はじめに

研究代表　久保　健太
（関東学院大学）

「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究２」の報告書です。
調査チームは青野裕介さん（Tree to Green 代表)、鈴木秀弘さん（和光保育園副園長)、溝口義朗さん（ウッディキッズ園長）と久保の４人でした。

当初は、月１回集まって、保育園を訪問したり、ミーティングを行ったりしていました。しかし、2020 年３月から、コロナ過の影響で、研究の進め方を見直さざるを得なくなりました。

まずは、上の４名に加えて、岩崎真人さん（第一小学童クラブ）に加わっていただきました。岩崎さんを加えた５名で「リレー執筆（集団的な往復書簡)」を始めました。
2020 年７月までに、往復書簡が第８便まで進みました。議論の内容が深く、複雑になってきたので、第９便からは、研究を「対面講読」で行うことにしました。

すべてが手探りの研究でした。
私は「実践者が自ら書く研究」になることを目指しました。この報告書は、その試行錯誤の成果でもあります。

読者のみなさんにとっては読みにくい報告書であるかも知れません。議論の方向性が定まっておらず、議論が体系性をもっていないからです。
一般的な研究が議論の方向性と体系性をもっていることに比べると、今回の研究は議論の方向性と体系性が弱い書き方になっています。

とくに、「対面講読」をおこなった第９便以降は、読みにくさが増していきます。しかし、その反面で、それぞれの文章の強度は増していきました。その強度は、溝口さんの「第 15 便」で極まったように思います。

この「第 15 便」は、2021 年度、22 年度に行われる継続研究の起点にするつもりです。この「第 15 便」に刻まれた「贈与」論、「俯瞰」論、「アフェクトゥス」論などを紐解いた上で、「第 15 便」を捉え直し、書き直す――21 年度、22 年度の研究は、そこから始めるつもりです。

今回の報告書は、2020 年 12 月の「対面講読」の報告と記録とで終わっています。その後、21 年 2 月と 3 月にも「対面講読」を行なったのですが、そこでは「第 15 便」の捉え直しを始めていますので、その内容は、21 年度、22 年度の研究報告書に記すことにいたしました。

保育者が実践し、研究者が分析する。
そのような研究に加えて、保育者と研究者が一緒になって記述するという研究ができないものかと思っています。

そこで、往復書簡を試みました。
その意味で、往復書簡は実験でした。
ある程度、深めたら、対面講読が必要になりました。これが明らかになっただけでも、収穫です。

そして、対面講読を試みました。
対面講読においては、生成的な学びが生じることがわかりました。
その学びを記録しておくためには、講読された文章に加筆をすることで、記録をすることがいいことがわかりました（第 19 便など）。これが明らかになったことも収穫の一つです。

基軸とする理論を、保育者と研究者が共有することで、「一緒になって記述する」という研究が可能になるのではないかと考えています。
基軸とする理論として、私たちは、エリクソンの理論を学び始めています。エリクソンの理論以外にも、矢野智司、メルロ＝ポンティ、大田堯、木村敏、ジル・ドゥルーズの理論を学ぶことになるだろうと思います。
また、柄谷行人、見田宗介（真木悠介）の理論も共有していくつもりです。

思えば、往復書簡だって「生成的な学び」の場でした。
どのような問いが生まれ、探求が生まれ、解答が生まれ、知識が生まれるのか、始まる前には誰にも分らないのです。
このようなプロセスを経て進行する「学び」の成果を報告書とするとき、「表」をつくっておくことで、研究メンバー自身がプロセス（と、その成果）を確認しやすくなる。第 13 便に登場した表は、そうした工夫の一つです。
このような表を加工すれば、読み手のみなさんへの「目次」をつくれるかもしれません（今回は、そこまでできませんでしたが、今後のために記しておきます）。

表を共有しつつ、その表を一緒に更新していくこと。これは保育者と研究者が「一緒になって記述する」際の土俵になってくれるかも知れません。

この報告書は読みづらいかも知れません。

一つ一つの「便」は読み易くても、それらの便が束になった、一つの「報告書」としては読みづらいかも知れません。

その読みづらさの理由は、この報告書自体が、まだ整理されていない研究の試みの実況中継だからです。

2021 年、22 年の報告書では、「保育者と研究者が一緒になって記述すること」と「読み手にとって読み易いこと」とを両立するつもりです。

「実践者が自ら書く研究」を試みたために、読者のみなさんには御負担をおかけするかも知れません。「実践者が自ら書くこと」と「読者にとって読み易いものになること」を両立するためにも、読者みなさまの忌憚ないご意見をいただきたく、お願い申し上げます。

ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究２

研究代表　　久保　健太
（関東学院大学）

「居心地の良さ」とは何でしょうか？
ゆっくりとコーヒーが飲めること？好きなソファーに座っていられること？好きな人とギュっとしていること？
うーん、わかりません。

というわけで、2019 年度、いくつかの保育園を訪問しながら、「居心地の良さ」とは何かを考えました。調査チームは青野裕介さん（Tree to Green 代表）、鈴木秀弘さん（和光保育園副園長）、溝口義朗さん（ウッディキッズ園長）と久保の 4 人です。
この調査チームは、「居心地の良さ」を研究するために組まれたチームではなく「住民自治（ローカル・ガバナンス）」と「地域福祉」を研究するために組まれたチームです。
しかし、チームの中で、「住民自治」と「地域福祉」について語り合ううちに、「保育園、幼稚園、こども園が、地域住民にとって、居心地のいい場所になることは、地域福祉のために、とっても重要なことではないか」という共通見解が生まれました。
そこから「まずは、保護者にとって居心地のいい場所になることは大事だよね」という意見や、「園で生活している子どもたちや保育者にとっても居心地のいい場所にしたいよね」という意見が出てきて、「居心地の良さ」とは何か？について、考えることになりました。

とはいえ、「居心地の良さ」とは何か？を考え始めても、そう簡単には答えにたどりつけません。冒頭に書いたように、人によって「居心地の良さ」の中身がバラバラだからです。しかし、一見、バラバラに見えても、そこには共通する要素があるはずなのではないか？とも思います。

2019 年度、私たちのチームは、「居心地の良さ」の正体を突き止めるために、いくつかの保育園を訪問しました。杜ちゃいるど園（横浜市）、和光保育園（千葉県富津市）、ウッディキッズ（東京都あきる野市）での、子どもたちや保育者の姿をヒントに、「居心地の良さ」とは何か？を考えました。
本格的に考え始めて、半年くらいがたった 2020 年 4 月ごろ、何が「居心地の良さ」の要素になっているのかが何となくわかってきました。
そして、ちょうどその頃、新型コロナの感染が拡大しました。

保育園の訪問も、メンバーが集まってのミーティングも叶わなくなりました。

そこで、私たちは、「本質観取」の手法を応用し、メール上の「リレー執筆（集団的な往復書簡)」の形式で本質観取をできないかと考えました。

本質観取の方法については、後述の「リレーの進め方」にも記されていますが、ここにも転載しておきます。

以下の手順で、リレーのバトンを回していきます。

自分の番が来たら

① 深掘りしたい箇所を、先行走者の文章から見つける。ピックアップする。 ② 「①」の箇所を念頭に置いた際に、みなさんが思い浮かべる保育や生活の姿、場面を書く。 ③ 「②」の姿、場面をもとに、①の箇所（キーワード）について、自由に考える。

を書いて、次の人にバトンタッチ。

これは「本質観取」という方法を応用したものです。本質観取の手順については、「リレーの進め方」のページに、苫野一徳が『はじめての哲学的思考』に紹介している手順を記しておきましたので、ここでは省略いたします[1]。

では、次ページからの「リレーの進め方」に続いて、「第一便」を始めたいと思います。

[1] 苫野一徳『はじめての哲学的思考』筑摩書房、2017 年

ローカル・ガバナンスプロジェクト
居心地研究　リレーの進め方（参考）　2020 年 4 月 30 日

リレーの進め方について、久保が個人的なメモとして書いたものです。いずれメールが埋もれてしまったり、時間が経って記憶が遠のいたりしたときのための、備忘録でもあります。

個人的な備忘録として作ったものですが、共有してもいいかと思ったので、共有いたします。みなさんも、忘れそうになったら、読み返してみてください。

①　起点：リレーの起点は、久保が『子どもの文化 3 月号』に書いた「居心地の良さとは何か？」とする。

②　順番：順番は、

⓪久保が『子どもの文化』に書いたもの（起点）
→①秀弘さん→②青野さん→③溝口さん→④岩崎さん→⑤久保（一周目）
→⑥秀弘さん→⑦青野さん→⑧溝口さん→⑨岩崎さん→⑩久保（二周目）
→⑪秀弘さん→⑫青野さん→⑬溝口さん→⑭岩崎さん→⑮久保（三周目）
（以後、繰り返し）

ですが、進めながら入れ替えていこうとも思っています。

後述⑤のような理由から、久保の登場頻度を増やすかもしれません。

また、順番自体を組み替えるかも知れません。進めながら考えていきましょう。

※追記：その後、溝口さんの役割変更（後掲、5 月 12 日のメール参照）に従って、上の順番は修正されました。

③　バトンタッチのペース：「ひとり一か月」でまわすと、一周するのに 4 か月もかかってしまうので、「ひとり半月」くらいを目安に、ちゃっちゃとまわす。

だから、「ここんとこわからなくて、なんか大事そうだから考えたいけど、考えてると時間かかっちゃうから、誰か、深掘りして！とりあえずバトンタッチ！」もアリにしましょう（後述⑥も参照）。

④　バトンタッチの仕方（書き方）：自分の番が来たら、

① 深掘りしたい箇所を、先行走者の文章から見つける。ピックアップする。
② 「①」の箇所を念頭に置いた際に、みなさんが思い浮かべる保育や生活の姿、場面を書く。
③ 「②」の姿、場面をもとに、①の箇所（キーワード）について、自由に考える。

を書いて、次の人にバトンタッチ[1]。
　このリレーでは、誰かが書いた文章に、誰かが文章を乗っけていくという方法で、「居心地の良さ」について、みんなで考えていく。

⑤　各周の終わりに久保がすることは「総括」。もちろん皆さんが「総括」してもいい。（メールには書かなかった）

　周が終わるときに、久保がすることは、その周の「簡単な総括」。
　この「リレー」を「本質観取」「意味生成」のスタイルをとった「研究」に仕上げるための作業。

　具体的には、以下のこと。
　①　みなさんから出てきた「問い」や「テーマ」を整理して、周にバトンタッチする。
　②　みなさんの事例や考察を「分類したり」「共通性を考えたり」する。

　もちろん、みなさんが、随所で総括してもいい。
　周の途中で、小括を挟むこともあると思う。
　ただ、総括する人は、ちょっとだけ不自由になるから、久保がその不自由を引き受けて、みなさんは自由に書く。

⑥　失敗談、質問、異論、注文、共感、何でもあり。（メールには書かなかった）

　せっかくなので、気楽に、楽しくやりたい。
　というわけで、「ここんとこわからないから、久保さん教えて by 溝口さん」とか、「悪いけど、青野さん、この箇所をピックアップして。By 秀弘さん」とか、そういう書き方もありにしましょう。
　僕も、みなさんに「このキーワードで書いてほしい」とか言うかも知れません。

　失敗談、質問、異論、注文、共感、何でもあり。
　自分一人で引き受けずに、どんどんバトンを渡しながら、みんなで問題に挑んでいく。

---

[1] ちなみにこれが「本質看取」という方法。
これも忘れないように、苫野一徳『はじめての哲学的思考』（筑摩書房、2017 年）p177－180 に沿って、手順を整理しておく。
①「居心地の良さ」というキーワードを念頭に置いた際に、みなさんが思い浮かべる保育や生活の姿、場面を書く。
②「①」の姿、場面をもとに、「居心地の良さ」について、自由に考える。
③「②」で考えたことを持ち寄り、「分類し、名前をつけたり」「共通性を考えたり」する。

居心地の良さとは何か？
地域住民と保育園・幼稚園・こども園との将来のために

「居心地の良さ」とは何でしょうか？

ゆっくりとコーヒーが飲めること？好きなソファーに座っていられること？好きな人とギュっとしていること？

うーん、わかりません。

というわけで、現在、いくつかの保育園を訪問しながら、「居心地の良さ」とは何かを考えています。調査チームは青野裕介さん（Tree to Green 代表)、鈴木秀弘さん（和光保育園副園長)、溝口義朗さん（ウッディキッズ園長）と久保の 4 人です。

この調査チームは、「居心地の良さ」を研究するために組まれたチームではなく「住民自治」と「地域福祉」を研究するために組まれたチームです。

しかし、チームの中で、「住民自治」と「地域福祉」について語り合ううちに、「保育園、幼稚園、こども園が、地域住民にとって、居心地のいい場所になることは、地域福祉のために、とっても重要なことではないか」という共通見解が生まれました。

そこから「まずは、保護者にとって居心地のいい場所になることは大事だよね」という意見や、「園で生活している子どもたちや保育者にとっても居心地のいい場所にしたいよね」という意見が出てきて、「居心地の良さ」とは何か？について、考えることになりました。

とはいえ、「居心地の良さ」とは何か？を考え始めても、そう簡単には答えにたどりつけません。冒頭に書いたように、人によって「居心地の良さ」の中身がバラバラだからです。しかし、一見、バラバラに見えても、そこには共通する要素があるはずなのではないか？とも思います。

私たちのチームは、「居心地の良さ」の正体を突き止めるために、いくつかの保育園を訪問しました。ここでは、杜ちゃいるど園（横浜市)、和光保育園（千葉県富津市)、ウッディキッズ（東京都あきる野市）での、子どもたちや保育者の姿をヒントに、「居心地の良さ」とは何か？を考えたいと思います。

本格的に考え始めて、まだ半年くらいですが、何が「居心地の良さ」の要素になっているのかがわかってきました。それらの要素を紹介しながら、書いていきます。

腰かけスペース

杜ちゃいるど園（以下、杜ちゃ）は、大船駅から歩いて 5 分くらいの国道沿いにある保育園です。待機児童対策のために、狭い敷地に新しく建てられた保育園です。ですから、環境に恵まれているわけではありません。建物は 3 階建てで、1 階に事務所とランチルームがあり、2 階では 3，4，5 歳が暮らし、3 階では 0，1、2 歳が暮らしています。園庭だって、広いわけではありません。そういった環境の中で、「居心地の良さ」を実現しています。だからこそ、杜ちゃの「居心地の良さ」の秘密がわかれば、多くの方の参考になるだろうとも思

います。

杜ちゃの居心地の良さは、保育園に入ってすぐ、その雰囲気で感じ取ることができます。園の玄関を上がると、ベンチとダイニングテーブルが置かれた腰かけスペースがあります。腰かけスペースは、ランチルームの隣に設けられているのですが、ランチルームとはベンチとテーブルの配色や高さが違うので、腰かけスペースとランチルームとが別の空間であることが視覚的にも伝わってきます。

ランチルーム、腰かけスペースと連なって、事務所があります。事務所はカウンターで仕切られているだけで、そこにガラス戸はありません。

つまり、玄関を上がってすぐのスペースには、ランチルーム、腰かけスペース、事務所が開放的に、隣り合って配置されています。そうして、ゆったりとした雰囲気が生まれています。

僕は、杜ちゃにお邪魔するたびに、まずは、腰かけスペースに腰を下ろして一服します。クッション付きのベンチが「さあ、どうぞ、一息ついてください」と誘ってくるのです。その誘いに乗って、腰を下ろしているのは僕だけではありません。園庭から帰ってきた子どもたちも腰を下ろして一服しています。

ベンチは、ダイニングテーブルをはさんで二台あるので、僕と子どもたちはテーブルをはさんで円になります。そこで「だれのお父さん？」「お父さんじゃないんだよ」「じゃあ、だれ？」「えんちょうせんせいの、ともだち」「えんちょうせんせいって、おおたけさん？」「そう、おおたけさん」というやりとりが生まれることもあれば、僕は勝手にボケーっとして、子どもたちは、その向かい側で、自分の読みたい本を読んでいる、ということもあります。

ともかく、そこでは、自分の過ごしたいように、過ごしていい。いや、杜ちゃいるど園は、2階に行っても、3階に行っても、園庭に行っても、どこに行っても、自分の過ごしたいように過ごしていいのですが、その最たる場所が、この腰かけスペースなのです。

自分の過ごしたいように、過ごせること。それは居心地の良さの、第一の要素です。しかし、みんなが好き勝手に過ごしているわけではありません。お互いが、自分の過ごしたいように過ごせるように、お互いが配慮しています。とはいえ、互いへの配慮で、ガチガチになることもありません。お互いが混じったり、自分の世界に引きこもったりできるように、互いのあいだに「あそびの空間」があります。この「あそびの空間」とは、クルマのハンドルやブレーキにある「あそび」と一緒で、「詰めてもいいし、詰めなくてもいい空間」のことであり、「詰める」と「詰めない」のあいだで「やや詰める」「やや緩める」といった詰め具合を調節できる空間のことですが、こうした「あそびの空間」があることが、居心地の良さの、第二の要素になっています。

そうした「あそびの空間」があれば、相手との詰め具合、相手との距離感を調節できます。そのおかげで、「相手に対する配慮意識」の量を調節できます。距離が詰まっていると、ガチガチに配慮しなくてはいけませんが、相手との距離をとれれば、配慮意識を解除できます。

配慮意識がある程度、解除されること。これは「あそびの空間」がもたらす効果の一つで

あり（逆に言えば、その空間が「あそびの空間」になっているかどうかの目印であり）、居心地の良さの、第三の要素でもあります（第一、第二、第三と、要素を数えることに、そろそろ疲れてきました。要素を数えるのは、ここまでにして、文末で、要素を整理することにします）。相手への配慮意識を、ある程度、持ち合うことは、居心地の良さをもたらしてくれますが、その意識を強く持たなくてはいけない状態が続くと、どうしてもしんどくなってきますし、居心地も悪くなってきます。しかし、「あそびの空間」があれば、配慮意識の強弱を調節でき、そうして、配慮意識を、ある程度、解除できます。配慮意識を解除して、ボケーっとできる。それは、その空間が「居心地の良い空間」になるために、とても大事なことだと思うのです。

絶対矛盾的自己同一

「あそびの空間」がもたらす効果は、それだけではありません。相手への配慮意識を、ある程度、解除できることとも相まって、「あそびの空間」では、ボケーっとする人、絵本を読む人、おしゃべりをする人とが、混在します。多種多様なものの同時存在。これも「あそびの空間」がもたらす効果であり、居心地の良さの要素です。

しかも、それらの存在は、バラバラに存在しているわけではありません。ボケーっとする人はボケーっとする人として、絵本を読む人は絵本を読む人として、おしゃべりをする人はおしゃべりをする人として、それぞれの存在が、それぞれの存在のまま、「一つのまとまりのある世界」をつくっています。「それぞれのまま」だからこそ、「一つのまとまりのある世界」をつくることができている。そう言ってもいいくらいです。

「それぞれの存在が、一つのまとまりをつくっている。どころか、それぞれの存在だからこそ、一つのまとまりをつくっている」。そのことの意味を、もう少し、深掘りします。その点が、「居心地の良さ」のとても重要な中身であるように思うからです。

私は、いま、西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」の考え方を思い浮かべています。この考え方については、調査チームの報告書でも紹介しました。報告書は、全国私立保育園連盟のホームページで「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究」と検索すれば、出てきます。が、ここでは、報告書を読んでいない方にも伝わるように書きます。

「絶対矛盾的自己同一」について、教育哲学者の櫻井歓さんは、次のように書いています。

「西田は、現実の世界は絶対矛盾的自己同一の世界だと考えていた。

現実の世界とは、インコが囀（さえず）り、コスモスが花を咲かせ、夕日が沈んでいく、そのような場所だ。そこでは、インコは動物で、コスモスは植物で、夕日は天体の現象のことで、それぞれは別々のものである。この意味でそれらは対立している。

また、人と人との関係を、あなたと私との関係として考えてみるとどうだろう。あなたと私とは別々の人格であって、決して同じではない。相手のことを完全に理解することはできない。そうでありながら、互いに語り合ったり、笑い合ったり、喧嘩もしたりする（略）

いくつか例を挙げてみたが、世界には対立すること、矛盾することがたくさんある。けれども、そんな矛盾や対立は矛盾や対立のままに、丸ごと包み込むようにして、世界は一つのまとまりのある世界を作っているのだ。絶対矛盾的自己同一とは、そのようなことを意味している。世界のなかには、多様なもの、異質なもの、矛盾するもの、対立するものがあるけれど、それらはすべて、それぞれの形で世界を表現している。それによって世界は世界自身を形作っているのだ。

つまり、インコはインコとして、コスモスはコスモスとして、夕日は夕日として、それぞれの形で世界を表現している。また、あなたはあなたとして、私は私として、それぞれの形で世界を表現しているのだ。世界は、それらの表現を通して、自己自身を作っている。こう考えるのなら、私は世界のなかの一部分として世界を表現し、それによって世界を形作っているといえる。」[1]

以上が櫻井さんによる絶対矛盾的自己同一の解説です。インコ、コスモス、夕日といった、それぞれ別々の存在を「個物」と呼び、それらの個物からなる、一つのまとまりのある世界を「全体」と呼ぶのなら、絶対矛盾的自己同一の世界観は、「①個物は個物として、それぞれの形で全体としての世界を表現し、②全体としての世界は、個物の表現を通して、世界全体を表現している」と書けます。

難しいですね。具体的に言います。

「腰かけスペース」で言うならば、①個物としての「ボケーっとする人」「絵本を読む人」「おしゃべりをする人」が、スペース全体の「居心地の良さ」を表現し、②スペース全体の「居心地の良さ」は、個物としての「ボケーっとする人」「絵本を読む人」「おしゃべりをする人」を通じて、スペース全体に「居心地の良さ」があることを表現している――ということです。

そのとき、「ボケーっとする」というのは、他の誰でもない私（久保）による「居心地の良さ」の表現です。他の人は「絵本を読む」とか、「おしゃべりをする」とかいう仕方で「居心地の良さ」を表現しています。

それぞれが、「居心地の良さ」という「一つのまとまり」（全体）を表現している。それにもかかわらず、その表現の仕方が「一つではない」。

「一つ」のものを表現しているのに、「一つではない」というこの状態のことを、西田は「矛盾」と呼びます。そして、そうした矛盾を丸ごと包み込むようにして、世界が一つのまとまりをつくっているという世界のありようのことを、西田は絶対矛盾的自己同一と呼ん

---

[1] 櫻井歓『西田幾多郎　世界のなかの私』朝文社、2007 年。p140-142。「インコはインコとして、コスモスはコスモスとして、夕日は夕日として」の箇所は、エリクソンによる「独自性が確かなものとして認められていること distinctiveness confirmed」という「ヌミノース」の思想を想起させる。エリク・H・エリクソン『玩具と理性』近藤邦夫訳、みすず書房、1981 年（原著は 1977 年）。

だのです。

繰り返しになりますが、個物としての久保や、個物としての子どもたちが、スペース全体の「居心地の良さ」を表現し、スペース全体の「居心地の良さ」は、個物としての久保や、個物としての子どもたちを通じて、スペース全体を表現しています。そのとき、久保という個物の表現は、スペース全体の「居心地の良さ」を表現してはいますが、しかし、他の誰でもない個物としての久保による表現なのです。

ここから、「それぞれの存在が、一つのまとまりをつくっている。どころか、それぞれの存在だからこそ、一つのまとまりをつくっている」ということの意味が分かってきます。そして「居心地の良さ」のポイントも分かってきます。一つ目のポイントは、「他の誰でもない個物としての久保による表現」が許されているという点でしょう[2]。そして、それらの個物がバラバラでないという点が二つ目のポイントです。先に記した文章で言えば、「(個物どうしの) そうした矛盾を丸ごと包み込むようにして、世界が一つのまとまりをつくっている」という「世界のありよう」が二つ目のポイントです。

以上から、「腰かけスペース」を、西田の絶対矛盾的自己同一の世界観から分析することによって得られる「居心地の良さ」の要素を、次の 2 点にまとめることができます。

Ⓐそれぞれが、それぞれの仕方で、「居心地」を表現できること。Ⓑ多種多様な存在が、「一つの世界(一つの居心地)」に包まれながら、同時に存在していること。この 2 点です[3]。

あそびの空間

「居心地の良さ」の要素がいくつか挙がりました。少し議論が複雑になり、整理したくなってきたので、整理しておきます。居心地の良さの一つ目の要素は、①自分の過ごしたいように、過ごせること、です。

しかし、これは自分勝手に過ごすことではありません。その点を、杜ちゃいるど園の「腰かけスペース」を手がかりに考えました。そこでは、腰かけスペースの特徴を「あそびの空間」があることに見出そうともしました。そうしてわかってきたのが、次の三つの要素です。

---

[2] これは「ズレ」が許されることとも言えますし、エリクソンのいう「自己発揮」でもあります。

[3] ちなみにⒷは、エリクソンが「ヌミノース」と呼ぶ状態を想起させる。人間はⒶよりも、Ⓑの状態を先に味わう。いわば「ズレ」が生じる前の自他未分の状態である（第一期初期)。その後、自他区分の時期に入るのだが、その時期には、いつでもⒷに戻れるという安心の感覚を培う（第一期)。その後、ようやくⒶの「自己発揮」が優勢になる時期が来る（第二期)。ⒷとⒶの状態のあいだにある順序性は、エリクソンの思想が教えてくれることである。

②距離感を調節できるので、互いへの配慮意識を調節できる。配慮意識をある程度、解除することもできる。③それぞれが、それぞれの仕方で、自分の感じている「居心地」を表現できる。④多種多様な存在や表現が、「一つの世界（一つの居心地）」に包まれながら、包括的に、同時存在している。以上が、ここまでの整理です。

しかし、これで終わりではありません。「①自分の過ごしたいように過ごすこと」と「④多種多様な存在が、包括的に存在していること」ととの間には矛盾（衝突）が起きます。

どういうことか？「腰かけスペース」は基本的に「①自分の思い通りに使っていい空間」ですが、まるっきりの個人空間ではありません。ある程度、自分の羽を伸ばしたら、他人の羽に触れるような空間です。だからこそ「②周囲との距離を調節すること」で、羽をどれくらい伸ばすのかを調節することができるようにしてあります。そこでは「②配慮意識を解除すること」もできますが、配慮意識を解除して「個物」として過ごしていても、いずれは、他人との矛盾（衝突）が起きます。なぜなら「腰かけスペース」は「④多種多様な存在が、包括的存在している空間」でもあるからです。その空間では、自分が羽を伸ばすのと同等に、他人も羽を伸ばしているのです。

この点を、5 つ目の要素にしておきましょう。「⑤羽を伸ばしていると、いずれ、周囲との矛盾（衝突）が起り、配慮意識が必要になる空間」とまとめておきます。

「腰かけスペース」を手がかりにすることで、この①②③④⑤をもたらす空間が「あそびの空間」であるということがわかってきました。

また、この五つの要素が「居心地の良い空間」の要素であることもわかってきました。

「あそびの空間」から「あそびの時間」へ

「あそびの空間」で考えたような「あそび」は空間においてだけではなく、時間においても、必要です。いわば「あそびの時間」が必要です。

「自分の思い通りに使っていい空間」が「あそびの空間」であったように「自分の思い通りに使っていい時間」が「あそびの時間」だと言ってもいいでしょう。

しかし、その時間は、まるっきりの個人時間ではありません。ある程度、自分の羽を伸ばしたら、他の人の羽に触れるような時間です。このような「周囲との距離を調節できる」という点も「あそびの空間」と同様です。

こうした「あそびの時間」について、および和光保育園やウッディキッズについては、秀弘さんや溝口さんたちの力も借りながら、あらためて書かせていただくことにして、今回は、ここまでにします。

ローカル・ガバナンスプロジェクト
2020 年 5 月 12 日メール
溝口さんの役割変更について

(略)

さて、ここでみなさんに御報告。
このリレーでは、溝口さんに「不定期に現れるヘルメス」をしてもらうことにしました。

「それってなんやねん」と言われると難しいのですが、
僕たちのリレーのようすを見ながら、溝口さんのリズムで自由に考えて、
そこで思ったことを自由に書いて、
その書いたものをもって、僕たちのリレーに、不定期に、フラッと現われる。というイメージです。

他の人より、多く登場することもあるかと思いますし、
形式は、溝口さんに任せてあります。

溝口さんには、リレーメンバーとは別のもちまえがあるのではないかとずっと考えていました。
上の提案を、溝口さん本人にしたところ、
思いのほか喜んでいただいて、
めでたく「不定期に現れるヘルメス」をしていただくこととなりました。

というわけで、
青野さんのあとは、岩崎さんです。

岩崎さんに心の準備をしてもらうためにも、
御報告いたします。

ではでは、青野さん、溝口さん、みなさん、
よろしくお願いいたします。

久保　健太

ズレが生んだ一つの物語（時間）

わこう村和光保育園　鈴木秀弘

久保さんは、「居心地の良さとは何か？～地域住民と保育園・幼稚園・こども園との将来のために～」の文末で以下のように記しています。

「腰かけスペース」を手がかりにすることで、この①②③④⑤をもたらす空間が「あそびの空間」であるということがわかってきました。

また、この五つの要素が「居心地の良い空間」の要素であることもわかってきました。

（以上居心地の良さとは何か？～地域住民と保育園・幼稚園・こども園との将来のために～）

つまり、子どもたちとの生活の場が「あそびの空間」であるかどうかが「居心地が良さ」に関わってくるのだということが分かりました。

そして、そのうえで更に次のような示唆を投げかけてくれています。

「あそびの空間」から「あそびの時間」へ

そして、最後に、「あそびの空間」で考えたような「あそび」は空間においてだけではなく、時間においても、必要です。いわば「あそびの時間」が必要です。

「自分の思い通りに使っていい空間」が「あそびの空間」であったように「自分の思い通りに使っていい時間」が「あそびの時間」だと言ってもいいでしょう。

しかし、その時間は、まるっきりの個人時間ではありません。ある程度、自分の羽を伸ばしたら、他の人の羽に触れるような時間です。このような「周囲との距離を調節できる」という点も「あそびの空間」と同様です。（以上居心地の良さとは何か？～地域住民と保育園・幼稚園・こども園との将来のために～）

私も、久保さんが示してくれたように「居心地の良さ」を考えるには、「空間」的なものだけではなく、「時間」的な「あそび」が必要と考えます。

そこで、和光保育園の事例を紹介しながら、「あそびの時間」について、私なりに考えてみたいと思います。

その前に、久保さんが示してくれた「あそび」について確認をしておきたいと思います。

この「あそびの空間」とは、クルマのハンドルやブレーキにある「あそび」と一緒で、「詰めてもいいし、詰めなくてもいい空間」のことであり、「詰める」と「詰めない」のあいだで「やや詰める」「やや緩める」といった詰め具合を調節できる空間のことです。

和光保育園では、子どもも大人もそれぞれの興味や関心、リズムやペースを認め合いながら、生活協同者として共に生活を創っていくことを大事にしながら日々暮らしています。

その時に大事なのが「あそびの空間」であり「あそびの時間」です。少しいい方をかえると、空間や時間に「ゆとり」を持っていることで、それぞれの興味や関心・ペースやリズムを認めながら包み込むことができると考えています。

包み込むと書きましたが、もちろん時にそこから逸脱することもありますが、それも丁寧に認めながら共に生活をしていると、大体あそびの空間や時間の中に、なんとか居心地良くまとまってくるという意味で、包み込むという表現をしました。

さて、そんな「あそび」（ゆとり）を持った空間・時間の中で起こった出来事です。

ズレが生んだ一つの物語（時間）

お昼ご飯の頃のお話です。ほとんどの子が部屋へ上がり、食べ始めている子もいれば、雑巾がけやご飯の支度をしています。ひとけの少ない園庭には、楽しそうにお喋りをしながら、自分たちで楽しんだおままごとを片づける、チーちゃんとハルちゃん（4 歳児）がいました。

二人は、おままごとをタライに溜めた水でジャブジャブあらっては、綺麗になったおままごとを片付け用のカゴに納めています。

二人の楽し気な雰囲気が周りに溢れるかのように、タライの水が少しずつこぼれ出ている様を見て、なんだか可愛らしく、少し離れた所から眺めていました。

その流れ出た水たまりが、ゆっくりと川のような形をつくり始めていた頃です。その水たまりにカイ君（3 歳児）が気付いて、“なんだ？”と覗き込むと、おもむろに持っていた棒で、水たまりの流れの先端に線を入れました。すると、その線に水がジワジワっと流れ込んだので、カイ君はニヤッと微笑むと、その線の先をグルグル～っと長くのばしてから、また水たまりから線へ流れ込む所へと戻りました。

多分、カイ君は、水たまりが川のようになっていく“流れ”を感じていたのではないかと思います。その川（らしきもの）から伸びるグルグルっとした線に、カイ君の嬉しさや、楽しさや、期待のようなものが現れているように見えて、見ていた私も引き込まれて行きました。

しかし、川の水は直ぐに地面に染み込んでしまい、描いた線の先へは流れ込みません。カイ君は、あれ？とした表情を浮かべながら、水たまりと線の境目辺りを棒でつついています。

実は、カイ君の傍らにはもう一人、リク君（3 歳児）が居ました。リク君もカイ君が描いた線を更に伸ばしたりして、カイ君と同じ楽しみや、期待の中にいるように見えます。

リク君は、ゴニョゴニョっといった感じで、タライで洗い物をしている二人に「もっと水が欲しいんだけどな～」みたいなことを言ってみますが、洗い物をしている二人には届かなかったようです。リク君も伝える気持ちがさほど強く無かったのか、言ったと思ったらすぐに目の前に落ちていた木片を拾い、タライの近くの水たまりから、水を川下へ送り込みます。

二人が、水たまりにちょっかいを出している間も、チーちゃんとハルちゃんの楽しそうな片付けは続きます。よくよく見てみたら、二人が洗い物をするタライの底に穴が開いているようです。穴から流れ出る水が、どんどん二人の足元に溜まってきています。でも、そんなことは片づけをする二人は気になっていません。

その水が、カイ君とリク君の待つ水たまりの先端へ少しずつゆっくりと流れていきます。段々と水量が増えてきて、ゆっくりですが川も長く育って行きます。

それは、線を描きこむ二人が“作っている”とも、洗い物をしている二人が“作っている”ともいえません。しかし、そこに居る 4 人が織りなす片付けや関心事から生まれる行為によって、川は段々と育っていきます。そう感じているのは、今のところ私だけかもしれませんが、ズレてい

る営みが一つの物語（時間）を生み出しているように見えて、それが心地よく、面白みを感じました。

一瞬の重なり合い

さて、その時洗い物をしている二人の片付けが終わって、タライを一気にひっくり返しました。

それは、決して川の先端で線を描き入れる子たちの為にやったものではないのですが、その水が流れる勢いに、ハルちゃんは「おぉぉ！」と驚いたような大きな声を上げました。

その声が届くのと同じようなタイミングで、川の先端で覗き込むように線を描き入れていた二人の元に、勢いのいい水が流れ込みました。

それに気が付いた二人も「おぉぉ！」「おぉっ！」「おぉっ！」と飛び跳ねながら、川が勢いよく流れていくのを追いかけていきます。

しかし、面白いな～と思うのは、洗い物を洗う二人の感情と、線を描き入れる二人の感情が一瞬重なり合って濃密な時間が生まれたように感じたのですが、洗い物をしていた二人はわりと直ぐにその時間から離れ、トムソーヤ小屋におままごとを片付けに向かいました。

私はつい、二つのズレている営みが、いよいよ重なり合って、一層盛り上がっていくと期待を感じていたのですが、そんな期待とはズレる形で、二つの営みは枝分かれしていったのでした。

一方で、カイ君と、リク君は水を得た魚状態で、川の流れを追いかけています。リク君はその勢い良さを「たいふうじゅうきゅうごう！」と表しています。

先ほどまでゆっくり流れていた時間も、スピードをあげて流れているように感じます。

さてさて、その後も、あれやこれやでしばらく楽しい時間はつづくのですが、今回の「あそびの時間」についての考察をするには、ここまでで十分ですので、この後の出来事は省略します。

ただ、もう少しだけお伝えしておきたいのは、存分に川の流れを楽しんだカイ君とリク君は、その後に二人で一緒にお昼ご飯へ向かい、二人で一緒に支度をして、食べる時も、気分の高揚が抑えきれないような感じで、ふざけ合っているのでした。まるで、楽しさの余韻も一緒に味わっているようです。

それから、チーちゃんとハルちゃんは、最近毎日一緒におままごとをやっているようです。二人の関係はこの日に限った関係ではないようです。それもまた、楽しさの余韻の中の出来事です。

ズレているけど重なり合っている

私は、片付けと、川に線を描きこむ、二つの「目当てやそれに伴う行為」がズレている主体が、流れた水によって薄っすらと重なり始め「一つの物語的に共有している時間」を生み出し始めていることに、面白みを感じて見ていました。

そういう視点を用いて、更に、この出来事を俯瞰的に見たならば、お昼ご飯を食べている生活の主流と、この子たちの間にもズレがあります。しかし、ズレているけど、和光保育園という生活の場で、暮らし（朝登園してから、夕方降園するまでの営みや流れ）を共にしているという意

味では重なり合っている。

このズレは、空間的なズレでもありますが、時間的なズレでもあります。

空間的なズレは、目当ての違いによる行為のズレです。例えば、庭で片付けをしている。その傍らで川遊びをしている。部屋の中でご飯を食べている子もいれば、陽だまりの縁側でご飯を食べている子もいる。小さい子は、お昼寝の支度をしている、等々です。

お昼ご飯の潮が満ちてきて、遊びの潮が引いていく

時間的なズレは、それぞれのタイミングのズレと考えています。例えれば、小さい子どもたちは、保育園の中でも早いうちにご飯を食べ始めます。それは早いうちにお腹が空くからです。その準備をする大人の姿がきっかけになって、お腹が空いた３歳児辺りの一部の子どもたちが、担任に「そろそろご飯食べよう」と声を掛け支度を始めます。更に、その姿を見た大きい子も、ご飯の支度を始めていきます。そうやって、まるで段々と潮が満ちていくように、お昼ご飯の風景が（空間的に）保育園中に満ちていきます。その姿に引き寄せられる「お腹が空いた子」や「遊びにけりがつけられた子」は、“お昼ご飯をたべよう”と部屋へ戻っては、ご飯の支度に混ざっていきます。それと同時に、まだ遊び足りない子、遊びのけりが付かない子、片付けが残っている子は、未だ園庭にいます。しかし、その子たちも、自分たちのタイミングでいずれご飯の流れの中に入っていきます。それはまるで、園庭から遊びの潮が引いていくかのようです。そして、その潮は、お昼ご飯からお昼寝へと流れて行きます。

その流れの中で、初めのきっかけとなるタイミングを生きている子も居れば、最後の潮となって流れに誘われていく子もいる、とこんな感じです。

私は、こうやって“ズレ”ている者たちが一緒にいることが、私たちの暮らしや遊びを豊かに動かしているのだと考えていています。

話を戻せば、生活の主流がご飯へと流れ込んでいるお陰で、ひとけの少ない空間が生まれ、この出来事の輪郭を際立たせ、ご飯へ向かう片づけをしている人たち（チーちゃんハルちゃん）の仕事が水をこぼし、その流れに面白みを感じて遊び混む人（カイ君リク君）たちがいる。そのズレを平に慣らしてしまったら、少なくとも今回のような出来事は生れません。

ということは、もしかしたら、このズレが重なって生まれているものこそが「時間」と呼べるものかもしれません。これは、私が先に示した「一つの物語的に共有している時間」です。更に、「お昼ご飯の潮が満ちて、遊びの潮が引いていく」“流れ”の中に見えてくる時間です。

そう考えるならば、「時間」というものは、それぞれズレたもの同士が重なり合うことで生まれる流れであるといえるような気がします。

つまり、細切れに区切られたものではなく、常に消えては生れて、生まれては消えてを繰りかえしながらも、繋がっているものなのではないでしょうか。

そういう視点で、「あそびの時間」を考えるならば、それぞれの目当ての違いによって生まれる行為のズレや、タイミングのズレを、細切れに分断して、重なり合わないようにしてしまうのではなく、緩やかな“流れ”のように捉えて、「その流れ（時間）を生み出しているズレや重り」を包み込めるような「ゆとり」のことを「あそびの時間」といえるのではないでしょうか。

ズレを認めることで意味が豊かになる

そして、更に言うならば、そもそも同じもの（事象も含む）を見ても、一人一人の持ち前の感じ方（センス）もズレているので、出来事への意味付けにもズレが生じます。そのズレを認める

ことで、ズレが重なり合い、出来事の意味が平板なものから、より豊かなものに育ったのではと思います

チーちゃんとハルちゃんにとっては、洗い物をする為の水ですが、そのこぼれ出た水に、カイ君やリク君は川という意味を加えました。

どちらかに統一するのではなく、それぞれを受け入れることで、水場の出来事の意味が豊かになったと思うのです。

私は、二つの営みが一つになることを心の何処かで期待していましたが、一つにはならなかった。大人は（私たちは）つい、一つになることを期待し過ぎてしまう。もちろん、一つになる可能性もあったと思うし、それはそれで盛り上がったのではないかと想像出来ます。

しかし、一見枝分かれをしたように見えた流れも、お昼ご飯や遊びの潮のように見れば、先にお昼に向かうか、後から向かうかのタイミングの違いはあるものの、同じ流れの中にいて、先にお昼へ向かった流れに誘われて、やがてカイ君もリク君もお昼ご飯へと向かっていくのです。その大きな一つの流れの中でいえば、二つの違った主体が、正にその場の意味を豊かにしていたといえるのではないでしょうか。

このように、“ズレているけど重なり合って一つの時間を創っている（豊かにしている）”という捉え方は、久保さんが示した西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」という言葉の意味の中に含まれることと解釈しています。

最後に、これはあくまでも個人的な思いですが、西田の「絶対矛盾的自己同一」という言葉の意味に出会った時、なんだか「私が私でいることの意味（価値）」を後押しされているような気持ちになりました。

それは、このリレー執筆の手法である「意味生成の議論」や「本質看取」の背景にある思想でもあると考えます。こういう個人的な思いも添えて、この手法は、いずれ保育園の現場や社会にも浸透していく事で、子どもにとっても大人にとっても「私が私でいることの意味（価値）」を認め合いながら、自分たちで「居心地の良い」場を創っていく手助けになるのではないかと信じています。

あそびのこころについて

Tree to Green
青野裕介

今日は 5 月 25 日。コロナウィルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が首都圏でも解除されるかもしれないという日の朝です。

そういう日であることも影響しているのか、単に数日ぶりに天気が良いからなのか、中学校にプリントを提出する 5 分間のために登校する長女の表情は先週の月曜日あるいは先々週の月曜日よりも明るいです。

またそれに釣られてか、次女（小 2）・三女（4 歳）も早起きして二人で仲良く遊んでいます。わたしも妻も、その姿を見ていつもの月曜日より笑顔が多い気がします。

そんな朝にふと浮かんだのは、『あそびのこころ』という言葉でした。

これまで、居心地の良さに必要となる要素について、①あそびの空間、②あそびの時間という観点から考えを深めてきました。もし、これらの 2 つのあそびが制限されるような環境になった場合（少なくともわたしの暮らしている地域では制限されたと思っています）に、そのような環境下での居心地の良さの要素につい考えてみる、というのが今回のわたしの取り組みです。

まず、これまで久保さんによるあそびの空間、秀弘さんによるあそびの時間についての書簡を読みつつ、着目した文章は以下になります。

- 久保さんの書簡より
  ・・・しかし、これで終わりではありません。「①自分の過ごしたいように過ごすこと」と「④多種多様な存在が、包括的に存在していること」との間には矛盾（衝突）が起きます。・・・（中略）・・・・なぜなら「腰かけスペース」は「④多種多様な存在が、包括的存在している空間」でもあるからです。・・・
- 秀弘さんの書簡より
  ・・・そういう視点で、「あそびの時間」を考えるならば、それぞれの目当ての違いによって生まれる行為のズレや、タイミングのズレを、細切れに分断して、重なり合わないようにしてしまうのではなく、緩やかな“流れ”のように捉えて、「その流れ（時間）を生み出しているズレや重り」を包み込めるような「ゆとり」のことを「あそびの時間」といえるのではないでしょうか。・・・

わたしがこれらの2つの文章の中のとりわけ「矛盾」「衝突」「ズレ」という言葉に意識が向かうのはおそらく、（何でもかんでもこの話にしたくはないのですが）コロナの影響で、日々の暮らしのなかで『あそび』が大きく失われている状況（後ほど説明します）にあると感じているからだと思います。もう少し言いますと、あそびが失われているために、「矛盾」「衝突」「ズレ」をできれば避けたいという気持ちが働いている実感もあります。

【第 3 便】青野裕介　あそびのこころについて　（5 月 26 日）

例えば、わたしの家庭（わたしと妻と 3 人の娘たち）を例にとりますと、

- あそびの空間・・・少ない～非常に少ない
  - 家から出ることは“自粛”になっているので、我が家が 5 人家族の割にとても狭いという住宅事情も相まって、1 日中過ごす居場所としての空間的な余裕が少ない。
  - 一つの空間に集団で集まることも“自粛”になっているので、調節するべき相手（客体）がいない、もしくは少ない。
- あそびの時間・・・少ない～非常に少ない
  - 学校は休校で保育園も原則休園で、“何となく宙ぶらりんな状態で”一日中を過ごさなければならないという点であそびの時間は少ない。
  - 逆を言えば、調整をできるだけの時間的な余裕があり過ぎる（あそびが少ない）。

4 月早々の段階では、このような状況になることをぼんやりと予測して、この先 1 か月近く（結果的には一か月半）過ごしていけるのだろうかと心配（危惧）をしていました。

今日までの約 1 か月半を振り返ってみますともちろん、子どもたちの間で、あるいは子どもと大人の間や大人と大人の間で起きる「矛盾」「衝突」「ズレ」を許容されることが空間的にも時間的にも困難であるために、途方に暮れそうになる瞬間がありました。

しかし同時に、空間的にも時間的にも、家の外（外部）との関係がほぼなくなって、家の中だけの人間関係で完結しなければならない状態が一定期間経過すると、じっくりではありますが、こころに変化が起きていったように思います。

例えば、道路のソメイヨシノの葉が清々しい新緑の色に染まったり、パンジーやツツジやバラが鮮やかに花咲いたりしていることを目にして、日々、少しずつ夏に近づいていることを実感できてでワクワクすること。あるいは、（冒頭で書いたような）自粛的な状況が段階的にせよ解除される情報に触れて、仲間たちと集まれる状況を想像してドキドキすること、つまり、『明るい兆しを予感すること』は、こころが変化できた要因のひとつでした。

加えて、何となく宙ぶらりんな時間を制限された空間のなかで過ごしているために、不安定になってしまう気持ちが許容されること、つまり『そのままでいること・あることが認めること』もわたしの家の中に居心地の良さを創り出したと思います。

このような『予感』や『承認』が居心地の良さの要素なのかもしれない、という仮説提案の想いも込めて『あそびのこころ』という考察でした。

そして今晩（5 月 25 日）に制限が解除されました。

これから段階的に、あそびの空間とあそびの時間が日常に戻ってくると思いますが、この 1 カ月半の経験がありますので、4 月以前よりはもっとあそびの重要性を感じじながら、日々を過ごしていけるのではないかと思います。

【第４便】　岩崎真人　（5 月 27 日）

皆さんこんにちは。社会福祉法人バオバブ保育の会より、参加することになった岩崎といいます。保育士として 15 年目になり、昨年度からは学童クラブで働いています。自分の学びの視野を広げたいと、なにか周辺参加できる学びはないかと久保さんに相談したところ、今回のリレーに加えていただくことになりました。鈴木ひでひろさんとは、一度 2 泊 3 日で和光保育園に見学させてもらったことがあり、見学後は近くの宿まで案内していただいた思い出があります。もし今でも覚えていただけてたら嬉しいなと思います。青野さんとは初めましてだと思います。改めて、皆さんよろしくお願いします。

僕が青野さんの文を読んで注目したのは、

4月早々の段階では、このような状況になることをぼんやりと予測して、この先1か月近く（結果的には一か月半）過ごしていけるのだろうかと心配（危惧）をしていました。（中略）

しかし同時に、空間的にも時間的にも、家の外（外部）との関係がほぼなくなって、家の中だけの人間関係で完結しなければならない状態が一定期間経過すると、じっくりではありますが、こころに変化が起きていったように思います。

例えば、道路のソメイヨシノの葉が清々しい新緑の色に染まったり、パンジーやツツジやバラが鮮やかに花咲いたりしていることを目にして、日々、少しずつ夏に近づいていることを実感できてでワクワクすること。あるいは、（冒頭で書いたような）自粛的な状況が段階的にせよ解除される情報に触れて、仲間たちと集まれる状況を想像してドキドキすること、つまり、『明るい兆しを予感すること』は、こころが変化できた要因のひとつでした。

という、この心の変化です。
そして、自分が居心地について勘違いして捉えていたなと考えさせられたのです。

○居心地の良さって主体的
今回、“居心地の良さとは”というキーワードで、同じような学びをしている人がいないか、インターネットで検索してみようと始めたところ、興味深い文章を見つけました。

ある人が、カフェの窓側の席でコーヒーを飲むことが居心地の良さと感じているところに、突然団体客がやってきて、その居心地の良さを侵害されてしまったという話です。そのあとその人がとった行動は、席を替えるのは露骨すぎるので、体の向きを変えて、直接目線にいれないようにしたということでした。声は聞こえてしまうけど、視界に入らないだけで、さっきの居心地の悪さに比べたら少し居心地が良くなり改善したということでした。
ここで、居心地の良さの学び初心者の僕が感じたのは、『居心地の良さって自分で変えることができるんだ！』という、改めて考えてみれば当たり前のことに驚き、新鮮に感じました。

では今までの自分はどう感じていたのかという話になるのですが、例えばカフェ屋さんなら、カフェ屋さんのおしゃれな雰囲気や美味しいコーヒーのおかげで居心地が良いと感じていましたし、同じカフェ屋さんでも、違う店ではちょっと匂いが嫌だなとか、感覚的に良い悪いを判断していたように思います。そしてそれは、とても受身的で、カフェ屋さん次第で変わるものだと思っていました。
でもこの文章を読むと、突然団体客が来たときに、居心地の悪さを自ら改善しようとする筆者の心の動きを感じることができました。そう考えると、居心地の良さは、人それぞれ感じ方が違うと久保さんの文章の冒頭にも書いてありましたが、それは自分次第で変わるものだから違いがあるということに改

めて気がつきました。

ここで青野さんの心の変化に戻ります。その時ある空間が最初はどうやって過ごしていけばいいか危惧していた気持ちも、道路のソメイヨシノに目がいき、そして夏の到来を楽しみに感じているという心の変化は、居心地の悪い環境だと思っていたものを、自ら視点を変えて(おそらく無意識的に)、その悪いと思っていた環境よりも、少し居心地の良い環境へと変えていったということなのかなと感じました。それは受身ではなく自分で環境を変えていくようなものを感じ、自らよく生きようとする主体的な心からくるものなのかなと感じました。

『居心地の良さ』から『自らよく生きる』という言葉が僕の中のキーワードとして生まれてきたのですが、そう考えると、ひでひろさんの文章にも繋がってくるように感じます。

ひでひろさんの文章の中で、ずれているけど重なり合っているという言葉がありましたが、それぞれが自らよく生きようとしながら、(ズレヤ衝突も含めて)生活していくというような経験を幼少期から積み重ねていくということが、その後、自分自身で居心地の良さを豊かにしていく力に繋がっていくのではないかと感じました。

とは言っても、初めての店に行ったらとても居心地のいいものところだった、自然の中に入って気持ちがいいなと感じるような、環境による受身的な居心地の良さもあるようにも感じますし、全てが主体的なものなのかはよくわかりませんが、今まで自分が感じていた受身だけの居心地の良さとは違う、主体的に居心地の良さを感じていくという視点が生まれたので、考察してみました。

突拍子もないような考察でしたら本当にすみません。皆さん助けてください。(涙)

「新しい意識状態」と「意識の比率」
〜〜　一周目の総括とあわせて　〜〜

久保　健太

１．はじめに

１．１．最近考えていること

私の手を離れたときには「あそびの空間」「あそびの時間」だけだったバトンに、「あそびのこころ」が加わって、戻ってきました。リレーの醍醐味です。

私は最近、「その瞬間、その瞬間、世界には新しい事態が生まれている。世界には、違う状況が生まれている。」ということを考えています。

そして、その「新しさ」や「違い」が、そのままではいることが許されなくなったら、居心地が悪いだろうな、ということを考えています。

１．２．先行走者の文章から

そんな私の考えとマッチした箇所を、秀弘さんと青野さんの文章から挙げておきます。

秀弘さんの文章からは「洗い物をしていた二人（チーちゃんとハルちゃん）はわりと直ぐにその時間から離れ、トムソーヤ小屋におままごとを片付けに向かいました」の箇所。

青野さんの文章からは、「しかし同時に、空間的にも時間的にも、家の外（外部）との関係がほぼなくなって、家の中だけの人間関係で完結しなければならない状態が一定期間経過すると、じっくりではありますが、こころに変化が起きていったように思います。」の箇所。

どちらの箇所も、新たに湧いて出てきた「新しさ」や「違い」が、そのまま、この世界に表現されているように見受けます。

秀弘さんは、そこから「あそびの時間」の考察に移り、「ズレを認めること」が居心地の良さの要素なのではないかという仮説を得ます。

一方、青野さんは、ご自身の「こころの変化」を「あそびのこころ」という思想にまで昇華し、「明るい兆しの予感」や「そのままでいること・あることの承認」が居心地の良さの要素なのではないかという仮説を得ます。

岩崎さんは、青野さんのこの考察に触発され、「居心地の良さって自分で変えることができるんだ！」ということに気づき、驚いた。その気持ちを率直に記してくれました。

私が「新しさ」や「違い」という言葉で言い当てようとしたことは、秀弘さんが「ズレ」と言い、青野さんが「変化」「兆し」と言ったことにかかわっているように思うのですが、なんだか上手く、整理できません。

ですので、ある生活の場面に託して、もう少し、自分の考えをまとめてみたいと思います。人間の中に「兆し」や「変化」が生じていく、そんな場面です。

２．昨日の朝の出来事

5 月 28 日（木）午前 7 時 8 分。

3 歳の娘と私が、どちらからともなく眼を開けて、布団の上で寝転がり、向かい合っています。

家族 4 人が寝るために 3 枚並べた布団の上で、娘は左半身を下に寝転がって、私の方を向いています。私は、右半身を下に寝転がって、娘の方を向いています。

スマホの時計を見たら、7 時 8 分でした。妻と 1 歳の娘は、すでに起きて、朝の生活を始めているようです。

娘は「まだ起きたくない」「もう少し、こうしていたい」と思っているでしょう。

私も「もう少し、寝転がっていたい」と思っています。

そんな二人が、向かい合って、寝転んでいます。

そんなに離れているわけではありません。娘が右手を伸ばせば、私の体には触れるくらいの、私が左手を伸ばせば、娘の背中を抱けるくらいの、そんな距離です。

みなさんも、左半身を下にして寝転んで、すなわち、娘の体勢を取りながら、寝転がって読んでいただけたら、今から書くことが伝わりやすくなるかも知れません。

可能であれば、ぜひ、そうしてみてください。

娘は、左半身を下にして、左手の親指を咥えています。右手は敷布団の上を撫でたりしています。手を伸ばした先にちょうど私の体があるので、布団の上を撫でた娘の指は、ちょうどそのまま私の体に触れます。娘の爪の先でくすぐられるようなかたちですから、私にしたら、その感触が、なんともくすぐったい。

娘の右手は、しばらくの間、布団の上を撫でたり、腕を伸ばした先の私の体に触れたりしていました。

そうしていると、階下から（寝室は 2 階にあります）妻の「そろそろおきなさーい」の声が聞こえてきます。

時計を見たら、7 時 13 分になっていました。寝転びながら向かい合っている時間が、5 分間も経っていたのです。

妻の声に私が「はーい」と応じます。そして、私は、体を起こします。すると娘は「やだー。だめー」と言って、私を引き留めようとします。それが、娘の今日の第一声です。

どういうタイミングで、人は動き始めるんだろう（それまでとは別の体勢を取り始めるん

だろう)。私は、そういうことを知りたかったので、しばらく娘を泳がせて、観察することにしました。
　そして、娘の心の中で何が動いているんだろうということに思いを馳せていました。

　左半身を下にして寝転んでいた娘は、そのままうつぶせになりました。
　左手の親指を、まだ咥えています。

　私はそろそろ居心地が悪くなってきました。
　1 階に行きたくなってきました。時計を見たら、7 時 18 分くらいになっていました。妻の「おきなさーい」に応えてから、さらに 5 分が過ぎていたわけです。

　娘はさらに、体の向きを変えました。
　今度は右半身を下にして、寝転んでいます。
　もはや私と向かい合っているのではなく、かといって、私に背中を向けているわけでもなく、私と T の字をつくるように、寝転がっています。私のお腹に、娘の頭がくっついています。

　私は娘の横にいながら、まったく別のことを考えていました。このリレー原稿のことを考えていました（前日に、岩崎さんからバトンが届いていたのです)。
　娘の心の動きに思いを馳せている時間は、気がついたら、いつの間にか、終わっていて、それとは別のことを考えていたわけです。
　秀弘さんの原稿（第二便）に出てくるチーちゃん、ハルちゃんが、もし、片付け終わっても「そこで片付けをしててください。でないと、水が流れないんですから」と言われてしまったら、心地悪かっただろうなあ。と、そんなことを、娘の横で、ぼんやり考えていました。

　というのは、今の私が、片付け終わったにもかかわらず、「まだ片付けを続けてください。そうしないと水が流れません。」と言われているチーちゃん、ハルちゃんに近い状況だったからです。

　どういうことか？
　すでにもう私の中では「もう少し寝転んでいたいという当初の気持ち」は展開しきっている。限度まで達している。
　「寝転びきった。展開しきった。開ききった」というところまで来ている。
　チーちゃんとハルちゃんも、おそらく「洗いきった」のでしょう。自分が「ここまでやろう」と決めた地点は超えたのでしょう。

正確に言えば、「ここまでやろう」という地点を決めて始めたわけではないと思いますが、洗っている最中に「もうこれで十分だな」という気持ちにはなったのでしょう。
にもかかわらず、「まだ続けなさい」と言われたら、それは居心地が悪い。

何だか徐々に、考察に移ってきました。
いま私がチラッと書き急いだことは大事なことだと思います。
それは、洗い始める前に「ここまで洗ったら」という目標到達地点が決まっているわけではないという点。
より詳細には、洗い始める前に「ここまで洗ったら」という目標到達地点が決まっているわけではなく、洗っている最中に「あ、これで十分だな」という地点が訪れるのだという点(それが不意に訪れる場合もあれば、徐々に訪れる場合もある)。
私にしてみると、目を覚ました 7 時 8 分に「この時刻まで寝転ぼう」という時刻を決めたわけではなく、「こういう状態になったら起き上がろう」という目標到達地点を設定したわけでもなく、なんとなく、寝転んでいる間に「もう十分だな」という状態が訪れたわけです。

そういった状態まで来たので、私は「よし、下(1階)に行こう」とあらためて体を持ち上げました。
娘はそれを見て「まだ、まだ、いかないで」と言います。
私は「えー、そろそろいこうよ」と返事します。
ここで、娘の「まだ」と私の「いこう」がしばらくせめぎ合います。
せめぎ合っている間に、「そろそろいこう」という気持ちになったのでしょう。娘は、自分で体を起こして、「だっこー」と言ってきます。「抱っこして、下に行こう」の合図です。
こうして下にやってきました。7 時 20 分を過ぎたところでした。

3．考察

3．1．考察

考察に戻ります。いくつかの論点を確認しておきます。

「先行する気持ち(寝転んでいたい気持ち)」が展開しきった(充たされきった)ところで、もしくは「それとは別のことをやりたい気持ち」が上回ってきたところで、「後続する状態(起き上がる状態)」への転換が生まれる。これが第一に確認しておきたい論点です。
キーワードは「展開しきる(充たされきる)」「上回る」「転換」です。

この転換は、青野さんの文章にも見られます。青野さんの文章自体で、この転換が起こっ

ています。

青野さんの文章では、久保、秀弘さんとバトンが渡ってきた「あそびの空間、あそびの時間」というテーマが論じきられたところで、もしくは、論じきられていないにしても、それとは別に論じたいテーマ（「あそびのこころ」のテーマ）が徐々に上回ってきたところで、転換が生まれました[1]。

居心地が悪くなるということがあるとすれば、「先行する気持ちが充たされきった状態」や「後続する気持ちが上回った状態」が来ているにもかかわらず、「後続する状態」に転換できないときでしょう[2]。

青野さんで言えば、上のような状態が来ているにもかかわらず、「あそびの空間、あそびの時間」をもっと論じなさいと言われてしまうときでしょう。

私で言えば「寝転んでいたい気持ち」が展開しきったか、「起き上がりたい気持ち」が上回ったにもかかわらず、「まだ寝転んでいなさい」と言われてしまうときでしょう。

以上が第一に確認しておきたい論点ですが、その点を書きながら、第二に確認しておきたい論点も分かってきました。

それは、「起き上がる状態」への転換が生まれる前から、「起き上がりたい気持ち」は生まれているという点です。

青野さんで言えば、文章上は、ある一点で[3]、「あそびの空間、あそびの時間」というテーマから、「あそびのこころ」というテーマへの転換が起こるわけですが、「あそびの空間、あそびの時間」の文章を書いている最中にも、その内側では「あそびのこころ」のテーマがムクムクと浮かんできていたのでしょう。

このとき、青野さんの中には、クロスフェードが起きていたはずです。「あそびの空間、あそびの時間」というテーマがフェードアウトしながら、「あそびのこころ」というテーマがフェードインしてくる、というクロスフェードが起きていたはずです[4]。

---

[1] 久保と秀弘さんが論じきったから「もう十分」という場合もあるでしょうし、青野さんが論じきったから「もう十分」という場合もあるでしょう。第三便の場合は、論じきられたというよりも、論じたい別のテーマが浮かび、上回ってきたのだと思います。

[2] この文章では、のちに整理される「状態」「意識状態」「意識」の使い分けが、まだ曖昧なまま、「状態」「気持ち」という言葉が使われています。後ほど、注 6 で整理します。

[3] 「しかし同時に…」の箇所から。

[4] ベルクソンによる「浸透」という言葉を使うならば、そのクロスフェードは、「あそびの空間、あそびの時間」というテーマと、「あそびのこころ」というテーマとの相互浸透とも言える（ベルクソン（藤田尚志ら訳）『時間観念の歴史』書肆心水、2019 年、p86）。

私で言えば、表面的には「寝転んでいる状態」から「起き上がる状態」への転換が生まれたわけですが、その内側では「寝転んでいたい気持ち」から「起き上がりたい気持ち」へのクロスフェードが起きていたのです。

より正確な考察を行うために、「**状態（行動の状態）**」「**意識状態**」「**意識**」という言葉を導入させてください。

目に見えるものとして、「寝転ぶ」「起き上がる」といった「**状態（行動の状態）**」があります。

そうした「状態」の奥には「寝転んでいたい意識状態」「起き上がりたい意識状態」という「**意識状態**」があります。

こうした「意識状態」は、一つの意識で塗りつぶされているわけではなく、その「意識状態」の中には、つねに複数の「**意識**」が混在（共存）しています。例えば、「寝転んでいたい意識状態」の中でも「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」が比率を変えながら、共存しています。

さて、クロスフェードについてです。

一つの意識状態がまずある。その意識状態は「寝転んでいたい気持ち（意識)」や「起き上がりたい気持ち（意識)」という単一の意識に塗りつぶされているわけではない。一つの意識状態の中に「寝転んでいたい意識」も「起き上がりたい意識」も混在（共存）している。

そして、瞬間、瞬間に「新しい意識状態」が生まれる。そのたびに「寝転んでいたい」と「起き上がりたい」の比率が変わる。

だから「ある一瞬の意識状態」において「寝転んでいたい意識」が上回っているとしても、その陰には「起き上がりたい意識」が潜んでいる。逆に「起き上がりたい意識」が上回っているときにも、その陰には「寝転んでいたい意識」が潜んでいる。

「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」は「比率」を変えているのであって、そして、どちらかの「比率」がもう一方を上回ったときに、「どちらかの意識が優勢な意識状態」が生まれるだけであって、「寝転んでいたい意識で塗りつぶされた意識状態」から「起き上がりたい意識で塗りつぶされた意識状態」への「ある瞬間での転換」があるわけではない。

これは「寝転んでいたい意識状態」から「起き上がりたい意識状態」への「転換」の瞬間においてさえも、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」とが「比率」によって、グラデーションをつくっていて、どちらかが上回ったり、下回ったりしているにすぎないということです。

転換の瞬間においてでさえも生じているこのグラデーションが、クロスフェードの正体です。

書きながら、第二の論点のキーワードがわかってきました。

それは「新しい意識状態」と「比率」です。

第二の論点で言いたかったことは、瞬間、瞬間、ある比率をもった「新しい意識状態」が生まれている。すなわち、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」との「比率」をもった「(その瞬間の) 意識状態」が生まれている。そして、そのたびに「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」の「比率」は変わり続けている。ということです[5]。

3．2．考察の整理

書きながら、第一の論点と、第二の論点の違いも分かってきました。

第一の論点は「先行する意識状態」から「後続する意識状態」への転換の話をしていました。例えば、「寝転んでいたい意識状態」から「起き上がりたい意識状態」への転換の話をしていました。

第二の論点は、「転換」の土台になっている「瞬間」の話をしていました。例えば、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」との「比率」をもった「意識状態」が、あらゆる「瞬間」に新しく生まれているという話をしました。

そうした話をしたことで、第一の論点で論じた「転換」の瞬間においてさえも、クロスフェード（グラデーション）が起きているということがわかりました。

この点は、引き続き、リレーの中で深めたいと思います。

---

[5] 先ほど、考察の中で、

居心地が悪くなるということがあるとすれば、「先行する気持ちが充たされきった状態」や「後続する気持ちが上回った状態」が来ているにもかかわらず、「後続する状態」に転換できないときでしょう

と書きました。この文章を書いた時点では、まだ「状態」「意識状態」「意識」という言葉の使い分けがあいまいなまま、「状態」「気持ち」という言葉を使ってしまいました。上のような使い分けを定めた今であれば、この考察は次のように書き換えることができます。

居心地が悪くなるということがあるとすれば、「先行する気持ち（意識）が充たされきった意識状態」や「後続する気持ち（意識）が上回った意識状態」が来ているにもかかわらず、「後続する状態（行動の状態）」に転換できないときでしょう。

ちなみに「先行する気持ち（意識）が充たされきった意識状態」も「後続する気持ち（意識）が上回った意識状態」も、どちらもが「後続する意識が優勢な意識状態」です。

４．ドゥルーズの思想：「差異」「反復」

以上の私の考察には、土台になっている思想があります。ジル・ドゥルーズの思想です。

冒頭の「１．１．最近考えていること」の中で、

> *私は最近、「その瞬間、その瞬間、世界には新しい事態が生まれている。世界には、違う状況が生まれている。」ということを考えています。*
> *そして、その「新しさ」や「違い」が、そのままではいることが許されなくなったら、居心地が悪いだろうな、ということを考えています。*

と書きました。

この「最近考えていること」は、「３．１．考察」の中で、

> *第二の論点で言いたかったことは、瞬間、瞬間、ある比率をもった「新しい意識状態」が生まれている。すなわち、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」との「比率」をもった「(その瞬間の) 意識状態」が生まれている。そして、そのたびに「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」の「比率」は変わり続けている。ということです。*

と書いた箇所に反映されています。

このような考え方は、ドゥルーズの思想に影響された考え方です。

上に書いたことを、「差異」「反復」というドゥルーズの言葉遣い（用語）で書くと、次のように書けます。

刻々と、瞬間、瞬間に新しいものが生まれている。その「新しいもの」は、前の姿とは少しずつ違う。その「少しずつ違う新しいもの（微小な変異、差異)」が、まず、ある。その「微小な変異、差異」が反復される中で、先行する状態から後続する状態への「転換」が起こる[6]。

重要なのは、「差異」がまず、ある。という点です。言い換えれば「ちがう」というのが基本形態だという点です。

「同一性」があり、それに比べて「ちがう」のではありません。

この世界には「ちがう」しかないのです。

この点は、みなさんと共有したいので、長くなってしまいますが、このまま書かせてください。申し訳ありません。

---

[6] 吉川泰久・堀千晶『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』せりか書房、2015 年、p80-81（「セリーSeries」の項)。

昨日の朝、7 時 20 分。私は娘を抱いて、階下に降りました。

妻がいます。なんだか、今日は元気そうです。

こんな時、私たちは「ふだんの妻」を基準点に設定して、それとの対比で「なんだか元気だ」とか「なんだか疲れている」とか考えてしまいます。

しかし、「ふだんの妻」など、いまだかつて、どこにも存在したことはないのです。

いまだかつて、どこかに存在してきたのは、少しばかり比率を変えた「なんだか違う妻」なのです。

まず存在するのは「なんだか違う妻」なのであって、その妻が反復して存在する。そうすると、「なんだかいつも反復して存在している、ふだんの妻っぽいもの」は浮かんでくる。しかし、それだって、しっかりと同一性を保った(確固として揺るぎなく、一貫性を保った、いつもと同じ)「ふだんの妻」なんかではない。

これは居心地の悪さにもかかわっていて、「なんだか違う」が基本形態なのに、「いつもと同じ」であることが強いられると、居心地が悪いのです。

「みんなちがって、みんないい」ではなく、「みんなちがって、あたりまえ。いつもちがって、あたりまえ」なのです。この点は教育研究者の大田堯がさかんに訴えていた点です[7]。

さて、この点からすると、私が第一便で挙げた、

③それぞれが、それぞれの仕方で、自分の感じている「居心地」を表現できること。

④多種多様な存在や表現が、「一つの世界(一つの居心地)」に包まれながら、包括的に、同時存在していること。

という居心地の要素についても、「一つの世界(一つの居心地)」があるという前提を、「それぞれが感じている居心地が、まず、ある」という前提へと書き換えねばなりません。第一便の書き方では、同一の「居心地の良さ」が、まず、ある、という誤認識を与えかねません。

この点は、ここでは、深入りしませんが、この訂正が生じただけでも、議論は深まっているように思います。

5．居心地研究に戻って

以上の考察を経て、居心地研究に戻ります。

今回、わかったのは、「意識状態の転換」が起きているのに、新しい状態(state)を生み出せない状況(situation)は居心地が悪い。ということです。

以下、状態と状況を使い分けます。

---

[7] 映画『かすかな光へ』(森康之監督、2011 年)

「寝転ぶ」「起き上がる」というのは「状態 (行動の状態)」です。「布団の上で寝転がり、向かい合っている」というのが「状況」です。

状況に「あそび」があり、状況が柔らかいものであったら、状態を変えることができる。逆に、状況に「あそび」がなく、状況が硬いものであったら、状態を変えるのは難しい。そういうふうに言えるでしょう。

ただ、状態によって状況は変わり、状況によって状態は変わるので、両者は密接にかかわっていると言えるでしょう。のみならず、両者の区分けは、そこまで厳密にはできないでしょう。ですので、状態と状況をわざわざ分ける必要はないのかも知れません。

しかし、私にとっては、この区分けがあった方が、考察が整理されるので、この区分けを導入させてください。

状態と状況。この区分けの妥当性は、みなさんと一緒に検討していきたいと思います。

繰り返しになってしまいますが、この一周目で、「意識状態の転換」が起きているのに、新しい状態(state)を生み出せない状況(situation)は居心地が悪い。ということがわかりました。

青野さんで言えば、「あそびの空間、あそびの時間」とは別のテーマを書きたい「意識状態」になっているのに、「あそびの空間、あそびの時間」をもっと書きなさいと言われてしまう状況。その状況が仮にあったとしたら、居心地が悪いのだろうということがわかりました。

その状況を青野さんは「しなければならない状態」と呼んだわけです。

とはいえ、空間的・時間的には「しなければならない状態」を余儀なくされ、「先行する状態」を捨て去ることや「後続する状態 (新しい状態)」へと転換することが難しかったとしても、心理的には「先行する意識状態」を捨て去って「後続する意識状態 (新しい意識状態)」へと転換することができる。

青野さんは「空間の状態」「時間の状態」とは別の「心理の状態」に着眼することによって、空間的・時間的な転換とは別の、心理的な転換を論じてくれました。

さらには、そのような転換を生み出す「あそび (余裕)」のことを「あそびのこころ」と名づけてくれました。

このとき、青野さんが「(心理的な) こころの向き」を変えながら、「(空間的な) からだの向き」を変えていたという点も興味深い点です。

それはちょうど、カフェで団体客に居合わせた人が、空間的には「しなければならない状態」に置かれつつも、ちょっとした空間を見つけることで「体の向き」を「転換」し、それによって「こころの向き」をも「転換」していたことと重なるからです(岩崎さんの第四便)。

とはいえ、これ以上、バトンを重くしたくないので、この点についても黙っておきます。

いささか余談めきますが、この「第五便」の扱い方について、私が考えるところを述べておきます。

私のこの文章は「バトン」ではないと思ってください。

どちらかというと、私は、みなさんのリレーに走者として加わりながら、みなさんが走っている間につかんだ「新しいフォーム」を一緒に確認する「マネージャー」を自任してもいます。

メールでお送りした「リレーの進め方」の⑤にも記したように、その周が終わるときに、その周で起きたことを総括する役割とも言えます。

それに免じて、私の文章が長くなってしまうことをお許しください。そして、この文章は「バトン」ではありませんので、そのすべてをバトンタッチしようとは思わないでください。

長く書きすぎました。

申し訳なく思います。私がこの文章で述べたかったことは、「３．１．考察」の中の

> *第二の論点で言いたかったことは、瞬間、瞬間、ある比率をもった「新しい意識状態」が生まれている。すなわち、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」との「比率」をもった「(その瞬間の) 意識状態」が生まれている。そして、そのたびに「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」の「比率」は変わり続けている。*

という箇所に集約されています。

私の考察は以上です。

以下、一周目の総括と、二周目へのブリッジを書きます。

６．一周目の総括と、二周目へのブリッジ

６．１．一周目の総括。そして、残された論点

ここでは、一周目を総括しつつ、残された論点を、4 つに整理しておきます。

【論点１】

まずは、秀弘さんが考察してくれた「あそびの時間」について（第二便）。

この論点は、ほぼ、手つかずのまま残っています。

チーちゃん、ハルちゃんたちの「水洗い」と、カイ君、リク君たちの「水遊び」。この二つの「異なるものが、差異を保ったまま遭遇することによって、双方が互いを引きずるようにしつつも、バラバラに進化し変形していった」さまは、ドゥルーズが例に出す「スズメバチと蘭」の関係を思い出させてくれました[8]。

スズメバチは蘭をメスの性器と勘違いし、惹きよせられます。蘭はそうして、スズメバチの力を借りて花粉を運びます。

「スズメバチと蘭」が 1 年というサイクルの中で出会っていること、ハルちゃんたちの「水洗い」とカイ君たちの「川遊び」が午前中いっぱいというサイクルの中で出会っていること、すなわち、両者ともに、ある程度の「あそび」をもった時間の中で出会っていること。その点はポイントになりそうです[9]。

【論点２】

加えて、「あそびのこころ」の論点について。

「あそびのこころ」は、青野さんが書いてくださったように「変化の兆しの予感」や「承認」をも含んだテーマです。

このうち「変化」「兆し」については「比率」という考え方が、さらなる糸口になりそうな予感がします（３．１．や３．２.）。

また「承認」については「ちがいこそが基本形態であり、ちがいこそがそのまま承認されること」を述べました（３．３.）。

---

[8] 吉川泰久・堀千晶『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』せりか書房、2015 年、p134-135（「生成変化 Devenir」の項）。

[9] また、このプロセスは、ユーリア・エンゲストロームの学習論と接続しうるかもしれない。その際は、「人間の活動の構造の三角形」内部で起きていることを（エンゲストローム 1999：79）、とくに、共同体と主体という構成要素の間で起きている「第二の矛盾」を（同：238）、ドゥルーズの世界観から書き直すことになるだろう（ユーリア・エンゲストローム（山住勝広ら訳）『拡張による学習』新曜社、1999 年（原著は 1987 年））。

さらには、「転換」が承認されることについても言及しましたが（3．1．や4.)、この転換については、もっと深めたいと思っています。

私は「2．昨日の朝の出来事」の中で「目標到達地点」という言葉を使って、次のように書きました。

> *私にしてみると、目を覚ました7時8分に「この時刻まで寝転ぼう」という時刻を決めたわけではなく、「こういう状態になったら起き上がろう」という目標到達地点を設定したわけでもなく、なんとなく、寝転んでいる間に「もう十分だな」という状態が訪れたわけです。*

そうなのです。ただなんとなく、「もう十分だな」という状態が訪れるのです。これは、展開しきった(充たされきった)ところで訪れる意識状態の「転換点」にかんする論点です。
この転換点は、どうやって訪れるのか？
この転換点を過ぎてもなお、転換が許されないときに、居心地が悪くなるわけですから、この論点は、居心地にも、かなり深くかかわっていそうです。

【論点3】
「あそびのこころ」については、「こころの向き」と「からだの向き」の関係も残された論点です（4.）

【論点4】
「それぞれが感じている居心地が、まず、あること」と「一つの世界（一つの居心地）に包まれていること」との関係も、今後、深掘りしたい論点です（3．3.）

こうして並べてみると、リレーの一周目で、かなり多くの論点が出てきました。一周目の充実を、あらためて感じます。

5．2.「2周目」以降に向けて
私は、このリレーを走りながら、「小さな変異」「転換点」「スズメバチと蘭の生成変化」といった問題を考えたいと思っています。
大きく言えば、「時間」の中で何が起こっているのかを考えたいと思っています。

第一便からちょうど一か月が経ちましたが、この一か月間での新たな発見は、「同一性」が先にあるのではなく、「変異」や「差異」が先にあるという点です。
言い換えれば、「同一性」はいつまで経っても「偽装」としてしか出てこないということ。

これは教育学にとっては大きな論点です。

というのも、人の育ちにおいては、それが「偽装」であったとしても、周囲からの応答や期待の「一貫性」を、揺るぎないものとして信じなくてはいけない局面があります。それはエリク・H・エリクソンが提示した論点です[10]。

私は、このリレーを走りながら、ドゥルーズとエリクソンの間を行き来し、この論点を考え続けるつもりです。

ちなみに、第一便で言及した「包まれる感覚」の正体にも興味があります。「匂い」「感触」「発見」。このあたりのことと「包まれる感覚」とは大いに関係があるように思うのです。この点も、ドゥルーズとエリクソンの間を行き来しながら、考えたい論点です。

「ヌミノース」「習慣」「儀式化」「擬似種化」「感覚」「リズム」「想起」あたりがキーワードだと思います。

みなさんが一緒に考えてくださってもいいですし、各自が、各自の考え抜きたいテーマを、各自で考えてもいいと思います。

そうした「ズレ」が実相なのですから。

というわけで、このリレーにおいて、私はドゥルーズの思想を、自分なりに理解しながら、リレーに参加するということになりそうです。ドゥルーズの思想を理解しきった状態で参加するのではなく、このリレーを通じて、ドゥルーズの思想を理解していくということになりそうです。

さらに、あわよくば、私の中で根をはりつつあるドゥルーズの思想が、私の中で先に根をはっている大田堯、エリクソン、ユーリア・エンゲストロームの思想と、接続されていくと

---

[10] 例えば『洞察と責任』には「モノの世界の一貫した質 the enduring quality of the thing world」という言葉や（p117）、「ケアしてくれる人間を、一貫した存在として経験するということ the experience of the care-taking person as a coherent being」という言葉（同）、さらには、人の育ちにおける「法の精神によって導かれた親による分別 the judiciousness of parents guided by the spirit of law.」の重要性を指摘する言葉がある（p119）。これらの言葉は、養育者や周囲の大人による応答や期待が「安定して、一貫していること」の重要性を指摘するものである（Erik. H. Erikson “*Insight and Responsibility*”, New York, W.W.Norton, 1964）。また、ドゥルーズに言わせれば、エリクソンが想定する「応答」であっても、差異が反復されているということになる。瞬間、瞬間「新たな応答」が誕生するが、その「新たな応答」が反復されることで「特徴的な応答」が浮かびあがってくるのだろう。これらの点も、個人的には論点にしたい。

いう予感があります。

そういう意味では、秀弘さんには唯識の思想などを、どんどんこのリレーで発揮してもらうといいのかも知れません。私が勉強している上の思想と、秀弘さんの思想が面白く出会い、別のものになる（生成する）ということがあるのかも知れないとも思いました。

もちろん、その一方で、接続しすぎては窮屈になるでしょうから、切断もしたいと思います[11]。

長くなりました。申し訳ありません。

一周目は拡散する方向で、議論がかなり充実していました。二周目はもう少し論点を絞ってもいいのかも知れません。この第五便で整理した論点の中から「この論点に絞って、リレーしよう」という論点を、みんなで決めてもいいのかも知れません。

もしくは、二周目を始める前に「ここってどういう意味？」という質疑応答をしておいてもいいかも知れません。

みなさんの意見を聞きながら、決めたいと思います。

論点を絞りますか？いったん質疑応答をしますか？それとも、このまま 2 周目に入りますか？ご意見ください。

私は、溝口さんを含めた 5 人で、ハルちゃんたちの「水洗い」とカイ君たちの「川遊び」の論点を深掘りしたいと思っています。

二つの「目当てやそれに伴う行為」がズレている主体が、流れた水によって薄っすらと重なり始め「一つの物語的に共有している時間」を生み出し始めたのに、離れていくような、そんな物語を、みんなで持ち寄って、秀弘さんの示してくれたテーマを深掘りしたいと思っています。

みなさんのご意見をお聞かせください。

溝口さんの、不定期に現れる「ヘルメス」も待っています[12]。

---

[11] 千葉雅也『動きすぎてはいけない（文庫版)』河出書房新社、2017 年

[12] 河野哲也『境界の現象学』筑摩書房、2014 年、第六、第七章。

読者のみなさんへ

久保　健太
（関東学院大学）

第五便まででリレーが「一周」しました。

リレーメンバーで、2020 年 6 月 5 日に ZOOM 会議をしました。

岩崎さんから、「二周目に入る前に、確認したいことがある」ということでしたので、二周目のトップバッターは岩崎さんにお願いすることにしました。

また、二周目は、岩崎さん、青野さん、秀弘さん、久保という順番でリレーをまわすことにしました。

第六便『居心地の良さと心理学』(6 月 13 日)

記：岩崎 真人

０．最初に質問

第六便は、質問から始めさせてください。

第五便に書いてあった「状況と状態の違い」についてもう少し理解したいです。第五便からその箇所を引用します。

> *５．居心地研究に戻って*
> *今回、わかったのは、「意識状態の転換」が起きているのに、新しい状態(state)を生み出せない状況(situation)は居心地が悪い。ということです。以下、状態と状況を使い分けます。*
> *「寝転ぶ」「起き上がる」というのは「状態（行動の状態）」です。「布団の上で寝転がり、向かい合っている」というのが「状況」です。*
> *状況に「あそび」があり、状況が柔らかいものであったら、状態を変えることができる。逆に、状況に「あそび」がなく、状況が硬いものであったら、状態を変えるのは難しい。そういうふうに言えるでしょう。*
> *ただ、状態によって状況は変わり、状況によって状態は変わるので、両者は密接にかかわっていると言えるでしょう。のみならず、両者の区分けは、そこまで厳密にはできないでしょう。ですので、状態と状況をわざわざ分ける必要はないのかも知れません。*
> *しかし、私にとっては、この区分けがあった方が、考察が整理されるので、この区分けを導入させてください。*
> *状態と状況。この区分けの妥当性は、みなさんと一緒に検討していきたいと思います。*

区分けがあった場合とない場合の違いが良く分からず、区分けの妥当性がどうかを考えるまでには理解が追いついていないので、もう少しその二つの言葉の使い方について理解を深めたいと思っています。

質問は以上です。

「１．五便までで学んだことと、カウンセラー養成講座で学んだこと」「２．先行走者の言葉から」「３．エピソード」「４．エピソードへの考察」の順に書きます。

１．五便までで学んだことと、カウンセラー養成講座で学んだこと（自己生成）

○3 つの要素から、あそびのこころに注目。

居心地の良さ 1 週目の総括として、「あそびの空間」「あそびの時間」「あそびのこころ」という、空間・時間・心理的状態の 3 つの要素が居心地の良さに関係しているというところまで、理解を深めました。その中で、「あそびのこころ」という心理的状態については、自分が以前受講した、全国私立保育園連盟主催による、保育カウンセラー養成講座で出会った清水幹夫先生という講師から学んだ、心理学の分野と接点があるように感じ、注目して考察してみたいと思います。

自己の生成機能

人は、悩みや苦しみ、課題や問題が大きすぎる場合、「自己」を変容することによって、「自己」を修正し、再構成する力を持っている。自己の再体制化ないしは「自己生成」と呼ぶ機能。「自己」は諦め、

要求水準を低めるという消極的な機能も備えているが、問題や課題を通してものの見方や考え方を変え、「自己」や「自己の構造」を変えるという、積極的な働きを持っていると考えられる[1]。

２．先行走者の言葉から

私は、第四便で「居心地の悪い環境だと思っていたものを、自ら視点を変えて(おそらく無意識的に)、その悪いと思っていた環境よりも、少し居心地の良い環境へと変えていったということ」と書きました。居心地の悪い環境だと思っていたものを、自ら視点を変えて、その悪いと思っていた環境よりも、少し居心地の良い環境へと変えていくこと。そして、それは受身ではなく主体的に環境を変えていく力という話から「よく生きようとする」という言葉が出てきました。自己生成機能はそんな「よく生きようとする」心の有り様を説明しているようにも感じます。以上の学びから、以下の学童で起こったエピソードを通して考えてみたいと思います。

３．エピソード

○余裕の心

午前中の川遊びの終盤に「ザリガニ一匹もいないのほんと最悪。もうこんなもの意味なかった…。」とザリガニを捕まえたら入れようと思っていた、プラスチックのパックで作った入れ物を、川に流しやる気をなくしているあきらくん。その後川遊びの時間が終わり、学童に戻ってきたときの出来事だった。

「まじでむかつく！あいつなんかいなけりゃいいのに！あーもうほんと川遊びなんか最悪。」と、午前中の川遊びが終わり学童に帰ってきてそうそう、怒りの声を出す３年生のあきらくん。「どうしたの？」と心配の気持ちで声をかける岩崎。「たけしのやつが、水かけてきたんだよ！あいつなんかいなけりゃいいのに！あーもうほんとうざい。」と気持ちを話してくれた。たけしくんとは 1 年生の子である。岩崎も川で遊びを見守っていたが、たけしくんは誰かに水をかけているわけではなく、「洋服ぬれるの気持ちいいねー(笑)」と浅めの川を行ったりきたりしてみては、移動することでズボンや服が濡れる感覚を楽しんでいたように見えた。思い思いに歩いていたので、人が集まっているところにも歩き、周りに水がかかるなどは気にしていない姿はあったが、みんなで川遊びをしていたら、少しかかってしまってもしょうがない程の環境だったように見えた。「なるほどね。でもたけしくんわざとじゃなさそうに見えたけど。」と話をすると、「絶対わざとだ！」と声を荒げていた。

あきらくんは普段から言葉遣いが荒くなることがしばしばある。感情が素直に言葉に出るので、怒りの感情の時は、こんな風に周りに向かって声を荒げることはよくある姿であった。また、たけしくんとの関係はあまり良いと言えるものではなく、天真爛漫に行動するたけしくんの姿によく苛立ちを見せることがあった。ザリガニが取れなかった気持ちと普段からのたけしくんとの関係が、苛立ちを増幅させているように感じた。

その後、その話を聞いていた職員二人それぞれに、「気持ちは分かるが、年下の子に対して今のは言いすぎだ。」「あきらくんが１年生の頃はそういうことしてても、年上の子は優しくしてくれてたんだよ。」と、それぞれ別のタイミングで話をされ、「それはわかってるけどさ…！」と、目には少し涙があり、しばらく図書コーナーのソファーで気持ちを整理していたとのことだった。※岩崎は、あきらくんに「どうしたの？」と声をかけ気持ちを聞いたあと、別の子の話し合いに加わることになり、あきらくんとの続きの話は違う職員とバトンタッチしていた。

そんな話からしばらく時間が経ち、午後の川遊びが終わった時のこと。午前中に引き続き、再び川遊

[1]清水幹夫先生から 2020 年 5 月 26 日に個人的に頂いた資料「人は人との間で人になる」。13 ページ。

びにでかけていたあきらくんが遊びを終え学童に戻ってくると、「ザリガニ俺じゃないんだけど、みんなで 1 匹捕まえたんだぜ！」と嬉しそうに報告し、足を洗いに学童前にある水場へやってきた。あきらくんの前には 1 年生が 3 人並んでいた。その内の 1 年生のまなみちゃんとよしおくんの二人が、ふと列から離れる。自然と前二人分の間をつめるあきらくん。まなみちゃんとよしおくんが、無言ですぐ戻ってきて、あきらくんがつめた間にぎゅっと戻ろうとすると、「俺が並んでるんだから、ちゃんと並べ！」と 1 年生に厳しく声をかけていた。1 年生も思いがけず列から離れてしまったようにも感じたことと、あきらくんの声に萎縮していたように見えたので、「さっき並んではいたんだよね。ちょっと並ぶ場所間違えちゃったのかな？」と、少しフォローするような形で 1 年生二人に岩崎が声をかけた。すると、「まっいいよ。おれの方が年上だからな。前入っていいよ。」と話すあきらくん。その言葉には優しさと気持ちの余裕があるように感じた。それでも前の 1 年生が、足洗いにもたもたしていると、「おい、さっさとしろよ！」と急かしたりする姿もあった。あきらくんが足洗いの順番になったとき、「さっきは順番譲って優しかったね。でもどうして優しくしてあげたの？」と岩崎が声をかけると、「あそこで言い合ったら、また話が長くなる(おとなとの)でしょ。(笑)」と、あきらくんの表情は、少しはにかんでいた。

4．エピソードへの考察

年下に対して、配慮もなく声を荒げる、感情を素直に出す姿は、あきらくんのよく見られる姿のひとつで、この研究の中であえて言うならば、「いつものあきらくん」の一つであるように思います。

そこに、安心できるおとなからの、説教というのでしょうか。水をかけられた気持ちを受け止めつつも、荒い言葉についてや、以前のはるとくんの様子を重ね、年下の子の気持ちについて考えさせられたこと。また、ザリガニが取れなかったことへの悔しさ、苛立つ相手から、わざとではなくても水をかけられたことへの行き場のない怒りの気持ちとで、涙が出るほど葛藤する体験があったように思います。

その後、午後の川遊びに気持ちが向くほど心は回復し、遊んでいる最中に、みんなで力を合わせて朝からの念願だったザリガニがとれたことの嬉しさ、幸福感を得たあきらくん。気持ちに余裕もあったように感じます。そんな安心した気持ちを基盤に、足洗いの順番の場面では、前があいたから抜かして並ぶという自分の素直な気持ちと、年下の子への配慮意識とで葛藤し、そこには、自分の主張を貫くと、おとなに長い話をされるからやめとくという諦めもあるかもしれませんが、自分もそんなことでは気にしない、はにかむくらいは居心地がいいという新しい居心地の良さを獲得するあきらくんの姿があったように感じました。(自己生成)。

おそらくそんなあきらくんも、翌日にはまた「いつものあきらくん」が存在し、川遊びの日に獲得した「年下の子に優しくできるあきらくん」も同時に存在するように感じます。久保さんの比率や転換の話につなげて言うのであれば、今まであきらくんの中で、水をかけられたことで「配慮もなく怒りの声を出す」「気にしない」の二つの意識の中でクロスフェードしていたことが、学童の職員の言葉がけ、自分の気持ちと相手の気持ちの葛藤から「配慮もなく怒りの声を出す」「気にしない」に加え、「年下の子へ優しくする」という、新しい意識が加わり、クロスフェードする幅が増えたように感じました。そして、翌日にはまた「いつものあきらくん」の要素が強いので、「年下に優しくするあきらくん」の要素はまだ見え隠れするような意識状態のように感じますが、「年下の子に優しくする」という経験の積み重ねや、優しくしたことで、あきらくんにとっても居心地が良いと感じるものであれば、「年下の子に優しくする」という意識の比率も変わってくるように感じました。いつものあきらくんに見えるけど、

日々の暮らしの中で、実はその内面では微小な差異が起きているという久保さんの話と繋がるのかなと感じました。

ドゥルーズの思想はまだよく分かってはいませんが、その言葉を使うとしたら、そんな風にして、その「微小な変異、差異」が反復される中(年下の子、安心できる保育者と出会いの中で葛藤することなど、日々の出来事の中。)で、先行する状態から後続する状態への「転換」（今までは声を荒げていたけど、今日はちょっと優しくしてみようかなという意識状態の転換。獲得した新しい居心地の良さ。あきらくんの中で起きた自己生成。）が起こっているのかなと感じました。

＜まとめとして＞

あそびのこころの一番の要素は、「余裕」という点なのかなと感じます。その「余裕」が生まれるためには、たくさんの困難な場面や葛藤を乗り越え、自己生成していくことで生まれる意識状態の幅がポイントなのかなと感じました。

また、「０．最初に質問」で、まだ理解しきれていない状況と状態の違いについても、エピソードを通して感じたのは、「水をかけられたこと」という環境的要因から生まれた状況により、「あいつなんかいなけりゃいいのに！」という心の状態が起こっているという風に言えるのかなと感じています。様々な状況も、受け止め方次第で、居心地の良いものとしても悪いものとしても、心の状態として受け止められるものなのだなと感じました。

保育カウンセラー要請講座で出会った清水幹夫先生の学びを理解しきっているわけではないのですが、リレーを通じて自分なりの理解を深めていきたいと思っています。

内面と外面と時間

Tree to Green
青野裕介

今日は 6 月 21 日。夕方に、太陽が月と重なることで太陽が欠けて見えるという、いわゆる日食が見える日の朝です。次に日食が見えるのは 3 年後ということでたいそう貴重なイベントに思えますが、その 3 年間というのも時間であり、今日が日食であることをわたしがまだ知らなかった朝に、眠たい目をこすりながらパンをかじっていた 10 分間も時間である、というような考察を今回はしてみたいと思います。

前回のわたしの文章のなかであそびのこころという言葉に触れさせてもらったあと、間に久保さん解説を挟んで頂きながら岩崎さんより 2 回の考察を頂きました。主体性や余裕のこころというキーワードが示され、わたし自身のあそびのこころに対する理解も深まりました。

そうやって振り返ってみると、あそびの空間、あそびのこころについての考察が進んでいるなかで、ちょっとあそびの時間が取り残されているように思いました。と言いますのも、前回の文章からの引き続いてのテーマとして、居心地の良さを自分の内面と外面から見つめてみたときに、あそびの空間は外面的な要素、あそびのこころは内面的な要素という整理になると考えているのですが、あそびの時間は内面なのか外面なのか、という点が個人的にははっきりと整理できません。

あそびの時間について考える前に、わたしにとって時間とはどういうものなのかを考えてみたときに思いつく場面をいくつか挙げてみたいと思います。

① 平日の朝起きてまだ眠いというような日が良くあるのですが、そのような時に見る時計の進みはだいたいわたしの気持ちより早くて、時計の針がとても冷たいもののように感じます。時間が客観的で早い場面、ということができるでしょうか。
別の場面として、予定の会合の時間に遅れそうになっているときに電車の中や歩きながら見る時計の針の進みも同様です。

② 土曜日の午前中に小学校 2 年生の娘と一緒に勉強しているときに二桁の足し算がわりと調子よく終わって、これから漢字ドリルに取り掛かろうというようなタイミングで時計を見てみると、あっという間に 1 時間が経っていて、というようなことがあります。そのような場面での充実感に満たされた時間は濃密で、時計がまるであたたかく見守っていてくれたようにも感じられます。先ほどの表現に合わせますと時間が主観的で早い場面という感じです。

③ とても退屈な会合に参加することもときどきあるのですが、会合時間の 2 時間のうちの最初の 30 分は時計が止まっているのではないかと思うほどにゆっくりで、時計の針は冷たい存在のように感じます。この場合は、時間が客観的で遅い場面ということができるかと思います。

④ 子どものころから箱根に連れて行ってもらうことが多かったため、いまも毎年 2 回は家族で箱根に行きます。山や川などの景色を眺めても良し、湖の畔に佇んでも良し、もちろん温泉やベランダでくつ

ろいでも良し、という感じで、のんびりしたいときに真っ先に思いつく場所です。そのような箱根にいるときには、時計を目にすること自体が少ない様な気がしますが、時間の進みはゆっくりしています。
この場合は、時間は主観的で遅い場面と整理できるかと思います。

何となく挙げた 4 つの場面で無理やり整理したという気がしなくもありませんが、何れにしましても、時間というものは、（1）時計の針を目にして文字や数字として認識するとき（頭で考えるとき）は客観的であり外面的なのですが、（2）外でランニングなどのスポーツをしたり、大好きな本を読んだり、面白い映画を見たり、友達や家族と食事をしたりするなど、からだとこころで時間を感じるときには、主観的で内面的になるというような両面性を持っているように思います。

では、そのような特徴を持つ時間が居心地の良さの要素となるためには、つまりあそびの時間となるためにはどうなると良いのかという点について考えてみたいと思います。

まずあそびの時間とはどういう状態かという点について、上述の例②から考えてみますと、「あっという間」であり、また「充実している」という要素が挙げられます。スポーツとか囲碁・将棋の世界で言われるゾーンという言葉に近いイメージでしょうか。

また同様の上述の例④から考えてみますと、「のんびり」であり、また「くつろいでいる」という要素が挙げられます。スポーツのシーンというよりも、佇んだり、座ったり、寝転がったりしているときのイメージかと思います。

無意識的に 4 つの事例の中で②と④を挙げてしましたが、それはおそらく、時間を客観的であるよりも主観的に認識して、つまりからだとこころで感じるときの方があそびの時間になるのではないかと考えているからだと思います。この点はぜひ皆さんのご意見をお伺いしたい点です。

さて、上記の②と④の 2 つの事例を比較しますと、「あっという間」と「のんびり」という時間の早さの観点では逆の要素が上がってきていることが分かります。

振り返ってみますと、②と④の事例は私にとっていずれも「居心地の良い」時間だったので、あそびの時間とは、（A）根を詰めて集中していても良いし、（B）ゆったり、あるいはのんびりとしても良くいということになると思います。

最後に、もう一つ気になることとして、あそびの時間は居心地の良さの要素なのか、結果としてもたらされるものなのか、という点があります。

空間は距離の空け方や詰め方を調節することで、あそびを作っていくイメージが付きやすいですし、こころも前回までの考察のなかで主体性や余裕というキーワードが得られつつあるとも思います。

ところが時間については、予想する、あるいは意図する（言い換えれば環境を作り出す）ことが難しいのではないか、と思っています。

上述した①～④の事例に当てはめて考えてみても、空間とこころは意図することで作り出すことが可能

でも、時間については結果的にもたらされるものであるという印象を強くします。

整理しますと、あそびの空間とあそびのこころが（偶然性などの外部環境に影響受ける部分も多いものの）主体的に作り出すように試みることで、あそびの時間が生み出される、というのがわたしのイメージです。

壮大なテーマに取り組んだ割に、まだ考察が浅い様な気がいたしますが、今回はいったんこれくらいにして、皆さんのご見解や他のテーマでの文章を聞きながら、読みながら、さらに考察を深めていきたいと思います。

また、今回の考察を通じて、前回の岩崎さんの書かれた文章の中で、疑問点として提起されていた『状況と状態の違い』について、わたしも別の角度からではありますが、同じ疑問に対して今回検討をしていたことに気づきました。それだけ重要なポイントなのだと思います。

いまの時計は 22 時 30 分。けっきょく今日は曇りで日食を見ることはできませんでしたが、そもそも日食は太陽・月・地球の順番となって起きる現象であることを長女から教えてもらって、たいそう貴重な一日になりました。

以上

わこう村和光保育園　鈴木秀弘

青野さんの第 4 便を読み「あそびの心」というｷｰﾜｰﾄﾞに触発され、更に、久保さんの第５便を読み、意識状態のクロスフェードというキーワードに誘われて、私が第 2 便で紹介した「ズレが生んだ一つの物語（時間）」について再考したい気持ちが高まっていました。

というのも、私が執筆した第２便の事例の考察で用いている「ズレ」という言葉自体が、行為の時間的・空間的な違いを表した言葉であると共に、その行為の元になる「心の状態」の違いのことを言い表そうとしたものだったからです。

しかし、第 2 便の時点では「心」について考察するが余裕がありませんでした。そういう状況の中で、青野さんが「あそびの心」というキーワードを示してくれたので、「心」について考えたくなっていました。更にその後、久保さんから意識状態のクロスフェードというキーワードが示され、私が思い描いた言葉が、唯識の「無記」というものでした。唯識は、仏教の中でも特に心を扱った学派で、仏教深層心理学とも言われています。そこで、今回は、唯識思想を用いて、「ズレが生んだ一つの物語（時間）」について再考させてもらいます。

心の奥底にある深層心（唯識）

私は、保育士の傍で、お寺の副住職をしています。大学等で仏教学を専攻していた訳ではないので、あくまでも独学の領域を脱しませんが、保育と宗教（仏教）という営みの根底に共通にある「命とは何か？」という問いを、日々深めています。

その中で、特に私の思考的な軸となっているものが「唯識思想」です。

唯識とは、「唯（ただ）識（しき：心）のはたらきのみ」という意味で、もうすこし砕けた言い方をすれば、「全ての物事が生じているのは、こころのはたらきによるものである」というように考えるのが、唯識の特徴的な考えです。

そして、その「こころ」というものを深く洞察していくうちに、「心」は私たちが普段「心」と呼んで知覚しているもの（五感＋意識）以外に、自分では知覚できない深層心（末那識・阿頼耶識）の働きがあることに気付いたことが、唯識の最大の功績といいますか、最大の思想的特徴なのだと思います。

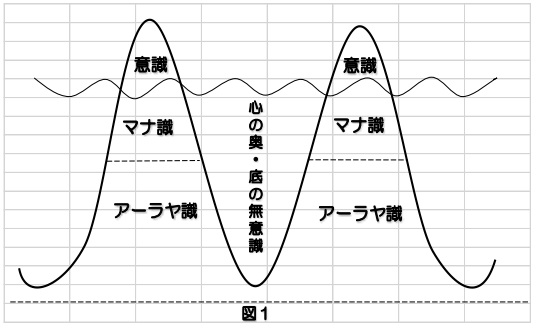


図１

図１（唯識のすすめ　仏教の深層心理学入門　岡野守也　NHK ライブラリー　P158 第五章心の仕組み　図５-１参照）は、ごく簡単に唯識の心の三層構造を表したものです。

今回のリレー執筆で唯識の詳しい説明をするのは、私自身の力量も足りませんし、文量的にも余裕がありません。更には、論点が拡散してしまう恐れがあります。しかし、上記のように第 2 便の事例「ズレが生んだ一つの物語（時間）」の考察で用いている「ズレ」という言葉の中に含まれる「心の状態」の違いがあ

ることと関連があるので、ごく概略的に唯識の心の三層構造を説明します。

繰り返しになりますが、唯識では普段私たちが日常的に感じている、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）と、その感覚を感受する意識の働きの他に、普段は私たちが感じることのできない心の奥・底の無意識として末那識と阿頼耶識の働きがあると説明します。

末那（マナ）識の「末那」とは、思い量るという意味ですが、何を思い量るかというと「自分がある」ということ、つまり、心の奥底に「自分」というものがあることに拘ってしまう働きがあるということです。

その更に奥に潜んでいるのは、阿頼耶（アーラヤ識）です。阿頼耶とは「蔵」という意味です。ヒマラヤという山脈がありますが、ヒマは雪ですので、雪を蓄える蔵という意味なのだそうです。阿頼耶識は、「命を維持して、命に執着していく働き」また、命を種に譬えて「命の種を蓄えているような蔵のようなもの」とも考えられています。

図１を見れば、なんとなくつかめるのではないかと思いますが、それぞれが知覚している心の奥底に、無知覚な識（心の働き）があって、その無知覚な識の働きが、私たち個人の意識や行動に影響を与えているのです。

それぞれが違う心の世界に生きている

例えば、「りんご」というものがあります。このように「りんご」という言葉を聞いた瞬間にそれぞれが頭の中に思い描く「りんご像」は、今まで五感や意識を用いて出会ってきた「りんご」に対する印象が、無意識のうちに末那識や阿頼耶識に蓄えられていて、その蓄えられたものの働きによって、今「りんご像」として生起させていると考えます。

嗜好性のようなものと考えても良いかもしれませんが、その嗜好の根底に、見た目や味や匂いや肌ざわりや耳ざわりの影響（五感＋意識）だけでなく、喉が通らないとか、胃が受け付けない等の内臓感覚的な嗜好性、さらには人間としての反射的行動や生理機能などの生命維持を司る機能（末那識）さらに、もっと根底に流れる DNA などの遺伝子情報に込められた記憶（阿頼耶識）などの影響があり、それらが総合されて表象されるのが、それぞれの「りんご像」なのです。

そう考えれば、「りんご」一つとっても、誰一人同じりんご像を描けるわけがないのです。

例えば、私が「りんご」を表象する時に必ず含まれ出てくるのは、仏壇や位牌檀にお供えしてあるりんごです。食べる頃には、少しスカスカして正直美味しくない。それと同時に、母親の実家（福島）から毎年秋に送られてくる、みずみずしい甘いりんごも思い出します。

さらに、そういった事柄に含まれた仏壇や位牌檀や母親の実家にまつわる記憶や印象もくっついています。そこには、お線香の薫りや、お経の響き、足の痺れ、母親の帰省についていった思い出、叔父ちゃんや従妹の顔等々・・・りんごにまつわる周辺の事柄が、言葉にしようとすればまだまだ出てきますが、言葉に出来ないようなことも含めて、私の描く「りんご像」は、単に「赤くて甘酸っぱくて美味しい」というような抽象的で平板なものではなく、今までの経験の中で蓄えてきたものが、総合的に表象されるのです。

更にいえば、お腹がいっぱいの時に差し出されるりんごと、風邪などで体調が悪くて数日間何も口にしていなかった時に剥いてもらうりんごでは、「美味しそう」と思う度合が違います。それは、同じ「りんご」と向き合ったとしても、身体や心の状態の違いによって、刻々と印象が変わっていくということです。

そう考えれば、一人一人、持ち合わせた身体も、経験も、生まれ育った環境も、DNA も違いますので、みんながそれぞれに違う心を持っているということは当然のように確認できる訳で、その違った心で、それぞれが世界を捉えている訳ですから、それぞれ別々の世界を生きていると言っても過言ではないのです。

ここで一度唯識の三層心を簡単に表にしてみます。

	唯識の三層心	身体機能との関係
表層心	**前六識** （知覚できる感覚）	眼識（視覚）・耳識（聴覚）・鼻識（嗅覚）・舌識（味覚）・身識（触覚）・意識
深層心	**末那識** （自分への執われ）	内臓感覚的嗜好性・反射行動・生命維持（生理）機能と重なる
	阿頼耶識 （生命への執われ）	DNA などの遺伝子情報の記憶と重なるとる

※唯識思想の特徴ともいえるが、前六識の中に、五感を含め識（心の働き）と捉えている。そのことから、末那識や阿頼耶識も身体機能に関連しているのではないかと、私は考えていて、末那識や阿頼耶識にも、身体機能を当てて捉えようとしている。但し、岡野守也や横山紘一の著書を参考に、私が独自に整理した物であり、今後理解を深めていきながら更新の余地を残しているものとしてご了承頂きたい。

さて、ここでようやく、「無記」の話になります。深層心である末那識と阿頼耶識について、末那識は有覆無記（うぶくむき）であり、阿頼耶識は無覆無記（むぶくむき）なのだと唯識は説明します。

どういうことかというと、例えば、性善説とか性悪説という考え方があります。人間は本来、善性や悪性を持って生れてくるという考え方です。それに対して、唯識は「無記」であると説明するのです。

無記とは、善でも悪でもないが善にも悪にもなる状態のことをいいます。つまり、全ての物事自体は「無記」であるが、それを捉える私の心が善と見ようとすれば善なるものとして捉えられるし、またその逆にもなるということです。前述のように、全ては私の心が世界を捉えている訳だから、その心の中が、健康な状態だったら、どんなことも善なる出来事として捉えられるし、そうでなかったら、些細な出来事にも、腹を立てたり、落ち込んだりしてしまうというのです。

その心の中の健康状態に直接関わってくるのが、末那識の状態（有覆無記）なのです。

つまり、無記の前に有覆がついていますが、末那識は自分があるものだと執われている（我執）心の働きからなるものですので、その我執のベールに覆われているという意味で有覆ということです。本来は、無記であり善でも悪でもなく善にも悪にもなる“可能性”だけ持っている出来事に対して、末那識が「なんかいい感じ」とか、「なんか嫌だな」というように印象付けをしてしまうのです。本来は、無記ですので、その出来事自体は私の心から離れさえすれば、善でも悪でもない。しかし、人はみな、自分の心から離れて世界を捉えることができないのです。だから末那識の働きによって、本来無記であるものに、我執のベールを覆わざるを得ない。

因みに、阿頼耶識は、我執のベールに覆われていないので無覆無記です。今回は、阿頼耶識まで掘り下げてしまうと文量が増えてしまうのでここまでとします。

さて、この意識や末那識の有覆無記の状態の推移を上手い具合に言い表してくれたのが、久保さんが第５便で用いたクロスフェードという言葉です。

色々な心の状態が同時存在しているが、その場の状況と対話しながら、心の状態の比率が上回ったり下回ったり流動的に蠢いている様子が想像できます。

その心の状態を創っているのが、表層心の働きと共に、深層心に蓄えられた個人的な印象や記憶なのです。少しくどいですが、つまり、同じような状況下にいたとしても、それぞれの心の中で独立した心の状態がある。

そのような前提を元に、「ズレが生んだ一つの物語（時間）」の事例を振り返ると、おままごとを洗うちーちゃんもハルちゃんも、流れ出る水を川に見立てて遊ぶかい君とりく君も、更にそれを見る私も、一緒にその場（状況）を共有してはいましたが、「それぞれの違う独立した心が、その場で起こる出来事を別々に捉えていた」ということです。

違う世界に生きるのに同じ今を生きる感覚が生まれるのは何故？

しかし、その上で、もう一つ確認したいことは、何故それぞれが違う独立した心が、別々に捉えているはずなのに、ちーちゃんはハルちゃんと一緒に「おままごとを洗う」ことが出来て、かい君はりく君と流れ出る水を一緒に「川に見立てる」ことが出来て、その二人が川に見立てていることを私は理解することができるのだろうか？ということです。

これは、あくまでも私の主観ですが、その時、私は彼らと一緒の世界の中に生きているという感覚がありました。

しかし、冷静に洞察してみれば、私は私独自の深層心に蓄えられたものを通して、その時の今を、私の心の世界として捉えているし、他の彼らもそうである訳だから、別々の世界を生きていたと振り返ることも出来る。

しかし、そうとはいえ、別ではなく共有した感覚が私にはある。つまり、違うはずなのに「同じ」という、彼らと今を共有しているような感覚があった。

私は、その「違うはずなのに同じ」という感覚が生まれるのも、末那識の働きなのではないかと考えています。

そのことを探るために、「ズレが生んだ一つの物語（時間）」の一部分をもういちど紹介します。

さて、その時洗い物をしている二人の片付けが終わって、タライを一気にひっくり返しました。

それは、決して川の先端で線を描き入れる子たちの為にやったものではないのですが、その水が流れる勢いに、ハルちゃんは「おぉぉ！」と驚いたような大きな声を上げました。

その声が届くのと同じようなタイミングで、川の先端で覗き込むように線を描き入れていた二人の元に、勢いのいい水が流れ込みました。

それに気が付いた二人も「おぉぉ！」「おぉっ！」「おぉっ！」と飛び跳ねながら、川が勢いよく流れていくのを追いかけていきます。（リレー執筆第二便　ズレが生んだ一つの物語（時間））

彼らの心の中は、私には想像することしか出来ないので、私の主観的世界を頼りに振り返ります。

洗い物のタライがひっくり返される瞬間、正確に言えば、そのような雰囲気を感じ取り始めた頃から、私は“なんだかこれは面白いことが起こるぞ”という予感がしていました。そして、もう少し具体的に表現するならば、その予感の積み重ねが“タライの水が流されれば、かい君やりく君の元に流れ込み、目に見えて勢いがある川になるぞ、そしたら、二人は喜ぶぞ”更に、“タライをひっくり返した二人も、その流れの勢いに引き込まれて、かい君やりく君の遊びに加わっちゃうかも”と予測をしていました。

そうしたら、案の定二人はタライをひっくり返し、その瞬間に水が勢いよくかい君やりく君の足元に流れ込みました。私は、ハルちゃんが「おぉぉ！」と驚いたような大きな声をあげるのに響き合う形で、自分の予測通りの出来事に思わず興奮して「おぉぉ」と声を出しました。その声の重なり合いと然程時間差なく、かい君やりく君の喜びの声も聞こえてきます。

その瞬間は、私が思い描いた予測とあまりズレることなくおとずれました。

しかし、次の瞬間、ちーちゃんとハルちゃんは、川の流れやかい君やりく君の喜びの流れには乗らずに、タライを片付けに行ってしまったのです。その間も、かい君とりく君は流れる水に心が引き込まれたように夢中で流れを追いかけます。

こうやって振り返ってみれば、それぞれが違う今を過ごしながらも、感情の高まりやそれに伴う声の重なり、そして、水の流れにみんなが集中した瞬間が一番濃く今を共有していた感覚があったように思います。

この感情の高まりやそれに伴う声の重なりを生み出しているのは、それぞれの末那識からくるものと考えます。つまり、私でいえば、「なんだかこれは面白いことになるぞ」という予感がするのは、末那識に蓄えられたこれまでの経験や印象が生み出したものです。もしも、私の心の中に、危なっかしさや面倒くささの種が沢山蓄えられてしまっていたら、「なんだか厄介なことが起きそうだぞ」という予感が生まれたかもしれません。

更に、タライがひっくり返された瞬間、「おぉぉ」と声を上げるハルちゃんも、私も、流れの先で「おぉ！」「おぉ！」と喜ぶ二人も、勢いよく流れる水の勢いを、それぞれの末那識が「なんだか凄い」とか「なんだか嬉しい」とか「面白い」みたいな感じに捉えたから、「おぉ！」という歓声に現れたのだと思います。

だから、冷静に洞察すれば別々なのだけど、同じような、似たような感情の高まりが、完成や振舞いに表出されて、響き合いの濃さが増している時、正に今「同じ世界を共有している」という感覚を生み出すのではないかと思うのです。

すこし、いい方を変えれば、それぞれの末那識が響き合っているともいえるような気がします。

しかし、次の瞬間、タライをひっくり返した二人は、一瞬の高まりから離れ片付けへ向かいます。私は、「益々盛り上がりそう」とワクワクをしていたところがあるので、少し肩透かしにあったような気分です。しかし、それに反して川の流れは勢いよく流れて行きます。

私は、タライを片づける二人から心を離し、川の流れに興奮する二人に心を向けていきます。それは、「面白そうな予感」が、「面白い出来事」となって結ばれて行くからです。

その瞬間々に立ち現れる「面白そう」という予感が、二人の面白そうな行為によって結ばれて行きます。きっと、かい君やりく君も、私と似たような感情の高まりが続いているような気がするので、私は彼らと同じ時間の中にいるような感覚を味わっています。

その一方で、タライを片づけた二人が、その後どんな感じでご飯へ向かったかは、私には分かりません。正確に言えば、想像は出来ますが、見ていなかったので分かりません。

つまり、ちーちゃんとハルちゃんとは、同じ時間を共有しているという感覚はどんどん薄れていきました。

つまり、ちーちゃんとハルちゃんの末那識には、一瞬響き合うものがあったけど、私たち程は、水の流れに対する執着といいますか、面白そうな予感はしなかったのでしょう。少しはあったかもしれませんが、それを上回る何かがあった。それは、お昼ご飯のことかもしれませんし、もう十分に遊び満たされた状態かもしれません。正確には分かりませんが、彼女らの末那識が次への行動へと向かわせていったのです。

我執を超えた智慧

随分と長く書いてしまいました。そろそろ終結に向かっていこうと思います。

居心地の良さを考える時に、大事な視点なのではないかと思い、紹介したいのは、唯識では末那識を正しい思考によって平等性智に磨いていくように説きます。

平等性智（びょうどうしょうち）とは、「わたしたちのような凡人には千差万別にしか見えない森羅万象の、差異の底にある平等性や共通性を知る智恵」（中村元氏の『新・佛教辞典（増補）』誠信書房）です。

この智慧は仏になる為の智慧であり、私たち凡夫にはとっても難しいことのように感じます。しかし、完全に理解することができなかったとしても、「そうなのだろうな～」と感

じることはできます。

そういう意味で、私自身に対する戒め的な意味合いもありますが、第２便の考察で

私は、片付けと、川に線を描きこむ、二つの「目当てやそれに伴う行為」がズレている主体が、流れた水によって薄っすらと重なり始め「一つの物語的に共有している時間」を生み出し始めていることに、面白みを感じて見ていました。

そういう視点を用いて、更に、この出来事を俯瞰的に見たならば、お昼ご飯を食べている生活の主流と、この子たちの間にもズレがあります。しかし、ズレているけど、和光保育園という生活の場で、暮らし（朝登園してから、夕方降園するまでの営みや流れ）を共にしているという意味では重なり合っている。

このように、私自身の末那識的感覚では、ズレていると感じていた二つの物語の平等性や共通性を探りたかったのです。

更に、保育者という立場でいえば、どうしても川の流れに夢中になるかい君やりく君を「面白そうな二人」として見て、その場を立ち去るちーちゃんとハルちゃんを「真面目？な二人」と見ようとしてしまう。その見方の根底には、善悪や優劣や美醜といった私を基準にした差異をつけたがる末那識の働きがあるのです。

保育園の中での「居心地の良さ」を考えた時、保育者としての心構えや姿勢が密接に関係してくることはいうまでもありません。

最後に、もう一つ、末那識を平等性智に磨き上げるように、前六識（五感＋意識）の中の意識を妙観察知（みょうかんざっち）に、五識を成所作智（じょうしょさっち）に磨くように説かれます。

妙観察知は「平等に見えるもの、共通に見えるものの、そのなかにある差異を正しく観察する智恵」あるいは「全体のなかの部分を正しく観察する智恵」（中村元氏の『新・佛教辞典（増補）』誠信書房）です。

私が、同じ時間を過ごしていると感じていたかい君やりく君も、それぞれ別々の心があり、あの出来事をどう捉えていたのかは分からないことが沢山あります。もちろん、二人の表情や振舞いや、行動の蓄積を追っていれば、総合して楽しかった経験になっていることは間違いないと思いますが、だからと言って私が彼らのこころを十分に理解し切ったとは言えません。だから、今日も彼らとの出会いを大切に過ごすのです。

そして、成所作智は、「ものごとを生成する智恵」あるいは「人間の身体と経験を媒介としてはたらく実践的な智恵」（中村元氏の『新・佛教辞典（増補）』誠信書房）です。

ちょっとこれに関しては中村元氏の説明では、分かりずらいような気がするので、私なりに言い換えると「自分が作ろうとすることと周りが成ろうとすることが一致していく知恵」です。つまり、今回の事例でいえば、細かく言えば、私の予感や予測とは微妙にズレる形で物事が進んでいきます。その出来事を、自分の作りたい方向へ無理やり押し戻してしまうのではなく、タライを片づける二人や、川の流れに興奮する二人に少しずつ合わせていく。いくら川の流れの勢いを増して欲しいからと言って、タライを片づける二人に「もう一回水汲

んできて流してよ～」と無理を言ってお願いをするのではなく、今起こっていることが向かおうとしている方向に、自分の作ろうとしていることを合わせていく。周りに合わせすぎれば、自分の作ろうとする時間が奪われてしまうし、自分の方の引き寄せようとし過ぎれば、それは自分よがりな時間になってしまう。私の予感や予測と、周りの出来事（行きたい方向）の塩梅がいい具合になるように、五感を用いた行いを整えていくということです。

これは、日常生活の全ての場面で言えることです。私は、保育とは成所作智的に「居心地の塩梅を、みんなで創っていく」営みだと考えています。それは、流動的な営みです。

以上ですが、唯識の三層心の構造は、久保さんが 2018 年度報告書で示してくれている、木村敏の三つの時間の次元とかなり重なるのではないかと思います。

第一の次元：「生命一般の根拠」の次元、阿頼耶識

第二の次元：「こと的」な時間や自己の次元、末那識

第三の次元：「もの的」な時間や自己の次元、前六識（五感＋意識）

今後、どこかのタイミングで比較研究できれば嬉しいです。

読者のみなさんへ

～～第 8 便の後に～～

久保　健太
（関東学院大学）

秀弘さんの第 8 便が届きました。書簡の内容が深く、複雑な内容になってきました。
本来であれば、私（久保）が第 9 便を書くことで、第 6 便（岩崎さん)、第 7 便（青野さん)、第 8 便（秀弘さん）と続いた「二周目」を総括しなくてはいけないところです。

しかし、このまま第 9 便を書くよりも、研究スタイルを転換した方が、より深い研究ができるように思いました。
そこで、これまで行ってきた「往復書簡」スタイルを、「zoom などを使った、対面的な書簡講読」スタイルに変えようと思います。

私としても「理論的な研究を進める際には、対面と講読が必要だ」ということがわかりました。
具体的には、
①「研究」が深くなってくると、「往復書簡」に「対面」を加えなくてはいけないことが、わかりました。
②「研究」が深くなってくると、「ミーティング」に「講読」を加えなくてはいけないことが、わかりました。
　「講読」とは、メンバーの誰かが書いた文章、もしくは誰かが参照した文章を、みんなで読み、その意味を、みんなで解き明かすということです。

やはり、学習において、何らかの非対称（例えば、久保とドゥルーズとの非対称。秀弘さんと岡野さんとの非対称）は、避けられないのかも知れません。
その非対称を学びの機会にするには「講読」が必要なのだと思います。

これは、「実践者が自ら書く研究」を進める上で、大きな知見です。

以上の知見を踏まえて「三周目」以降は、「zoom などを使った、対面的な書簡講読」スタイルを取りたいと思います。

三周目（第９便）の前に
～～非対称、学び、カオス、コスモス～～

久保　健太
（関東学院大学）

１．

久保は前便「**読者のみなさんへ（第 8 便のあとに）**」において、「非対称」から生まれる「学び」について、以下のように書きました。

> やはり、学習において、何らかの非対称（例えば、久保とドゥルーズとの非対称。秀弘さんと岡野さんとの非対称）は、避けられないのかも知れません。

この箇所について、秀弘さんが質問をしてくれました（以下、メールでのやり取りから抜粋します)。

> ちょっと質問なのですが、
> （例えば、久保とドゥルーズとの非対称。秀弘さんと岡野さんとの非対称）は避けら
> れないのかも知れません。
> の非対称とはどういう意味ですか？
> ちょっと分かるようで分からないので教えてください。

秀弘さんの質問に対して、久保は次のように回答しました

> 「非対称」とは「差異」「つりあわなさ」のことです。
> 久保とドゥルーズのあいだに、何らかの「差異」があって、その「差異」を埋めようとして、学習をします。もしくは、ドゥルーズからレッスンを受けます。
> この場合の「差異」は、「知識量の違い」ですが、「考え方の違い」の場合もあります。そうした「違い（差異)」を埋めようとして学習をします。その場合の「差異」のことを「非対称」と言います。
> 「秀弘さんと岡野さんとの非対称」という言い方は、秀弘さんには失礼な言い方でしたね（汗)。ただ、秀弘さんなら、久保の言わんとすることをわかってくれると思います。
> ちなみに「対称」は「つりあう」という意味なので、「非対称」は「つりあわない」という意味です。

さらに、久保の回答に対して、溝口さんが次のようにコメントしてくれました。

> こんにちは。「非対称」が「差異」であるという整頓は重要だと思います。秀弘さんの質問と久保さんの回答のおかげです。学習のみならず、養護も非対称によって生み出されています。例えばアタッチメントもそうです。6 ヵ月の赤ちゃんは、8 か月の

赤ちゃんに対してアタッチメントしません。むしろ、関心を示しません。双子の場合は違いますが。そう思います。
　大田堯先生が絶叫したように「みんな違うんです」。違うので、居心地がよいし、居心地が悪い。だから居心地がよくなるように調節する。居心地がよいということは良いと悪いが「つりあう」。五分五分ということではなくて、良いと悪いが同居し調節しあっている。１対９もあれば、６対４もある。この違いは個々の主観によるのだと思われます。この調節をすることを、壊し（壊れ)、作り、維持（保持）するベルクソンの弧が示しているように思います。

メンバーとは以上のやりとりをしました。
「非対称」と「学び」というテーマが、重要なテーマであることがわかってきました。

「非対称」と「学び」というテーマについて、もう少し、深めておきます。
「非対称」があると「学び」が生まれる。ということは、逆にいうと、非対称がないと学びは生まれない（生まれにくい）ということです。
そして、(この点も非常に大事な点だと思うのですが）非対称が強すぎても学びは生まれない（生まれにくい）ということも示唆されます。

この点については、「**学びとは、カオスから、コスモスをつくる働きだ**」という学習観を踏まえると理解しやすいと思います。
例えば、知らない街を歩くとき、「未知のもの」と「既知のもの」、「確かなもの」と「不確かなもの」、「危険なもの」と「安全なもの」とが混在しています。そうした混在（カオス）の中から、「危険なもの」と「安全なもの」を分別して、私たちは生命を維持しています。こうした分別の働きは、秩序、すなわちコスモスをつくる働きだと言えるでしょう。そして、このようなカオスからコスモスをつくる働きこそ、学びだと言えます（詳細は、本便と同送する「第９便」をご覧ください)。

さて、「カオス」「コスモス」というキーワードを使って「非対称（学びにおいて埋められる差異)」を説明すると、以下の二つのことが言えるように思います。

１．非対称がない状況というのは、コスモスが最初から出来上がっている状況である。
２．非対称が強すぎる状況というのは、カオスが強すぎる状況である。

そして、コスモスが最初から出来上がっている場合も、カオスが強すぎる場合も、学びは生まれづらいのだと思います。
だとすると、**ちょうどいいカオス、適切な非対称**が学びを生み出す条件だということも言えそうです。

じっさい、ヴィゴツキーのいう「最近接発達の領域」は「適切な非対称（ちょうどいいカオス)」のことだと言えるでしょう（後掲の①を参照ください)。

ちなみにヴィゴツキーは、教員（保育者）が「適切な非対称」を学習課題として提示することを重視しました。しかし、子どもたちを見ていると、自分たちで「適切な非対称（ちょうどいいカオス)」を見つけて、嬉々として「課題」に挑んでいるようにも見受けます。

なにより「適切な非対称（ちょうどいいカオス)」は、**コスモスとは別の「居心地の良さ」**をもたらしてくれそうです。

そのあたりは、溝口さんが先ほど指摘してくれた通りです。また、唯識は、コスモスの存在はどう考えているのでしょうか？知りたくなります。その点も、秀弘さんの力を借りて、深めたく思っています。

２.

さて、二周目のまとめは、三周目で「第五便」や「第八便」を講読しながら、行うことにします。そこには、2018 年報告書の講読も加えていきます（忘れないように記しておけば、2018 年報告書のイラスト A や「第二便」の水洗いと水遊びは、「ちょうどいいカオス」を示しているように思われます)。

メンバーと相談し、9 月 14 日、10 月 26 日、11 月 16 日、12 月 14 日、2 月 15 日、3 月 8 日に「zoom などを使った、対面的な書簡講読」を行うことにしました。

三周目は、これまでの書簡や 2018 年報告書を講読すればいいと思っていますが、講読文献の中に、

①　ミネルヴァ書房の辞典用に、久保が書いた「ヴィゴツキー」の項目

②　『子どもの文化　9 月号』のために、久保が書いた文章

の２つを加えさせてください。

①については、短い文章なので、本便に書き添えてしまいます。②は「第 9 便」として、本便と同送します。

以下、①です。

【ヴィゴツキー（1896-1934）　Lev Semenovich Vygotsky】

ソヴィエトの心理学者。人間は媒介物（道具）を使って、活動する。例えば、包丁という道具を使って、野菜を切る。このとき、包丁という道具（労働用具）が人間と野菜との実際的活動（身体技術を使った活動）を媒介している。一方で、人間の活動には、

雨雲を見て、傘を準備するというような、技術よりも思考を使った活動がある。このような活動は実際的活動に対して、心理活動と呼ばれる。例えば、雨雲を見て、傘を準備するという心理活動では、「雨雲が見える」「雨が降る」「濡れる」「濡れないようにする」「傘を準備する」という思考が行われているが、この一連の活動を媒介しているのが「雨雲」「雨」「濡れる」「傘」といった言葉である。そこから、包丁を道具と呼ぶのに対して、「雨雲」などの言葉は心理的道具と呼ばれる。人間は、これらの道具（労働用具や言語）を使いこなすことで、活動を意識的なコントロールのもとで行えるようになる。

とはいえ、初めから道具を使いこなせるわけではない。最初は、他者との協働によって道具を使い、いずれは他者との協働がなくても使いこなせるようになる。そこから「協働すればできること」と「協働しなくてもできること」との間にある領域、すなわち「最近接発達の領域」への着目が生まれ、そうした領域の範囲にある課題を協働活動によって達成する学習が主張されることとなる。その一方で、「雨雲」という言葉（概念）を「雨」「濡れる」「傘」などの言葉との体系において習得することもヴィゴツキーが重視していた点を忘れてはならない。

以上が①です。

①では「適切な非対称（ちょうどいいカオス)」という言葉を使ってはいません。①の示唆を生かすのであれば、「適切な非対称（ちょうどいいカオス)」とは「協働すれば分別できそうなカオス」だと言えるでしょう。そして「強すぎるカオス」とは「協働しても分別できなさそうなカオス」であり、「出来上がっているコスモス（もしくは、弱すぎるカオス)」とは「協働しなくても分別できそうなカオス」であると言えるでしょう。

ここでは意図的に「分別できるカオス」ではなく、「分別できそうなカオス」と書きました。「できそう」という感覚は、人間の「根源的探求心」や、世界の「奥行き」とかかわっているからです。そして、人間の学習には「できそう」なことを「できる」ことへと変えていくという側面があるからです。この点については、あらためて三周目以降で深めたいと思います[1]。

②は、第９便として、本便と同送します。

[1] 世界には複数の可能性が、つねに潜在している。そうした「奥行き」や、それを直観する人間の「根源的探求心」については、久保健太「教育観を変えようという提案」を参照（久保健太編著『子ども・子育て支援と社会づくり』ぎょうせい、2017 年。42-47 頁)。

コスモスの心地よさを越えて

久保　健太

（はじめに）この文章は『子どもの文化　2020年9月号』（特集テーマ「間違っていい生き方、間違っていい遊び・学び」に寄稿した文章です。文章中に「カオス」「コスモス」「学び」というキーワードが登場しますので、メンバーのみなさんと講読する文献の候補にしたいと思います。

まちがいは偉大なる混とん

今回の特集タイトルは、「間違っていい生き方、間違っていい遊び・学び」ですが、もともと、遊び・学びというのは「間違い」の中にあるものです。

すでに50年前に大田堯は次のように書いています。

「人間の発達には、跳躍と同時にゆきどまりがある。法と制度にしばられ、人間が生きることへの感応力をまひさせられた教師も、ときとして跳躍の成果に目をみはらされることはあっても、それに必ず先行するゆきどまり――飛躍の前の停滞――の意味の重さを見落としがちである。彼らにとってゆきどまり、とまどい、スランプは、達成にとってマイナスの意味しかもたない。資本家から規格の定められた労働者のつくり出す商品にも似ている。

個性的なものが生み出される過程でのゆきどまり、とまどいは、そこでは単なる「あやまり」、マイナスとしてあつかわれる。テストの結果だけにとらわれ、その結果の平均点に何か意味ありげな幻想にとらわれるのは教師だけではない。多くの父母もそうであろう。もちろんそれは単なる幻想ではない。そういう「人間」評価が現実の社会で重要な役割を果たしているからである。人間の選びながら発達する権利にさからって現代社会の構造と機能とがはたらいているという一つのもっとも顕著な兆候が、ここにあらわれている。

ところが、人間の発達という観点からみると、そのゆきどまり、とまどいの中に人間の未来がふせられている。“偉大なる混とん”と名づけてもよいものである。“まちがい”とともに、何をおいても人間でなくてはありようもない偉大なカオスなのである。人間がもっとも人間的である瞬間でさえある」

以上は、1970年に書かれた「選びながら発達することの権利について」という文章の一

節です[1]。

ここで大田はまちがいこそ、人間が人間であることの証拠だと言っています。そして、ゆきどまり、とまどい、あやまり、まちがいこそが偉大なる混とんであり、そこに人間の未来がふせられているのだと言います。

当時は、子どもがゆきどまり、つまづくのは、親の育て方が悪かったり、教師の教え方が悪かったりするせいだ、と考えられた時代です。その時代に、いやいや、子どもがゆきどまり、つまづくことは、その子が人間であることの何よりの証であり、その中に、その子だけに限らない人間全体の未来が潜んでいるのだと喝破したのです。

こうした大田の思想を学び続けたからでしょうか、私は、まちがいに寛容な方だと思います。「まちがっていい」というよりも「そもそも、まちがいかどうか自体、どこかの誰かが、思いつきで決めたものでしょ」と思っている節があります。

カオスからコスモスをつくる

そんな父親と暮らしているからか、我が家の娘たちは、奔放に生きています。

今日は 3 歳と 1 歳の娘と風呂に入りました。1 歳の娘は、湯船のお湯をがぶがぶ飲んでいました。読者のみなさんは、最近、湯船のお湯を飲みましたか？家族がひととおり浸かった後のお湯です。それなりに汚れています。飲むこと自体まちがっています。たぶん美味しくありません。なのに、がぶがぶ飲んでいます。

特集テーマに照らせば、湯船のお湯を飲むことは「遊び」なのか、「学び」なのか、「まちがい」なのかということが問題です。

その点について、参考になるのは汐見稔幸の次のような考え方です。

「赤ちゃんって、いろんなものを触ってみたり、引っ張ってみたり、投げてみたり、舐めてみたりする。それって（略）自分の生きている世界がどういう世界なのかということを、必死になって探索しているんだと思うんです。（略）

その生命活動によって、子どもは世界図を作っていくんだ、自分の生まれたこの世界というのが、どんなふうな世界になっているのかということを、すこーしずつつくっていくんだというように、私は思うんです。（略）

バラバラになっているもの、いわばカオスの状態にあるものを積み上げるとか、バラバラのものを並べてみるとか、それだって「遊び」と私たちが呼んでいるものですが、それらはどれも混沌としているものから一定の秩序をつくることですよね。

---

[1] 大田堯「選びながら発達することの権利について」『大田堯自撰集成　4　ひとなる』2014 年、藤原書店、所収、246－247 頁（原著は 1970 年）。

そこに示されているように、人間の中には、カオスからコスモスをつくるというか、混沌から秩序をつくるというか、そういった本能があるんだと思うんですよね。むちゃくちゃになっているものから、何か秩序をつくり出したいという本能ですよね。（略）

ごっこ遊びも、バラバラの役割から何かルールを決めて役割をやっていますよね。遊びにはカオスからコスモスをつくるという性格が含まれている。

実は、それって学問も同じなんです。混沌とした事象をある切り口で見ることによって秩序立てて説明できるようになる。混沌のままではなく、明瞭に見えるようになる。その時には、大事な事実を見落としてしまうことも起きてしまうわけだけど、とにかく混沌としたものの中に少しずつコスモスをつくっていくことが学問だとしたら、遊びと学問は、本質的には、実は同じ働きです」（『保育のグランドデザインを描く』112－113 頁[2]）

汐見はここで、「遊び」と「学び」は本質的に同じだと述べています。どちらもが、混沌とした世界の中に、補助線を引いたりしながら、秩序をつくっていく生命活動だと述べています。それをカオスからコスモスをつくる働きだと呼んでいます。

ということは、1 歳の娘が、湯船のお湯を飲むことは「遊び」であり「学び」なのでしょうか？

答えは、おそらく、イエスでしょう。

娘は、お湯でなければ飲まなかったのだと思います。たしかに、石鹸を食べようとはしませんでした。そして、シャンプーも飲もうとしませんでした。

大事なのは、石鹸を食べようともしないし、シャンプーを飲もうともしないのに、湯船のお湯は飲んだ、ということです。

おそらく、1 歳の娘の中では「飲んでいいもの」と「飲んではいけないもの」との線引き作業が絶賛進行中なのでしょう。そうした線引き作業の中で、お茶やラーメンのスープは「飲んでいいもの」の中にくくられ、石鹸やシャンプーは「飲んではいけないもの」の中にくくられているのです。

そして、どっちにくくったらいいものか、という難問として「湯船のお湯」が出てきた。そこで一口飲んでみた。飲んでみたら、そんなに苦くもないから、もう一口飲んでみた。それでも、そこまで変な味はしないから、さらに飲んでみた。あげくの果てに、私が気づいたときには、がぶがぶ飲んでいた。

実際は、そういったことだったのだと思います。そうして、娘は「湯船のお湯」をお茶やラーメンのスープと同じ「飲んでいいもの」グループに入れたのです。

社会的コードと欲望のコード

---

[2] 汐見稔幸・久保健太編著『保育のグランドデザインを描く』2016 年、ミネルヴァ書房。112－113 頁。

さて、そのような一歳の娘の働きは、「遊び」であり「学び」であり、本質的にはカオスからコスモスをつくり出す働きだということは理解できます。

だとしても、問題は、「湯船のお湯」を「飲んでいいもの」グループに入れることが「まちがい」ではないのか？という点です。

この点については、社会、コード、欲望という考え方が参考になります。

大田や汐見の言葉に比べて、ぐっと読みにくくなりますが、ジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリの文章を引用します。

「社会的コードにおいては、〈専制君主のシニフィアン〉があらゆる連鎖を粉砕し、これらを線形上にして、記号と意味とを一対一に対応させ、それぞれの煉瓦を不動の要素として用い、秦帝国の長城を築きあげている。しかし分裂者は、これらの煉瓦を常に離脱させ、抜きとり、あらゆる方向に運び去って、欲望のコードに他ならない新しい多義性を取り戻す。」（『アンチ・オイディプス』上、p79[3]）

以上が、ドゥルーズの文章です。言い回しが独特ですので、「湯船のお湯」に即して説明します。「お湯」は「湯呑み」に入っていれば「飲み物」です。しかし、「お湯」が「湯船」に入ったとたんに「飲み物」から「体を洗うもの」もしくは「体を温めるもの」に変わります。このとき、使い方（意味）が変わっています。この使い方（意味）のことを「コード」と呼びます。

さて「お湯」が「湯呑み」と接続されれば「飲み物」になって、「湯船」と接続されれば「体を洗うもの」になったように、事物はどのような接続の中に置かれるかによって使い方（意味、コード）を変えます（ちなみに、先の引用文中では、そのような事物のことが「煉瓦」と呼ばれています）。

さて、「コード」には「社会的コード」と「欲望のコード」の二種類があります。

社会的コードとは、社会で通用している使い方（意味）のことです。私は、「湯船」と接続された「お湯」を「飲み物」ではなく、「体を洗うもの」として扱う「社会」に生きています。ですから、私は「湯船のお湯」を「飲み物」としては扱いません。そうした社会的コードに沿って、生きています。

さて、そんな私でも「湯船のお湯」を「娘のおむつ布を洗うもの」として扱うときがあります。自分の体を洗うだけではなくて、おむつ布を洗うために使うのです。

これだって、まだ「社会的コード」、すなわち社会で通用している使い方の範囲内でしょう。

---

[3] ジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリ（宇野邦一訳）『アンチ・オイディプス（上）』河出書房新社、2006 年、79 頁（原著は 1972 年）。

さて、そんな私が「湯船のお湯」を「飲みたい」と思うときがあるかも知れない。そのとき、私は「湯船のお湯」を「飲み物」としては扱わないという「社会的コード」から脱け出し、「飲みたい」という自分の欲望に沿って、「湯船のお湯」を「飲み物」として使うかもしれません。

「湯船のお湯」を「飲み物」として使うとき、私は「社会的コード」を破り棄て、自分の欲望に沿った使い方（意味）を「湯船のお湯」に与えています。この自分の欲望に沿った使い方（意味）をドゥルーズは「欲望のコード」と呼んでいます。

のみならず、欲望のコードに沿うことで、社会的コードに抑え込まれていた「新しい多様性を取り戻」してくれる人間を、ドゥルーズは「分裂者」と呼んで称揚します。

言うなれば、一歳の娘は分裂者であり、私に「新しい多様性を取り戻」させてくれる存在です。それはコスモスが硬直しそうなときに、カオスを回復させてくれる存在とも言えるでしょう。

以上を踏まえて、「湯船のお湯」を「飲んでいいもの」グループに入れることが「まちがい」ではないのか？という問題に答えておきます。

「湯船のお湯」を「飲んでもいいもの」グループに入れることは「社会的コード」からみたら「まちがい」です。しかし「欲望のコード」から見たら「まちがい」とは言えません。のみならず、「欲望のコード」は「社会的コード」に埋め尽くされた世界においては「新しい多様性を取り戻す」働きをもつものとして称揚されもします。

そして、大田が「まちがい」を「偉大なる混とん」と述べるとき、大田は「社会的コード」から見たら「まちがい」である「欲望のコード」が、「社会的コード」からは生まれえない新しさや多様性をもたらすことに注目していたのです。

コスモスの心地よさ

しかし、最後に考えたいのは、そのような「欲望のコード」は親や教師が「まちがい」だと言わなかったとしても、子ども本人が封印していってしまうという点です。

実際に、三歳の娘は「湯船のお湯」を飲みません。彼女は「欲望のコード」を封印してしまったのです。

そのメカニズムを解く手がかりは、エリク・H・エリクソンの発達論にあります。エリクソンは第二期を、自分のことは自分で決めたいという自己決定の気持ちと、周囲の期待に応えたいという気持ちとがせめぎ合う時期だと考えます。第二期は「イヤイヤ期」と言われる時期ですが、自分で決めたいという気持ちが強くなる一方、「みててみてて！」ということを盛んに言う時期でもあります。それは「自分に期待されていることに関する知識を組み込むようになる」時期なのです（傍点久保、“*Insight and Responsibility*“p119[4]）。

---

[4] Erikson, E. H. “*Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of*

キーワードは「期待」です。第二期において人は、「社会のコード」に従って欲しいという周囲の期待を組み込み、「社会のコード」に沿って振る舞うようにもなります。その振る舞いを周囲から承認されることで、承認欲求を充たしもします。

一方で、自分の欲望に沿って決めたいという気持ちもあります。ですから、第二期の人間の中では「欲望のコード」と「社会のコード」とがせめぎ合います。結果として、「欲望のコード」は、（完全に封印されないにしても）ある程度、周囲の期待に沿ったものへと調整されていきます。

とはいえ、第二期には、自己発揮が、自己抑制を上回っていきます。ですから、第二期の人間関係は、自己発揮のし合いであり、「やりたい！」どうしがぶつかり合うカオスの様相を見せます。しかし、人間は、そうしたカオスから「順番をつくる」「役割を分担する」といった第三期の人間関係を生み出します。

第三期の人間関係は「時間的見通し」を共有する人間関係と呼ばれます。それは第二期のカオスから生まれた秩序的（コスモス的）な関係と呼んでもいいでしょう（同 p120[5]）。

こうして「欲望のコード」は封印されないにしても、調整されていきます。第二期には「周囲の期待」とのせめぎ合いの結果、調整され、第三期にはコスモス的関係の中で役割を与えられていきます。それは「社会的コード」が蔓延っていくプロセスでもあります。また「欲望のコード」よりも「社会的コード」を優先させるようになるプロセスでもあります。

第三期的なコスモスは、やはり心地いいのです。その点を食い破って、いかに自己発揮とカオス（混とん）を取り戻すか。引き続き、考えたいと思います。

---

psychoanalytic insight”、W. W. Norton & Company,1964 p.119。

[5] *Ibid.*p120

対面的な講読（9 月 14 日開催）の御報告
と
第 9 便までの整理

～読者のみなさんへ（第 10 便として）～

2020 年 9 月 24 日

久保　健太
（関東学院大学）

1.

本便は、第 10 便です。
この研修では、リレー形式で「集団的な往復書簡」を行ってきました。
そのリレーは
1 便（久保）、2 便（鈴木）、3 便（青野）、4 便（岩崎）、5 便（久保：一周目の総括）
6 便（岩崎）、7 便（青野）、8 便（鈴木）
と続いてきました。

8 便までで、リレーは二週目を終えました。
そして、議論の内容が複雑になってきたので、8 便までで「往復書簡」は終えることにしました。

代わりに、**三周目からは「対面講読」を行うことにしました**。すなわち、実際に顔を合わせて、文章を読むことにしました。そうして、顔を合わせながら、難解な場所を確認し合い、議論を深めることにしました。

2.

三周目は 9 便から始めました。9 便は、久保が『子どもの文化　2020 年 9 月号』に書いた文章を、8 月 5 日に送りました。
そして、**9 月 14 日に「対面講読」を行いました**。

9 月 14 日の「対面講読」は、本研究のメンバーが千葉県富津市の真福寺に集って、12 時から 15 時まで行いました。
参加メンバーは以下の通りです。久保健太、青野裕介、鈴木秀弘、溝口義朗、岩崎真人の 5 名。また、ゲストとして、溝口さんの同僚である平賀努（保育者、ウッディキッズ）も参加し、総勢 6 名で行われました。

9 月 14 日の「対面講読」では、9 便ではなく、「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究」の「2018 年報告書」の第二部から、第一章と第二章を読みました。「2018 年報告書」は全国私立保育園連盟の HP からご覧いただけますが、本便でも、かいつまんで紹介いたします。

3.

「2018 年報告書」は、和光保育園（千葉県富津市）の子どもたちのようすを描いた「みてての渦」というエピソードを検討した研究です。

まずは「**みてての渦**」というエピソードを紹介します。

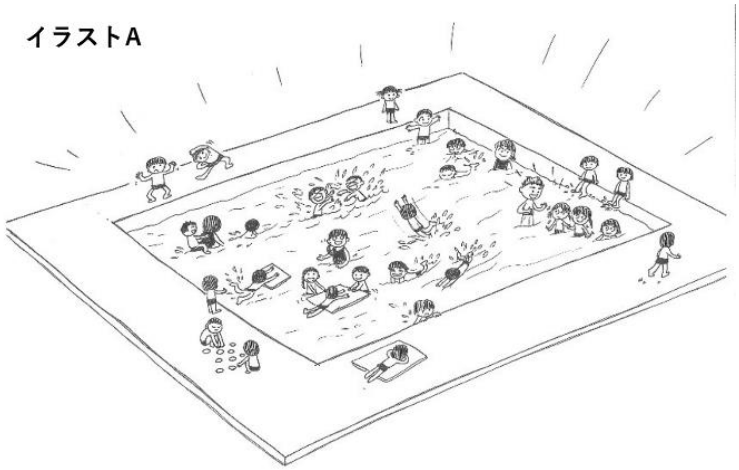
ここでは鈴木秀弘さんが年長児担任の健太さんから「みてての渦」のようすを聞き、そこで起きていたことを書いてくれた箇所を、2018 年報告書から引用します。

年長のみーちゃんと、ゆいちゃんが健太さんに「てをつないでおよげるよ」といってきたそうです。健太さんは、何事にたいしても慎重な印象のみーちゃんが、友だちと一緒に自信気にそう言うので、嬉しくなって「おぉ！見せて見せて」と言ったそうです。

すると、二人が見事に手を繋いで浮いて見せてくれたので、健太さんは益々嬉しくなって「おぉすごい！」と言ったそうです。すると、それを周りで見ていた子達が、「わたしもやりたい」と参加してきたそうです。次から次と代わる代わる手を繋いで泳いで見せてくれました。そのうちに、「こんどはけんたもいっしょに、４にんでやってみよう」と一段と盛り上がったそうです。

すると、その一連の様子や声が届いていたのでしょう。近くに居た保育士のあん子さんが「どれどれ、じゃあ見せてもらおうよ」と言って、ほかの子達にも声をかけてくれて、場所をあけてくれたそうです。

イラストA

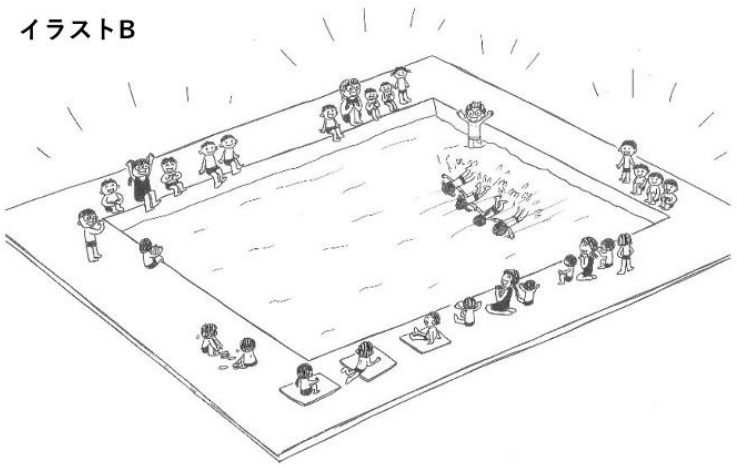


はる組の４人組はその空いた場所をいっぱいに使って、手を繋いで“けのび”（ﾌﾟｰﾙの壁をけって伸びて浮く）を見せてくれました。

すると周りから「おぉぉぉ！すごい」と歓声が上がりました。そして、そのはる組の 4 人の姿と歓声に触発されたのでしょう、「わたしもやりたい」と次々に声が上がったそうです。

そこで、やりたい子たちが順に前に出てきて、年長さんの 4 人がやった「けのび」のよ

イラストB



うな泳ぎ方を、それぞれの出来るやり方で披露してくれたそうです。

そのやり方は実に色々です。年長さんのように潜ったり浮いたりが出来る子もいます。顔だけ水につける子もいます。ワニ泳ぎ（腹ばいになって顔を上げてワニの様に泳ぐ）の子もいます。それぞれが、自分のやり方で参加していたそうです。中には、今までは顔をつけるのを怖がっていたので、“ワニ泳ぎを見せてくれるのだろうな～”と大人が思っていたら、雰囲気に後押しされて、顔をつけて泳いで見せてくれる子もいたそうです。

順番での披露し合いは、何回も繰り返されました。その度に益々盛り上がって、園庭中に「いいぞ♪いいぞ♪」と嬉しそうな声が響き渡っていました。その声が私のいる二階にも届いてきていたのです[1]。

以上が「みてての渦が広がって」の場面です。この場面は、イラスト A の姿から、イラスト B の姿が出来上がっていく場面とも言えます。

４．

2018 年報告書では、「みてての渦」を検討するために、**「三つの次元」という木村敏の世界観**を参照しています。

少し長くなりますが、2018 年報告書から、その箇所を引用します。

――――以下、2018 年報告書からの引用――――

第二部　第三章 時間の共有――木村への準拠――

あらためて、本節で検討する問いを確認しておく。

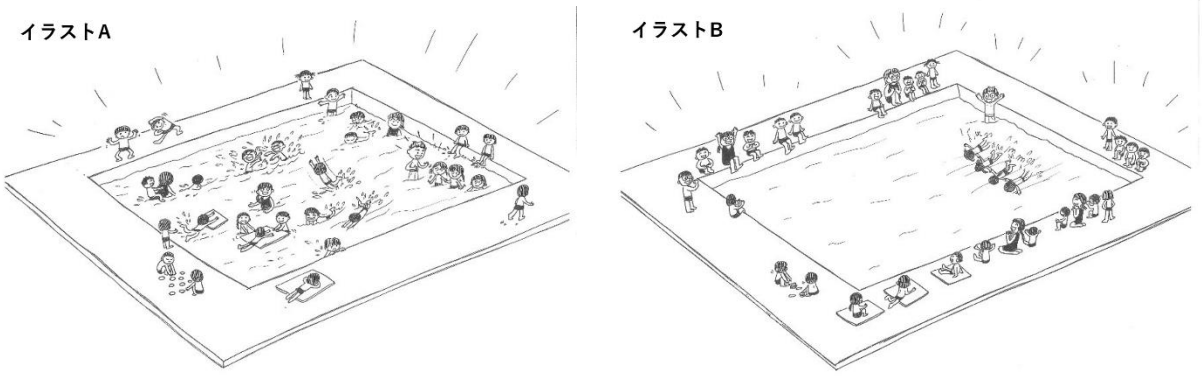
イラスト A よりも、イラスト B の方が、時間を共有している感じがする。イラスト A では同じテーブルについてはいるものの、ばらばらのことをしている感じであるのに対して、

[1]「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する調査研究」2018 年度最終報告書（全国私立保育園連盟のホームページより閲覧可能）p8。

イラスト B では同じテーブルについて一つのことをしている感じがする。イラスト A においてよりも、イラスト B において強く働いているものがあるはずである。すでに登場した言葉で、何とか表現するならば、それは「多から一へ」という時間の形式である。

とはいえ、時間の形式は、イラスト A においても、イラスト B においても働いている。両者の差があるとしたら、その差は程度の差でしかない。だとするならば、時間の形式の働きの程度の差は、どのようにとらえることができるのか？程度の差をはかる際の指標は何か？それが本節で検討する問いである。

この問いを検討するために、本節では、時間とは何か？をあらためて問う。参照するのは木村敏（きむらびん）の時間論である。



【三つの次元】

木村敏は、時間を三つの次元に分ける。

それぞれ、第一の次元として「生命一般の根拠」の次元、第二の次元として「こと的」な時間や自己の次元、第三の次元として「もの的」な時間や自己の次元と説明される（以下、コト、モノと片仮名で記すこともあるが、読み易さに配慮してのことであって、意味は平仮名のそれと同じである）[2]。

これら三つの次元は、「みてての渦」のみーちゃんに即して述べれば、それぞれ次のような次元である。

みーちゃんが、プールの中で泳ぎを堪能しているとする。その際、みーちゃんの体は水に触れ、みーちゃんの耳には友だちの歓声が入ってきている。ひょっとしたら、蝉の声も耳に入っているかも知れない。しかし、みーちゃんが、泳ぎを堪能しているとき、みーちゃんは肌に触れているもの、耳に入ってくるものに対して「これは水だ」とか「あの歓声は、○○ちゃんの歓声だ」ということを意識していない。

全てのものが混然一体となった世界のなかに、みーちゃんは飲み込まれている。まずは、水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが一体となった一つの世界がある。一体となっ

[2] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993 年。

て分けられていない一つの世界がある。そのような、すべてのものが一つとして混じり合っている世界を、第一の次元という。自分と、他のものが、まだ分けられていないという意味で、自他未分の世界と呼んでもいい[3]。

とはいえ、この自他未分の世界を、私たち人間が、全面的に見たり聞いたりすることはできない[4]。私たちに出来るのは、この自他未分の世界を「垣間見る」ことだけである。それも、自他未分の世界が私たちを触発し、私たちに「気持ちいい」「冷たい」「なんかイヤだ」といった感覚が生じることで、自他未分の世界を垣間見ることができるのみである[5]。

いわば、私たちは、個々別々の仕方で、第一の次元に触発され、第一の次元を垣間見る[6]。その次元が、第二の次元である。

第二の次元は、自他未分の世界ではない。繰り返しになるが、第二の次元において、私たちに生じる感覚は、個々それぞれのものである。同じ水に触れても、そこで生じる感覚は、みーちゃんとゆいちゃんとでは異なる。私たちに生じる感覚が、個々それぞれのものだという点で、もはや純粋な自他未分ではなくなっている。その点が、第一の次元と第二の次元の違いである。

第二の次元は、瞬間瞬間に立ち現れる世界である。自他未分の世界から、個々別々の感覚が、意識の中に発生する。その瞬間の次元である。それゆえ木村は、第二の次元のことを「第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きのようなもの」ともいう[7]。

とはいえ、この第二の次元において、「これは水だ」とか「あの歓声は〇〇ちゃんの歓声だ」といった意識は働いていない。水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが混然一体となった世界が、各々の仕方で感覚を触発している。そこには一つの出来事（コト）があるのであって、その出来事は「水」「みーちゃん」「〇〇ちゃんの歓声」といった諸要素（モノ）には、いまだ分けられていない。

すなわち、第二の次元においては、自他未分の世界がいまだに垣間見えている。それに対して、一つの出来事の中で混じり合っていた諸要素を「これは水だ」とか「あの歓声は〇〇ちゃんの歓声だ」というように分けていくという意識が働く。この意識の働きによって、自他区分の世界が現れる。この自他区分の世界が第三の次元である。

---

[3] 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005 年、みすず書房所収。p257。

[4] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993 年。

[5] 木村敏「自己の実像と虚像」『あいだと生命』2014 年、創元社所収。p154。

[6] 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005 年、みすず書房所収。p256。そこでは「メタノエシスの個別化」という表現で、第二の次元が語られている。

[7] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫所収。p117。

第二の次元と、第三の次元は、次のように考えてもいい。例えばライブ会場で、「今日のライブはなんだかすごい！」と盛り上がっている。その盛り上がりの渦の中に、一緒に飲み込まれている。そのとき、「今日は、音のバランスがいい」とか「ギターのディストーションが効いている」とかいうことは、いちいち考えていない。「なんかいい」という感覚が生じているのみである。それが第二の次元である。

そうして盛り上がっているときに、横から「今日は、音のバランスがいいね」「ギターのディストーションが効いてるね」などと友達に言われるとする。友達は「盛り上がり」という塊を、「音のバランス」「ギターのディストーション」という諸要素に分けて、分析している。友達は盛り上がりに飲み込まれているというよりは、そこから半歩下がって、その盛り上がりを分析している。この友達が過ごしている時間が、第三の次元の時間である。第二の次元に比べれば、いささか冷めた次元であり、そこで起きていることから距離を置いた次元でもある。

第三の次元で行われているような、「これは水だ」「あれは〇〇ちゃんの歓声だ」というように要素ごとに、世界の構成物を分けること。それを、要素を対象化するという。自分とは分けられた対象として、世界の構成物を見るという意味である。これが、自分と他のものを分けるという自他区分の世界である。自他区分の世界のことを、コトの世界に対して、モノの世界という。コトの中では自他未分の性格を残していた各要素が、いまやはっきりと、モノとして分けられた世界という意味である。

自他未分という第一の次元、自他未分の世界から個々別々の感覚が生じる第二の次元、自他区分という第三の次元。これが、木村による時間の三つの次元である[8]。

————以上、2018 年報告書からの引用————

[8] 木村自身は、この三つの次元の区分について、次のように述べている。「第一の次元は、それ自体はまだ時間とも自己とも呼べないが、後の段階で時間や自己についての経験が論じられるようになると、その源泉として想定せざるを得ない領域であって、禅で「父母未生已前（ぶもみしょういぜん）の自己」と言い、私が「メタノエシス的な生命の根拠」と言っている、いわば「メタ現象学的」なヴァーチュアリティ（潜勢性）の次元である。第二の次元は、この第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きで、アクチュアル（現勢的）に経験可能ではあるけれど、発生するやいなやたちまち次の第三の次元に移行してしまう。私が従来から「こと的」ないし「ノエシス的」な時間や自己と呼んできたものに相当する。そしてこの第三の次元は、すでに意識の志向構造の中に展開ずみの「もの的」ないし「ノエマ的」な時間体験および自己体験であって、ここではもはや時間と自己の同義性を云々することができない。リアル（実在的）な時間および自己の次元だといってよいだろう。」木村敏『精神医学から臨床哲学へ』ミネルヴァ書房、2010 年。p250。

以上が、木村敏の「三つの次元」を紹介した箇所の引用です。

5.

9 月 14 日の「対面講読」では、「三つの次元」の世界観を理解しようとしました。とくに「三つの次元」のうち、「第二の次元」を理解しようと努めました。

さまざまな質疑応答や問答をしながら理解を深めているうちに、12 時から 15 時が過ぎてしまいました。

そうして解散しました。
その後、9 月 24 日に、メンバーの岩崎さんから、次のメッセージが届きました。

「9 月 14 日に共有した、３つの次元で働く時間の感覚は、なんとなくイメージを受け取った状態として僕の心に残りました。

その言葉を間違いながらも使っていくことで、久保さんや研究チームの皆さんにアドバイスをもらい理解を深めていくのものだと感じ、今回、学童で毎月行われているエピソード会議から、自分が書いたものを引用し、研究チーム用に書き直してみました。

目を通していただき、アドバイスを頂けたら嬉しいです！」

そこで、岩崎さんが送ってくださったエピソードに、久保からのコメントつけたものを「11 便」にしたいと思います。

第 11 便
岩崎さんのエピソードと久保のコメント

久保　健太

第 11 便は、岩崎さんの「水に溶け込むように」というエピソードと、久保のコメントからなっています。

第 10 便に記したように、9 月 14 日の「対面講読」では、「三つの次元」の世界観のうち、とくに、「第二の次元」を理解しようと努めました。
その後、9 月 25 日に岩崎さんが「水に溶け込むように」というエピソードを送ってくれました。
そのエピソードに久保が考察（コメント）を加えて、第 8 便までの「居心地研究」と、第 10 便以降の「第二の次元」の議論とをつなげたいと思います。

次回の対面講読は 10 月 26 日に予定されています。その対面講読で読むことを想定して、久保のコメントは少し長く書きました。
久保のコメントの中では、岩崎さんの「水に溶け込むように」以外にも、秀弘さんの第 2 便や、青野さんの第 7 便にも触れました。そうして、上に書いたように、第 8 便までの「居心地研究」と、第 10 便以降の「第二の次元」の議論とをつなげようとしました。
少し書きすぎかとも思いましたが、中途半端に書くと、かえって疑問を残すこともあるかと思い、大事な箇所は徹底的に書きました。

水に溶け込むように

2020 年 9 月 25 日
岩崎真人

9月エピソード【8.31　水に溶け込むように】　記：岩﨑

まきちゃん(3年生)が登所して少しすると、連絡帳机(登所したら真っ先に連絡帳を出し出欠確認をする場所。)にやってきて岩崎の膝に座ろうとする。甘えたそうだったが、連絡帳確認の仕事もあったので、隣にイスを用意し、今は膝の上に座るのはできないけれど、ここならどうぞということを話すと、しぶしぶではあるがそこに座るまきちゃん。「はんこ押すの手伝ってもいい？(笑)」と、まきちゃん。その場に留まりたい気持ちなのだろう。特に連絡帳の仕事に支障もなく、安心できる場所に好きなだけいてもらえたらと思っていたので、手伝ってもらうことになった。まきちゃんは、手持ち無沙汰になると連絡帳机に

来ることがたまにあるが、よく遊ぶのぞみちゃん(3年生)や、かなちゃん(3年生)のどちらかが登所している時は､連絡帳机には目もくれずその二人と遊びを楽しむことが多いので、今日はどうして連絡帳机に来たのか不思議に感じた。(その日は、かなちゃん休み。のぞみちゃん登所の日だった。)

「今日はのんちゃん(のぞみちゃん)どうしてるの？」と、さり気なくまきちゃんに声をかけると、「のんちゃんはあそこ。」と連絡帳机の横にある窓を指さし、イスを窓際に寄せて台にして立ち上がった。そして窓をのぞき込むまきちゃん。私も覗いてみると、玄関横のスロープで水遊びをしてはしゃいでいるのぞみちゃんや、みさこちゃん、ともきくんなど5～6人で遊びを楽しむ子どもたちの姿があった。水鉄砲で仲間同士かけあったり、水風船に水をためて面白がったりしていた。「おー、なんだか楽しそうだね♪まきちゃんも行ってみたら？」と声をかけると、「えー、まき水やなんだもん！」と、表情は笑いながらも行きたがらないまきちゃん。それでも、のぞみちゃんのことが気になるのか、先ほど手伝っていたはんこ押しのことはすっかり忘れたようで、イスを台にして窓から見続けるまきちゃんの姿があった。一緒に遊びたいけど、水はちょっとなという心で揺れているように見えた。しばらく窓の外を眺めるまきちゃんと、その傍らで連絡帳にはんこを押す岩崎との時間があった。

転機は突然訪れるとはこのことなのか、予想外のことが起きた。「うぇーい！」と、なんだかにぎやかな声で、あきらくん(3年生)と、たいすけくん(3年生)がにゅうどう・あかね(道路を一本挟んだ場所にある、1・2年生が過ごす施設。おやつはそこに移動して食べている。)から戻ってきた。「はい、まき。一個やるよ。」と、あきらくんが、手渡したのは小さな水風船。学童のおとなから周りの友達に一人一個ずつ配るようお願いされたということで、まきちゃんにも水風船を渡しに来てくれたのである。「えっいらないんだけど！(笑)」と、突然渡されてまきちゃんはびっくりしながら笑みがこぼれていたものの、最初の一言は否定したい感じのまきちゃん。それでも「なんか一人一個って言われたからさ。いいからやるよ。」と話すあきらくん。そのままたいすけくんと一緒に立ち去り水遊びに向かうのだった。あきらくんにとっては、最後の一個を渡す相手がまきちゃんというのも意外で、もらったまきちゃんも、いらないと言いつつ手放しはしない姿も意外だった。その後、水風船をもらった何人かの子が水道で水風船に水をためるのを見た後、「ちょっとまきも行って来る(笑)」と、連絡帳机から飛び出し、玄関前に向かうまきちゃん。みんなが遊んでいる場所へ溶け込むように、水遊びを始めていた。

〇くっつきたい気持ち　～安心感・心が動いている時間を共有すること～

まきちゃんは、手持ち無沙汰の時、膝の上にのろうとするなどできればおとなにくっつきたい気持ちがあるように感じる。身体的距離が近いほど安心するという感覚は、保育園の乳幼児期の満たされ方と似ている。(とは書いたが、くっついて安心したい瞬間はどの年

齢であっても起こりうる。ただ、まきちゃんはその頻度や時間が長め。)岩崎とくっついて安心できる距離から、のぞみちゃん達が遊んでいる窓の外の世界へ。そして窓の外の世界から、あきらくんの登場で気持ちがはじけ水遊びの世界へ。このような気持ちの移り替わる様は、安心の基地から外に飛び出していくように、安心感をもとに世界が広がるまきちゃんの姿である。

その安心感とは何だったのか。もう少し細かく考察すると、まきちゃんの窓を見つめていた時間が、安心感を感じる上で大切であったように感じる。(10分、20分という物理的な時間ではなく、久保さんの研究チームで共通言語となっている、第二の次元で働く時間。)『水遊び楽しそうだな』『みんな何しているのかな？』という遊びに向かって感じている心であったり『ここ(連絡帳机)にいてもいいんだな』『私がくっついててもいいんだな』など、安心をもとにした気持ちであったり、窓から見える水遊びの景色から、まきちゃんが感じている時間の中に様々な心の動きがあったように感じる。まきちゃんがその時間に浸っている際仮に、「楽しそうだね」と岩崎が声をかけてしまうと、きっと最初の一言は否定したい感じのまきちゃんから「全然楽しそうじゃないし。」と、返ってくるかもしれない。「楽しそうだね」「なんか面白い事やってそうだね」という言葉での時間を共有するというよりは、心が動いている時間そのものを共有する感覚が大切な事の様に感じた。そこに安心感が生まれるように感じた。(会話を否定している訳ではない。信頼関係の中で感じる相手の心の動きに対して、侵害的にならないということ。)

また､“他者(モノ)の力を借りて自分の気持ちをコントロールしていく”そんな部分に主体的保育があると、りんごの木の研修で大豆生田先生が話していたが、まきちゃんにとって考えてみると、岩崎の傍に居るということや、窓の外で楽しそうに水遊びをしているのぞみちゃんの姿、あきらくんの気さくな雰囲気から感じるもの、そして水風船という魅力的な出会いがあって、そしてその力を借りて、はじめてそこにまきちゃんが“みんなと水遊びしたい！”と、自己決定し、主体的に周りと関わっているのだと感じた。主体的に過ごす心の中に居心地の良さの要素があると以前考察したが、主体的に過ごしている時間の中に、居心地の良さの要素があると言い換えてもいいように感じる。

〇水の力が共振を生む。～自然に触れ、夢中になる時間を過ごすこと～

もう一つの視点で、“水”という自然物のもたらす力の凄さ、魅力はダイレクトに子どもたちの心に入ってくるように感じた。きんとうん(3年生が生活する施設)の部屋の中で工作コーナーを作り、そこで楽しむ子どもたちの姿や、LaQやレゴブロックに没頭する子どもの姿など､心を動かす楽しい遊びという場面はもちろん日常の遊びの中にある。しかし、やっぱりそこでは得られない、あの水にかかったら『わぁー』と笑顔がこぼれる感覚。『冷たい』『気持ちいい』『かけたな』『やりかえしだ！』など心に直接響く感覚はすごい。そして、保育園では園庭に出れば水遊びが自由にできる環境が多いことに対し、学童という環境は、小・中学校の近くにあるため、上級生の授業中は自由に水遊びするなど大はしゃぎできない環境がある。また、施設外の自然へ飛び出そうにも、150人規模という中で、

放課後気軽に散歩に行けないという保育園より縛りの多い環境の中で、水に触れて遊びこめる時間が子どもたちにとってどれほど貴重なものなのかも同時に感じる。そんな環境だからこそ、より一層水遊びが楽しいという気持ちを盛り上げてくれているようにも感じた。(学校では勉強。放課後は習い事。家に帰ったら宿題やテレビやゲームといった生活の中で、自然と触れ合うという時間がどれほど大事なものなのか。)

その水の力が玄関のスロープにいたのぞみちゃんや、あきらくんの心に響く。そしていつの間にやら水が少しいやだなと感じていたまきちゃんの心に響く。以前似たような場面で、連絡帳机にやってきた手持無沙汰のまきちゃんが「なんか暇。」とつぶやいた時に、「〇〇してみる？」と私がいくつ遊びの誘いを提案しても首を振っていたまきちゃんの姿から見ても、今回の水の力の凄さを感じる。子どもたちの楽しい気持ちが響き合っている。共振が起きている。

また、「えー、まき水やなんだもん！」という言葉も、まきちゃんの心の中で感じている水が「やだ」という気持ちと、岩崎の心で感じている水が「やだ」という気持ちは違うということも大事にしたい。言葉で受け取らず、まきちゃんの今までの水の触れ方を考え・感じていくという心持ちでいたい。(一人一人の感じ方、感覚を大事にしていくということ。久保さんの研究チームで共通言語となっている言葉では、第三の次元である言葉で受け止めるのではなく、第二の次元である気持ちを受け止めていく。)

心を動かす環境にどれだけ出会える機会を作れるのか。どれだけ自然物や芸術、仮想体験ではなく実体験という物事に触れていく経験ができるのか。集団が大きいからこそ一人一人の心に寄りそうには限界がある。むしろその大きい集団の中の育成では、子どもたち同士が刺激し合い、自発的に環境に働きかけるような相互作用が起きることを願っていきたい。(遠藤利彦先生の言葉を借りると、集団的敏感性の働き。)

〇物理的な時間ではなく、心の動きをたっぷりと味わえる時間から、『あそびの時間』を考える。

今回の考察の中で、居心地研究のキーワードの一つにある『あそびの時間』という視点を取り入れて、捉え直してみると、まきちゃんが、窓を眺めながら安心を感じている時間、水という自然物に触れて遊んでいる時間という、どちらも第二の次元で働く時間を、その場にいるおとなや仲間たちと、ゆったり共有している時間こそが、あそびの時間であると言えるのではないか。その時間は、まきちゃんが窓を眺めてから、水遊びしようと感じるまでに起こる『心の時間』であり、水をかけたりかかったりする中で『心が夢中になって過ごす時間』である。物理的な時間ではなく、心の動きをたっぷりと味わえる時間である。その心の動きを、見守ってくれている人、気持ちをわかってくれる人が周りにいることで、安心という居心地の良さが生まれるのではないか。

上記にある、安心感をもとに世界が広がるといったエピソードは、子どもたちと関わる日常の中にごくありふれた場面である。そんな日常の中にも、こんなにも心の動きがある

ということを改めて感じた。学童という人数多く、かつ短い時間で過ごす生活の中で、そんな心が動く時間をたっぷり保障できる場でありたいと感じる。

「水に溶け込むように」へのコメント

2020 年 9 月 26 日
久保　健太

１．心が、現在進行形で動いている次元で、時間を共有する

岩崎さんの文章の中で印象的なのは、次の一節です。

また、「えー、まき水やなんだもん！」という言葉も、まきちゃんの心の中で感じている水が「やだ」という気持ちと、岩崎の心で感じている水が「やだ」という気持ちは違うということも大事にしたい。言葉で受け取らず、まきちゃんの今までの水の触れ方を考え・感じていくという心持ちでいたい。（一人一人の感じ方、感覚を大事にしていくということ。久保さんの研究チームで共通言語となっている言葉では、第三の次元である言葉で受け止めるのではなく、第二の次元である気持ちを受け止めていく。）

岩崎さんは、第二の次元とは「気持ちで受け止めること」、第三の次元とは「言葉で受け止めること」だと書いています。私自身、とてもしっくりくる整理の仕方だと感じました。

岩崎さんは、その上で、第三の次元ではなく、第二の次元で時間を共有することが大事だと言います。それを岩崎さんは

心が動いている時間そのものを共有する感覚が大切な事の様に感じた

とも書いています。

「心の動き」という言葉は、エピソード「水に溶け込むように」のキーワードだと思います。岩崎さんの文章を引用します。

その安心感とは何だったのか。もう少し細かく考察すると、まきちゃんの窓を見つめていた時間が、安心感を感じる上で大切であったように感じる。（10分、20分という物理的な時間ではなく、久保さんの研究チームで共通言語となっている、第二の次元で働く時間。）『水遊び楽しそうだな』『みんな何しているのかな？』という遊びに向かって感じている心であったり『ここ（連絡帳机）にいてもいいんだな』『私がくっついててもいいんだな』など、安心をもとにした気持ちであったり、窓から見える水遊びの景色から、まきちゃんが感じている時間の中に様々な心の動きがあったように感じ

る。まきちゃんがその時間に浸っている際仮に、「楽しそうだね」と岩崎が声をかけてしまうと、きっと最初の一言は否定したい感じのまきちゃんから「全然楽しそうじゃないし。」と、返ってくるかもしれない。「楽しそうだね」「なんか面白い事やってそうだね」という言葉での時間を共有するというよりは、心が動いている時間そのものを共有する感覚が大切な事の様に感じた。そこに安心感が生まれるように感じた。(会話を否定している訳ではない。信頼関係の中で感じる相手の心の動きに対して、侵害的にならないということ。)

「安心感」というキーワードについては、後ほど「6.2.」で言及します。

ここでは「様々な心の動き」「心が動いている時間そのもの」という言葉から、さらに考察を深めたいと思います。

第二の次元とは、心や気持ちが動いている次元だと言えます。

それに対して、第三の次元とは、心や気持ちの中身を見つめて、知っていく次元だと言えます。

そのあたりのことについて、木村敏（びん）が書いた箇所を引用します。「リアリティとアクチュアリティ」（1997 年）という文章からの引用です。

「リアリティ」（久保註：第三の次元のこと）とは、公共的な認識によって客観的に対象化され、ある共同体の共有規範としてその構成員の行動や判断に一定の拘束を与えるものである。それが「科学」の理念にこの上なく適合するものであることは、いうまでもない。「知の営み」scientiaとしての科学にとって、「知」scioとは世界をリアリティとして対象化すること以外の何物でもない。「科学共同体」以外の――たとえば「宗教共同体」や「迷信共同体」といった――共同体にも、それなりの客観的な心理とそれについての知がありリアリティがあるだろう。ただ、今日の世界ないし人類の全体を圧倒的に支配している科学共同体によって、それには「非科学的」の烙印が押されるだけのことである。科学的であれ、人間の知が古来、リアリティの公共性と客観性を求めていることには変わりはない。

「知」という名の客観化は、対象を自己の直接的で私的な生から切り離す。それは、空間的には対象との間に距離を設定し、時間的にはそれを現在から――「所与」datumuというかたちで――過去へとずらす。「知られたもの」、それはかならず「すでに与えられたもの」である。科学、宗教、迷信などといった知の体系における「未来の知」――たとえば日蝕その他の天文学的な予測、終末論的な予言、呪術的な予知など――は、生の現在がそのつどその切っ先をつっこんでいる直接の「未来」についての知ではない。むしろそれは知によってひとまず「過去化」され、「前もって知られていた」という仕方で登録済みの真理が、それと同一の――同一性によって律せられた――時

間線上にある「未来」という名の次元に投影されたものにすぎない[1]。

ここまでが「第三の次元」についての木村敏の文章です。「楽しい？」「うん、楽しい」という「言葉」での確認を行うとき、人は、第三の次元で時間を共有することができます。しかし、そこでは、楽しい出来事からは「距離を設定し」、その出来事を「過去へとずらす」ことをせざるを得ません。

ですが、距離を設定したり、過去へとずらしたりしてしまうと、「いま、ここで味わっている楽しさ」からは出てしまうことになります。岩崎さんはそれが嫌だから、

> *「楽しそうだね」「なんか面白い事やってそうだね」という言葉での時間を共有するというよりは、心が動いている時間そのものを共有する感覚が大切な事の様に感じた。*

と書いたのでしょう。

そして、第二の次元で時間を共有することを岩崎さんは選びました。

木村敏は、第二の次元について、次のように書いています。

> *「アクチュアリティ」（久保註：第二の次元のこと）のほうは、生の各自的で直接的な営みである「生きる」ための実践的行為actioに全面的に属している。それはいかなる仕方でも客観的・公共的な知の対象とはなりえない。生それ自身の行為として、それは「生の現場」である「生き生きした現在（レベンディゲ・ゲーゲンヴァルト）」（フッサール／ヘルト）に密着し、生の方向が指し示す次の一瞬へ身を乗り出している。動詞の時制を借りていえば、リアリティが「過去形」あるいは「完了形」で表現されるのに対して、アクチュアリティは「現在形」――あるいはより適切には英語でいう「現在進行形」――でしか展開しない。リアリティが存在者の指標であるとするならば、アクチュアリティは生成そのものの特性であって、いかなる形でも存在の標識にはならない。ただ、人間の志向的意識は、あらゆるものを知のノエマ的対象に変え、（ニーチェの言葉を借りれば）「生成に存在の刻印を押そうとする＜力への意志＞」によって支配されている。こうしてアクチュアリティを知のノエマ的所与としてとらえようとすれば、それはたちまちリアリティとしての存在者に姿を変えてしまう[2]。*

---

[1] 木村敏「リアリティとアクチュアリティ」『分裂病の詩と真実』河合文化教育研究所、1998 年（初出は 1997 年）、p149-150。

[2] 木村敏「リアリティとアクチュアリティ」p150-151.

「第三の次元」は「知ること」とかかわっていたのに対して、「第二の次元」は「生きること」とかかわっています。「現在進行形で生きること」、それが第二の次元の時間です。

岩崎さんは、9 月 14 日の「対面講読」を経て、第二の次元で時間を共有することの大切さを再確認したのだと思います。それは、心が、現在進行形で動いて（生きて）いる次元で、時間を共有するということです。

2．「心の動き」の「様々（さまざま）さ」が生きていること（第二の次元）の確かさを与えてくれる

岩崎さんの思いは、第三の次元で時間を共有する前に、まずは第二の次元で時間を共有することを大事にしたいということなのだと思います。

そのように書くと、第三の次元よりも、第二の次元の方が大事だと考えてしまうかも知れませんが、人間にとっては、どちらも大事です。その点は、木村が『からだ・こころ・生命』において、「二重の主体性」（p44）、「二重の未分」「二重構造」（p75）という言葉で語っています[3]。

ここでは、木村からの引用はせずに、岩崎さんに当てはめて、考えてみます。

岩崎さんの仕事が充実しているとき、その充実は、子どもたちと気持ちを通わせることで得られる実感としての確かさ（これが第二の次元です）と、周囲から言葉などで「岩崎さんの仕事は充実しているように見えるよ」と確認してもらうことで得られる確かさ（これが第三の次元です）の両方によって支えられています。

もしくは、「いま、この瞬間に味わっている、第二の次元での充実」に支えられているのと同時に、「後になって、思い出すことができる、第三の次元での充実」に支えられている、ということもできます。

岩崎さんが「自分の仕事は充実している」ということを確かめるときに、そのどちらもが大切になってきます。

私を含めて、どうしても、第二の次元の方が大事だ、と考えてしまいがちなので、まずは、その点を指摘しておきます。

その上で、第 8 便までの「居心地研究」とかかわらせるためにも**第二の次元で得られる確かさと、第三の次元で得られる確かさは何が違うのか？**という点を考えておきます。

「第三の次元」は「知ること」とかかわっていたのに対して、「第二の次元」は「生きること」とかかわっています。「現在進行形」で生きること、それが第二の次元の時間です。

[3] 木村敏『からだ・こころ・生命』講談社学術文庫、2015 年（初出は 1997 年）。

第三の次元と、第二の次元は違います。その違いは、次のように言えます。第三の次元では、出来事を客観的に対象化した上で、出来事の「楽しさ」を「知って」いきます。そうして、「ああ、楽しい出来事だったんだ」ということを確かめます。

そのとき、「楽しさ」の確かさを与えてくれるのは、「楽しかった」と言ってくれる人の人数や言葉といった「公共的」で「客観的」な事実です。

対して、第二の次元では、出来事を対象化しません。出来事の中を、現在進行形で生きます。そのとき、その出来事が楽しいのか、楽しくないのかはわかりません。知ることができません。とにかく、出来事の中を生きています。

そのとき、何が「出来事」の中を生きていること（「出来事」が起きていること）の確かさを与えてくれるのでしょうか？

その点は、ぜひみなさんと考えていきたいと思いますが、ここでは、久保の仮説として**「心の動き」の「様々さ」が「出来事」の中を生きていること（「出来事」が起きていること）の確かさを与えてくれるのではないか**ということを書いておきます。

３．場所としての主体

その土台として、木村敏の議論から、場所としての主体という人間観を紹介しておきます。以下、木村の文章から引用します。

> *「私は海を見る」「私は音楽を聴く」という能動文の場合には、動作の主体たる私がそのまま主語に置かれて、動作の客体が客語になっている。これは、自己である「私」を主語的実体として立てる言い方である。これに対して中動文「私には海が見える」「私には音楽が聞こえる」の場合には、「見る」「聞く」という動作は表面から姿を消して、「見える」「聞こえる」という感覚の対象が主語として立てられ、「私」は「私には」の形でこの感覚が生起する場所として扱われている。そこにはいかなる意味でも、動作ないし感覚の遂行主体がだれであるかは言われていない。アンリの言うとおり、ここでは「現れることがそれ自身に本源的に表れ」「感じるというそのことが自らを感じ」ているのであって、これは感覚の「自己触発」であるといわなくてはならない。だからこの中動文は、主体である「私」を消して、「ここから海が見える」「いま音楽が聞こえる」という、いわば非人称の形に書き改めることも可能である。*
>
> *（略）*
>
> *パンヴェニストは、≪能動態においては、動詞は主語に発して主語の外で行われる過程を示す≫のに対して、≪中動態では、動詞は、主語がその過程の座であるような過程を示し、主語の表すその主体は、この過程の内部にある≫と書いている。彼によると≪中動態の場合、主語は、過程の場所≫なのである。*[4]

[4] 木村敏「自己の「実像」と「虚像」」『あいだと生命』創元社、2014 年（初出は 2010

ここには、「動作の主体」である私とは別に、「場所」である私という人間観が示されています[5]。

加えて、場所においては、感覚が自己触発するということも書かれています。

４．感覚は、生み出すのではなく、生まれ出る

「感覚が自己触発する場所」である私。

少し、難しい人間観かも知れませんが、私が「第５便」で書いた人間観と重なる人間観です。私の「第５便」から引用します。

> *さて、クロスフェードについてです。*
> *一つの意識状態がまずある。その意識状態は「寝転んでいたい気持ち（意識）」や「起き上がりたい気持ち（意識）」という単一の意識に塗りつぶされているわけではない。*
> *一つの意識状態の中に「寝転んでいたい意識」も「起き上がりたい意識」も混在（共存）している。*
> *そして、瞬間、瞬間に「新しい意識状態」が生まれる。そのたびに「寝転んでいたい」と「起き上がりたい」の比率が変わる。*
> *だから「ある一瞬の意識状態」において「寝転んでいたい意識」が上回っているとしても、その陰には「起き上がりたい意識」が潜んでいる。逆に「起き上がりたい意識」が上回っているときにも、その陰には「寝転んでいたい意識」が潜んでいる。*
> *「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」は「比率」を変えているのであって、そして、どちらかの「比率」がもう一方を上回ったときに、「どちらかの意識が優勢な意識状態」が生まれるだけであって、「寝転んでいたい意識で塗りつぶされた意識状態」から「起き上がりたい意識で塗りつぶされた意識状態」への「ある瞬間での転換」があるわけではない。*
>
> *これは「寝転んでいたい意識状態」から「起き上がりたい意識状態」への「転換」の瞬間においてさえも、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」とが「比率」*

年)、p150-151。
この箇所は、中動文（中動態）について書かれた箇所である。國分功一朗の中動態論では、「場所としての主体」に加えて、「過程における変状」という契機が中動態に含まれている（國分功一朗『中動態の世界』医学書院、2017 年、p257 など)。木村と國分の異同は、今後の検討課題である。

[5] 木村には「感覚の自己触発の「場所」としての中動態的な「主体」あるいは「自己」」という表現もある（木村敏「中動態的自己の病理」『あいだと生命』所収。初出は 2010 年）

によって、グラデーションをつくっていて、どちらかが上回ったり、下回ったりしているにすぎないということです。
転換の瞬間においてでさえも生じているこのグラデーションが、クロスフェードの正体です。

私は第 5 便で「意識」という言葉を使って、一つの意識状態の中に「寝転んでいたい意識」や「起き上がりたい意識」が様々に混在していることを書きました。
ここで私が「意識」と書いたものは、木村が「感覚」と書いたものと重なります。
ドゥルーズであれば、そうした「意識」や「感覚」の奥に、まだ「意識」されていない「微小表象」を想定することと思います[6]。とはいえ、その点は、いつかまた触れることにしましょう。

木村の議論において重要なのは、感覚は生み出すものではなく、生まれ出るものだという点です。
中動文においては「動作ないし感覚の遂行主体がだれであるかは言われていない」のです。つまり、感覚を誰かが遂行している（言い換えれば、生み出している）わけではないのです。感覚は、私という「場所」において、「生起」している（言い換えれば、生まれ出ている）のです。それが「「私」は「私には」の形でこの感覚が生起する場所として扱われている」という文章に示されている世界観です。

以上の木村の人間観、すなわち「感覚が自己触発する場所である私」という人間観に、岩崎さんの「様々な心の動き」というアイデアを加え、**「意識」「感覚」が様々に動いていることで、しかも「自己である「私」」という場所で動いていることで、出来事（こと）の中を生きていること（出来事（こと）が起きていること）の確かさが与えられるのではないか**という仮説を提示しておきたいと思います。

５．適切なカオス、適切なコスモス

加えて、これを「居心地の良さ」とかかわらせておきましょう。
上に書いたことは「様々な心（意識、感覚）」が「心（自己である私）という場所」で動いていることだと言えます。
そうした「様々な心の動き」は、第二の次元の確かさ（生きていることの確かさ）を与えてくれるものですが、その動きが過剰であれば、居心地はかえって悪くなってしまいます。
やはり、適切な範囲で、適度に動いてくれることが大事なのだと思うのです。とはいえ、動きが少なすぎてもつまらない。

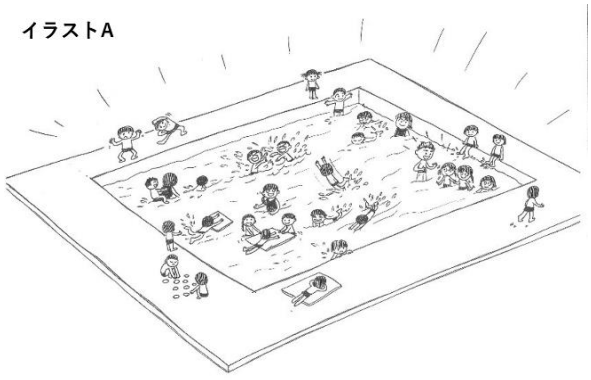
[6] ジル・ドゥルーズ（財津理訳）『差異と反復（下）』河出文庫、2007 年、p123-125。

それらを表現するのに、第 9 便で使った「カオス」「コスモス」という言葉を使いたいと思います。

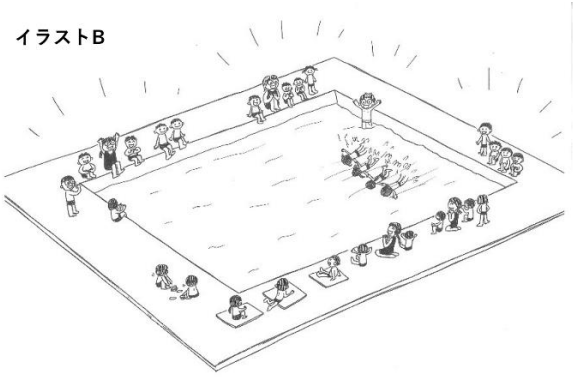
つまり、居心地の良さを感じるには**「適切なカオス（適度なカオス）」もしくは「適切なコスモス（適度なコスモス）」が要素になる**のでしょう。

第 10 便でも取り上げた「2018 年報告書」にはイラスト A とイラスト B が出てきます。イラスト A は「適切なカオス」を、イラスト B は「適切なコスモス」を表現しているようにも見えます。

イラストA



イラストB



人間が第二の次元をも生きている限り、そこにカオスが生まれることはやむを得ないことだと思います。というのも、木村が言うように、感覚の自己触発は、能動ではなく中動の働き、つまりは、生み出すものではなく、生み出されてしまうものだからです。

感覚の自己触発に伴い、感覚は生み出されてしまう。岩崎さんの言葉で言えば、心は様々に動いてしまう。能動的に動かそうとしなくても、中動的に動いてしまう。

それが第二の次元を生きている人間の実相です。

ですから、そうした心の動きにともなって、カオスは生まれてしまうのです。

カオスは生まれるものだと思って、生きていくしかありません。**そのカオスが「適切なカオス」を超えて、「過剰なカオス」になったとき、居合わせた人間で、そのカオスを調整する**――それがローカル・ガバナンスの姿なのかも知れません。

そのような意味では、イラスト A の姿と、第 2 便での「水遊び」と「水洗い」の姿とを検討してみたくもなります。この点は、後ほど、青野さんの第 7 便とかかわらせて、簡単に触れます。

ともあれ、これ以上書くと、書きすぎになるので、みなさんとの「対面講読」で深めたいと思います。

６．今後に向けて

岩崎さんの考察は、まだまだ深められるのですが、今回は、ここまでにします。

ここから先は、今後に向けて、第 8 便までの「居心地研究」と、第 10 便以降の「第二の次元」の議論とをつなげておきます。

６．１．青野さんの第 7 便

青野さんの第 7 便は、第 1 便と絡めた方が、深められるように思います。

私は、第 1 便では「自分の過ごしたいように過ごせること」を居心地の良さの第一の要素に挙げました。

青野さんが「くつろぎ」と呼んだ要素も、「あっという間」と呼んだ要素も、「自分の過ごしたいように過ごせること」のヴァリエーションだと思います。

とはいえ、「くつろぎ」と「あっという間」は、まったく違います。

私は「くつろぎ」は、第 1 便の「互いへの配慮意識をある程度、解除すること」と重なるのではないかと思っています。キーワードは「解除」です[7]。

また、「あっという間」はミハイ・チクセントミハイの「フロー」の議論と重なるのではないかと思っています。フローについて、チクセントミハイは『楽しみの現象学』（1975 年）の中で、次のように定義しています。

> *我々はこの特異でダイナミックな状態――全人的に行為に没入しているときに人が感ずる包括的感覚――をフロー（Flow）と呼ぶことにする。フローの状態にあるとき、行為は行為者の意識的な仲介の必要がないかのように、内的な論理に従って次々に進んで行く。人はそれをある瞬間から次の瞬間への統一的な流れとして経験し、その中で自分の行為を統御しており、さらにそこでは自我と環境との間、刺激と反応との間、過去現在未来との間の差はほとんどない。*[8]

---

[7] この「解除」は、ドゥルーズ＝ガタリであれば「切断」と呼ぶのかも知れない。ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ（市倉宏佑訳）『アンチ・オイディプス』河出書房新社、1986 年（原書 1972 年）。とくに第一章第五節。

[8] ミハイ・チクセントミハイ（今村浩明訳）『改題新装版　楽しみの現象学』新思索社、2000 年（原著 1975 年）、p66

「内的な論理に従って」への傍点は、久保が振りました。後の議論で、この箇所が再登場するからです。

さて、「（フロー体験において）自我と環境との間、刺激と反応との間、過去現在未来との間の差はほとんどない」という、チクセントミハイのこうした考察は青野さんに大きなヒントを与えてくれるのではないでしょうか。

とくに「過去現在未来との間の差はほとんどない」という点は、青野さんが始めようとしている**「時間」の議論**に大きなヒントを与えてくれるのではないでしょうか。

その点に関して、『フロー体験　喜びの現象学』（1990 年）におけるチクセントミハイの考察を一つ、紹介しておきます。

> *（フロー体験においては）数時間が数分間に感じられることがしばしばあり、一般にはほとんどの人が時間は通常よりはるかに短く感じられると答えている。しかし時々逆のことが起こる。バレリーナたちは、実際には一秒に満たない一つの困難な回転が、数分間に感じられるほど引き延ばされることについて述べている。「二つのことが起こりますね。一つは、時間はある意味では本当に速く過ぎるように感じます。時間が経った後、それが本当に短く感じられるんです。午前一時になっているのに気がついて、『アラッ、さっき八時だったのに』と言ってしまうんです。でも踊っている時は……実際の時間よりずっと長く感じます」。この現象を一般化する最も無理のない解釈は、フローを体験している間の時間の感覚は、時計の絶対的な約束事によってはかられる時間の経過とほとんど関係がないということである。*[9]

バレリーナが語るように、過去、現在、未来が「あっという間」に集約されるだけでなく、現在が「引き延ばされ」、「実際の時間よりずっと長く感じ」られることもある。この二つが同時に起きているのが「フロー」なのです[10]。

なお、チクセントミハイは、フロー体験を、チャレンジとスキルが釣り合う状況で起きるものだと述べています。そして、フローの隣には「退屈」や「不安」があると指摘しています。「退屈」とはチャレンジに対して、スキルが大きすぎる状態。「不安」とはスキル

---

[9] ミハイ・チクセントミハイ（今村浩明訳）『フロー体験　喜びの現象学』世界思想社、1996 年、P84.

[10] ここにドゥルーズの「第一の時間」を重ねたり、郡司らが「集合」と呼んだ時間感覚や、エリクソンが「フォーカス Focus」と呼んだ時間感覚を重ねたりすれば、議論はより深まるように思われる。（ジル・ドゥルーズ『差異と反復』河出書房新社、1992 年。郡司ペギオ幸夫ら「ただ流れる時間へ」『ドゥルーズ／ガタリの現在』河出書房新社、2008 年。Erik. H. Erikson “Insight and Responsibility”, New York, W.W.Norton, 1964, p120）。

に対して、チャレンジが大きすぎる状態です[11]。「フロー」という心地よさの隣には、「退屈」や「不安」といった心地悪さがあるのです。これ以上の深入りは、青野さんにお任せするか、次の機会に行ないますが、ここに「適切なカオス」の議論を加えることは十分に可能でしょう。

そして、先にも書いたように、「適切なカオス」の議論を深めるためには、2018 年報告書のイラスト A と、第 2 便の「水遊び」と「水洗い」の姿とは、格好の素材だと思います。

６．２．居心地の良さの三つのタイプ

私はいま、居心地の良さを、次の三つのタイプに整理しています（以下の分類は、本研究において重要な役割を果たすであろうエリク・H・エリクソンの思想を念頭に、第 1 便で挙げた五つの要素を整理し直したものです)。

居心地の良さの三つのタイプ 1．意識が解除され、状況に包み込まれ、身を委ねている（そこにみんなが溶けていく)。その心地よさ。 2．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。その心地よさ。 3．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。その心地よさ。

青野さんの「くつろぎ」は「タイプ１．意識が解除され、状況に身を委ねている」に含めました。また、「フロー」は、「タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる」に含まれています（ここで「内的な論理」を再登場させました)。

岩崎さんが書いた「安心感」については、「タイプ１.」とかかわっているように思います。そこに、エリクソンの「ヌミノース」という概念を加えれば、「安心感」の正体をさらに確かめられるようにも思います。

また、9 月 14 日の「対面講読」では、人間は相互依存しながらも自己決定することができる。それは「類似した目標もしくは相補的な目標を持つ」ことによって可能だ――そう述べたバーバラ・ロゴフの言葉を紹介しました[12]。

ロゴフの言葉は、「タイプ１.」の上で「タイプ２.」を行おうとするとき、「タイプ３.」によって可能になるということを述べたものだとも言えます。

さらには、岩崎さんが書いた

---

[11] チクセントミハイ前掲書、P95.

[12] バーバラ・ロゴフ（當眞千賀子訳)『文化的営みとしての発達』新曜社、2006 年、p262

まきちゃんにとって考えてみると、岩崎の傍に居るということや、窓の外で楽しそうに水遊びをしているのぞみちゃんの姿、あきらくんの気さくな雰囲気から感じるもの、そして水風船という魅力的な出会いがあって、そしてその力を借りて、はじめてそこにまきちゃんが“みんなと水遊びしたい！”と、自己決定し、主体的に周りと関わっているのだと感じた。主体的に過ごす心の中に居心地の良さの要素があると以前考察したが、主体的に過ごしている時間の中に、居心地の良さの要素があると言い換えてもいいように感じる。

の箇所は「タイプ２.」のもとである、エリクソンの「自律性（自己決定)」とかかわっているように思います。

ここで示される「自己決定」論は、

・様々な心の動きがある。
・そこから、様々なやりたいこと（選択肢）が生まれてくる。
・その選択肢自体は、他者（もの）の力を借りて、自分が「場所」になることで生まれてくる。
・そうして生まれてきた選択肢の中から、自分のやりたいことを、自分で決める。

このような「自己決定」論です。これは、「第二の次元」「場所としての主体」を踏まえた自己決定論とでもいうべきもので、とても面白く思います。

６．３．ビオスとゾーエー

最後に、「第二の次元」において時間を「共有」することを考えるキーワードとしてビオスとゾーエーというキーワードがあります。それぞれの人間（ビオス）が、大文字の生命（ゾーエー）と「非 - 不連続」にある。その世界観は「共有」を解き明かす際に重要であるように思います。

いよいよ書きすぎになってきたので、もうやめます。

７．まとめ

冒頭に書いたように、次回の対面講読（10 月 26 日）において読むことを想定して、久保のコメントを少し長めに書きました。

「場所としての主体」「感覚は、生み出すのではなく、生まれ出る」「適切なカオス／適切なコスモス」「フロー」などいくつかのキーワード（世界観、人間観）をまとめて出しました。

次回の対面講読で、これらのキーワード（世界観、人間観）を読み合うのはいかがでしょうか？

そうすれば、「三つの次元」の世界観を深められるだけではなく、第 8 便までの「居心地研究」と、第 10 便以降の「第二の次元（アクチュアリティ）」の議論とが整理しやすくなるように思います。

私としては「あそび」「居心地」を書くための世界観（言葉）は十分にそろったように思います。「アクチュアリティ（時間即空間）」、「意味（感覚、意識、微小表象、センス）」「時間／空間」「起きること／起こすこと」「場所としての主体／行為する主体」「カオス／コスモス」「ビオス／ゾーエー」などの言葉を使って、「あそび」「居心地」を書いていきたいと思っています。

【追伸】10 月 5 日（月）

上のコメントを 9 月 26 日（土）に書き終えた後、9 月 29 日（火）に福岡伸一先生、汐見稔幸先生と鼎談いたしました（『保育ナビ』誌の 2021 年 2 月号に掲載される鼎談です）。

その席で、福岡先生が「ピュシス／ロゴス」の世界観を語っておられました。「起きること／起こすこと」「カオス／コスモス」「ビオス／ゾーエー」「アクチュアリティ」などの思想を整理するのに有効な世界観です。

今後、「ピュシス／ロゴス」の世界観についても、共有したいと思います。

また、ここ数日、ピュシスの哲学を勉強し直す中で、柄谷行人の「交換様式 D」や、そこで回復される「原遊動性 U」（大澤真幸）をテーマにできないものかと考え始めています[13]。

「ピュシス」「交換様式 D」「原遊動性 U」については、いずれ「対面講読」でとりあげましょう。

これらの言葉は、私たちが「ヌミノース」「アクチュアリティ」「適切なコスモス」「起きること」という言葉で考えようとしていたものに、さらなる考察の手がかりを与えてくれるもののように思うのです。

[13] 柄谷行人『哲学の起源』岩波現代文庫、2020 年（初出は 2012 年）。柄谷行人、見田宗介、大澤真幸『戦後思想の到達点』NHK 出版、2019 年。

第 12 便
1 歳児と民主主義とをつなぐ

久保　健太
2020 年 10 月 23 日

9 月 26 日の第 11 便に続いて、第 12 便を送ります。

10 月 26 日（月）の対面講読では、第 11 便を読みます。また、次年度（2021 年度）以降の研究計画も議論します。
次年度は「交換様式 D」（柄谷行人）をテーマに加えるつもりです。
以下、その趣旨説明も兼ねて、「1 歳児」と「民主主義」とをテーマに文章をしたためました。今後、検討したいテーマを仮説的に示しておきます。

１．1 歳児の姿

我が家には、3 歳、1 歳の娘と、0 歳の息子がいます。

1 歳の娘（響子）は、最近、自己主張を強くするようになってきました。その結果、3 歳の娘（晃子）と取り合いをするようになってきました。
おもちゃの取り合い、お父さんの取り合い、などなどです。
場合によっては、手が出るときもあります。

響子は、先に晃子が使っているものでも、自分も使いたいとばかりに、取りに行きます。逆に、自分が使っているものを、晃子に取られそうなときもあります。そういうときでも、取られないように、歯向かいます。
そうして、取り合いが起きます。

少し前までは、取られたものに、そこまでの執着がなかったように思います。ある意味、無関心でした。ですので、晃子に取られても、取り合いにはなりませんでした。
しかし、最近は、取り合いが生まれるのです。

とはいえ、四六時中、取り合いをしているわけではありません。むしろ、大半の時間は、一緒に絵本をのぞき込んで、キャッキャッと笑い合ったり、ディズニーの歌を一緒に歌ったり、「プリプリプーのプー」と意味不明な言葉を叫んでふざけ合ったりしています。

つまり、一緒にのぞき込む。一緒に歌う。一緒にふざけるという時間が存分にあって、その中に「取り合い」「奪い合い」が顔をのぞかせるようになってきたのです。

私は、ここに、民主主義を考えるヒントがあるように思います。

２．ヌミノース

問題の見通しを得るために、いくつかの理論を紹介します。

まずはエリクソンの理論です。『玩具と理性』（1977 年）に収録されている「日常生活における儀式化」という論文は、いつか「対面講読」で読みたいと思っています。その論文の中に「**ヌミノース**」という言葉が登場します。その箇所を引用します。

「人生の第一期（the first stage）では、一連の疎隔(a series of estrangement)は分離(separation)と遺棄（abandonment）の感覚である。この感覚は親密性と相互性の周期的再保証（periodical reassurance）では完全には克服しきれぬものと言えるが、しかしこの最初の極めておぼろげな確証、つまり神聖なるものの存在という感覚は、人類の儀式形成にヌミノース的なるものという語でもっともよく表現される一つの普遍的要素を与える。このように命名してしまうと最初の儀式化から最後の儀式化への流れを追うという意図から外れてしまうことになるが、しかし我々はヌミノース的なものをあらゆる定期的儀典（periodical observance）に内在する経験的要素の不可欠の側面と考えている。そして組織化された宗教制度があらゆる制度の中で最も強くこのヌミノース的なものを担っていることは明白だろう。信ずるものは適切な身振りによって子どものように無垢な信頼と全き依存を告白し（confess his dependence and his childlike faith）、同時に適切な供物によって、（自分たちの顔をのぞきこむように）傾けた顔にかすかな微笑を浮かべて優しく応じてくれる神聖なる者の胸に抱き上げてもらう特権を求める。ヌミノース的なものはわれわれに分離性の超克（separateness transcended）と同時に個別性の認可（distinctiveness confirmed）をも保証し、それによって「我（われ）」という感覚の基盤そのものをも保証する。そしてこの「我」の感覚は、一つの全一包括的な「我あり」への共有の信仰で結びついた複数の「我」（Is）全員の相互的認知によって、さらに強められ新たにされる（と「我」は感じる）のである。」

（Erik・H・Erikson ”Toys and Reasons” W.W.Norton & Company, 1977,p89-90 ＝エリク・H・エリクソン（近藤邦夫訳）『玩具と理性』みすず書房、1981 年、p99-100。久保の方で、訳し直し、傍線を引き、原語を補った。）

また、次の西平直の文章を、**ヌミノース**と**儀式化**とを、ともに説明したものとして引用します。

「エリクソンにおける宗教性について論究したJ・ライトは、（略）幼児は、母親の存在に「神聖な存在としてあがめるべき意味合い(a sense of hallowed presence)」を感じ取り、それは「ヌミノースというべき性格(a quality of numinousness)」であると述べている。

ヌミノース体験、むろんそれはR・オットーによって名を与えられた宗教的・神秘的・超越的な意味をもつ体験のことであるけれども、エリクソンにおいてそれはなんら比喩や誇張なのではなく、まさしくその通り、幼児は母親という＜他者＞のうちに究極の他者を感じ、それはまさしくヌミノース体験だというのである。

母親なしには生きられない幼児にとって、その母親が視界から消えてしまうことは、文字通り自分の命にかかわる一大事、逆に、再びその視界に母の姿が現れるということは、それなしには自ら存在することができない絶対的他者と出会うという体験、しかも、仰向けに寝ている幼児にとって、それは自分の存在根拠を仰ぎ見る体験、まさしく、ヌミノース体験だというのである。

そのヌミノース感覚が日ごとに繰り返され、そのつど驚きを新たにしながら馴染み深くなり、つまりは儀式化されてゆくなかで、「またいなくなる」との不信感を「でもまた来てくれた」という信頼感によって乗り越えることを通して、人生最初の徳（virtue）である「希望」が形成され、また、その体験を社会的に拡大し制度化したところに「宗教」という社会制度が成り立つ。

（西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993 年、p162-3。傍線は久保）[1]

---

[1] 儀式化については、西平直『エリクソンの人間学』の p111-2 も参考になります。以下、引用します（傍線は久保）。

「世界観の側が個人のうちに食い込んでゆくことと、個人の側が世界観を受け入れてゆくことと、その両方向をエリクソンは、ともに「儀式化（ritualization）」として一息に視野のうちに収めようとする。言い換えれば、従来「社会化」「文化化」「価値体系の内面化」などという言葉で把握されていたプロセスを、エリクソンは、K・ローレンツから受け継いだ「儀式化」という言葉で写し取ろうとするのである。

ここに言うところの儀式化とは、しつけの仕方に始まり、挨拶の仕方や食事のマナー、日常生活のあらゆる習慣を含みながら、エリクソンの言葉を使って説明すれば、「日常的な相互交渉の子細なパターンの定型化」「型にはまった行為と即興的行為の混合」「時間的な押韻」（TR78-79）ということ、当然、教育という営みも、こうした儀式化の一形態、それも高度に意識的・意図的・計画的に為される一つの形態であるということになる。

この場合、肝心なのは、儀式化が相互交渉の一つであるという点、「その相互交渉において生じた葛藤するエネルギーを適応させてゆく機能」として理解されているという点である。つまり、衝動の溢れるにまかせるのでもなく、逆に衝動を強迫的に抑圧してしまうのでもなく、エネルギーを一つの型に適応させてゆく「創造的形式化」（TR82）のプロセ

西平が述べているように、ヌミノースという概念はエリクソンがルドルフ・オットーの『聖なるもの』（1936 年）から拝借した概念です。神聖な体験をしたときに感じる、大きな存在に包まれているような感覚を言い表した概念です。

エリクソンは、ヌミノースという世界観によって、母親的人物と子どもとの関係において成立する、包む - 包まれる関係を論じています。

しかし、ヌミノースという世界観によって、我が家で繰り広げられている響子と晃子との関係、すなわち子ども同士の関係において生じる、大きな存在にともに包まれる関係（体験）を論じることも可能ではないかと思っています。

実際に、先の『玩具と理性』からの引用文中、最後に傍線を引いた「一つの全一包括的な「我あり」への共有の信仰で結びついた複数の「我」全員の相互的認知」（the mutual recognition of all “I”s joined in a shared faith in one all-embracing “I Am.”）という箇所などは、複数の人間が一つの包括的な存在に包まれている様子を描いています。

そのとき、ヌミノース体験は、矢野智司が「溶解体験」と呼んだ体験と重なってくるように思います[2]。

少なくとも、我が家で響子と晃子が、一緒になってのぞき込んだり、歌ったり、ふざけ合ったりしているとき、そこには「小さなヌミノース」「小さな溶解」とでもいうべき事態が繰り広げられているのだと思います。この点もいずれ検討したいところです。

ス、それを儀式化という言葉で表現しようとする。

子どもを教育するという場面に即して言い換えれば、放任でもなく、抑圧でもなく、子どものうちから溢れるエネルギーを一つの型に適応させてゆく創造的形式化、それこそが「教育」という儀式化で考えられていたことなのである。」

以上の引用に示された「儀式化」というアイデアは、次の三つの理論（世界観）に接続しうるものだと思います。

一つ目。2018 年報告書に描かれた、子どもたちの姿。すなわち、自分たちのうちから「溢れるエネルギーを一つの型に適応させてゆく創造的形式化」の姿。

二つ目。ドゥルーズが『差異と反復』（1968 年）の中で、「第一の受動的綜合」と呼んだ「習慣」の理論。言い換えれば、微小表象を異化=分化してゆく統覚に関する理論（ジル・ドゥルーズ（財津理訳）『差異と反復（下）』河出文庫、2007 年、p123-125）。

三つ目。倉橋惣三が『フレーベル』の中で「野生でない自然がある。温室でない培養がある。放任でない自由がある。抑圧でない管理があり、強要でない期待がある。」と述べたときに描いていた世界観（『倉橋惣三選集　第一巻』フレーベル館、1965 年、p368）

[2] 矢野智司『意味が躍動する生とは何か』世織書房、2006 年。同『贈与と交換の教育学』東京大学出版会、2008 年。

ともあれ、ともに包まれる関係（体験）を射程に含めることで、ヌミノースの感覚の要素に「一体感」を含めることができます。『理性と玩具』からの引用文中では、ヌミノースの感覚を得ることで、一人一人がバラバラの存在であるという「分離性」を超えると同時に、一人一人がかけがえのない存在であるという「個別性」を確かめることができるという点が論じられていましたが、とくに前者（分離性を超えること）は、ヌミノースによってもたらされる「一体感」の内実をエリクソンなりに表現したものだと言えるでしょう。

いわば、**一体感に包まれながら、それと同時に、自分のかけがえのなさが確かめられること**。それがヌミノースの感覚なのです。

ヌミノース的な関係は、第一期の人間関係です。人間は、そこから第二期へと進んでいきます。

第一期において、母親的人物に包まれている状態にいた人間は、徐々に、寝返りをするようになり、ずりばいをし、ハイハイをし、あっという間につかまり立ちをして動き回るようになります。その頃から第二期が始まります。

第二期は「自己決定（自律性 autonomy）」の感覚が育ってくる時期です。自分のことは自分で決めたいという感覚が開花してきます。それに伴い、自己発揮が始まり、自己主張が始まります。ここでは、第一期的な一体感からの裂開も始まります。

エリクソンの理論の詳細は、私が『生活経済政策　2019 年 6 月号』に書いた「日常生活と民主主義と教育をつなぐ理論」とに譲ることとし（この文献も、エリクソンの人間観への導入として、いつか「対面講読」で読んでもいいかも知れません）[3]、ここでは以下のように、ごく図式的にエリクソン理論を整理しておきます。

第一期：ヌミノースの感覚を得る。自他未分の感覚を思う存分、味わう。第 11 便までいうところの「アクチュアリティ」の感覚を思う存分、味わう。その一方で、自分という存在のかけがえのなさも味わう。

第二期：自己決定、自己発揮、自己主張が盛んになる。それに伴い、取り合い、ケンカ、食い違い、すれ違いも起きる。

第三期：取り決めをつくる。取り合いをするよりも、順番をつくる。一緒に使うための取り決めをつくる。シェアをする。その役割をプレイする。すなわち、演じて、遊ぶ。

[3] 久保健太「日常生活と民主主義と教育をつなぐ理論」『生活経済政策　2019 年 6 月号』生活経済政策研究所、2019 年。

第三期は「集団の中での役割」がわかったり、作業全体の中での今の作業がわかったり、つまりは「時間的見通し」がもてたりするようになる時期です[4]。

この第三期は、第一期で味わった「ヌミノース」が、第二期の「裂開」を経て、あらためて回復される時期だと考えることもできます。

エリクソン自身がそのような人間観を示した箇所として、次の箇所は重要であると思います。

「儀式生活において大きな役割を演ずる「老人の理性」に関しては一言触れておかねばなるまい。儀式化に関してそれが担う使命を私は人生のサイクルの意味（the meaning of the cycle of life）を確証する統合的（integral）なるものと考えたい。ブレイクを読んでいるときに私は、老人の理性には遊戯的な子どもっぽさ（playful childlikeness）が（再び）賦与されているという彼の指摘に出会った。儀式的な知恵の化身（personification of ritual wisdom）という伝統的な老人の役割もこの解釈を支持していると言えよう。しかし、現代的な生活様式の中に生きたり、もしくは、そこで多くの老人（ごく少数の強靭な例外的な人物ではない）を見たりしながら老年期に達すると、一つの疑問が、心のうちに湧いてくるかもしれない。その疑問というのは、ブレイクは、老人の理性は（そして、玩具も）、子供じみたものであるということだけ（a bit childish）を言おうとしたのではないという疑問である。不可避的なあらゆる絶望と嫌悪をともなう老衰を前にした時期に関して、私はシンプルな統合という徳（the strength of a simple integrity）を仮定したが、それはまさに子どもにも見られる徳であり、それ故に老人と子どもは相互に親縁性を感じるのである。しかし、いうまでもなく老年期にもこの時期独特の儀式主義が存在する。賢さ（賢明 wise）を装おうとする愚かな試みである。「賢明ぶること」つまり賢明至上主義（sapientism）とでも言えようか？」

（Erik・H・Erikson "Toys and Reasons" p112 ＝ エリク・H・エリクソン（近藤邦夫訳）『玩具と理性』p127-8。久保の方で、訳し直し、原語を補った。傍線は久保）

引用は以上です。エリクソンは、この箇所で、第三期の遊びにみられる徳（強さ）を「**シンプルな統合**」と呼んでいます。しかも、シンプルな統合を通じて、第三期の遊びと、第八期の賢さとは近しさを感じ合うとも述べています。

多くの議論を誘発しそうな考察ですが、ここでは第一期的なヌミノースが、第三期においてはシンプルな統合として回復されるのではないかという仮説を取り出すだけにしておきましょう。

さて、エリクソンの理論から、響子（1 歳）の状態は、第一期のヌミノース状態にいた響子が、第二期へと歩みを進めたために裂開した状態だと理論化できるでしょう。

[4] Erikson, E. H. "*Insight and Responsibility*" W. W. Norton & Company, 1964, p.120-121

それに伴い、先に第二期へと進んでいた晃子（3 歳）との間で「取り合い、ケンカ、食い違い、すれ違い」が起き始めたのです。

3．自己発揮と同時に共振を

私は、自分の娘には、民主主義の担い手へと育ってほしいと思っています。

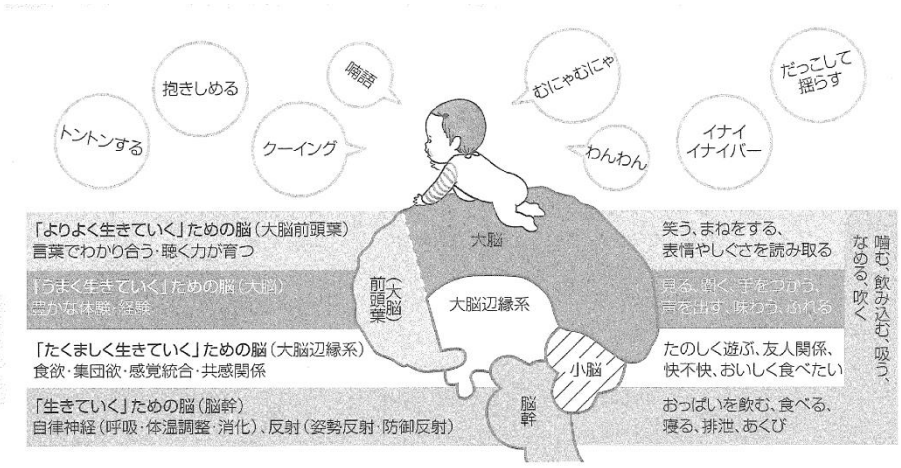
それは「取り決めとしての人権」「取り決めとしての相互尊重」をできる人間へと育ってほしいということです。

そのためにも、まずは第二期をしっかりと味わってほしいと思っています。言い換えれば、しっかりと裂開してほしい、しっかりと自己発揮をしてほしいと思っています。

第二期に、人はそれぞれ固有だということをしっかり味わっておく。人はそれぞれ固有で、人にはそれぞれ事情があるということを味わっておく。他者性・複数性をもつということを味わっておく。

頭ではなく、体で分かっておく。脳ではなく、「内臓感覚」（三木成夫）で分かっておく[5]。『乳児保育の基本』の p53 の図でいえば「大脳前頭葉（第四層）」ではなく、「大脳辺縁系（第二層）」で味わっておく[6]。

そういうことをたっぷりさせてやりたいと思っています。それは、第三期に「取り決めとしての人権」を「頭」「脳」に入れる際に（リアリティとして確認する際に）裏支えになるように思うのです。



しかし、その一方で、第一期の肯定的感覚である「信頼 trust」をヌミノース込みで（言い換えれば、一体感、共振、響き合い込みで）しっかり味わってほしいと思っています。

また、第二期の対抗的感覚である「周囲の期待に応えたい気持ち」をしっかりと育てておいてやりたいと思います[7]。

---

[5] 三木成夫『内臓とこころ』河出文庫、2013 年

[6] 汐見稔幸ら責任編集『乳児保育の基本』フレーベル館、2007 年

[7] エリクソンを熱心に読まれている方の中には、「第二期の対抗的感覚である「周囲の期待に応えたい気持ち」」という記述に違和感を覚えた方もいらっしゃると思います。ここでは「第二期の否定的感覚である恥・疑惑の感覚」を、上のように書き換えています。

そうして生まれる「自分で決めたい気持ちと、周囲と一体になりたい気持ちとのせめぎ合い」や「自分で決めたい気持ちと、周囲の期待に応えたい気持ちとのせめぎ合い」を第二期に十分味わうところから、「取り決めとしての順番」「取り決めとしての人権」「取り決めとしての民主主義」が第三期に生まれるように思うのです。

先日は、飲み終わったペットボトルを晃子と響子で取り合っていました。どちらも譲りません。ペットボトルを引っ張り合います。私は「まーた、やってる」と思って、見てました。

晃子（3 歳）がキャップ部分を握り、響子（1 歳）がボトル部分を握り、ひっぱり合っています。その最中、晃子の手が滑り、ペットボトルが晃子の手から放れました。「大きなかぶ」が抜けたようなかたちになって、響子は勢いよくしりもちをつきます。

その姿がおかしかったのか、晃子と響子は二人で顔を合わせて、大笑いしています。これで取り合いはおしまいです。

響子は第二期を思う存分生きています。急いで第三期へ進む必要もありません。いまの響子には、取り決めをつくることよりも、自己主張することの方が大事です。だから私は、こうした取り合いの姿に充たされています。

とはいえ、取り合いだけでは、取り決めは生まれてきません。その点をもう少し考えてみます。

『アイデンティティとライフサイクル』（1959,80 年）の中でエリクソンは「否定的な感覚というのは肯定的な感覚のダイナミックな対概念であり、人生全体を通してそうあり続ける。」と述べています。私が「否定的感覚」を「対抗的感覚」と呼び変えた理由は、ここにあります。ここには否定的感覚によって、ダイナミズムがもたらされるという人間観が示されています（西平直ら訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房、2011 年、p237）。

さらに私は「恥・疑惑の感覚」を「周囲の期待に応えたい気持ち」と言い換えました。「期待」が第二期のキーワードであるという私の考えは、エリクソンが期待 expect という語を用いて「周囲に期待できること（expectable）と、自分に期待されていること（expect）に関する知識を組み込むようになる」と述べている箇所などにもとづいています（Erikson, E. H. “*Insight and Responsibility*” p.119）。

以上、否定的感覚を対抗的感覚と言い換え、「恥・疑惑の感覚」を「期待に応えたい気持ち」と言い換えることで、第二期には、自分で決めたい気持ちの対抗的感覚として、周囲の期待に応えたい気持ちが開花するという記述に至ったわけです。

別のとき、晃子と響子がおもちゃのマラカスを取り合っていました。このときは、お互い意地があるようで、なかなか譲りません。なので私は、二人に声をかけて、どちらが先にもっていたのか聞きました。晃子が先にもっていたということなので、響子に「お父さんのひざで、一緒に見てよう」と声をかけ、響子を膝にのせて、晃子が遊ぶようすを見ていました。

晃子は、ようやく手に入れたマラカスを堪能するわけですが、面白いことに、先ほどまで取り合いをしていた響子に向かって「みてて！すごいでしょ！」と呼びかけます。もちろん、響子を乗せたお父さん（私）への呼びかけが第一なのかも知れない。しかし、晃子の目と声は響子にも向かっています。さらに、面白いことには、晃子の呼びかけとパフォーマンス（堪能している姿）に対して、響子が前のめりで応じています。

そんな響子に対して、晃子は「きょうこもやってごらん」とばかりに、マラカスを押しつけます。そうして、二人は、私の膝の上で入れ替わって、今度は響子がマラカスを振りながら、「プリプリプーのプー」の歌を歌っています。

その響子の姿に、晃子は一緒になって歌いながら、笑い合っています。

もちろん、そんな理想的な状況がいつも繰り広げられるわけではありません。しかし、取り合いが起きて、晃子が先に使うことが決まったとき、私が響子に「待っていようね」という言葉ではなく、「一緒に見てよう」という言葉をかけた点は、手前味噌ですが、重要だったように思うのです。

「待ってようね」という言葉では、晃子と響子の裂開は埋まりません。もちろん、二人の裂開を埋める必要などないのかも知れませんが、すでに「マラカスを持つもの／持たざるもの」として裂開してしまったのであれば、その一方で、ヌミノースを味わうことも大事だと思うのです。

じっさい、「一緒に見てよう」という言葉は、ヌミノースを取り戻す言葉だったのではないでしょうか。その証拠に、晃子と響子は「すごいでしょ！」に「すごいね！」と応じ合ううちに、ヌミノース（一体感、響き合い）を取り戻していったように見えました。

この点に関して、もう三つだけ、記しておきます。

一点目。

私は、青山誠さんと書いた『明日からの保育チームづくり』という本の中で、「共振欲求」と「自己発揮欲求」とのせめぎ合いについて書きました[8]。これは「ヌミノースを味

[8] 青山誠・久保健太『対話でほぐす　対話でつくる　明日からの保育チームづくり』フレーベル館、2020 年、p78。

わいたい」という第一期の欲求と、「自分を発揮したい」という第二期の欲求とに当てはまります。

人間が生きていると「自己発揮」によって「共振」が打ち破られることが多々あります。そのとき、「共振」に戻ろうとする力学が働くわけですが、そこでの揺り戻しには①第一期的な「一体感（ヌミノース）」に終わる場合と、②第三期的な「取り決め」に終わる場合と、③「一体感」と「取り決め」の合わせ技に終わる場合の三通りがあるように思います。

とくに第三期の「取り決め」については、エリクソンによる「目的（時間的見通し）の共有」という言葉に戻って考えてもいいですし、第 11 便でも紹介した「人間は相互依存しながらも自己決定することができる。それは「類似した目標もしくは相補的な目標を持つ」ことによって可能だ」というバーバラ・ロゴフの洞察（ポリネシア文化からの洞察）を手がかりにしながら考えてもいいように思います。

二点目。

響子が私の膝の上で、晃子の堪能を見ていたとき、「待つのが偉い」「譲るのが偉い」と考えるよりも、「自然に任せておけば、いつか譲るし、譲られるまで待つだろう」と考えていた点が、これも手前味噌ながら、重要であるように思います。

このときの「自然に任せておけば」というのは「ヌミノースが再び湧いてくるのを待っていれば」とも言い換えることができますし、「ピュシスに任せておけば」と言い換えることもできます。

第 11 便の**【追伸】10 月 5 日（月）**において、ピュシスについて触れましたが、ピュシスの世界観は、今後のキーになると思われます。その点については、「４.」で後述します。

三点目。

晃子と響子がマラカスを使う役を交替する姿は、2018 年報告書に登場するみーちゃんとゆいちゃんの姿と重なります。

その姿は、それまでの役割を分解し、新しい役割を合成する姿とも言えます。この分解と合成を、ピアジェの調節と同化、およびベイトソンの学習のレベルの議論、さらにはエンゲストロームの活動の三角形の議論から説明することも可能だと思っています。

これらの点は、引き続き、研究したいところです。

４．次年度への見通し

書き終えてみると、この文章は「ヌミノース」と「第二期」という人間観・世界観をメンバーのみなさんと共有するための文章になりました。

冒頭に「1 歳児」と「民主主義」というキーワードを挙げましたが、「1 歳児」というキーワードは「第二期」と呼び変えた方がいいかも知れません。

そうすれば、岩崎さんが学童保育の現場で目にしている「第二期」的な状況や、大人たちが繰り広げている「第二期」的な状況を、議論の射程に加えることができるからです。

今後、柄谷行人の「交換様式 D」の議論をテーマに組み込みますが、「交換様式 A」は「ヌミノース」と重なるように思います。また、「交換様式 B」や「交換様式 C」は裂開した個人を単位としているように思います。

エリクソンの人間観・世界観から、柄谷行人の議論に切り込むことが今後の目標の一つになりそうです。

これまでの議論との整理をつけるために、下のようなワードマップを示して終わりにします。このワードマップを叩き台として、今後の検証を続けるつもりです。

Ⓐ　11 便までに登場したのは、**「アクチュアリティ／リアリティ」の世界観**

そこには「起きたこと／起こしたこと」、「場所としての主体／行為する主体」、「ゾーエー／ビオス」という世界観、主体観、生命観が含まれています。

Ⓑ　11 便の【追伸】では、「Ⓐ」を発展的に解消させた**「ピュシス／ロゴス」の世界観**が登場しました。

そこにはⒶの世界観に、「カオス／コスモス」「過剰／適切」の世界観が付け加わります。すなわち「過剰なカオス／適切なカオス・適切なコスモス／過剰なコスモス」、および「過剰な贈与」の世界観、社会観が付け加わります。

Ⓒ　今後、登場するのは、「Ⓑ」に交換様式の議論をつけ加えた**「交換様式 D」の世界観**

「ピュシス／ロゴス」の世界観から社会体制を整理すると、そこに「交換様式 D」への展望が発生します。

また「交換様式 D」の議論では「原遊動性 U」という人間観を通じて、「切断／接続」という人間観、言い換えると「解除による心地よさ」（第 1 便、第 11 便）というテーマが再登場します。

「過剰な贈与」の議論は、ⒷよりもⒸの議論かもしれません。

以上、「交換様式 D」については今後、検討しますが、「1 歳児（第二期）」と「民主主義」については趣旨説明と仮説提示ができたと思います。

第二期的な状況から、「ヌミノース」や「取り決め」をつくる人間の姿を、さまざまな角度から記述したいと思います。そのような記述は、哲学の仕事だと思っています。

次年度に向けたメモ（第 12 便で書いたことの概要を別の角度から）

2019，20 年度の研究は「居心地」「アクチュアリティ／リアリティ」をキーワードに進んできました。2021，2022 年の研究は「ピュシス／ロゴス」「交換様式」をキーワードに、これまでの研究を発展させます。

2020 年 9 月 17 日に開催された私保連研究機構の会議で、横浜国立大学の伊集守直さんからコメントをいただきつつ、下の見取り図をつくりました。

第一期初期：ヌミノース（オットー『聖なるもの』）：アクチュアリティ
第二期：自己発揮、自己決定
第三期：約束、取り決め、フィクション（イメージの共有）：リアリティ：相互に、自己発揮をするために、フィクションや取り決めが必要になる。

そして、第一期のアクチュアリティを過大評価せず、第一期と同程度に第二期を評価しなくてはいけないことに思い当たりました。

この人間観に沿って、第二期の子どもたちを、あらためて見てみると「自己発揮」と「共振（ヌミノース）」を味わう姿を数多く見せてくれました。
そして、自己発揮と共振を味わいつつ、第三期的な「取り決め」を徐々につくり始める姿を目にすることもあります。
私たちの研究は哲学研究ですので、このような人間の姿を記述していきたいと思っています（実験するよりも）。
その際「ヌミノース」という概念を「ピュシス」という初期ギリシア（ソクラテス以前）の世界観や「原遊動性 U」（柄谷行人、大澤真幸）と重ねつつ、深めます。
また、ピュシスの教育学（保育学）とでもいうべきものを記述することになります。それは山竹伸二さん、川田学さんの研究ともかかわりうるものになるでしょう。

2020 年 10 月 22 日に開催された私保連研究機構の会議では「アクチュアリティ／リアリティ」という世界観・人間観から議論が展開し、「ビオス／ゾーエー」という生命観が話題になりました。
日本の全体主義においては、ゾーエーへの貢献を、ビオスに強制した苦い経験があります。一方で、ビオスの健康を保つためには、ゾーエーとの接続（かかわり）を保証しなければいけないという「自然享受権」のような発想もあります。

前者はトータリズム的なゾーエーへの接続であり、後者はホールネス的なゾーエーへの接続であると呼び分けて、両者の違いを検討したいと思っています。

また、音楽において、技術的にはうまくなくても、感情を揺さぶる演奏があります。逆に、技術的にはうまいのに、感情を揺さぶらない演奏もあります。

ここでは、感情や情熱が伝わってくる演奏を「アクチュアリティ」「ゾーエー」の側に置き、技術的に優れた演奏を「リアリティ」「ゾーエー」の側に置くことにします。もちろん、両者は矛盾（対立）するものではなく、一流と言われる演奏は、その両者を兼ね備えたものです。つまり、技術的なうまさと、感情の揺さぶりを兼ね備えた演奏が一流の演奏として、あり得ます。

ここで考えたいのは、情熱がまず先にあって、その情熱を表現するために、技術を身につけることが大いにあるという点です。このようにして技術や知識を身につけるような学びを「ピュシスの教育学」として論じることになるのだと思います。

第 13 便

対面的な講読（10 月 26 日開催）の報告
と
2018 年から 2020 年までの研究の整理

久保健太
2020 年 11 月 5 日

１．

10 月 28 日に「対面講読」を行いました。11 時から 15 時まで、4 時間。関東学院大学で行いました。

そこでは、「第 11 便　岩崎さんのエピソードと久保のコメント」を読みました。さらには「第 12 便　1 歳児と民主主義とをつなぐ」を読んで、次年度に向けた計画を立てはじめました。

さらには、溝口義朗さんが書いた「園だより」を読みました。これは溝口さんの方でさらに加筆して、11 月 16 日の「対面講読」で読むことにします。

いま 10 月も終わろうとしています。5 月から始めた往復書簡も、さまざまに展開しました。思いもよらぬ方向に進んでいきました。

しかし、年度末に向けて、整理しなくてはいけません。

2020 年の居心地研究を整理する際には、木村敏の理論と、エリクソンの理論とが、整理の軸になってくれます。

実は、木村敏の理論とエリクソンの理論は、2018 年報告書と、2020 年の居心地研究をつないでくれる理論でもあります。

その点を示すためにも、まずは、まずは、2018 年報告書から振り返っておきます。

２．2018 年報告書

2018 年報告書の主題は「交替と参加」でした。「みてての渦」の子どもたちは「交替」をすることで、互いの「参加」を呼び込んでいました。

そうした子どもたちの姿を素材に、そこで起きている「交替と参加」を主題的に論じました。

まずは「**A. 交替とは何か？**」がテーマでした。

そこでは、「みてての渦」というエピソードを描いた和光保育園の鈴木秀弘さんによる考察、すなわち、まるで一つの生命現象のように、「みてての渦」の場面が展開していったという考察から着想を得て、福岡伸一の「分解と合成」という生命観を手がかりに、「みてての渦」の場面を検討していきました。

その検討において、「交替」においては、「役割の分解」によって「役割の合成」が呼び込まれることを示しました。

考察は「**B. 分解とは何か？合成とは何か？**」というテーマに移りました。そこでは、西田幾多郎の「時間／空間」論に準拠しつつ、

合成：「多から一へ」という時間の形式が強く働くなかで、個物ごとの空間を定めるという空間の形式が働くこと。

分解：「多から一へ」という時間の形式があまり働かないなかで、個物ごとの空間を定めるという空間の形式が働くこと

と、分解と合成を定義しました（2018 年報告書 p44）。

とはいえ、この定義は「時間の形式が強く働くことと、あまり働かないことの違いは何か？」という問いを引き起こします。2018 年報告書から、そのような問いを記した箇所を引用します。

> *定義して、早々に申し訳ないのだが、この定義は、非常にあいまいである。どこがあいまいかというと、合成においては、時間の方向が「強く働き」、分解においては、時間の方向が「あまり働かない」という箇所があいまいである。時間の方向が「強く働く」とはどういうことか？逆に「あまり働かない」とはどういうことか？その点が、非常にあいまいである。*
>
> *結論的に言ってしまえば、このあいまいさが一掃されることはない。個物が全体的一から、いくら逃れようとしても、完全に逃れることはできず、「個物的多から全体的一へ」の方向は、何らかの形で残り続けるからである。言い換えれば、「個から一へ」という時間の形式は、何らかの形で、個物に働き続けるのである。*
>
> *つまり、時間の形式が、どれくらい働くかは、程度の問題なのである。まったく働かないという状態がない以上、その働きは「どれくらい働いているか」という程度ではかるしかない。*
>
> *とはいえ、程度をはかる際の指標はあるはずである。みてての渦の場面で言えば、イラスト A（左）の状態と、イラスト B（右）の状態は何かが違うはずである。*

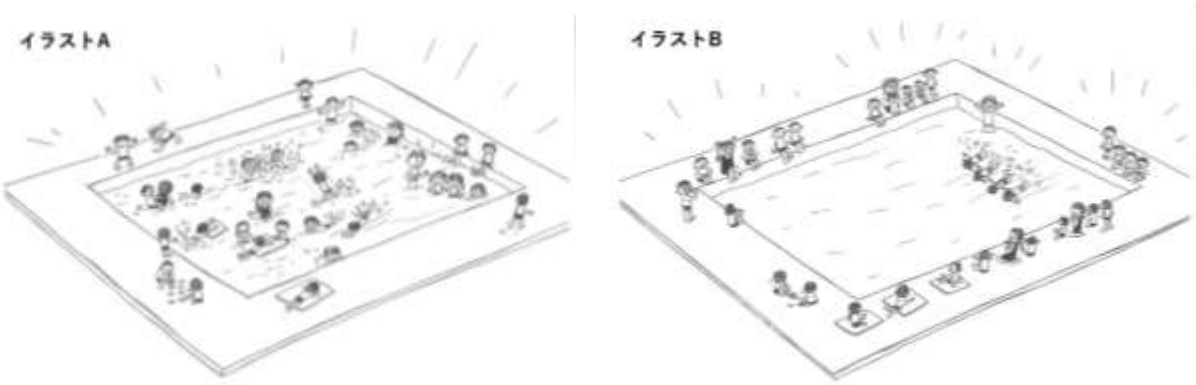


イラスト A には時間を共有している感じがない。プールという空間を共有しているが、一つの活動（全体的一）を共有しているようには見えない。いわば、同じテーブルについてはいるものの、バラバラのことをしている感じである。
それに対して、イラスト B では、空間を共有しているだけでなく、一つの活動（全体的一）を共有しているように見える。同じ活動の中で、同じ時間を過ごしているように見える。いわば、同じテーブルについて、一つのことをしている感じである。
つまり、イラスト B の方が、全体的一への方向が強く働いているということが、言い換えれば、時間の形式が強く働いているということが、直観的にわかる。
それでは、イラスト B に働いていて、イラスト A に働いていないものは何なのか？それこそが、時間の形式の働きの程度をはかる際の指標であろう。次節では、その指標を突き止めたい。その指標がわかることで、合成と分解の違いがわかり、ひいては交替の正体に近づけるからである。（2018 年報告書 p44-5）

同じ空間を共有しているだけでなく、同じ時間を共有しているように見えるとき、そこに居合わせた人々は何を共有しているのでしょうか？このような問題意識から「**C. 時間を共有するとはどういうことか？**」を考察しました。

2018 年報告書では、主に木村敏による「三つの次元」の世界観を検討し、「時間の共有」の三つのパターンを、以下のように整理しました（2018 年報告書 p49）。

表１：「時間の共有」の三つのパターン

	第二の次元（出来事）	**第三の次元（記録）**
①第二の次元と、第三の次元を、どちらも共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有している。すなわち、その場にいた。	かつ、その出来事について書かれた記録も読んでいる。
②第二の次元のみ、共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有している。すなわち、そ	しかし、その出来事について書かれた記録は読んでい

	の場にいた。	ない。
③第三の次元のみ、共有している。	出来事が生まれ出た瞬間を共有していない。すなわち、その場にいなかった。	しかし、その出来事について書かれた記録は読んでいる。

とはいえ、イラスト A の子どもたちも、イラスト B の子どもたちも、どちらも「第二の次元」を、その場で、共有しています。なので、この 3 パターンだけでは、「C.時間を共有するとはどういうことか？」という問いへの答えにはなりません。そこで検討を重ね、「時間の共有」の三つのレベルを整理しました（2018 年報告書 p51）。

表２．:「時間の共有」の三つのレベル

	死への傾斜	生への意志
Ⓐ	「死への傾斜」の共有もない	
Ⓑ	「死への傾斜」の共有はある	しかし、「生への意志」は共有されていない
Ⓒ	「死への傾斜」の共有がある	しかも「生への意志」も共有されている

「死への傾斜」「生への意志」については、下の文章を、2018 年報告書から引用しておきます。

> *死への傾斜とは「みてての渦」の場面で言えば、声が消えていくこと、波が消えていくことである。一つ一つの声や、波が消えていく。そのとき、意識には、今あるものも、そのうち消え去るという「死への傾斜」が忍び込む。その死への傾斜に逆らうように、この楽しい時間を続けたいという「生への意志」が生まれてくる。健太さんが書いた「この楽しさをもっと長く味わいたい！終わりたくない！という気持ち」は、ここで木村が「生への意志」と呼んでいるものにあたる。（2018 年報告書 p51）*

このように、「時間の共有」を三つのレベルから整理した上で、イラスト A とイラスト B の違いを考えました。そして、イラスト A では、プール全体で「死への傾斜」「生への意志」が共有されてはいなかったが、イラスト B ではプール全体で「死への傾斜」「生への意志」が共有されていた――その点にイラスト A とイラスト B の違いがあることを示しました。以上が、2018 年報告書の内容です。

しかし、私自身、この結論に十分満足できたわけではありません。特に、死への傾斜から生への意志が生じてくるプロセスの検討は残された課題でした。ですので、『発達 159 号（2019 年 6 月号)』に掲載された「自然の中で過ごすと、どうして人は仲良くなれるのか」（以下、2019 年論文）で、その課題を検討しました。

３．2019 年論文

私は、2019 年論文の中で、下の表を用いて、死への傾斜から生への意志が生じるプロセスを示しました。

表３．：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス

	西田、木村	大田	エリクソン
①	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	
②	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）
③		不思議だね	応答（第一期）
③a			善い意志の交わし合い（第二期）
④	生への意志（の共有）	たくらみの共有	目的（第三期）

2018 年報告書でも援用した西田、木村の理論を左列に記しました。この西田、木村の理論をさらに検討するために、大田堯の理論を参照しました。その箇所を、下に引用します。

大田堯の思想は「死への傾斜」から「生への意志」がどのように生じてくるのかを説明しようとしたものとして再評価されてもよい。とくに大田が「たくらみ」（の共有）という言葉でとらえようとした人間の姿は「死」から「生」が生じる姿だと言える。
大田は次のように述べている。

「自然は、実に多様な出来事を子どもの前にくり広げてくれます。風が吹くことさえ、蝶が飛ぶことさえ、花が咲くことさえも、これはどうしてかという疑問を起こしたり、不思議だなと思ったり、いろいろな要素を含んだセンス・オブ・ワンダーを、子どもは初期において経験するんです。」（大田 1992：21。傍線、久保）。

大田はここで「死への傾斜」が表徴される世界を、シンプルに「くり広げ」られる世界と呼んでいる。くり広げられる世界とは、まずは死への傾斜の世界である。すなわち、音が消えていく、波が消えていく。そのような世界である。その世界が目の前でくり広げられる。しかし、くり広げられる世界は生への意志の世界でもある。そこでは、自分以外の存在が生への意志を見せる。音が湧き、波が立つ。風が吹き、カニが現われ、歓声が上が

る。そうした死と生がくり広げられる[1]。その死生の世界に触発されて、子どもたちの中に「不思議だな」という驚きが生じる。すなわち、くり広げられる世界において、人間のセンス・オブ・ワンダーが触発されるのである。

こうした大田の思想に、西田、木村の思想をそのまま重ねたくなる。すなわち、くり広げられる世界に、死への傾斜（あわせて、自分以外の存在が見せる生への意志）を重ね、センス・オブ・ワンダーの触発に、生への意志の芽生えを重ねたくなる。

しかし、理路はそう単純ではない。センス・オブ・ワンダーの触発には続きがある。

「自然というものは、センス・オブ・ワンダーを子どもから引き出すと同時に、自然そのものがいろいろな興味をひき起こしてくれます。つまり、教えたがらないところに、自然のよさがあります。

ただ、非常にだいじなことは、自然の中へ子どもをおいておけばセンス・オブ・ワンダーができるというものではなく、「不思議だな」と思った時に、「ああ、不思議だねえ、調べてみよう」といってくれる相棒が必要だということです。つまり、人間関係の中でセンスが確認されることが必要です。悪童どもとたくらみをして、そのたくらみを成功させるために自然の中をかけめぐり、自然を知り、事物を知る中で、不思議さを感じたり、新たな発見をしたりする（略）」（大田 1992：21-22。傍線、久保）

ここで大田は、自然がくり広げてくれる姿から、たくらみが共有されるまでのプロセスを、4 つの段階で述べている。そのプロセスを、あえて丁寧に取り出すと、①自然はくり広げる、②センス・オブ・ワンダーが触発され、不思議だな、と感じる、③不思議だね、と応じてくれる相棒たちがいる。④その相棒たちとたくらみを共有する、というプロセスである。

以上が、2019 年論文からの引用です。以上の検討が、表 3 の真ん中の列の内容です。2019 年論文では、さらにエリクソンの理論を検討しました。その箇所も引用します。

大田は「不思議だな」に対して「不思議だね」が応じ、そこから「たくらみの共有」が

---

[1] くり広げられる世界を、「エントロピーの増大」という点からだけではなく「オートポイエーシス」「動的平衡」という点から説明すれば、死への傾斜だけではなく、生への意志をも、くり広げられる世界の中身に含めることができる。福岡は、分解と合成という用語で「動的平衡」を説明しようとするが（池田・福岡 2017）、分解と合成は、死への傾斜と生への意志に、それぞれ対応するように見える。その詳細な検討は今後の課題であるが、西田、木村と福岡の共通点として、両者ともが死（分解）を生（合成）に先立つものとしていることは現時点で指摘しうる。

生じるというプロセスを示したが、事情はもう少し複雑である。その複雑さを整理する手がかりがエリクソンの思想にある[2]。

以下、「不思議だな」「不思議だね」「たくらみの共有」に対応する言葉を、エリクソンの用語から拾っていく（表 3 を見ながら、読んでほしい）。

まず、センス・オブ・ワンダーが触発されることによる「不思議だな」は、エリクソンが「身体的・情動的欲求」（Erikson1964:117）や「暗い衝動 dark urges」（op.cit:118）と呼んだものに対応する[3]。そして、「不思議だな」に対する「不思議だね」は、エリクソンが「応答」と呼ぶものにあたる（op.cit:116。久保 2019a：13）。

大田の筋書きに従えば、この「応答」がなされれば、「たくらみの共有」が生まれるということになる。しかし、応答から、たくらみの共有が生まれるためには、「（磯でカニを捕まえるときに生じる）あっちのカニか、こっちのカニか」の食い違いに何らかの決着がつけられる必要がある。そこで必要になるのが、エリクソンが「善い意志の交わし合い exchange good will」と呼ぶものである。エリクソンは「善い意志を他者と交わすこと good will of others は、意志を互いに抑制し合うことを土台にしている（略）、子どもは善い意志を交わし合うことを学ぶようになる」（Erikson1964：119）と述べる。「あっちのカニをつかまえたい」「こっちのカニをつかまえたい」という意志を抱きながら、その意志を抑制しつつ、伝え合う。そうして、お互いの意志を交わし合った結果、たくらみの共有に至る。このたくらみの共有は、エリクソンが「目的」（の共有）と呼ぶものと重なる（op.cit:120-122）。

エリクソンの理論によれば「身体的・情動的欲求」「暗い衝動」「応答」は第一期に、「善い意志の交わし合い」は第二期に、「目的の共有」は第三期に、それぞれ体験され、培われるものである[4]。

先ほど、自然の中で過ごすと人間が仲良くなる第二の理由は「動いている環境に、身を置いている人間が、ともに驚きあう人間どうしだからだ」と述べた。エリクソンの理論を導入することで整理されるのは、「不思議だな」と驚く姿や「不思議だね」と応じる姿には、第一期で身体的・情動的欲求に応答された経験が注ぎ込まれており、たくらみを共有する姿には、第二期で善い意志を交わし合ったり、第三期で目的を共有したりした経験が

---

[2] エリクソンの思想については、西平直『エリクソンの人間学』がいまだに多くの学びを与えてくれる（西平 1993）。私自身もエリクソンの思想について、最近、書いたものがある（久保 2019a）。

[3] この対応については慎重な検討が必要であることは承知している。エリクソンが「暗い衝動」と呼んだものは、「なんかいい」とか「なんかやだ」といったような自分でも正体がつかみきれない衝動を意味するものだと、私は解釈している。この解釈の妥当性についても検証が必要である。

[4] 第一期、第二期、第三期の区分については久保 2019a を参照。

注ぎ込まれているということである（2 歳の娘が「目的」（の共有）を本格的に味わうのは、この先だと思うが)。

以上が、2019 年論文からの引用です。以上の検討が、表 3 の右列の内容です。

2019 年論文では、西田、木村、大田、エリクソンの理論を検討しながら、死への傾斜から、生への意志が生じてくるプロセスを表 3 のように整理したのです。

４．2020 年の居心地研究

さて、2020 年の居心地研究においても、2018 年報告書を講読しました。とくに、木村敏による「三つの次元」の世界観を読み合いました。その旨は、第 10 便に記してあります。

そして、第 11 便で岩崎さんが「第二の次元（アクチュアリティの次元)」は「気持ちで受け止めること」、「第三の次元（リアリティの次元)」は「言葉で受け止めること」だと、自身の言葉で整理してくれました。

木村敏の理論は、2020 年の研究においても、非常に重要な土台になっています。

その一方で、エリクソンの理論も重要な位置を占め始めています。

たとえば、私は、第 11 便で、居心地の良さの三つのタイプを次のように整理しました。

第 11 便：居心地の良さの三つのタイプ

1．意識が解除され、状況に包み込まれ、身を委ねている（そこにみんなが溶けていく)。その心地よさ。
2．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。その心地よさ。
3．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。その心地よさ。

このタイプ分けは、エリクソンの理論を念頭において、第 1 便で挙げた五つの要素を整理し直したものです[5]。エリクソンの理論については、第 12 便で下のように図式化しました。

[5] 第一便では「居心地の良さの要素」として、①自分の過ごしたいように、過ごせること、②距離感を調節できるので、互いへの配慮意識を調節できる。配慮意識をある程度、解除できること、③それぞれが、それぞれの仕方で、自分の感じている「居心地」を表現できること、④多種多様な存在や表現が、「一つの世界（一つの居心地)」に包まれながら、包括的に、同時存在していること、以上の四つを挙げました。さらには、「居心地の良い空間」の要素として、⑤羽を伸ばしていると、いずれ、周囲との矛盾（衝突）が起り、配慮意識が必要になる空間を挙げました。

第 12 便：エリクソン理論の図式的記述

第一期：ヌミノースの感覚を得る。自他未分の感覚を思う存分、味わう。第 11 便までいうところの「アクチュアリティ」の感覚を思う存分、味わう。その一方で、自分という存在のかけがえのなさも味わう。
第二期：自己決定、自己発揮、自己主張が盛んになる。それに伴い、取り合い、ケンカ、食い違い、すれ違いも起きる。
第三期：取り決めをつくる。取り合いをするよりも、順番をつくる。一緒に使うための取り決めをつくる。シェアをする。その役割をプレイする。すなわち、演じて、遊ぶ。

こうして並べてみると、タイプ 1 が第一期に、タイプ 2 が第二期に、タイプ 3 が第三期に、それぞれ対応していることがわかります。

さて、これらの内容を注ぎ足しながら、表 3 に加筆して、表 4 をつくってみます。
表が横に長くなってしまうので、ここからはしばらく、ページを横に使って、文章を記します。

以下が表4です。表4では、一番左の列の番号の振り方も、エリクソンの発達段階に合わせた番号を振り直しています。つまり、第一期のものは①、第二期のものは②、第三期のものは③というふうに振り直しています。

表4.：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス　と　居心地の良さ

新	旧	西田、木村	大田	エリクソンを踏まえた大田	エリクソン（第12便）	居心地の良さ（第11便）
①a	①	死への傾斜（もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。
①b	②	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）	
①c	③		不思議だね		応答（第一期）	
②a				不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。
②b				探りたいことが違う	食い違い（第二期）	
②c	③a			探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）	
③	④	生への意志（の共有）	たくらみの共有	たくらみの共有	目的の共有（第三期） 順番、役割など取り決めをつくる（第三期） シンプルな統合	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。

さらに、ここに第 10 便や第 11 便で示した「第二の次元（アクチュアリティ）」と「第三の次元（リアリティ）」とを加えれば、2020 年度の居心地研究がさらに整理されると思います。「第二の次元」とは「いま、この瞬間に味わっている、充実」の次元、「生きている」という次元です。「第三の次元」とは「後になって、思い出せることができる充実」の次元、「知って、確かめる」という次元です。第二の次元は、出来事の中に身を置くこととかかわり、第三の次元は、出来事を客観視し、公共的に確認することとかかわっています（第 11 便参照）。

ここでは、出来事の客観視や俯瞰について、エリクソンが論究している箇所を引用します。エリクソンは第三期の「目的（の共有）」について、次のように言っています。

> *内的世界と外的世界を結びつけ、記憶にある過去と予期される未来とを結びつけられるようになり、そののち、協働作業に用いる道具を習得したり、コミュニティの中で割り振られた役割を習得したり、ある技術において目指されている目的（求められている目的）を習得することができるようになる、（IR　121）*

エリクソンはここで、第三期の人間について、現在に没入するだけではなく、過去と現在を見るようになる、すなわち自分が立っている地点を客観視し、俯瞰するようになることを述べています。それに続く、「協働作業の中での道具」「コミュニティの中での役割」「技術 technology の中での目的」を習得 master するという箇所も、全体の中での部分を客観視するようになるさまを表現しています。

この点を、表 4 に書き込むと、下のように表 5 を書けるように思います（大田の行は、まとめてしまいます）。アクチュアリティがⒶⒷⒸの 3 種類あることにご注目ください。

表５：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス、居心地の良さ、アクチュアリティ／リアリティ

	西田、木村	大田	エリクソン （第12便）	居心地の良さ （第11便）	アクチュアリティ リアリティ（第10,11便）
①a	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。	アクチュアリティⒶ：包まれている実感（ヌミノース）
①b	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）		
①c		不思議だね	応答（第一期）		
②a		不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。	アクチュアリティⒷ：自己発揮している実感
②b		探りたいことが違う	食い違い（第二期）		
②c		探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）		
③a			出来事の客観視、俯瞰（第三期）		リアリティ：俯瞰、客観
③b	生への意志（の共有）	たくらみの共有	目的の共有（第三期） 順番、役割など取り決めをつくる（第三期） シンプルな統合（第三期）	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。	アクチュアリティⒸ：回帰したアクチュアリティⒶ（ヌミノース）としての「シンプルな統合」

だいぶ整理されてきたでしょうか？ここで12便で言及した交換様式まで書いてしまうと、書きすぎになるかも知れませんが、最後に表6として、交換様式を書いて（さらには今後のために社会類型も書いて[6]）、第13便を終わりにします。表6には、ここまでの往復書簡の履歴も書き込んでおきます。

表６：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス、居心地の良さ、アクチュアリティ／リアリティ、交換様式

	西田、木村	大田	エリクソン （第12便）	居心地の良さ （第11便）	アクチュアリティ リアリティ（第10,11便）	交換様式 社会類型	2020年の往復書簡 〇数字は便数
①a	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。	アクチュアリティⒶ：包まれている実感（ヌミノース）	交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uナシ）	解除① のんびり、くつろぎ⑦ 明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
①b	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）				阿頼耶識⑧、末那識⑧ 意識⑤、意識状態⑤ 差異の生成⑤、ズレ② 場所としての主体⑪
①c		不思議だね	応答（第一期）				
①d			基本的信頼（第一期）			交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uナシ） 共同体（特殊的信頼）	
②a		不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。	アクチュアリティⒷ：自己発揮している実感	交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uアリ、選択アリ）	状態⑤、イラストA（2018） フロー⑪、あっという間⑦ 行為する主体⑪
②b		探りたいことが違う	食い違い（第二期）				ズレ②、非対称⑧
②c		探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）				
③a			出来事の客観視、俯瞰（第三期）		リアリティ：俯瞰、客観		
③b			順番、役割などの取り決め（第三期）			交換様式B（非対等、特殊的信頼アリ？） 交換様式C（対等、特殊的信頼ナシ？） 集列体（ヌミノースナシ、選択ナシ）	
③c			順番、役割などの取り決め、権利の相互尊重（第三期）			連合体（ヌミノースナシ、選択アリ、一般的信頼アリ）	
③d							明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
③e	生への意志（の共有）	たくらみの共有	順番、役割などの取り決めをつくる、権利の相互尊重（第三期） 目的の共有（第三期） シンプルな統合（第三期）	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。	アクチュアリティⒸ：回帰したアクチュアリティⒶ（ヌミノース）としての「シンプルな総合」	交換様式A（原遊動性U込み）の回帰 交響体（ヌミノース込み）	イラストB（2018）

[6] 柄谷行人、見田宗介、大澤真幸『戦後思想の到達点』NHK出版、2019年、p215

以上が 2018 年報告書から、2019 年論文、2020 年の居心地研究を貫く整理です。最後は、2021 年以降に検討する交換様式と社会類型まで書き込んで表 6 としました。

表 6 は書き込みすぎてしまいました。今後の研究を進めながら、この表自体を共有していけばいいと思っています。

５．今後の方向

今後、どのような研究の展開が待ち受けているのか。それは私にもわかりません。

ただ、第 12 便の最後に書いた次の点は、私が強く意識している点です。

今後、柄谷行人の「交換様式 D」の議論をテーマに組み込みますが、「交換様式 A」は「ヌミノース」と重なるように思います。また、「交換様式 B」や「交換様式 C」は裂開した個人を単位としているように思います。

エリクソンの人間観・世界観から、柄谷行人の議論に切り込むことが今後の目標の一つになりそうです。

エリクソン、木村敏、大田堯、それらの思想家の人間観・世界観から、柄谷行人、見田宗介の議論に切り込むことは、大きなテーマになると思います。

そこでは、権利の相互尊重や、一般的信頼についても論じることになると思います。とくにウッディキッズに足を運んだ際に感じることなのですが、ウッディキッズでは一般的信頼が醸成されているように感じます。その点は、ウッディキッズの居心地の良さの大きな要素になっているように思います。

ウッディキッズでの信頼が、特殊的信頼ではなく、一般的信頼にまで展開していく秘密。この秘密を解き明かすためにも、第二期（1 歳児）の研究を、さらには第三期の研究を進めていきたいと思っています。

【資料】社会類型に関する覚え書き。

	ヌミノース	選択	綜合	取り決め	
共同体	●				
交響体	●	●	●	○	交換様式 A
集列体				●	交換様式 C
連合体	○	●	●	●	
	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅲ期	

第 14 便

対面的な講読（11 月 16 日開催）の報告

久保健太
2020 年 11 月 16 日

本日、**11 月 16 日に「対面講読」を行いました**。11 時から 15 時まで、4 時間。関東学院大学で行いました。

そこでは、「第 13 便　2018 年から 2020 年までの研究の整理（久保健太)」を読みました。
さらには、前回（10 月 26 日）読んだ「園だより」を溝口義朗さんが推敲して、「塊と裂開についての考察〜0 歳から 2 歳の間に〜」を書いてきてくれました。その溝口さんの文章を読みました。その文章は、「第 15 便」として、本便の後、載せることにします。

また、岩崎真人さんが、ご自身が考えていることを語ってくださいました。それも文章にまとめて送ってもらうことにしました。岩崎さんの文章を「第 16 便」として、後掲します。

さらには、久保による「第 13 便」と、溝口さんによる「第 15 便」とをつなげて読みながら、見田宗介による「社会類型」を、保育の立場から検討しました。その内容は「第 17 便」として、後掲します。
また、『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』（吉川泰久・堀千晶著、せりか書房、2015 年）のうち、「差異（p38，39)」「多様体（p66，67)」「生成変化（p134,135)」の項目を読みました。

以上が、本日行われた「対面講読（対面レッスン)」の内容です。
次回の「対面講読（対面レッスン)」は、12 月 14 日に行う予定です。そこでは、第 15，16，17 便や『戦後思想の到達点』(柄谷行人、見田宗介、大澤真幸著、NHK 出版、2019 年)、『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』を読む予定です。

遊ぶことについて『塊と裂開についての考察』～0 歳から 3 歳の間に～第 15 便　ウッディキッズ　溝口　義朗

[1]

[2]

１、秋の畑で

散歩に出かけ秋の畑道を歩きます。空は高く、青さは宇宙まで吸い込まれるようです。遠くの山並みはまだ紅葉はしていませんが、そちらの方から畑道の台地に向かい澄んだ風が渡ってきます。心地よい、秋晴れの日です。

畑の散歩は、作物の間を抜けてあるきます。２歳２か月のりょうた君が畑の脇に座り込みました。「たまごがあるから、とって。このたまご、けんちゃんにあげるの」と私に向かって話します。りょうた君が指す指の先に、なるほど、たまごが転がっています。若い冬瓜の実が、ちょうどダチョウの卵のような大きさで、葉っぱの間に転がっていました。

緑色の卵。りょうた君は、畑の中に、そして秋の環境、そう、高く青い空と風の中に、大発見をしたのでしょう。それを、けんちゃんに伝えたいのだと思われます。私は「畑のおじさんのだから、獲れないよ」と、りょうた君に伝えました。りょうた君はあきらめて、また歩きはじめました。

２、水たまり

畑道を先へ進んでいくと、大きな水たまりがありました。いったん立ち止まり、子どもたちは水たまりを覗き込みます。そのうち１人が足を踏み入れます。それを合図とするように、もう１人がジャンプで水たまりにとびこみました。あとは五月雨です。次々とみな水たまりに足を踏み入れ、しばらくそれが続きます。

水たまりに入り、ばちゃばちゃと足を動かします。次第に、関東ローム層の黒土は泥水となり、顔や衣類に飛び散ります。気持ちは最高に達します。大笑いしながら、声を高らかに上げながら、より一層、泥のしぶきが跳ね上がります。とうとう、転んで真っ黒になります。

一方で、そことは違う子どもたちがいます。幾人かの子どもたちは水たまりに入らずに、水たまりの周囲で、その様子を見ています。見ながら、まるで「やれやれ」というようなそぶりでいます。場は共有していながら、行為は共有されていない。行為を共有していないのは、そこに居る保育者も同じで、やはり見ています。

３、園に帰って、冬瓜のこと

その日の夕方、保護者が子どもたちを迎えにやってきます。りょうた君のお母さんに「冬瓜のこと」を話しました。お母さんは答えます。「りょうたは、家でもよくけんちゃんのことを話します。気にいっているおもちゃを持っては、これはけんちゃんにはあげないと話しています」と。

「けんちゃんにあげたい」「けんちゃんにあげない」。一見、これは相反するように見えます。しかし、そうではないのではないか。交換の方式でとらえてみたいと思います。

[3]

４、交換の方式

哲学者の柄谷行人によれば、交換（交換様式）は、四つのタイプになるといいます。A 互酬交換（贈与と返礼）、B 服従と保護（略取と再配分）、C 商品交換（貨幣と商品）、D？（X）。お腹がすいてパンを買うのならば C の交換だと思います。お金でパンを買う。この方法は、現在私たちが一般的に行っている交換の方法です。

B　服従と保護 （略取と再分配）	A　互酬交換 （贈与と返礼）
C　商品交換 （貨幣と商品）	D　X

交換様式

『戦後思想の到達点』大澤真幸、柄谷行人、見田宗介、NHK 出版 2019　P１７による

一方、B と A はお金（貨幣）で物を買う以前の時代が想像できます。しかし、今でもお歳暮やお中元のように行われていますし、大切にされています。従属し言うことを聞けばパンはもらえる B と、パンをもらったのでお礼にリンゴをあげた A は、貨幣が現れる C 以前の社会であると柄谷はいいます。歴史で言えば領主に年貢を納めて命を守ってもらう B と、原始社会のように川で捕まえた魚と山で集めた栗を交換する A のような交換の様式でしょうか。

では D とは何なのでしょうか。歴史として D は存在しないと柄谷はいいます。そして D は A の高次元での回帰ともいいます。資本主義経済の C を経て、A が再度現れることを D としているのです。

５、「けんちゃんにあげたい」「けんちゃんにはあげない」の交換様式

「あげたい」ことと「あげない」ことは、なぜ相反ではないのか。もちろん、「物と物」の交換を想定したならば相反します。「あげる」と「あげない」。しかし、「心と心」の交換を想定したならば、相反はしない。あの人にあげたい、あの人にあげたくないは、すでにその人に対しての心を交換している。なぜならば、その人に対しての気づかい、心づかいがすでに存在し、相手を想像して言葉にしているからです。

私有財産の交換を経済とするのではなく、気持ちの交換、心の交換を経済とすることはできないでしょうか。柄谷の交換様式 A は、私有財産の交換が先にあるのではなく、交換する相手への気遣いがまず先にあると思われます。交換した私有財産、すなわち物は、その気遣いの表れであり物の持つ価値は二次的な産物だと言えます。交換した物の価値は、物自体が持つ価値よりも、その気遣いにより決定されます。

そうなると交換様式 A、すなわち贈与と返礼は、贈与する側と返礼する側の「物」の価値がイコールである必要はあまり意味をなさなくなります。そして、その物の価値は、あの人とこの人の関係、間柄によってその価値は決まります。久保（関東学院大学）は、そのことについて『過剰な贈与』と表現をしました。（久保健太童心社会）。関係、間柄にとって贈与と返礼は、その価値を増産もさせ減産もさせることが可能なのです。

交換様式 C による交換は、交換様式 A に見られる「心と心」の交換を否定することで成立をみます。同一時間による、均質な物の拡大生産は「心」を否定することで成立をするのです。見えない消費対象に対して、均質で均等な物を増産する。ピーター・モスは「質」という用語を用い、近代の資本主義社会での「質」を『普遍性』『不変性』『確実性』『客観性』のことと定義し、これらは消費対象の質であることを明らかにしました。（「新しい保育の物語―保育の質・倫理と政治・リアルユートピア」　2019・12・1　東京大学 Cedep 講演会）

交換様式 C を通り超え、新たな交換様式 D は、交換様式 A に元遊動されるとするならば、消費対象の質ではない質、すなわち「心の交換」の質と伴うということが言えそうです。それらは、あの人にあげたい、またはあの人にはあげないという心から生じていることにほかなりません。ですから、常に生産はオーダーメイドでありカスタムメイドであるわけです。それは普遍的ではなく不変的でもなく、主観にみちた不確実な物であるかもしれません。

[4]

「たとえば、わしら今日、小さなヘビをつかまえただろう。わし自身の命もいつか同じように、突然確実になくなるだろってことを知ったうえで、ああしたんだ。だから、全体としてみれば、わしもヘビも、同等なのさ。彼らの一匹が、今日のところは、わしらをやしなってくれたんだ」　（『気流の鳴る音』真木悠介　ちくま学芸文庫 2003/3/10　p58）

『気流のなる音』に見るアメリカ原住民の呪術師のドン・ファンの行動を真木は「感覚としてのエコロジー」と言い表しました。ウズラを狩る場面では、5羽捕獲したウズラのうち、2羽を料理し3羽はまた山へ帰します。同行しているカスタネダ（研究者）がうずらの調理のために灌木を折ろうとしますが「もうウズラを傷つけたのだから、これ以上灌木を傷つけることはない」ドン・ファンはカスタネダを止めます。そして「だが、もしそうしてしまっていたら（うずらを5羽傷つけたり、灌木を折ったりしたならば）灌木も、ウズラも、まわり中のものがみんな、わしらに攻撃を開始しただろう。」とカスタネダに話します。所有を交換することを当たり前としてきた資本主義社会の合理性に対し、一旦それを停止し、ドン・ファンの行為から「合理性の質の相違を確認しておきたいと思う」と真木は指摘をします。

自明である資本主義の交換は、本当は違うのかもしれません。もしそうであれば、りょうたとけんちゃんのように「あげること」と「あげないこと」はやはり相反しない。繰り返しますが、そこで交換されているのは、物ではなく「思い」です。その思いを価値とするならば「合理性の質」は当然、変わるのでしょう。

私たちの教育は、社会の構造に支配されています。交換様式Cの中での教育は「心と心の交換」を否定し、普遍的で科学的と言う客観的な視点を強調して進められてきたように思います。自立による対等な関係の個人が、対等な交換を行うことで経済社会を維持していく構造です。自立し対等に交換のできない者に対しては、障害者、子ども、高齢者、貧困者などというカテゴライズとともに、福祉という名の配分と給付により、社会的弱者としての自立を促してきました。

しかし、本当の人の育ちは違うのです。りょうた君のように、生まれて2歳前後の子どもたちは「心と心の交換」が先行しているのです。先行と言うよりも、好んでこの「心と心の交換」をしているように見えます。この好んでいる時期を、発達心理学にならって「臨界期」または「敏感期」と表してみます。

6、塊（かたまり）と裂開（れっかい）～臨界期、敏感期～

畑道の水たまりでは、泥水につかる人、つからない人の二つに分かれました。歩いているうちに偶然に見つけた水たまりは、数日前の雨の日の産物です。準備されたものでもなく、準備したものでもありません。秋晴れの空気の中で、出かけることで出会った環境なのです。それが、見えたのです。多くの人々が教育とする時に、学校のような意図的な環境にて育ちは保障されているように思えますが、案外、水たまりのような偶然で突発的なものやことのへ対峙の中で保障されているように思います。

身体はすでに偶然で突発的なものやことを含め、自己を取り巻く環境に包囲されています。しかし、水たまりに入った人も、水たまりに入らなかった人も、同じ環境に包囲されながらも、その行為は違った。行為は、環境から起こる情報により決定づけられているにもかかわらずです。その個別性を「裂開」とし、同じ環境の包囲の中で同じように行為したことを「塊」とします。

おそらく人は、塊ったり裂開したりを瞬時で、同時に繰り返しながら、自己の存在を確認しています。白い画用紙に人型を描けば、その描いた線の内側は描いた線の外側があることによって認識され、同じようにまた線の外側も、線の内側があるので認識されるのです。同じように私たちは、環境の包囲なくしては、自分がいることすら描けませんし、畑道を歩くような行為する主体を描くこともできません。

西田幾多郎はそのことを『絶対矛盾的自己同一』として表しています。小坂国継によれば、絶対矛盾的自己同一は、次のように解説されます。

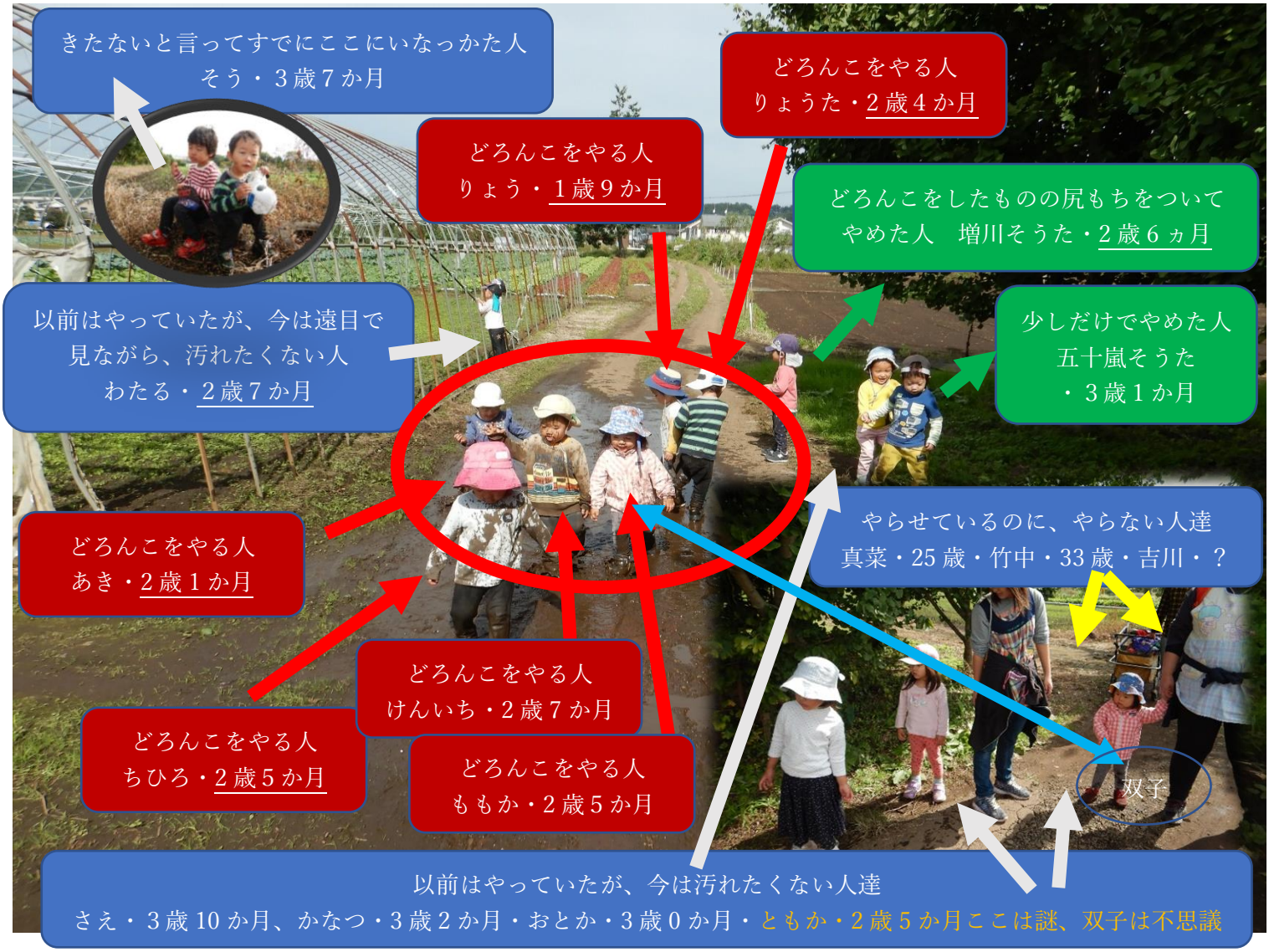
〈解説〉現実の世界は物と物が相働く世界である。個物と個物が相互に限定しあう世界である。しかるに、個物と個物が相互に限定しあうということは、それぞれの個物が自己を普遍化しようとすることである。個物が自己を普遍化するということは個物的多が全体的一になろうとすることであるから、それは個物が個物としての自己を否定することであるともいえる。現実の世界はこうした個物の相互限定によって成立している世界と考えられる。いいかえれば、それは多の一の世界である。現実の世界は物と物、個物と個物が相互に矛盾し対立しあいながら、同時に世界は世界として自己同一を保持している。それで、現実の世界は絶対矛盾的自己同一の世界であると考えられる。(『西田哲学を読む３－絶対矛盾的自己同一―』小坂国継　大東出版社　2009/12/16　p 15)

多の一は塊であり、個物と個物は裂開です。それが同時に行われる。行われるというよりも、今そのものは、すでにそうなっている。限定しあっている。私たちは自己がいることを認識すればするほどに、すでに多の一部として取り込まれているのです。

そうすると、水たまりの個々の行為は個々でありながら全体の行為でもあります。個が泥水を跳ね上げ、腹の底から湧き上がる喜びを笑い叫ぶ。個が喜べば喜ぶほどに、全体に包摂され、全体を構成する他の個と共振していく。すでに個は全体的一として存在しうるのです。そして、泥水につからない個も同じ構造です。

泥水につからない個は、水たまりにつかる個があることで、水たまりにつからないのです。確かに行為は相反していますが、心の交換として見たのであれば、同じことです。泥水につかっている個の感覚を共有しているので、つかりたくないのです。楽しいのと同時に、冷たい、汚らしい、わずらわしいなどの感覚が泥水につかっている個と同様に思い描かれているのです。

しかしなぜ、同じ環境に居ながらも水たまりに入る個と、入らない個とに分けられたのでしょうか。その理由として、臨界期、敏感期を重ね、考察したいと思います。



写真は、実際のその時の様子を撮影したものです。行為と月齢を記してあります。赤い囲みの子どもは、水たまりに入った子どもです。1歳9か月から2歳7か月の子です。一方、入らなかった子の月齢は2歳5か月から3歳7か月です。そして、加えて、私も含めた保育者です。

どうやらこのことから、年齢が1歳から2歳中ごろの子どもは水たまりに入り、2歳中ごろから3歳を過ぎた子どもは、水たまりに入らないということが見えてきます。臨界期、敏感期です。保育者も入らないことを見ると、この1歳から2歳中ごろの、この時期を逃すと、このような全身が汚れるほどの、水たまりに入る経験はしないということも言えるかもしれません。

水たまりのどろんこも、冬瓜の卵も、どうやら1歳から2歳の間に何かが起こっているらしいのです。3歳になった子どもたちは、自分がいることをすでに自明としている。自他未分である0歳の子どもは、自分がいることは知らないはずである。自他未分から自他区分の間が1歳から2歳と言えそうです。

「大きくなれば、水たまりなんかで遊ばないよ」と、おそらく大人はみんな言うでしょう。ですがその当たり前とするような事柄について、もう少し丁寧に考えなければならないと思います。「遊ばなくなる」ことを成長とするのでしょうがこの「遊ぶ」ということにつて、遊ぶべきであり、どうして遊ぶのかを考えなければなりません。

7、遊ぶ理由

どうして遊ぶのか。その理由を考えるために、遊ばなかった個の理由を考えたいと思います。私を含めた保育者は、確かに水たまりに入りませんでした。どうして入らなかったか。これから先のことを考えていたからです。私自身もそうでしたし、他の保育者に聞いてみたところほぼ同じ答えが返ってきました。

園に帰って泥んこの子をお風呂に入れたい。せめてシャワーはしたい。衣類は、保護者に返す前に一度洗たくをしたい。靴も洗いたい。靴は降園する頃までに乾くだろうか。

そんなことを考えていました。だから、自分が汚れることは控えたい。なによりも、風は冷たいので寒いのは嫌だとも考えていました。私たち大人だけでなく、水たまりに入らなかった子も、寒いからだとか、靴が濡れると歩きにくいし気持ちが悪い、衣類に泥がつくのは嫌だと考えていたようです。だから、水たまりに入る子を見ながら「汚い」と言いました。

これらが、どうやら遊ばなかった理由のようです。この理由は、今現在のことではなく、むしろこれから先の予測であり、予測が今の行為を決定したと言えそうです。

このことについて西田は『合目的的世界』という用語を用いています。以下は小坂による注釈です。

〈注釈〉合目的的世界
生物的世界あるいは生命的世界。物質的世界は因果法則が支配する因果的世界であるの対して、生物的世界は目的因によって動く合目的的世界と考えられている。因果的な物質的世界においては、現在は過去から決定されるのに対して、合目的的な生物的世界においては、現在は未来から決定される。(『西田哲学を読む3－絶対矛盾的自己同一―』小坂国継　大東出版社 2009/12/16　p 16)

現在は未来から決定される。コップを落としたら割れたような物理的な物質世界においては、因果関係として過去から現在が決められてきますが、生物による有機的な世界においては、これから先の「合目的的」、言い換えれば「意志」(Will) によって今の行為が決められていくということです。ですから、予測して、汚れると面倒なので水たまりには入らないと意志したのだと思われます。

さらに、水たまりに入らないということは「意志を意志」している感じでしょうか。環境により見えることで「入りたい」という情動と、未来から決定される「入りたくない」という情動、その両面によって今の行為が決定されている。どうも、生まれて2歳中ごろから3歳の子らは、入りたい意志を、入るとどうなるかの意志、そ

の両面によって今の行為を決めたように見えます。決して、一緒に居る大人に制止されて入らなかったのではありません。おのずから決定した。

意志を意志するということについて、真木悠介は先述した南米の呪術者ドン・ファンの語りから、次のように述べています。

先に見たように「意志」という語は、惰性から身を解き放つ超越を示すとともに、またあるものに執着してゆく内在を示してもいる。〈コントロールされた愚かさ〉は、このような意志の二つの側面、解脱と愛着、detachment と attachment、degagement と engagement の関係そのものをコントロールする能力であり、したがってそれ自体のうちにひとつ回帰する構造をはらむ。それはいわば〈意志を意志する〉ということであり、目的自体の自己決定性、自己の欲求の主体であることに他ならない。(『気流の鳴る音』真木悠介　ちくま学芸文庫 2003/3/10 p 138)

0 歳から 1 歳児には「意志を意志する」ことはない。なぜならば、自己の存在を自己で描いていないからです。自分がいない。画用紙に人型を描いたように、周囲がなければ自己の内側も外側も描くことはできないわけです。

自分の身体を包囲している環境そのものとの境界は、存在しないことになります。画用紙の上に線はひかれていない。しかし身体は受容器ですから、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、固有覚として環境の情報を常に捉えています。画用紙の上に線はひかれないままに、感覚を感じる身体への情報は、画用紙のぼんやりとした一点に集中します。その集中するが、ぼんやりした一点が、初発的な自己です。この時期と感覚をエリク・エリクソンは「ヌミノース」と表しているように思います。久保は次のようにエリクソンの感覚を書きます。

エリクソンは、母親に名を呼ばれ、顔を見つめられる時の乳児の感覚、すなわち「暖かく穏やかに包み込まれる」時の感覚をヌミノースの感覚と呼び、乳児は母親の中に「神聖なるものの存在」を見ていたのだと説明しました〜略〜エリクソンをもってしてもヌミノースという「非科学的」な言い方しかできない、その感覚は、しかし、人生の第一期に置かれる人間の土台なのです。(『保育ナビ　2010・10』フレーベル館 2020/10/1　久保健太 p53)

画用紙に自己が描かれていないこの頃の感覚と環境との関係はヌミノースであり、母に包まれている感覚、言い換えれば環境そのものを母としてその環境にすでに包摂されている感覚、これを真の「居心地の良さ」と言うのだと思います。ですから、私たち人類は、かならずこの「居心地の良さ」を経験しているのです。なぜならば、最初から環境の中で受胎し感覚を得、最初から環境の中に産み落とされ得た感覚で環境を感じているからです。

そして、1 歳の中ごろからは、自己が形成されてくる。受容器としての感じている身体を、すなわち自己とするのです。この身体で経験した感覚は記憶としてこの身体に残り、私の身体は今より先の未来においても「私」として継続し不変に存在することの自覚が、未来の予測を可能にする。自己が形成されるとは、自己の身体が一貫して私固有のものであることの認識であり、同時に環境から捉えた情報をもとに自己の身体で行為できることの認識であると思われます。ですから、時間軸としての過去と未来、言い換えれば記憶と予測が確かになっているということです。

「意志を意志する」。実際には「俯瞰」や「客観視」することとほぼ同義です。俯瞰や客観視と言う状態は、一度、自己を離れ他者からの視線で自己を認識するという作業が必要です。であれば、自己と他者が分離された状況でなければならない。水たまりの 3 歳前後の子どもたちは、この俯瞰や客観視が行われている。一方、水たまりに入った子どもたち、すなわち 1 歳から 2 歳の半ばの子どもたちは、そうではない。自己を一度離れ、他者の視線で自己を認識することはしていない。1 歳と 3 歳の違いは、ここにありそうです。

そして、俯瞰や客観を「意志を意志する」と書いたことには理由があります。今時点の俯瞰や客観だけではなく、先の予測を伴う俯瞰や客観であったからです。ですから、Will＝意志としたわけです。生まれて 3 歳にもなると、今から先の予測を俯瞰したり客観視したりすることが可能と言えます。今から先の自分の姿を、未来での自分の姿を予測することが可能ということです。

[8]

今、原稿を書く背中には 10 か月の赤ちゃんがいます。負ぶいひもでおんぶしながら、パソコンを打っています。数日前、39 度の発熱をし、保育所で預かりながら心配をしていました。おそらく「突発性発疹」であろうとは思いながら、熱の下がることを祈りながら保育をしていました。今日は平熱に下がり、ちゃんと発疹が出はじめています。最近は、人見知りを始めました。知らない人や、知っている顔でも、例えば迎えに来る他の子のお父さんの顔でも、見ると泣き出します。以前には平気であったにもかかわらずです。ただしその泣きは、号泣するようななきではありません。何が何だかわからないような不安ではなく、むしろわかった上での泣きに思えます。なぜならば、決まって近くにいる、私だの他の保育者だのに向かって泣くからです。「私の方を見ろ」というような具合です。

熱の高いとき、いつものように動きたいのですが動けない。なんだかおかしいなぁとの表情に見えました。自分の行為が、自分の身体の異変で制限されている。でもそれが何かはわからない。抱っこをすると、すぐに私の胸にピタッと顔をくっつけて、身体を弛緩させ、軽いすべての体重を私の身体にゆだねます。そうなると、私自身もこの赤ちゃんの身体も、どちらがどちらであるかは分からなくなります。赤ちゃんもきっと、おかしいなぁとの情報を自分の身体に持ちながら、自己を他者へゆだねる。ヌミノースの感覚です。この時、すでに自他は未分です。

このような感覚は、まさに母の胸に帰っていくような感覚は、自己の身体が異変を起こしたときなど、私自身の輪郭があいまいになる時には、子どもであろうが大人であろうが、みな経験したことがあるのではないでしょうか。誰かと一緒に居たい。この赤ちゃんは人見知りをするのですから、自他の区分が始まっているように思います。同時に、熱のある時の身体のように、他者への身体へ自己を同一化する、いや一つの身体に帰ってゆくことができる。このことは、私たちは自他未分から生まれ、自他区分の世界で行為をしながら、いつでも自他未分の世界へ帰っていくことができることを、証明しているように見えます。

	1	2	3	4	5	6	7	8
老年期 VIII								統合 対 絶望，嫌悪 **英知**
成人期 VII							生殖性 対 停滞 **世話**	
前成人期 VI						親密 対 孤立 **愛**		
青年期 V					同一性 対 同一性混乱 **忠誠**			
学童期 IV				勤勉性 対 劣等感 **適格**				
遊戯期 III			自主性 対 罪悪感 **目的**					
幼児期初期II		自律性 対 恥，疑惑 **意志**						
乳児期 I	基本的信頼 対 基本的不信 **希望**							

となると、母のような帰る場としての他者が必要になります。エリクソンは成人期を「世話」と表しています。この成人期は、その後の老年期の「英知」とも合わせもって、乳児がヌミノースの対象とする他者の役割を演じるのだと思われます。水たまりで泥水に浸からなかった保育者である大人は、まさにこの成人期を生きる存在であったのでしょう。

そして、水たまりを作った環境そのものには、成人期、老年期を生きる人たちが大勢います。意図せずに出会う、その人々も、地域としてのヌミノースの対象です。水たまりから帰る時の道端であった「おじさん」は、「なんだ、びしょびしょじゃないか。元気だねぇ」と、泥だらけの子どもたちを見て、笑いとばしていました。その笑顔のくしゃくしゃの顔には、優しい目線とともに、偶然出会った子どもたちへの、慈しみに満ちた表情でいっぱいでした。このようにして、地域においても肯定される存在として、子どもたちは迎えられ認められるのだと思います。受容する大人側が、このような「世話」「英知」に満ちた受容的態度でなければ形成できない関係です。

8、区分なき世界

汝の不思議な力は、時流が厳しく引き離したものを再び結び合わせる。すべての人々は兄弟となる。

シラーによる頌歌　歓喜に帰す　フリードリヒ・シラー
『ベートーベン交響曲第９番　フランス･ブリュッヘン　18 世紀オーケストラ』(フィリップス　宇野功芳解説)

引き離された個別が、全体的一へと再統一される力は何であるのか。シラーの詩にある汝の不思議な力は、0 歳から 3 歳の子どもたちの、その姿から語ることが可能ではないかと思うのです。私たちは、全体的一から生まれ、個別になる世界で、個別になることを繰り返しながら生き、最後は死して全体的一となる。0 歳から 3 歳は、個別と個別が織りなす世界への、全体的一からのいざないように見えます。

そして個別と個別の関係が行き過ぎると、私たちは全体的一を安堵の場として求めたくなり、実際に求める。個別と個別の世界に暮らしながらも、週末なれば山に登り川で遊び、環境の中で自己の身体の輪郭を不鮮明にし、溶け合うことで全体的一に、一時でもよいから戻ろうとする。全体的一への回帰です。

親子は、家庭は、そして親密な間柄は、個別と個別をヌミノース的な間柄のもとで、個を全体的一とさせる。居心地のよさとは、個別と個別との世界と全体的一の世界の両面を感じることのできる関係であり環境であり、同時に、個を全体とし、全体を個とするような関係と環境による「やりくり」そのものが民主主義の正体であると、今の所は一旦、結論付けようと思います。

[10]

第 16 便

第 15 便の考察を、今後、深めるために

久保健太
2020 年 11 月 27 日

１．溝口さんの洞察を深めるために

11 月 24 日、溝口さんから、第 15 便が届きました。非常に多くの洞察を含んだ文章でした。今後、溝口さんの洞察を深めるために、参照した方がいいであろう思想を、本便で紹介します。

本便で紹介する思想を踏まえつつ、今後、第 15 便の洞察を更新していきたいと思っています。

２．過剰な贈与

まずは第 15 便の p4 から引用します。

「物の価値は、あの人とこの人の関係、間柄によってその価値は決まります。久保（関東学院大学）は、そのことについて『過剰な贈与』と表現をしました。(久保健太　童心社会)。関係、間柄にとって贈与と返礼は、その価値を増産させ減産もさせることが可能なのです。」

童心社会というのは、絵本・紙芝居の出版社である童心社において、同社の酒井京子会長、私、溝口さんを中心に、2012 年 1 月 19 日から 2019 年 3 月 4 日にわたって続けられていた研究会です。

そこで、私が「過剰な贈与」という言葉をどのように紹介したのか、その記憶は定かではありませんが、その言葉の出自はわかります。矢野智司は『贈与と交換の教育学』（東京大学出版会、2008 年）において、「過剰な贈与」という言葉を用いて、次のように述べます。

「直接に贈与について名指しで語るのではなく、その「出来事としての贈与」の体験を生み出す文学作品を手がかりに語ることで、過剰な贈与の痕跡を感受できるようにすることができる。それを通して、私たちの経験として解釈枠組みの網の目のうちに沈み込んだもののなかから、事後的にではあるが贈与を想起することができる。またこのような作品を経ることによって、私たちは交換の環を破壊する贈与の力を知るとともに、贈与のもつ

暴力性の危険を知ることができる。ホモイの物語が示しているように、贈与の一撃は交換の環を侵犯するがゆえにそれ自体が暴力でもある。」p171。

「（宮沢）賢治における「犠牲」としての自己の差しだしは、返礼できないことへの負債感から来るもので、この返礼への内的要請は、交換の原理に由来すると考えることができる。つまりこの自己の差しだしは、純粋贈与ではなく贈与交換における返礼にあたると考えられるだろう。ところが返礼として自己が差しだされたときに、とても奇妙なことが生じる。形態上は返礼にあたり、交換であるはずなのに、自己がちゅうちょなく差し出された時点で、この行為は返礼ではなくなるのだ。それというのも、自己を差しだすとは、自己に死を与えることであるが、受贈者にとってこの他者の死に値する等価物はどこにも見出すことができず、そのため交換の環は侵犯されてしまい機能しなくなるからである。交換に基づき差しだされた他者の死は、受贈者にとって過剰な贈与となってしまい、結果として交換の環を破壊してしまう。だから、今度は、自己が差しだされた受贈者の側に、過剰な負債感を残すことになるのである。」p180

ここで、矢野は「贈与交換」と「純粋贈与」とを分けています。そして、「純粋贈与」の側に「過剰な贈与」を振り分けています。さて、柄谷が交換様式 A と呼んだのは、「贈与交換」と「純粋贈与」のどちらなのでしょうか？また、溝口さんが第 15 便で書いたのはどちらなのでしょうか？この点は、柄谷、溝口の思想を検討し直しながら、明らかにしたいと思っています。

いずれにせよ、ここに示された矢野の思想は、溝口さんの洞察を更新する際に、大きく参考になるように思います。

その際は「侵犯」「破壊」といった「暴力」的な言葉もキーワードに加わるでしょう。これらのワードは、ドゥルーズが『差異と反復』（上下、河出文庫、2008 年。原著は 1968 年）に記した次の世界観ともつながります。

「思考するということはひとつの能力の自然的（ナチュレル）な［生まれつきの］働きであること、この能力は良き本性（ナチュール）［自然］と良き意志をもっていること、こうしたことは、事実においては理解しえないことである。人間たちは、事実においては、めったに思考せず、思考するにしても、意欲が高まってというよりむしろ、何かショックを受けて思考するということ、これは、「すべてのひと」のよく知るところである。」（上 p354）

「思考は、「思考させる」もの、思考されるべきものの現前において、強制されてやむを得ずといったかたちでのみ思考する――そして、思考されるべきものは、まさに思考されえないもの、あるいは非‐思考でもある」（上 p385-6）

「真の問題とは諸《理念（イデア）》であるということなのである。さらにカントが言いたいのは、諸《理念（イデア）》とは、それなしにはいかなる解も存在しえないような不可欠の条件であるがゆえに、そうした諸《理念（イデア）》は「それらの」解によっては削除されない、ということである。(略)「問題的」という言葉は、とりわけ重要な種類の主観的行為を意味しているばかりでなく、こうした主観的行為によってエネルギーが備給される対象性［客観性］そのものの次元をも意味している。経験外の対象は、問題的なかたちでしか、表象＝再現前化されえないものだ。このことの意味は、《理念（イデア）》は実在的な対象をもっていないということではなく、むしろ、問題である限りでの問題こそが《理念（イデア）》の実在的な対象である、ということだ。」（下 p13－14）

『差異と反復』からの引用は以上です。何らかのショックによって、問題が与えられ、それによって思考が強制される。このようなドゥルーズの学習観（？）は、贈与と学習とを結びつけようとする人間にとって、非常に参考になる見方を与えてくれます。

今後の「対面講読」において、溝口、柄谷、矢野、ドゥルーズ、この四者の異同を丁寧に検討したいと思います。

それは、第 13 便の表 6 においては、①a、①b の箇所の検討だと思います（表については巻末資料として、後掲します)。

大田は「不思議だな」という言葉で、①b における「センス・オブ・ワンダーの触発」を表現しましたが、矢野やドゥルーズに言わせれば、そこで生じている「触発」は、「不思議だな」という言葉で表現されるほど整ったものではなく、「何が何だかよくわからないけど、すごいことが起きている」という情動の動きによって表現されるものでしょう。
それをドゥルーズは「アフェクト」という用語で論じました。これらの点については、『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』（吉川泰久・堀千晶、せりか書房、2015 年）なども講読しつつ、検討をしたいと思います。

３．意志を意志する

第 15 便に戻って、p8 から引用します。

「「意志を意志する」。実際には「俯瞰」や「客観視」することとほぼ同義です。俯瞰や客観視と言う状態は、一度、自己を離れ他者からの視線で自己を認識するという作業が必要です。であれば、自己と他者が分離された状況でなければならない。水たまりの 3 歳前後の子どもたちは、この俯瞰や客観視が行われている。一方、水たまりに入った子どもたち、すなわち 1 歳から 2 歳の半ばの子どもたちは、そうではない。自己を一度離れ、他者の視線で自己を認識することはしていない。1 歳と 3 歳の違いは、ここにありそうです。

そして、俯瞰や客観を「意志を意志する」と書いたことには理由があります。今時点の俯瞰や客観だけではなく、先の予測を伴う俯瞰や客観であったからです。ですから、will＝意志としたわけです。生まれて 3 歳にもなると、今から先の予測を俯瞰したり客観視したりすることが可能と言えます。今から先の自分の姿を、未来での自分の姿を予測することが可能ということです。」

溝口さんの、この洞察も、ぜひ深めたい洞察です。そのためにも 1 歳（第二期）と 3 歳（第三期）の違いについて、参考になる箇所をエリクソンの文献から引用しておきます。

第二期は、**自分の体が自分の思い通りに動かせるようになる時期**です。そして、その時期は他者からのコントロールを受け入れたいという欲求が高まる時期でもあります。『洞察と責任』から引用します。

「乳児の感覚と、その筋肉は、活動的（能動的）な体験への機会を、これまで以上につかむようになる。それにつれて、乳児は二重の要求・欲求（demand）に直面するようになる。その二重の欲求とは、自己コントロールの欲求と、他者からのコントロールを受け入れたいという欲求とである。」（Erikson1964：118＝エリクソン 2016：115。以下、訳は久保によるもの）[1]

自己コントロールと他者からのコントロールという相反するものへの欲求が同時に浮上してくることに関して、エリクソンは次のようにも書いています。

「成熟しつつある人間は、周囲に期待できることと、自分に期待されていることに関する知識を、徐々に、組み込むようになる」（Erikson1964：119＝エリクソン 2016：116）。

[1] Erikson, E. H. “Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight ”、W. W. Norton & Company,1964。エリクソン『洞察と責任（改訳版）』（鑪幹八郎訳）誠信書房、2016 年。

ここでは、自分から周囲に向けるものとして「周囲に期待できること」があり、逆に、周囲から自分に向けられているものとして「自分に期待されていること」があり、その両者が、一つの人格の中に組み込まれていくことが書かれています。

「自分に期待されていること」は承認欲求とかかわっています。ここでのキーワードは期待です。第二期は、**周囲からの期待**を感じる時期でもあるのです（この点も第 13 便の表 6 に②b として、書き加えておきます）。

また、第二期は**周囲からの視線**を意識する時期でもあります。エリクソンは第二期の「恥」の感覚について、以下のように述べています。

「恥とは、自分が完全に人目に曝され、また見られていると意識していること、要するに、自己意識的であることを意味している。人は見られる存在であり、見られる準備のできていない存在である。」（Erikson1959：71＝エリクソン 2011：68）[2]

次に第三期です。私は、第三期こそ、俯瞰が始まる時期だと考えています。そのように考えられる根拠を、エリクソンの文献から引用しておきます。

まずは良心について、述べた箇所。

「自主性（イニシアティヴ）を統治する偉大なる存在、すなわち**良心**がしっかりと確立するのは、この自主性（イニシアティヴ）の段階である。（略）

今や子どもは、見つかったときに恥ずかしいと感じるだけでなく、見つけられはしないか恐れる。いわば神の姿を見ることなく、神の声を聞く。さらに言えば、誰も見ていない単なる思いや行いについてさえ、反射的（オートマティカリー）に、罪を感じるようになる。これが個人における道徳の礎である。」（Erikson1959：84＝エリクソン 2011：83）

ここでは、見えないものの存在をイメージの中につくりあげるようになる子どもの姿に注目したいと思います。さらには、仲間たちと協働するために「建設的で計画的な目的」をつくるようになるということを指摘した次の箇所も引用しておきます。

「この時期は（略）**人を**「［自分の］**ものにする」代わりに物を作る**という意味における力よりも、義務・規律・作業を共に分かち合うという感覚において、大きく成長するこ

[2] Erikson, E. H. “Identity and Life Cycle”、W. W. Norton & Company,1959。エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』（西平直、中島由恵訳）誠信書房、2011 年。

とを学ぶ時期である。また、この時期の子どもは、他人を支配したり強要する代わりに、**一緒に物を作り**、他の子どもたちと一緒に建設的で計画的な目的のために協力することに熱心であるし、またそれが可能である。」（Erikson1959:85-6＝エリクソン 2011：85）

これらの箇所からは、目の前の事柄から離れ、目の前の事柄を俯瞰している子どもの姿を想定することができます。

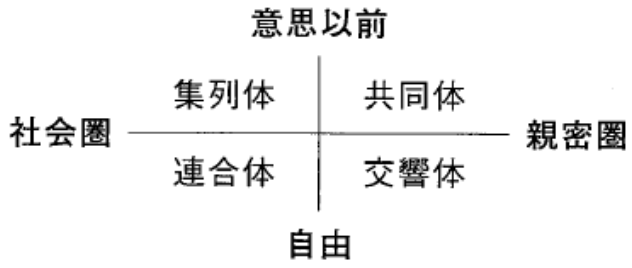
また『玩具と理性』（1977 年）において、エリクソンは、「現実」と「仮構（メイク・ビリーブ）」との相互関係に注目しながら、「仮構」と「現実」とが互いに制約し合いつつ、相互に生かし合う関係を論じています（西平 1993:170）[3]。

この「仮構」と「現実」との相互関係自体は、アクチュアリティの議論と大いにかかわる点ですが、それについて論究すると脱線してしまいます。ここでは、「現実」とは別の次元として「仮構」の次元を設定できるようになることに注目しておきます。「仮構」の設定には、俯瞰する能力が不可欠だからです。

これらの箇所から、エリクソンの人間観を次のように整理しておきます。

第二期：動けるようになること。周囲の期待はわかること。しかし、俯瞰はないこと。
第三期：俯瞰が生まれること。

４．あらためて「意志を意志する」



左の表は、見田宗介による 4 つの社会類型を整理したものです（『戦後思想の到達点』p215 より）。

第一期において、行動の自由をもたない新生児は「共同体」にいます。第二期において、自由に動けるようになるとき、人は共同体から交響体に移動します（ヌミノースの感覚、すなわち、包まれている感覚があることが条件ですが）。その後、第三期において、俯瞰能力を獲得するときに、親密圏を出て、社会圏に身を置きます。そこでは人間は連合体に入っていきます。しかし、俯瞰をした上で、あらためて親密圏に戻ってくる。すなわち、交響体をつくる。そのようなことも可能です。このときつくられる交響体は、第二期

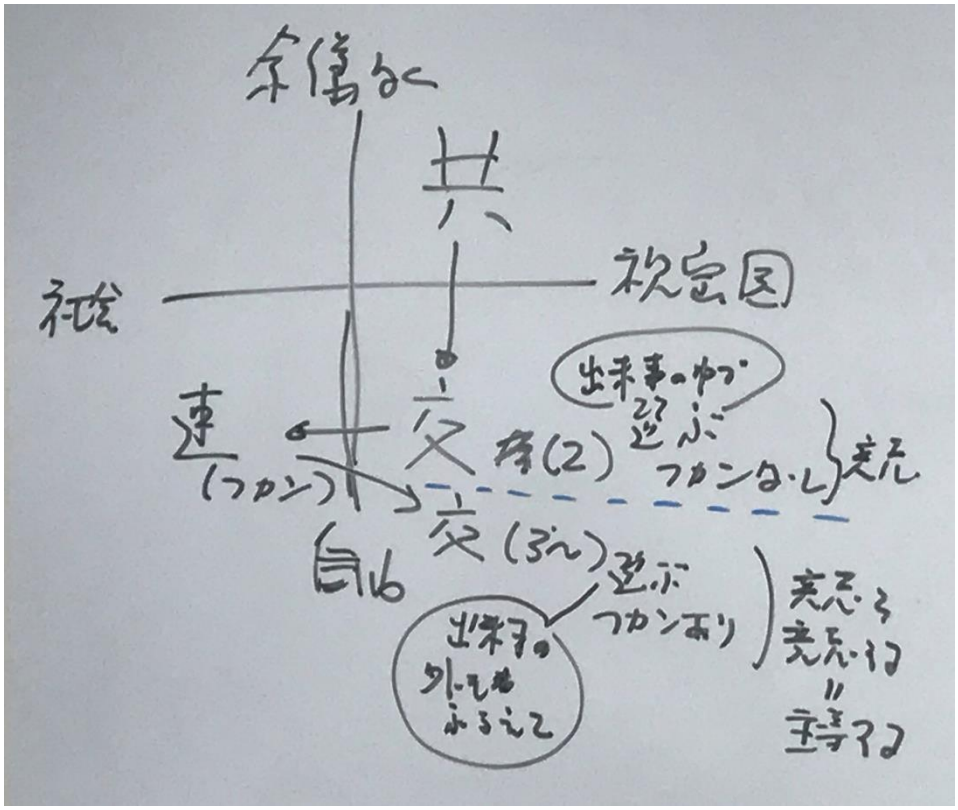
[3] 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993 年。

においてつくられた交響体とは別のものになるはずです。第二期には不可能だった俯瞰能力が備わった上での交響体だからです。

このように 1 歳（第二期）と 3 歳（第三期）の違いを踏まえると、交響体を 2 種類に分けることができるように思います。それは、**第二期の交響体**（共同体のあとにくる交響体。自分で動けるようになった 1 歳児の交響体）と、**第三期の交響体**（連合体を踏まえたあとにくる交響体。3 歳になったころに、俯瞰が可能になることで、社会圏に出て、連合体をつくったのちに、選び直された交響体）です。

それぞれ、第 13 便の表 6 においては、②a と③e の箇所で生まれるものでしょう。
交響体という社会類型をこのように用いることには賛否があるかも知れません。私たちも丁寧に検討したいと思っています。

交響体を二つに分けて考えるというアイデアは、11 月 16 日の対面講読において生まれたものです。その際にホワイトボードに書きつけられたメモ書きを撮影しておきました。その写真を下に掲げて、本便を終わりにしたいと思います。



【巻末資料】

第16便　表1（第13便表6より）：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス、居心地の良さ、アクチュアリティ／リアリティ、交換様式

	西田、木村	大田	エリクソン （第12, 16便）	居心地の良さ （第11便）	アクチュアリティ リアリティ（第10, 11便）	交換様式／社会類型 （第15, 16便）	2020年の往復書簡 〇数字は便数
①a	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。	アクチュアリティⒶ：包まれている実感（ヌミノース）	交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uナシ） 純粋贈与（過剰な贈与）	解除① のんびり、くつろぎ⑦ 明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
①b	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）			純粋贈与（過剰な贈与）	阿頼耶識⑧、末那識⑧ 意識⑤、意識状態⑤ 差異の生成⑤、ズレ② 場所としての主体⑪
①c		不思議だね	応答（第一期）				
①d			基本的信頼（第一期）			交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uナシ） 共同体（特殊的信頼）	
②a		不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。	アクチュアリティⒷ：自己発揮している実感	交換様式A（ヌミノースアリ、原遊動性Uアリ、選択アリ） 第二期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰なし）	状態⑤、イラストA（2018） フロー⑪、あっという間⑦ 行為する主体⑪
②b			周囲からの期待（第二期）				
②c		探りたいことが違う	食い違い（第二期）				ズレ②、非対称⑧
②d		探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）				
③a			出来事の客観視、俯瞰（第三期）		リアリティ：俯瞰、客観		
③b			順番、役割などの取り決め（第三期）			交換様式B（非対等、特殊的信頼アリ？） 交換様式C（対等、特殊的信頼ナシ？） 集列体（ヌミノースナシ、選択ナシ）	
③c			順番、役割などの取り決め、権利の相互尊重（第三期）			連合体（ヌミノースナシ、選択アリ、一般的信頼アリ）	
③d							明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
③e	生への意志（の共有）	たくらみの共有	順番､役割などの取り決めをつくる、権利の相互尊重（第三期） 目的の共有（第三期） シンプルな統合（第三期）	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。	アクチュアリティⓒ：回帰したアクチュアリティⒶ（ヌミノース）としての「シンプルな総合」	交換様式A（原遊動性U込み）の回帰 交響体（ヌミノース込み） 第三期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰アリ）	イラストB（2018）

【第17便】 岩崎　真人

11月16日に対面での講読がありました。今回の内容で話された交換様式や1歳児の臨界期の話題、そして今までの居心地の良さ研究で出てきたキーワードなどを通して、少しずつではありますが学びが深まってきたように感じています。そんな学びの中で、自分の気持ちや考えが感覚で受け止めるだけで精一杯だったものを、『言葉にしたい。言葉にすることで、考えを見直すものとしたい。』という気持ちの変化が現れてきました。そして、対面講読の最後に少しお時間を頂いて、自分の気持ちを言葉にする時間がありました。そこでは、今まで学んだ言葉を使いきれず、緊張した気持ちだけが残りましたが、「岩崎さんの言いたいことはわかる」という久保さんや秀弘さんの言葉や、「何言ってもいいんだよ」という溝口さんの言葉を頂きました。うまく話せた気はしませんでしたが、気持ちはなんだか清々しいものがありました。包まれるような優しさや温かさ（ヌミノース）を感じたのと同時に、お三方の言葉に支えられた（第三の次元に支えられた）のだなと感じました。また、自分が自己発揮したいという気持ちも生まれ、それを受け止めてもらえたことで、居心地の良さを感じることができました。

そんな気持ちや、先日うまく話せなかった気持ちを整理するという意味も含めて、改めて第17便として書きたいと思っています。

＜第一期から第三期は循環している＞

１．人と人との関わりには流れがある。

久保さんが、第11便で居心地の良さには3つのタイプがある、そしてそれは第12便でエリクソンの理論と繋げて整理されました。そのことから、居心地の良さは、それぞれが独立しているというよりは、第一期を経て、第二期へ。第二期を経て第三期へ。もしくは、第一期を感じながら第二期へ、第一期と第二期を感じながら第三期へというような段階としてつながっているように感じました。それは流れのようなものです。逆に言えば、いきなり第三期の居心地の良さは生まれないということです。

第11便：居心地の良さの三つのタイプ

１．意識が解除され、状況に包み込まれ、身を委ねている（そこにみんなが溶けていく。）その心地よさ。
２．自分なりの仕方で（内的な倫理に従って）自己発揮できる。その心地よさ。
３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。その心地よさ。

第12便：エリクソン理論の図式記述

第一期：ヌミノースの感覚を得る。自他未分の感覚を思う存分、味わう。第11便までのいうところ「アクチュアリティ」の感覚を思う存分、味わう。その一方で自分の存在のかけがえのなさも味わう。
第二期：自己決定、自己発揮、自己主張が盛んになる。それに伴い、取り合い、ケンカ、食い違い、すれ違いも起きる。
第三期：取り決めをつくる。取り合いをするよりも、順番をつくる。一緒に使うための取り決めをつくる。シェアをする。その役割をプレイする。すなわち、演じて、遊ぶ。

またその流れは、小さな循環となりながら、大きな循環へと成熟していくようなそんな要素に感じました。

その３つのタイプの流れを自分の身近な場面で表現し直し、今まで学んだキーワードを用いながら自身の考えを整理したいと思います。

例）エリクソンを用いて、夫婦関係における居心地の良さと流れを読み取る。

・第一期　出会い/あなたがいるだけで

人と人には必ず出会いがあります。その時どんな出会い方をしたのか、第一印象の良し悪しは、居心地の良さに大まかな部分影響しているように感じます。そしてその時の会話（第二期：小さな自己発揮、第三期：簡単な取り決め）などを繰り返しながら、まだお互いのことを深くは知らないのに、『この人といると落ち着くな』『この人なんか嫌だな』など、思い込みや決めつけも含めて、最初の印象から感じるものが気持ちや意識の判断材料になってくるように思います。エリクソンの第一期にある「暗い衝動」を、久保さんの解釈でいう「なんかいい」「なんかやだ」と、表現していましたが、その感覚に近いものだと感じています。そして同時に、私が第一期（出会い）と感じている中にも、小さな

136

自己発揮、簡単な取り決めという、第二期的なものや、第三期的な要素も含まれていると思います。これは、第一期～第三期までの経験の差から、成人である場合と赤ちゃんの時ではその要素の度合いも変わってくると思います。今回は成人の出会いを例にして考えていますが、そんな小さな循環がありながら、全体的に見たら、第一期的な度合いが大きいということが言えるのではないかと感じています。

このあたりの関係が居心地のいいものであれば、また会いたい気持ちへとつながるかもしれませんし、居心地の悪いものであれば会いたくないといったような、そんなアクチュアリティ強めの世界（直観・先入観・思い込みなど、環境から感じるもの）のように感じます。

居心地の良い第一期的な夫婦関係で表すならば、新婚ほやほやの雰囲気で、『あなたがいるだけで』という気持ちから、どこにいても、何をしていても幸せというようなヌミノース的な感覚なのだろうと解釈しています。逆にあまり居心地のよくない第一期的な夫婦関係を表すならば、政略結婚などでしょうか。あまりいい言葉は見つかりませんが、あまり一緒にいたくないけれど（なにか嫌だけど）、いなければならない。そんな状況のようにも感じます。

・第二期　テレビの主導権/エアコンの温度

最初は相手によく見られたい。自分をよく見せたいという気持ちだったものが、次第に、相手に甘えたい、自分の思うとおりに過ごしたいなど、エリクソンの第二期的な自己主張・自己発揮というような関係も少しずつ見えてくるように思います。第一期の出会いと比べ、より会話や行動を通して相手を知っていく中で、食い違いもあるように思います。自分を出せる、安心して気持ちを出せる心地よさと、食い違いとの葛藤の時期でしょうか。

居心地の良い第二期的な夫婦生活を表すならば、安心感をもとに少しずつ自分を出していくことや、より深い自分の気持ちや悩みなどを話すことなどでしょうか。逆にあまり居心地のよくない第二期的な夫婦関係を表すならば、お互い見たいテレビがあればチャンネルはどちらに合わせるかや、暑い寒いの違いでエアコンの温度の違いなどで、意見が食い違うなど、自分との合わなさを感じ、葛藤が出てくるように思います。

・第三期　お互いのツボがわかる/お互いの良さを発揮できる

第二期に起こる自己発揮や自己主張、そして葛藤やすれ違いを何度も繰り返す中で、第三期に起こる取り決めや役割を決めるようになってくると思います。また、相手の理解が深まり、ここまでの自分なら出せる。あそこまでの相手なら受け入れられるといったような、相手との距離感を感じられるようにも思います。お互いのツボがわかるというような感じでしょうか。私には、リアリティの世界（契約、記録）が強まる部分もあるようにも見えます。そして同時に、取り決めをすることで得られる、安心感や居心地の良さが生まれるようにも思います。ここで生まれる安心感（第三期で感じる一体感は）は、第一期的な安心感（ヌミノース）と近いけど違う感覚です。第一期にあるヌミノースは神聖的なものに包み込まれているような安心感ということを学び、その部分と比べると、少し取り繕うような居心地の良さの部分があるように思います。でもヌミノースにできるだけ近づきたいそんな感覚があるように思うと、“ヌミノース的なもの”という言葉の使い方のほうがしっくりきています。取り決めをすることで、ヌミノース的な感覚の復活、強化するといった言葉が合うように思います。(疑似的な第一期。) なので、私が夫婦関係の第一期として最初に説明した『あなたがいるだけで』という気持ちもヌミノース的なものであり、ただこの第三期で感じる安心感と比べると、より神聖的なものに近いヌミノース。純粋さがあるような感じがします。

居心地の良い第三期的な夫婦生活を表すならば、お互いの気難しいツボがわかりつつ、でもそれが心地よく受け止められる。役割分担をして一緒に旅行を計画するなどでしょうか。逆にあまり居心地のよくない第三期的な夫婦関係を表すならば、お互いのツボは知っているが、その行為を納得していない。黙認している。受け入れられないけど我慢せざるを得ない。言うとけんかになるから言わないという感じでしょうか。

ここまでの説明は、ただエリクソンの段階を誤読もありつつなぞっているだけなのですが、私が話したかったのは第一期から第三期までの流れのようなものが、この後の説明を含めて循環しているということです。つまり、第三期まで成熟した関係が再びこの後に、裂開していくということです。それはベルクソンの弧で説明があった分解と合成のような、また、生への意思と死への傾斜があるように、くり広げられる世界である以上、居心地がいい関係は続かないということです。説明しやすくするために、第三期から第一期・第二期へと循環していく時期を裂開期と名付けてみます。

・裂開期　ヌミノースの強化から、新たな自己発揮へ

裂開期の説明の前に、第三期は私の中で二つのわけて考えています。一つは取り決めなど役割分担をするといった部分（第三期①）。もう一つは、そのことで得られるヌミノース的な感覚の復活と強化という“疑似的な第一期”が起こるということです（第三期②）。その取り決めや、疑似的な第一期は、先ほどのくり広げられる世界の働きで、裂開していく。風化していくような、少し薄れていくようなそんな流れが時間の経過とともにあるように感じます（死への傾斜）。また一方で、ヌミノースが強化されたことで、その安心感のようなものから新たな自己発揮が生まれてくる。新しい自分との出会うなど、状況は常に変化していく（生への意思）。センスオブワンダー（感じ方）もその都度変わっ

137

ていく。同じ状況はない世界。いつもの自分ではない世界。このあたりに、まだ学び足りてはいませんが、ドゥルーズの差異と反復が当てはまってくるのかなという感覚があります。

裂開期とは、取り決められた世界が少し崩れる一方で、新しい自分と、新しい相手が生まれてくるイメージです。その二人の間には、疑似的な第一期の次に裂開期が起こり、再び第二期がやってくるように思います。（説明しやすいために順番に起こるように書いていますが、同時に瞬時に働く、もしくはグラデーションのような感覚で捉えています。）しかし、この第二期は単純な繰り返しではなく、第一期から第三期までの流れを乗り越えた関係(過去の経験。善い意志の交わし合いの経験。)があるため、質は変化しています(第二期a)。その質の変化した第二期aでは、お互いの居心地の良さを探ろうとする前向きな気持ちと、諦めという後ろ向きな気持ちの葛藤など、複雑さが増してくるように感じます。夫婦関係で話すならば、出会った頃の関係に戻ろうとしても戻れない。でもその出会った頃の気持ちや、第三期②に起こる疑似的なヌミノースを支えにして、相手を知り、知ることでいい関係が深まるものと、煮詰まってしまうものが同時に起こる。そんなものを抱えながら、新たな関係に対して生きているように感じます。

１．A　〇私の頭の中を図式化するとこんな感じです。
※大きな流れとして表現しています。実際は、いろんな部分で第一期から第三期の要素が同時多発し、グラデーションのような部分があると思います。または行きつ戻りつしている部分もあると思います。

第一期→第二期→第三期①→第三期②（疑似的な第一期）→裂開期
　　→第二期a（第一期～第三期を乗り越えた）→第三期①a→第三期②a（疑似的な第一期）→裂開期

この循環を伴った成熟する働きには、どの時期も大切ですが、特に第二期から第三期へ乗り越える流れがとても重要のように感じます。これは久保さんが第12便で考察した“響子さんと晃子さんのエピソード”から学んだことです。

２．第二期から第三期への支え。善い意志の交わし合い。

そのためにも、まずは第二期をしっかりと味わってほしいと思っています。言い換えれば、しっかりと裂開してほしい、しっかりと自己発揮をしてほしいと思っています。第二期に、人はそれぞれ固有だということをしっかり味わっておく。人はそれぞれ固有で、人にはそれぞれ事情があるということを味わっておく。他者性・複数性をもつということを味わっておく。
頭ではなく、体で分かっておく。脳ではなく、「内臓感覚」（三木成夫）で分かっておく。『乳児保育の基本』のp53 の図でいえば「大脳前頭葉（第四層）」ではなく、「大脳辺縁系（第二層）」で味わっておく。そういうことをたっぷりさせてやりたいと思っています。それは、第三期に「取り決めとしての人権」を「頭」「脳」に入れる際に（リアリティとして確認する際に）裏支えになるように思うのです。しかし、その一方で、<u>第一期の肯定的感覚である「信頼trust」をヌミノース込みで（言い換えれば、一体感、共振、響き合い込みで）しっかり味わってほしい</u>と思っています。

響子は第二期を思う存分生きています。急いで第三期へ進む必要もありません。いまの響子には、取り決めをつくることよりも、自己主張することの方が大事です。だから私は、こうした取り合いの姿に充たされています。とはいえ、<u>取り合いだけでは、取り決めは生まれてきません。</u>その点をもう少し考えてみます。

響子が私の膝の上で、晃子の堪能を見ていたとき、「待つのが偉い」「譲るのが偉い」と考えるよりも、「自然に任せておけば、いつか譲るし、譲られるまで待つだろう」と考えていた点が、これも手前味噌ながら、重要であるように思います。このときの「自然に任せておけば」というのは<u>「ヌミノースが再び湧いてくるのを待っていれば」</u>とも言い換えることができますし、「ピュシスに任せておけば」と言い換えることもできます。（久保 第13便。傍線、岩﨑。）

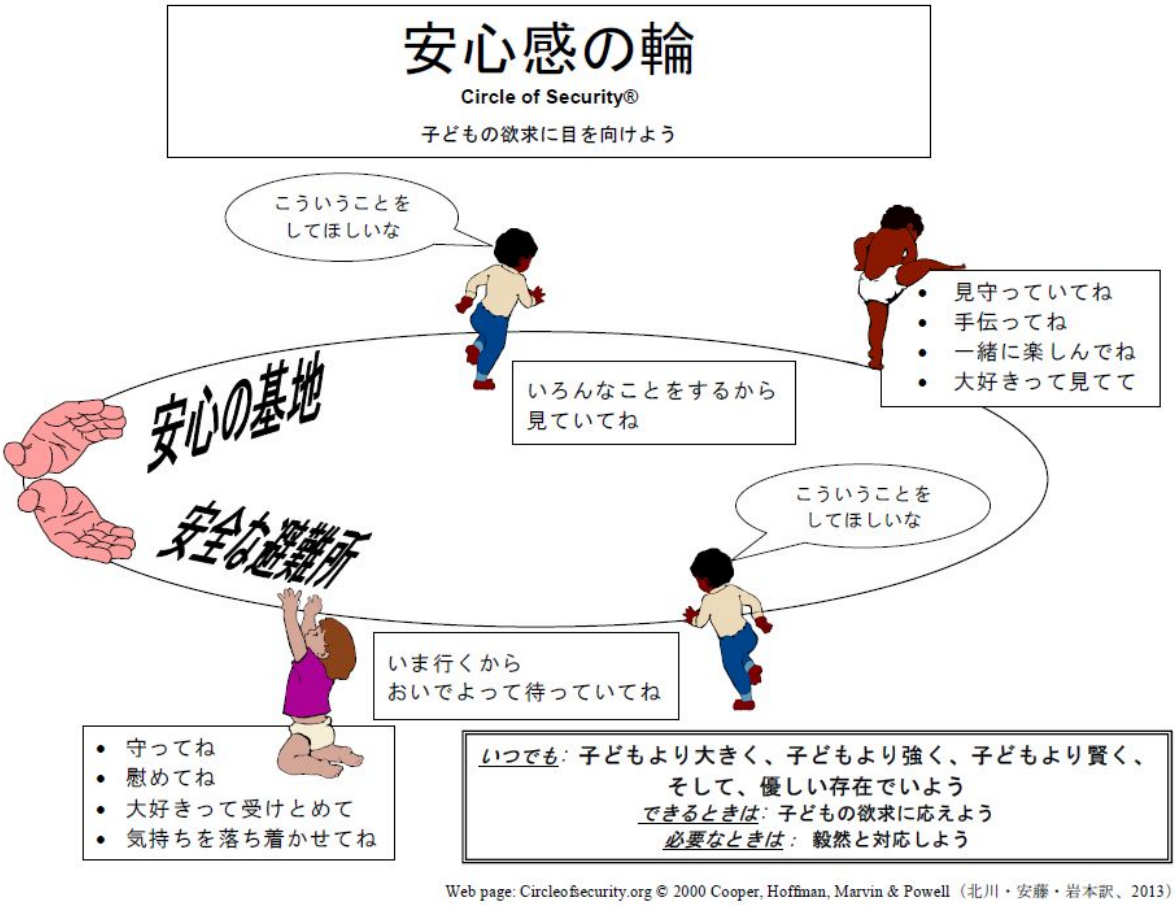
ここで久保さんは、第二期から第三期へと移り変わる姿について、だだ自己主張するだけでは取り決めは生まれてこない。そして支えになるのは、第一期の肯定的感覚というこを話されています。

この説明は遠藤利彦先生の安心の輪の考えとリンクしているように感じます（図：①）。安心の基地ではおとなとこどもの二者関係という中で、相手との信頼関係がまずある。その信頼関係をもとに安心の基地（第一期。ヌミノース）ができていく中で、こどもはその安心の基地を離れ自己発揮していく(第二期)。不安になった時、うまくいかなかったときは、そのいつでも戻れる安心の基地に戻り、再び安心感をもとに自己発揮していく。繰り返す度に、安心の基地に直接戻ってこなくてもいい時間が長くなる(図：①の楕円の幅が横に広くなっていくイメージ)。そして、心の中に安心の基地ができてきて、直接戻っていかなくても心地よい人間関係を形成していく力が備わっていく（第三期。久保さんのエピソードでいう、ヌミノースが再び湧いてくるのを待てばという部分と重なる）ということを学び、今回の主題で

138

ある、人と人との関係には大きな流れのようなものを説明するのに、わかりやすいものなのかなと感じました。。

図：①



私はここに加えて、夫婦関係や成人同士の、何度も循環した成熟した関係でいうならば、１．の部分で説明した、過去の人間関係で学んだこと。即ち、第三期で経験した一体感（疑似的な第一期）も、安心の基地の支えになりうるものと感じます。たくらみの共有で感じた一体感。「今日の川遊び楽しかったよな」「そうだね、また行こう」という、仲間の支え。もう少しいうならば、第11便の久保さんからのコメントで話された一文で、

もしくは、「いま、この瞬間に味わっている、第二の次元での充実」に支えられているのと同時に、「後になって、思い出すことができる、第三の次元での充実」に支えられている、ということもできます。

という文章からも、第一期に感じるヌミノースとは別の支え。人と人とのやり取りの中で生まれる安心感が支えになっていることが言えるように思います。まとめると、ヌミノースをもとに、第二期から第三期へ移り行くことを、“善い意志の交わし合い”ということだと感じ、そしてその善い意志の交わし合いは、新たな心の支えを生む。『人っていいな』という基本的信頼を高めていく。次にまた第二期的な食い違いが起きた時に、その関係の中に起こるヌミノースと、善い意志の交わし合いの経験が、再び新たな第三期を乗り越えていく支えになると感じるのです。

そう考えると、この“善い意志の交わし合い”はとても重要なものに見えてきます。人に対して基本的信頼が高まるということは、１．の第一期 出会い/あなたがいるだけで で説明した。「なんか嫌だ」「なんかいい」という気持ちの揺れに、少なからず、「なんかいい」の要素におまけが働くのかなと感じます。「なんか感じは微妙なところもあるけど、話せば面白いかも」などと人の弱さや苦手さを理解し、許容する幅が広がる。つまり自分自身の居心地の良さを拡大していく働きに繋がっていくのかなと感じました。

139

またもう一つ別の視点で、善い意志の交わし合いで起こる安心感（第三期で起こる安心感）は、ヌミノースと同様までとはいかずとも、安心の基地の支えになるということは、二者以外の関係や状況によって、第一期のやり直しができる可能性があるということです。

例えば、先ほどの安心の輪の例は、良好な信頼関係の築き方がベースになって考えられていると思います。しかし、親子関係で、第一期の関係が必ずしもヌミノースを感じられるような環境になれない時があると思います。そういったとき、第一期でいうところの、基本的信頼よりも不信の度合いがつよくなるなど、そんな気持ちをベースに自己主張(第二期)を繰り返しても、第三期へと繋がっていかない。響子さんと晃子さんのエピソードでいうところの取り合いだけでは取り決めは決まらないということだと思うのです。しかし、そこに親子との関係とは別の関係。つまり保育者や仲間との関係はまた新たに作られていく。最初は不信の気持ちから「なんかいやだ」の気持ちが高まっているかもしれませんが、ヌミノースや、自己主張をヌミノース込みで受けとめてもらう経験、善い意志の交わし合いの積み重ねで、基本的信頼が回復していく。その時に深まった基本的信頼の気持ちが、再び親子関係に戻った時の支えになる。そんな風に感じました。

そんなことを考えていくと、保育園で繰り広げられている営みは、基本的信頼の獲得の場として、人と人が認め合う根本的な場としてのかけがえのなさを感じます。行事や活動、散歩や食事など、その日常の中に起こる全ての共通体験は、善い意志の交わし合いが起こる場として大事な要素が含まれているのだと改めて感じます。そして、自然の良さ。ただそこに在るだけでいい。自然は忖度しない。優劣もない。そんなあまりしがらみの無い世界の中で、「不思議だな」「不思議だね」とたくらみの共有が生まれる居心地の良さを改めて感じます。

２．A　〇安心の基地、善い意志の交わし合いを加えて、再び私の頭の中を図式化するとこんな感じです。

第一期→第二期
→再び第一期a→第二期a　　…このあたりは繰り返しサイクルしている。

ヌミノース込みの、取り合いから取り決めに移り変わる/過去の善い意志の交わし合い

→第三期①→第三期②（疑似的な第一期）→裂開期
→第二期b→第三期、裂開期と繰り返す　…ヌミノース＋過去の善い意志の交わし合いによる心の支えが拡充していく

３．度合い/クロスフェード

１．２．と振り返る中で、改めて人と人との間に起こる、居心地の良さの移り変わる様に、大きな流れのようなものを感じます。しかし、現実はもっと複雑さがあるように思います。それは、１．Aの頭の中で考えている、『実際は、いろんな部分で第一期から第三期の要素が同時多発し、グラデーションのような部分があると思います。または行きつ戻りつしている部分もあると思います。』という部分に複雑さがあるということで、うまく説明しきれていないように感じます。こんなにわかりやすく１→２→３→１...と順を追って関係が作られているとは思えません。一対一の二者関係のほうがわかりやすい説明ができるという感じで書きましたが、実際は、複数の人間関係が同時多発的に存在していると思います。そして、感情とは突然瞬間で湧き出てくるものという研究チームの学びも含め、大きな流れはありつつも、瞬間瞬間を見れば、それはグラデーションのような気持ちで第一期～第三期で表したような感情が、入り交じり、かつ、その感情の度合いを変化させて存在しているように感じます。

例えば夫婦関係で、今まで心地よい話（第一期）をしていたのに、妻が洗濯ものを干すときに私のズボンのポケットからティッシュを見つけ、「また入ってるんだけど…」と、怒りが込みあがってくるような瞬間（第二期）。そこに居合わせた娘たちが、気を使い、「ママ大変だね。パパちゃんと確認して」という妻のフォローをする2年生の長女と、「でもパパもお仕事頑張ってるんだからそんなこと言わないの」と、私のフォローする年長の次女の姿から、（両者、俯瞰で父、母の気持ち理解をしている。第三期。）夫婦の話し合いに戻り「次は気を付ける」という話ですぐに落ち着く（第三期）。そして時間が少し経てばまた、ヌミノース状態に戻ってそれぞれがくつろいでいる（第一期）という。第一期を感じながら第二期、第三期が入り乱れて出てくるような、瞬間瞬間で変化しているように感じます。

それはその瞬間瞬間の度合いの話にもつながるように感じます。第5便で久保さんが書いたクロスフェードの部分だと思っています。

140

さて、クロスフェードについてです。
一つの意識状態がまずある。その意識状態は「寝転んでいたい気持ち（意識）」や「起き上がりたい気持ち（意識）」という単一の意識に塗りつぶされているわけではない。一つの意識状態の中に「寝転んでいたい意識」も「起き上がりたい意識」も混在（共存）している。そして、瞬間、瞬間に「新しい意識状態」が生まれる。そのたびに「寝転んでいたい」と「起き上がりたい」の比率が変わる。だから「ある一瞬の意識状態」において「寝転んでいたい意識」が上回っているとしても、その陰には「起き上がりたい意識」が潜んでいる。逆に「起き上がりたい意識」が上回っているときにも、その陰には「寝転んでいたい意識」が潜んでいる。「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」は「比率」を変えているのであって、そして、どちらかの「比率」がもう一方を上回ったときに、「どちらかの意識が優勢な意識状態」が生まれるだけであって、「寝転んでいたい意識で塗りつぶされた意識状態」から「起き上がりたい意識で塗りつぶされた意識状態」への「ある瞬間での転換」があるわけではな
い。これは「寝転んでいたい意識状態」から「起き上がりたい意識状態」への「転換」の瞬間においてさえも、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」とが「比率」によって、グラデーションをつくっていて、どちらかが上回ったり、下回ったりしているにすぎないということです。転換の瞬間においてでさえも生じているこのグラデーションが、クロスフェードの正体
です。瞬間、瞬間、ある比率をもった「新しい意識状態」が生まれている。すなわち、「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」との「比率」をもった「（その瞬間の）意識状態」が生まれている。そして、そのたびに「寝転んでいたい意識」と「起き上がりたい意識」の「比率」は変わり続けている。という箇所に集約されています。

目の前の子どもが、今は包まれたい感じを求めているのか。今はそっとしてほしい、自己発揮を求めているのか。今は仲間と協力して、目標に向かって楽しみたいのかなど、今この瞬間、自分と相手はどんな関係なのか、もしくは、子どもたち同士はどんな関係なのか、それは絶えずクロスフェードして変化し続けるものとして受け止めていく。当たり前のことではあるかもしれませんが、そんな複雑さのある感情を、日々の生活の中、受容・共感を通じて、感じ取っていく。もしくは後日エピソードを振り返る中で感じ取っていくことが、改めて大切なことだと感じました。その時に「この人と自分は今第二期的な関係かな」と例えば感じたとしても、環境によって常に変化しクロスフェードしているものなので、言葉にするとかえって関係が限定されてしまう気もします。その時は状況に身を任せながらも、振り返った時に子どもたちの心を探る手掛かりにする程度がいいのかなと感じています。

４．サイクルが強まることへのメリット・デメリット

私の中で、第一期～第三期までのサイクルを繰り返し成熟していくことで、善い意志の交わし合いの積み重ねによる基本的信頼の深まりという点で、サイクルすることが良いことのように書きましたが、１．の後半に考察した、『相手を知り、知ることでいい関係が深まるものと、煮詰まってしまうものが同時に起こる。そんなものを抱えながら、新たな関係に対して生きているように感じます』。という部分にある、煮詰まってしまう部分について少し考察したいと思います。

この煮詰まってしまう部分というのは、第三期的な関係が深まるにつれて、この人と『仲良くなりたい』という気持ちから『このことを言ったら関係が崩れてしまう』というような部分。心地よい関係を作ってきたからこその言いにくさがあるように感じるのです。理想的な話でいえば、それを上回る、『この人なら、きついことを言っても受け止めてくれる』という安心の基地がお互いできていることで、分解しても合成できる関係が大切なようにも感じます。ただ、その関係が作れるようになるのは、やはりいくつもの善い意志の交わし合いが必要になっていくのかなと思います。そしてそこに、民主主義を考えるヒントになるのかなと感じています。

身近な部分で考えていくと、保育の行事や習慣に対しても似たような場面があるように感じます。行事・習慣の中で、『なんでこの行事があるの？』『なんでこのルールがあるの？』と疑問になる瞬間があるように感じます。その時、その時代によかったもの、その時の子どもたちとおとなたちが、第一期、第二期を通して取り決められた第三期が、去年もよかったから今年もやってみようというサイクルの積み重ねによって、今この瞬間の子どもたちと、おとなたちに合っているのかと考えた時に、多少のズレや、煮詰まりやが起こってくることがあるように思います。もちろん、すべてがズレているわけではなく、良さもあるので続いていくわけですが、その煮詰まりは、サイクルが強まることで自分ひとりの意見じゃ変えられないルールみたいなものとなり強化されてしまうおそれもあるということ。だからこそ、取り決めには振り返りを持つ時間が大事で、関係を見直す、作り直す。裂開期を意識して作る。そんなサイクルの見直しを、第一期的な、『何を言ってもいい』という場を作って、より良い関係へと変わっていくのかなと思います。

そしてもう一つ、話し切れていなかった部分として、関係が対等なのかどうかというところです。特におとなとこどもの関係は、例えば意見の食い違いや、取り決めをするときにどうしてもおとなの意見というパワーが強くなってしまう。そんな部分はあると思うのです。(それが良いか悪いかは別として。影響力があるということ。)例えばプールのみーちゃんのゆいちゃんの場面で話すと、入っているだけで楽しいという部分から、それぞれの泳ぎや遊び方に刺激を受

141

けつつ、自分の楽しみを感じる流れがあって、子どもたちのみてての気持ちから、取り決めを作って遊んだほうが楽しそうだなというあんこさんの提案もありつつ、みてての渦が広がった。あんこさんの提案が、共通体験の場を生み、自分とみんなの楽しさを感じる(全員楽しんでいるというわけではなく、いろんな気持ちの人が同時に存在しつつ、全体の楽しさに包まれている度合いが大きいといったイメージ)瞬間につながったのかなと感じます。その時に、取り決めの場面だけを切り取ってみると、ここでどれだけ心地よい関係として提案できるか、ここも日々の関係のサイクルが深まる中で大切な瞬間なように感じます。「先生に言われたからやらなきゃ」というものと、「このおとなに言われたならやってみようかな」という、一方的なのかそうじゃないのかは、日々の信頼関係がどれだけ作れているのか、基本的信頼がどのくらい深まっているのかという点、つまりは日々の善い意志の交わし合いができているのかが大切なようにも感じます。また個々別々に見たら、言われたからやっている、楽しい気持ちでやってみたいなどとそれぞれの感情が生まれながらも、参加している子どもたちが、全体的には心地よい雰囲気、全体としての楽しさの度合いが勝っている状況にに巻き込まれていく、その散逸構造のような瞬間を持てることが、集団での第二期から第三期へとうつりかわる上で大切なことなのかなと感じました。

５．最後に。自分の考察の振り返り。

冒頭にもあるように、研究のチームへの信頼から、何か、周辺参加として参加させてもらっている自分にも役に立てることはないか、自己発揮したい、という気持ちが湧いてきました。つまり、今回のこの第17便は、この研究の学びについて、わからないことだらけの中、自分自身の気持ちを書くというとても挑戦的な面が強く出ています。自分の中ではかなりの問題作です。まとまらない文章を書いてしまったなと感じています。勝手に裂開期という言葉を作ってみたり、この部分とこの部分はつながっている気がするといってみたり。他にも、ある程度修正のきく範囲での善い意志の交わし合いを前提にかかれていて、強烈な裂開状態や、極端に対人関係が持てない場合なども書ききれていません。極めつけは、第１期～第三期までしか語られてないこと。第四期以降の学びが薄いため、恐らく第一期～第三期のサイクルがベースにあって、広がっていくものなのかなと漠然と思っていますが、そのあたりも学びは足りていません。誤読から生まれる誤読のオンパレードというのでしょうか。研究の話を聞いているのに、まだまだ理解していないんだなとがっかりさせてしまう部分もあるかもしれません。でも、それでも参加するということに価値があるように感じるのです。自分の自己主張・自己発揮をする。間違ったことをここで言っても、久保さんの研究チームなら、明るくいろいろ教えてくれる。そう思えるのです。そう思えているのは、久保さんや、秀弘さん、溝口さん、青野さんに対する信頼が生まれている。『何を言ってもいいんだよ』という暖かい眼差しがある。勝手ながら、短い時間しか共有していない中でも、そんな安心感を得て、少しずつそんな風に変わっていく自分があるのだなと感じました。

今回の自分の振り返りの中身についてですが、内容に関しては新たに気づいたというよりは、今まで保育で感覚でやってきたことが、改めて理論として心に残っていく、そんな感覚があります。今まで実践してきたことが、色んな言葉を使って表現できるようになったという感覚です。（使いこなせてはいませんが。汗。）

そんなことを考えていると、この研究に僕にとって必要なのはヌミノース。コロナ禍で人と集まるのが困難な時代に、みんなと包み込まれるような環境で、研究も気にせず何しゃべってもいいようなそんな雰囲気で、ご飯でも食べに行けたらいいなと感じます。そんな関係も含めながら、新たな自分で自己発揮していく。そんなことを考えていました。

岩﨑　真人

142

第 18 便

第 17 便の考察を、今後、深めるための資料集

久保健太
2020 年 12 月 9 日

１．岩崎さんの洞察を深めるために

11 月 27 日、岩崎さんから、第 17 便が届きました。非常に多くの洞察を含んだ文章でした。

第 17 便を読んで、岩崎さんに電話しました。そして「第 17 便を書いていて、さらに深めたい箇所はあるか？学び直したい言葉はあるか？」を訊きました。「エリクソンの第 4 期について」「ヌミノースについて」「塊と裂開について」学びを深めたいという本人の希望をうかがいました。

そこで、この第 18 便では「第四期」「ヌミノース」についてエリクソンの文章を、「塊と裂開」についてメルロ=ポンティの文章を、それぞれ引用します。この第 18 便は、岩崎さんが言葉と論理を磨く際の資料集にしてください。また、私自身も、この資料集を活用しながら、自分の言葉と論理を磨いていくつもりです。

「資料集」は長いものになりました。12 月のミーティングで読み切ろうとは思っていません。むしろ、年度いっぱいの時間を使って、読みたいと思っています。どころか、今後も、何度も、この「資料集」に戻り、言葉と論理を磨きたいと思っています。

２．エリクソン（エピジェネティック図式）における第 4 期について

第 17 便を読んで感じたのは、岩崎さんと研究チームとの人間関係が、第 4 期の人間関係に入りつつあるということです。

第 4 期の人間関係について、エリクソンは『洞察と責任』の中で次のように書いています[1]。原文と訳文を並べて引用し、今後の資料にしたいと思います。

資料 1 ：第四期（その 1 ）

[1] Erikson, E. H. “Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight ”、W. W. Norton & Company,1964。エリクソン『洞察と責任（改訳版）』（鑪幹八郎訳）誠信書房、2016 年。訳し直した箇所もある。

WHAT SHALL WE CALL the next virtue? *Competence* comes closest to what I have in mind,（略）A sense of competence, at any rate, characterizes what eventually becomes *workmanship*.（略）The fact, however, is that man must learn to work, as soon as his intelligence and his capacities are ready to be "put to work," so that his ego's power may not atrophy. （Erikson1964：122-3）
次（第四期）の徳（人格的強さ）を何と呼ぼうか？**Competence（適格、有能感）**という言葉こそ、私が心に思い描いているものにいちばん近い。(略)、有能感の感覚が、実際に**職人気質**（Workmanship）となるものを特徴づける。(略）人は、自分の知能や能力が「仕事に取り掛かる（put to work)」準備ができたならば、人は働くことを学ばなければならないのであり、そうでなければ、彼の自我の力は衰えてしまうというのが、実際のところなのである。(エリクソン 2016：120-1）

資料２：第四期（その２）
The rudiments of hope, will, and purpose anticipate a future of only dimly anticipated tasks. Now the child needs to be shown basic methods leading to the identity of a technical way of life. （略） It makes sense, then, that a period of psychosexual latency should permit the human to develop the tool possibilities of body, mind, and thing-world and to postpone further progress along sexual and sensual lines until they become part of a larger area of social responsibility.（Erikson1964：123）
希望、意志、目的の原基（芽生え rudiment）が予測するのは、おぼろげに予測された課題（task）だけの未来である。しかし第四期では（Now)、子どもは、生き方の技術的側面（technical way of life 技術面での生き方）においてアイデンティティにつながるような、基本的な方法を示される必要がある。(略）性的心理の潜在期があることによって、人が、身体、精神、モノの世界の道具的可能性を発達させることが許されること、および、人が社会的責任のより広い範囲の一員になるまで性的、感応的道筋でのさらなる進化が延期されることが許されていることには、意味がある。(エリクソン 2016：121）傍点は久保。

資料１では「仕事（作品）work」がキーワードです。この「仕事」は、第四期全体のキーワードでもあります。資料２に書かれていますが、希望、意志、目的といった第一期から第三期の徳（人格的強さ）がいかに磨かれても、そこからは「課題 task」しか見えてきません。

「課題」だけの未来を抜けて、自分なりの「仕事・作品」づくりを生き方と重ねることができるか？その生き方を（第五期には）アイデンティティへと重ねることができるか？それは第四期にかかっています。

自分なりの「仕事・作品」づくりを生き方と重ねること。そのために必要とされるのが技術や道具の獲得です。

その点について、下に資料 3 を引用します。

資料３：第四期（その３）
All cultures also have their logic and their "truths" which can be learned, by exercise, usage, and ritual. Where literacy is a common basis for future specialization, the rules of grammar and of algebra, of course, form a more abstract demonstration of the workings of reality. Thus the rudiments of competence and of reasonableness prepare in the child a future sense of workmanship without which there can be no "strong ego." Without it man feels inferior in his equipment, and in his ability to match an ever-increasing radius of manageable reality with his capacities.（Erikson1964：123-4）
あらゆる文化が、自分たちの論理と「真理（真実）」をもっている。その論理と「真理」は、（真理を）実践し（練習し exercise）、使用することによって、そして儀礼によって学ばれる。将来における専門分化に向けて、リテラシーが共通の土台になっているところ（社会）では、文法、代数の規則によって、当然のように、現実の仕事（働き working）が、抽象的に説明（demonstration）されている。それゆえ、有能感や合理性 reasonableness の原基（芽生え）は、子どもの中に、将来、職人気質の感覚（それがなければ、「強靭なエゴ」などありえない）のもとになるものを準備する。「強靭なエゴ」がなければ、人は自分の装備（道具）に劣等感を持ち、手に負える現実の範囲が拡がっていくことと、自分の能力とをマッチさせる能力に劣等感をもつことになる。（エリクソン 2016：122）傍点は久保。

いま、岩崎さん自身が、世界を広げていっています。「手に負える現実の範囲」を広げていっています。その際に、新しい言葉を獲得しています。

第四期においては、獲得される言葉や論理は、現実を説明する「文法の規則」「代数の規則」へと磨かれていきます。

そのような言葉や論理の磨き上げは、岩崎さんが一人で行うものではありません。下の資料 4 に書かれるような「教えてくれる大人や協力してくれる仲間」および「自分の文化の、より大きいセクション」に参加することによって行います。このような人間関係が、第四期の人間関係です。

資料４：第四期（その４）
The child at this stage, then, is ready for a variety of specializations and will learn most eagerly techniques in line with that ethos of production which has already entered his

anticipations by way of ideal examples, real or mythical, and which now meets him in the persons of instructive adults and co-operative peers. It is thus that individual man develops at each stage a significant gain in human evolution by joining a larger section of his culture. In this case his developing ca−pacities permit him to apprehend the basic materials of tech−nology, and the elements of reasoning which make techniques teachable.（Erikson1964：124）

つまり、この段階の子どもは、多種多様な専門分化に向けた準備を行なうのであり、それゆえ、「産み出すという倫理・雰囲気（プロダクションのエートス）」（それは理想的な事例、現実的な事例、神話的な事例といった形態で、その子の予測に、すでに入り込んでおり、教えてくれる大人や協力してくれる仲間といった人間という形態において、その子に出会っている）を抱きながら、順序に沿って、最も熱心に技術を学ぶようになる。それゆえ、個々の人間は、それぞれの段階で、自分の文化の、より大きいセクションに参加しながら、人の発達において重要な要素を獲得しながら発達している（重要な獲得物を発達させている）のである。この場合、発達していく能力によって、人は、技術の基本的な素材を獲得することができるようになり、理論的に考える要素（それによって、技術は教えることが可能になる。伝達可能になる）を獲得することができるようになる。（エリクソン 2016：122）傍点は久保。

以上を踏まえて、「協力する仲間」として岩崎さんにアドバイスします。

岩崎さんは、第 17 便を「久保がまとめたエリクソンの言葉」を獲得しながら書きました。岩崎さんの「道具（装備）equipment」をさらに磨いていくためには「エリクソン自身の言葉」を、まずは自分なりに噛み砕こうとしてみることを始めていいと思います。

保育場面において、子どもが本物の生活道具に挑むことと同じように、第四期において、人は本物の道具に挑みます。エリクソンは本物の道具のことを「文法・代数の規則」と説明しています。

以下、蛇足です（飛ばしても構いません）。

道具が「道具（労働用具）」ではなく、「心理的道具」であるという点において、生活道具と「文法・代数の規則」は異なりますが、その点については、ヴィゴツキーの考え方を紹介します。以下は「9 便の前に」でも書いた『保育・幼児教育・こども家庭福祉辞典』（ミネルヴァ書房、2021 年）からの引用です。

飛ばしてもいい資料 1 ：【ヴィゴツキー（1896-1934）　Lev Semenovich Vygotsky】
執筆；久保健太。『保育・幼児教育・こども家庭福祉辞典』より

ソヴィエトの心理学者。人間は媒介物（道具）を使って、活動する。例えば、包丁という道具を使って、野菜を切る。このとき、包丁という道具（労働用具）が人間と野菜との実際的活動（身体技術を使った活動）を媒介している。一方で、人間の活動には、雨雲を見て、傘を準備するというような、技術よりも思考を使った活動がある。このような活動は実際的活動に対して、心理活動と呼ばれる。例えば、雨雲を見て、傘を準備するという心理活動では、「雨雲が見える」「雨が降る」「濡れる」「濡れないようにする」「傘を準備する」という思考が行われているが、この一連の活動を媒介しているのが「雨雲」「雨」「濡れる」「傘」といった言葉である。そこから、包丁を道具と呼ぶのに対して、「雨雲」などの言葉は心理的道具と呼ばれる。人間は、これらの道具（労働用具や言語）を使いこなすことで、活動を意識的なコントロールのもとで行えるようになる。

とはいえ、初めから道具を使いこなせるわけではない。最初は、他者との協働によって道具を使い、いずれは他者との協働がなくても使いこなせるようになる。そこから「協働すればできること」と「協働しなくてもできること」との間にある領域、すなわち「最近接発達の領域」への着目が生まれ、そうした領域の範囲にある課題を協働活動によって達成する学習が主張されることとなる。その一方で、「雨雲」という言葉（概念）を「雨」「濡れる」「傘」などの言葉との体系において習得することもヴィゴツキーが重視していた点を忘れてはならない。

第四期に戻ります。私たちであれば、「本物のエリクソンの言葉」に挑むことが、本物の道具に挑むことにあたります。

第四期において、勤勉性と劣等感とはせめぎ合います。岩崎さんの徳は、そのせめぎ合いにおいて、勤勉性が上回りつつある点です。それは有能感を開花させます。その点について、資料 5 を引用します。

資料 5 ：第四期（その 5 ）

Competence, then, is the free exercise of dexterity and intelligence in the completion of tasks, unimpaired by infantile inferiority. It is the basis for co-operative participation in tech−nologies and relies, in turn, on the logic of tools and skills.

つまり、有能感とは、仕事を完璧に仕上げるにあたって、幼児期的な劣等感によって仕事の偏り（えこひいき）が生まれてしまうことを避けながら、器用さと知性とを自由に働かせることである。有能感は、技術をもって、協働作業に参加するための土台であり、ひるがえって、道具や技術の論理を土台にしている。

3．ヌミノース

さて、「エリクソン自身の言葉」を、まずは自分なりに噛み砕くにあたって、エリクソン自身が「ヌミノース」という言葉をどのように使っているか？そこから始めるのがいいと思います。第 12 便でも引用した『玩具と理性』の次の箇所を資料とします[2]。

資料 6：ヌミノース（その 1）

人生の第一期（the first stage）では、一連の疎隔(a series of estrangement)は分離(separation)と遺棄（abandonment）の感覚である。この感覚は親密性と相互性の周期的再保証（periodical reassurance）では完全には克服しきれぬものと言えるが、しかしこの最初の極めておぼろげな確証、つまり神聖なるものの存在という感覚は、人類の儀式形成にヌミノース的なるものという語でもっともよく表現される一つの普遍的要素を与える。このように命名してしまうと最初の儀式化から最後の儀式化への流れを追うという意図から外れてしまうことになるが、しかし我々はヌミノース的なものをあらゆる定期的儀典（periodical observance）に内在する経験的要素の不可欠の側面と考えている。そして組織化された宗教制度があらゆる制度の中で最も強くこのヌミノース的なものを担っていることは明白だろう。信ずるものは適切な身振りによって子どものように無垢な信頼と全き依存を告白し（confess his dependence and his childlike faith)、同時に適切な供物によって、（自分たちの顔をのぞきこむように）傾けた顔にかすかな微笑を浮かべて優しく応じてくれる神聖なる者の胸に抱き上げてもらう特権を求める。ヌミノース的なものはわれわれに分離性の超克（separateness transcended）と同時に個別性の認可（distinctiveness confirmed）をも保証し、それによって「我（われ）」という感覚の基盤そのものをも保証する。そしてこの「我」の感覚は、一つの全一包括的な「我あり」への共有の信仰で結びついた複数の「我」(Is）全員の相互的認知（the mutual recognition of all “I”s joined in a shared faith in one all-embracing “I Am.”）によって、さらに強められ新たにされる（と「我」は感じる）のである。

（Erikson1977：89-90＝エリクソン 1981：99-100。久保の方で、訳し直し、傍線を引いた。）

どうでしょうか？

エリクソンが「ヌミノース」という言葉を使うとき、一人ひとりが異なることが意識されています。そして、そのような違い（差異）が、ヌミノースによって、そのまま保存されることも意識されています。個別性は認可されるのです。

[2] Erik・H・Erikson ”Toys and Reasons” W.W.Norton & Company, 1977。エリク・H・エリクソン（近藤邦夫訳）『玩具と理性』みすず書房、1981 年。

これはホールネスとトータリティの区別とかかわります。『アイデンティティとライフサイクル』所収の論文「自我アイデンティティの問題」に付された脚注から引用します[3]。

資料 7：ホールネスとトータリティ
全体［しなやかな全体］wholeness は、様々な部分が、非常に多様性に富む部分でさえも、集合し、実りあるまとまりや組織として一つになること、という意味を含んでいる。この概念は wholeheartedness［誠心誠意の気持ち］、wholemindedness［全神経を集中させていること］、wholesomeness［健全であること］などの言葉においてもっとも際立って表現されている。さらに、wholeness は、一つのゲシュタルトとして、多様な諸機能や各部分の間の漸進的な相互性 progressive mutuality を強調するものである。それに対して、全体［排他的に完璧な全体］totality は、絶対的な境界が強調されるような一つのゲシュタルトを連想させる。ある種の恣意的な境界が引かれていて、内側に属しているものは決して外側に置き去りにされてはならないし、外側にあるべきものは決して内側に入ることを許されない。Totality は、完全に包括的であると同時に完全に排他的であらねばならない。辞書では、これに関連して、「徹底的な utter」という単語が使われている。こうした言葉が示すのは、絶対的であるとされるカテゴリーの出発点が論理的であったのかとか、各部分は本当に他の部分に、いわば恋いこがれている［求めている yearning］のかどうかといった問いを、無視して封じてしまう［暴力的な］力である。（Erikson1959：183-4＝エリクソン 2011:236）

また、「ヌミノース」がもたらす「個別性の認可」という感覚は「私が、様々な感覚の中心として存在する」という感覚ももたらします。その点について『ライフサイクル、その完結』の次の箇所を引用します[4]。

資料 8：ヌミノース（その 2）
「私自身」myself あるいは一連のいろいろな私自身（series of myselves）を意識するためには、「私」という感覚を絶対に必要とするのである。もっとも自己-経験のあらゆるヴァリエイションの根底には、様々な自己すべてを経験したこの「私」、様々な自己すべてを意識しうるこの「私」という、意識的連続性を持った「私」という感覚が（ありがたいことに）共通に備わっているのであるが。こうして、「私」とは、結局のところ、相互に了解し合える経験世界の中で、一人ひとりの個人が、自覚しているという意

[3] Erikson, E. H. “Identity and Life Cycle”、W. W. Norton & Company,1959。エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』（西平直、中島由恵訳）誠信書房、2011 年。

[4] Erikson, E. H. “Life Cycle Completed” W. W. Norton & Company,1982。エリクソン『ライフサイクル――その完結』（村瀬孝雄、近藤邦夫訳）みすず書房、1989 年。

味での一つの中心（a center of awareness）であるということに、言語の上での保証を与える唯一の基盤である。この中心性の感覚（中心であるという感覚）は極めてヌミノース的であるから、それは生きているという感覚（a sense of being alive）、ひいては生き生きと存在しているという感覚（of being the vital condition of existence）と、ほとんど同義になる。同時に、二人あるいはそれ以上の人間が、呼応する一つの世界観を共有し、かつ共通の言語をもちうる場合には、彼らは各々の「私」をひとかたまりの「われわれ」に融合させることができる。もちろん、「私」から「我々」そして「彼ら」にいたるこれらの代名詞が、その本来の意味を、様々な器官様式、様々な姿勢的様態、様々な世界観のもつ時間―空間的特徴との関係の中でいかに獲得していくかという発達的文脈を素描することは、大きな意味をもつことであろう。
（Erikson1982：87＝エリクソン 1989:122）訳の一部は西平直『エリクソンの人間学』（東京大学出版会、1993 年）の 234 頁を参照した。傍点は久保。

ここでは「中心性の感覚」が「生きているという感覚、ひいては生き生きと存在しているという感覚」とほとんど同じものになっていく。という点が興味深いです。本研究が「アクチュアリティ」という言葉でとらえようとしている感覚と、ヌミノースの感覚が、ほぼ同義であることを示すものだからです。

資料 8 において、エリクソンは言葉や意識の次元について述べていると読解されるかも知れませんが、この箇所は、感覚の次元で覚知（自覚 aware）されている感覚に、言葉による確認作業が加わることを述べているのであり、その点ではアクチュアリティとリアリティが二重に働くことで「私」が確認されることを述べた木村敏の思想と重なる人間観を述べています（詳細は、第 11 便を参照してください）。

エリクソンには「シンプルな統合」という言葉もあります。第 12 便で紹介した言葉ですが、本便でも、『玩具と理性』の該当箇所を引用しておきます。

資料 9：シンプルな統合

儀式生活において大きな役割を演ずる「老人の理性」に関しては一言触れておかねばなるまい。儀式化に関してそれが担う使命を私は人生のサイクルの意味（the meaning of the cycle of life）を確証する統合的（integral）なるものと考えたい。ブレイクを読んでいるときに私は、老人の理性には遊戯的な子どもっぽさ（playful childlikeness）が（再び）賦与されているという彼の指摘に出会った。儀式的な知恵の化身（personification of ritual wisdom）という伝統的な老人の役割もこの解釈を支持していると言えよう。しかし、現代的な生活様式の中に生きたり、もしくは、そこで多くの老人（ごく少数の強靭な例外的な人物ではない）を見たりしながら老年期に達すると、一

つの疑問が、心のうちに湧いてくるかもしれない。その疑問というのは、ブレイクは、老人の理性は（そして、玩具も）、子供じみたものであるということだけ（a bit childish）を言おうとしたのではないという疑問である。不可避的なあらゆる絶望と嫌悪をともなう老衰を前にした時期に関して、私はシンプルな統合という徳（the strength of a simple integrity）を仮定したが、それはまさに子どもにも見られる徳であり、それ故に老人と子どもは相互に親縁性を感じるのである。しかし、いうまでもなく老年期にもこの時期独特の儀式主義が存在する。賢さ（賢明 wise）を装おうとする愚かな試みである。「賢明ぶること」つまり賢明至上主義（sapientism）とでも言えようか？
（Erikson1977；112＝エリクソン 1981：127-8。久保の方で、訳し直し、原語を補った。傍点は原著。傍線は久保）

エリクソンからの資料は以上にします。対面講読で読み合って、言葉への理解を深めたいです。

４．木村敏の世界観

資料 8 において、エリクソンは「言葉・意識の次元」と「感覚の次元」を自覚的に（？）分けています。このうち「感覚の次元」について、さらに言葉と論理を磨くことで、「ヌミノース」という言葉が、岩崎さんのみならず、このチームの道具・装備になっていくと思います（さらには、溝口さんの第 15 便も深まっていくように思います)。

「感覚の次元」についての言葉と論理については、すでに木村敏のアクチュアリティ（第二の次元）の議論を紹介しています。

第 11 便でも引用した木村自身の文章を、今後の資料として、引用します。まずは「言葉・意識の次元」について、すなわち「リアリティ」についての文章をあらためて、載せます。

資料 10：リアリティ

「リアリティ」とは、公共的な認識によって客観的に対象化され、ある共同体の共有規範としてその構成員の行動や判断に一定の拘束を与えるものである。それが「科学」の理念にこの上なく適合するものであることは、いうまでもない。「知の営み」scientiaとしての科学にとって、「知」scioとは世界をリアリティとして対象化すること以外の何物でもない。「科学共同体」以外の――たとえば「宗教共同体」や「迷信共同体」といった――共同体にも、それなりの客観的な心理とそれについての知がありリアリティがあるだろう。ただ、今日の世界ないし人類の全体を圧倒的に支配している科学共同体によって、それには「非科学的」の烙印が押されるだけのことである。科学的であれ、人間の知が古来、リアリティの公共性と客観性を求めていることには変わりはない。

「知」という名の客観化は、対象を自己の直接的で私的な生から切り離す。それは、空間的には対象との間に距離を設定し、時間的にはそれを現在から――「所与」datumuというかたちで――過去へとずらす。「知られたもの」、それはかならず「すでに与えられたもの」である。科学、宗教、迷信などといった知の体系における「未来の知」――たとえば日蝕その他の天文学的な予測、終末論的な予言、呪術的な予知など――は、生の現在がそのつどその切っ先をつっこんでいる直接の「未来」についての知ではない。むしろそれは知によってひとまず「過去化」され、「前もって知られていた」という仕方で登録済みの真理が、それと同一の――同一性によって律せられた――時間線上にある「未来」という名の次元に投影されたものにすぎない。（木村1998：149－150）[5]

続いて、アクチュアリティについての文章です。

資料 11：アクチュアリティ

「アクチュアリティ」のほうは、生の各自的で直接的な営みである「生きる」ための実践的行為actioに全面的に属している。それはいかなる仕方でも客観的・公共的な知の対象とはなりえない。生それ自身の行為として、それは「生の現場」である「生き生きした現在（レベンディゲ・ゲーゲンヴァルト）」（フッサール／ヘルト）に密着し、生の方向が指し示す次の一瞬へ身を乗り出している。動詞の時制を借りていえば、リアリティが「過去形」あるいは「完了形」で表現されるのに対して、アクチュアリティは「現在形」――あるいはより適切には英語でいう「現在進行形」――でしか展開しない。リアリティが存在者の指標であるとするならば、アクチュアリティは生成そのものの特性であって、いかなる形でも存在の標識にはならない。ただ、人間の志向的意識は、あらゆるものを知のノエマ的対象に変え、（ニーチェの言葉を借りれば）「生成に存在の刻印を押そうとする＜力への意志＞」によって支配されている。こうしてアクチュアリティを知のノエマ的所与としてとらえようとすれば、それはたちまちリアリティとしての存在者に姿を変えてしまう。（木村1998：150-151）[6]

「第三の次元」は「知ること」とかかわっていたのに対して、「第二の次元」は「生きること」とかかわっています。第 17 便を経た現在では、10 月の「対面講読」で読んだときよりも、別の読みが生まれるかも知れません。だとしたら、第四期も循環しているのだと言えそうです。

[5] 木村敏「リアリティとアクチュアリティ」『分裂病の詩と真実』河合文化教育研究所、1998 年（初出は 1997 年）、p149-150。

[6] 木村敏「リアリティとアクチュアリティ」p150-151.

第 11 便では、「アクチュアリティ」の特徴として、「場所としての主体」という考え方と、「感覚は、生み出すのではなく、生まれ出る」という考え方を紹介しました。その両者が書かれた文章を、あらためて引用します。

資料 12：場所としての主体
感覚は生まれ出る

「私は海を見る」「私は音楽を聴く」という能動文の場合には、動作の主体たる私がそのまま主語に置かれて、動作の客体が客語になっている。これは、自己である「私」を主語的実体として立てる言い方である。これに対して中動文「私には海が見える」「私には音楽が聞こえる」の場合には、「見る」「聞く」という動作は表面から姿を消して、「見える」「聞こえる」という感覚の対象が主語として立てられ、「私」は「私には」の形でこの感覚が生起する場所として扱われている。そこにはいかなる意味でも、動作ないし感覚の遂行主体がだれであるかは言われていない。アンリの言うとおり、ここでは「現れることがそれ自身に本源的に表れ」「感じるというそのことが自らを感じ」ているのであって、これは感覚の「自己触発」であるといわなくてはならない。だからこの中動文は、主体である「私」を消して、「ここから海が見える」「いま音楽が聞こえる」という、いわば非人称の形に書き改めることも可能である。

（略）

パンヴェニストは、≪能動態においては、動詞は主語に発して主語の外で行われる過程を示す≫のに対して、≪中動態では、動詞は、主語がその過程の座であるような過程を示し、主語の表すその主体は、この過程の内部にある≫と書いている。彼によると≪中動態の場合、主語は、過程の場所≫なのである（木村2014：150-151）。[7]

最後に、「感覚の次元」「アクチュアリティ」を考えるキーワードとしてビオスとゾーエーというキーワードがあります。それぞれの人間（ビオス）が、大文字の生命（ゾーエー）の「限定」として、ある。その世界観は「感覚の次元」を解き明かす際に重要であるだけではなく、「ヌミノース」を解き明かす際にも重要であるように思います。

[7] 木村敏「自己の「実像」と「虚像」」『あいだと生命』創元社、2014 年（初出は 2010 年）、p150-151。
この箇所は、中動文（中動態）について書かれた箇所である。國分功一朗の中動態論では、「場所としての主体」に加えて、「過程における変状」という契機が中動態に含まれている（國分功一朗『中動態の世界』医学書院、2017 年、p257 など）。木村と國分の異同は、今後の検討課題である。

資料 13：ビオスとゾーエー

以上、統合失調症を人間社会の特異的な病理としている自己の自己性の成立不全について、あらためていくばくかの考察を試みた。最初に提示した男性患者は、《すべての人物に実像と虚像があって、それが入れ替わる。周囲の出来事を操っているのは実在の人物の実像ではなくて、虚像のほう。虚像が実像をあやつっている。ぼく自身でいうと、実像は存在する自己であって、生まれつきのこの身体を持った自分のこと、虚像は思う自己で正体がつかまらない。平生はこの二つが平行線ですれ違いになっているのだが、なにか事件があると、存在する自己が思う自己の方へ誘い込まれてのめり込んでしまう。他人の虚像からの影響がいろいろとはいってくるのは、この思う自己のほう》という。

患者が「実像」あるいは「存在する自己」と呼んでいるのが、彼自身もいうように、身体的個別性を備えていて個別感覚的に経験可能な「人物」としての「自己」であることは、いうまでもない。しかし、平生はこの実像的自己と並行しているが、なにか事件があるとそれと入れ替わり、それを誘い込んでいろいろと超自然的な影響を及ぼす虚像的自己、あるいは「思う自己」の「正体」は何だろう。それが、クローンフェルトのいう自他の区別を超越した「メタコイノン」、デカルトが「思う」の本来的な意味として取り出し、アンリが「感覚の自己触発」として解釈した「思える」「見える」の場所である videor 的自己、西田が「世界が自己において自己を映す世界の一焦点」と述べた場所的自己、アリストテレスのいう「共通感覚」や「コモン・センス」としての共同体的感覚を個人にとって可能としているような、ある意味で「超越論的」と呼んでもよい潜勢態的な自己であることは、これまで述べてきたところから見て間違いない。

この潜勢態的自己は、我々の個体的な生命（ビオス）が、個別的身体の発生に伴って個体以前の集合的な生命（ゾーエー）の限定として成立するのと軌を一にして、それ自身、私個人において「自己」と呼ばれるものの一成分として自らを現勢化する。そこで、いま一度われわれの患者の言葉を借りれば、「虚像」としての「思う自己」と「実像」としての「存在する自己」との二重構造ができあがることになる。（木村 2014：158-159）[8]

※　久保註：Videor は「見える／感じられる」を意味するラテン語（p150）。

最終部分で木村が述べている人間観、すなわち、「個体以前の集合的な生命（ゾーエー）の限定」としての「個体的な生命（ビオス）」という人間観は重要です。

この人間観からあらためて、「ヌミノース」（資料 6）を読み直すと、「ゾーエー／ビオス」という人間観を、ヌミノースの二つの働きと、それぞれ対応させたくなります。すな

[8] 木村敏「自己の「実像」と「虚像」」、p159。

わち、ヌミノースの第一の働きである「分離性の超克」「相互的な認知」を、「個体以前の集合的な生命（ゾーエー)」への回帰（召還）に対応させ、ヌミノースの第二の働きである「個別性の認可」を「個体的な生命（ビオス)」への限定に対応させたくなってきます。表であらわすと下のように対応させたくなります。

エリクソン （資料 6）	ヌミノースの第一の働き 分離性の超克、相互的な認知	ヌミノースの第二の働き 個別性の認可
木村 （資料 13）	「個体以前の集合的な生命（ゾーエー)」への回帰（召喚）	「個体的な生命（ビオス)」への限定

誤解が生まれないように書き足しておきますが、人間は「個体以前の集合的な生命」そのものを味わうことはできません。人間に出来るのはゾーエーを垣間見ることだけです。その点について、第 10 便（8 月 5 日）でも抜粋した「2018 年報告書」を改めて抜粋します。8 月とは、別の読み方が、できるかも知れません。なお、この資料 14 では「個体以前」の次元が、「第一の次元」「自他未分の次元」と表現されています。

資料 14：三つの次元（2018 年報告書より）

木村敏は、時間を三つの次元に分ける。

それぞれ、第一の次元として「生命一般の根拠」の次元、第二の次元として「こと的」な時間や自己の次元、第三の次元として「もの的」な時間や自己の次元と説明される（以下、コト、モノと片仮名で記すこともあるが、読み易さに配慮してのことであって、意味は平仮名のそれと同じである）[9]。

これら三つの次元は、「みてての渦」のみーちゃんに即して述べれば、それぞれ次のような次元である。

みーちゃんが、プールの中で泳ぎを堪能しているとする。その際、みーちゃんの体は水に触れ、みーちゃんの耳には友だちの歓声が入ってきている。ひょっとしたら、蝉の声も耳に入っているかも知れない。しかし、みーちゃんが、泳ぎを堪能しているとき、みーちゃんは肌に触れているもの、耳に入ってくるものに対して「これは水だ」とか「あの歓声は、○○ちゃんの歓声だ」ということを意識していない。

全てのものが混然一体となった世界のなかに、みーちゃんは飲み込まれている。まずは、水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが一体となった一つの世界がある。一体となって分けられていない一つの世界がある。そのような、すべてのものが一つとして混じり合っている世界を、第一の次元という。自分と、他のものが、まだ分けられていない

[9] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993 年。

という意味で、自他未分の世界と呼んでもいい[10]。

とはいえ、この自他未分の世界を、私たち人間が、全面的に見たり聞いたりすることはできない[11]。私たちに出来るのは、この自他未分の世界を「垣間見る」ことだけである。それも、自他未分の世界が私たちを触発し、私たちに「気持ちいい」「冷たい」「なんかイヤだ」といった感覚が生じることで、自他未分の世界を垣間見ることができるのみである[12]。

いわば、私たちは、個々別々の仕方で、第一の次元に触発され、第一の次元を垣間見る[13]。その次元が、第二の次元である。

第二の次元は、自他未分の世界ではない。繰り返しになるが、第二の次元において、私たちに生じる感覚は、個々それぞれのものである。同じ水に触れても、そこで生じる感覚は、みーちゃんとゆいちゃんとでは異なる。私たちに生じる感覚が、個々それぞれのものだという点で、もはや純粋な自他未分ではなくなっている。その点が、第一の次元と第二の次元の違いである。

第二の次元は、瞬間瞬間に立ち現れる世界である。自他未分の世界から、個々別々の感覚が、意識の中に発生する。その瞬間の次元である。それゆえ木村は、第二の次元のことを「第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きのようなもの」ともいう[14]。

とはいえ、この第二の次元において、「これは水だ」とか「あの歓声は○○ちゃんの歓声だ」といった意識は働いていない。水も、みーちゃんも、誰かの歓声も、すべてが混然一体となった世界が、各々の仕方で感覚を触発している。そこには一つの出来事（コト）があるのであって、その出来事は「水」「みーちゃん」「○○ちゃんの歓声」といった諸要素（モノ）には、いまだ分けられていない。

すなわち、第二の次元においては、自他未分の世界がいまだに垣間見えている。それに対して、一つの出来事の中で混じり合っていた諸要素を「これは水だ」とか「あの歓声は○○ちゃんの歓声だ」というように分けていくという意識が働く。この意識の働きによって、自他区分の世界が現れる。この自他区分の世界が第三の次元である。

---

[10] 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005 年、みすず書房所収。p257。

[11] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫。p117。初出は、1993 年。

[12] 木村敏「自己の実像と虚像」『あいだと生命』2014 年、創元社所収。p154。

[13] 木村敏「一人称の精神病理学へ向けて」『関係としての自己』2005 年、みすず書房所収。p256。そこでは「メタノエシスの個別化」という表現で、第二の次元が語られている。

[14] 木村敏「タイミングと自己」『偶然性の精神病理』2000 年、岩波現代文庫所収。p117。

第二の次元と、第三の次元は、次のように考えてもいい。例えばライブ会場で、「今日のライブはなんだかすごい！」と盛り上がっている。その盛り上がりの渦の中に、一緒に飲み込まれている。そのとき、「今日は、音のバランスがいい」とか「ギターのディストーションが効いている」とかいうことは、いちいち考えていない。「なんかいい」という感覚が生じているのみである。それが第二の次元である。

そうして盛り上がっているときに、横から「今日は、音のバランスがいいね」「ギターのディストーションが効いてるね」などと友達に言われるとする。友達は「盛り上がり」という塊を、「音のバランス」「ギターのディストーション」という諸要素に分けて、分析している。友達は盛り上がりに飲み込まれているというよりは、そこから半歩下がって、その盛り上がりを分析している。この友達が過ごしている時間が、第三の次元の時間である。第二の次元に比べれば、いささか冷めた次元であり、そこで起きていることから距離を置いた次元でもある。

第三の次元で行われているような、「これは水だ」「あれは〇〇ちゃんの歓声だ」というように要素ごとに、世界の構成物を分けること。それを、要素を対象化するという。自分とは分けられた対象として、世界の構成物を見るという意味である。これが、自分と他のものを分けるという自他区分の世界である。自他区分の世界のことを、コトの世界に対して、モノの世界という。コトの中では自他未分の性格を残していた各要素が、いまやはっきりと、モノとして分けられた世界という意味である。

自他未分という第一の次元、自他未分の世界から個々別々の感覚が生じる第二の次元、自他区分という第三の次元。これが、木村による時間の三つの次元である[15]。

[15] 木村自身は、この三つの次元の区分について、次のように述べている。「第一の次元は、それ自体はまだ時間とも自己とも呼べないが、後の段階で時間や自己についての経験が論じられるようになると、その源泉として想定せざるを得ない領域であって、禅で「父母未生已前（ぶもみしょういぜん）の自己」と言い、私が「メタノエシス的な生命の根拠」と言っている、いわば「メタ現象学的」なヴァーチュアリティ（潜勢性）の次元である。第二の次元は、この第一の次元がその不可知性を突破してわれわれの意識に出現してきた最初の閃きで、アクチュアル（現勢的）に経験可能ではあるけれど、発生するやいなやたちまち次の第三の次元に移行してしまう。私が従来から「こと的」ないし「ノエシス的」な時間や自己と呼んできたものに相当する。そしてこの第三の次元は、すでに意識の志向構造の中に展開ずみの「もの的」ないし「ノエマ的」な時間体験および自己体験であって、ここではもはや時間と自己の同義性を云々することができない。リアル（実在的）な時間および自己の次元だといってよいだろう。」木村敏『精神医学から臨床哲学へ』ミネルヴァ書房、2010 年。p250。

繰り返しますが、この資料 13 では「個体以前」の次元が、「第一の次元」「自他未分の次元」と表現されています。その次元が意識に出現してくる次元が「第二の次元」です。それが「感覚の次元」です。そして、そこで得た感覚を公共的に確認する次元が「第三の次元」であり、「言葉・意識の次元」です。

問題は、エリクソンが（そして、岩崎さんが引用する遠藤利彦さんが)、「個体以前」「自他未分」の次元を人間観・世界観の中に組み込んでいるかどうかです。

私は、「個体以前」「自他未分」と言われる次元を、人間観・世界観の中に組み込みたいと思っています。その際に、参考になる二つの理論を紹介して、この「資料集」を終わりにします。

５．メルロ=ポンティ

一つ目はモーリス・メルロ=ポンティの理論です。岩崎さんが「学びたい」と言っていた「塊と裂開」について、メルロ=ポンティの文章を引用します。いずれも『見えるものと見えないもの』（原著は 1964 年）からの引用です[16]。

資料 15：塊と裂開（その１）メルロ=ポンティの世界観
見えるものが私を満たし、私を占有しうるのは、それを見ている私が無の底からそれを見るのではなく、見えるもののただなかから見ているからであり、見る者としての私もまた見えるものだからにほかならない。一つ一つの色や音、肌ざわり、現在と世界の重み、厚み、肉をなしているのは、それらを把握している当の人間が、自分をそれらから一種の巻きつき（enroulement）ないし重複（redoublement）によって出現してきたもので、それらと根底では同質だと感ずることであり、彼が自分に立ち返った見えるものそのものであり、その引きかえに見えるものが彼の目にとって彼の写しないし彼の肉の延長のごときものとなることなのである（メルロ=ポンティ 1989；158）

資料 16：塊と裂開（その２）裂開１： 存在者と〈存在〉。言葉。
本質についても事実についても、最も望ましいのは、論じようとする存在を外から眺める代わりに、その中に身を置くことであり、あるいは同じことであるが、存在をわれわれの生活の織物の中に置き直し、私の身体の裂開にも似た存在の裂開（dehiscence）――それが存在を存在自身に開かしめ、またわれわれを存在に開かしめるのであり、そ

[16] メルロ=ポンティ『見えるものと見えないもの』（滝浦静雄、木田元訳）みすず書房、1989 年（原著は 1964 年)。なお、鷲田清一『メルロ=ポンティ』講談社、2003 年の 270-1 頁も大変参考になる。また、引用した４つの箇所は『メルロ=ポンティ・コレクション』（中山元編訳）ちくま学芸文庫、1999 年でも読むことができる。それぞれ、86,93,104,126 頁を参照。

して本質が問題になる場合には、それは、語りまた考えることの裂開となるのだ――に立ち会うことである。見えるものの一つである私の身体は、自分自身をも見、そのことによって、おのれの内面を見えるものに開く自然の光となり、その結果、見えるものが私の風景となり、よく言われる言い方で言えば〈存在〉の「意識」への奇跡的な昇進が実現し、われわれの言い方ではむしろ「内」と「外」との分凝とも言うべきものが実現するのであるが、それと同じように、言葉（パロール）もまた、もちろんそれは特定言語（ラング）のもつ何千もの理念的諸関係に支えられており、したがって科学の眼から見れば、構成された言語として意味の宇宙の或る一領域をなすにすぎないが、その言葉もまた、他のあらゆる意味の領域の器官ないし共鳴器なのであり、そのことによって考えうるものそのものと外延を等しくするのである。言葉（パロール）は、見えるものの肉と同様、意味の完全な部分集合であり、見えるものの肉と等しく、存在者を通した〈存在〉への関係であり、そして見えるものの肉と同じく、ナルシス的・エロス的であって、身体がおのれを感ずることによって世界を感ずるように、自分の網の中に他のさまざまの意味を引き込む自然の魔力を与えられている。（メルロ=ポンティ 1989；163-4）

資料 17：塊と裂開（その 3）裂開 2

哲学は、世界・自然・生活・思考の後にやって来て、それらがすでに自分の前に構成されているのを見いだしながら、この前もってある存在に問いかけ、そしてその存在と自分との関係について自分自身に問いかける。哲学は、自己とあらゆるものへの還帰であるが、ただし直接的なものへの還帰ではない。そのようなものは、それに近づき、そこに溶け込もうとするにつれて、遠ざかっていくのである。直接的なものは地平にあるのであり、地平として考えられなければならないのであって、直接的なものがそれ自身でありつづけるのは、距離をおいてでしかないのだ。私の視覚の以前にあるものとしての見えるものの経験が存在するが、その経験は融合や合致ではない。つまり、見るものである私の眼や触れるものである私の手もまた、見られたり触れられたりしうるし、したがってその意味では、それらは見えるものや触れられるものを内側から見、それに触れていることになり、われわれの肉は、自分が囲まれているあらゆる見える物や触れうる物を逆に織り上げ、さらには包んでいることになるのだから、世界と私は、互いに相手の中におり、そして「知覚する」（percipere）の「知覚される」（percipi）に対する優先ということもなく、そこには同時性あるいは遅れさえあるのである。というのも、自然的世界の重さは、すでに過去の重さだからである。私の生活のどの光景も、諸感覚のとりとめのない群や束（つか）の間の判断の体系ではなく、世界の持続的な肉の一片なのだから、それらはみな、見えるものである限り、私の視覚以外の多くの視覚を孕んでいる。

そして、私が見、語っている見えるものは、たとえそれがヒュメトス山やデルフォイのプラタナスではないとしても、プラトンやアリストテレスが見、語っていたものと数的に同じものなのである。私が、私の手や目の下に、私の身体に対してあるがままの現実の世界を見いだすとき、私は一つの対象よりもはるかに多くのもの、すなわち私の視覚がその部分をなしている〈存在〉、私のさまざまな作業や作用よりもはるかに古い可視性を見いだすのだ。だが、このことは、私からその〈存在〉に対して融合や合致があるということではない。むしろ、そのようなことが起こるのは、一種の裂開が私の身体を二つに切開し、眼差された身体と眼差す身体、触れられた私の身体と触れる身体との間に覆い合いないし蚕食が生まれ、その結果、われわれが物へと移行すると言うのと同様に、物がわれわれのうちに移行すると言わなければならなくなるからである。（メルロ＝ポンティ 1989；170-1）傍点は久保。

資料 18：塊と裂開（その 4 ）塊

身体の厚みは、世界の厚みと張り合うどころか、私が自分を世界たらしめ、物を肉たらしめることによって、物の中心に入っていくための唯一の手段なのである。

（略）

身体は、おのれ自身の個体発生によって、それを形作っている二枚の粗描、二枚の唇――つまりは、身体自身にほかならぬ感覚されうる塊と、身体がそこから分離によって出生し、また見るものとしてそこへと開かれ続けている感覚されうるものの塊――を互いに溶接するというふうにして、われわれを直接物に合一させる。われわれをものそのものに到達させうるのは、身体であり、また身体だけであるが、それは身体が二つの次元をもった存在だからである。物それ自身は、平板な存在ではなく、奥行をもった、上空飛行的主観には到達不可能な存在であり、もし可能ならば、同じ世界の中でものと共存している主観にのみ開かれている存在なのだ。（略）われわれの言わんとしているのは、肉的存在が、奥行をもち、幾つもの面や顔をもった存在、潜在的な存在、或る不在の現前として、〈存在〉の祖型であり、そして感覚されうる感覚者としてのわれわれの身体は、その〈存在〉のきわめて注目に値する異本にすぎず、しかもその〈存在〉を構成している逆説はすでにあらゆる見えるものの中にある、ということなのである。（メルロ＝ポンティ 1989：188-9）傍点は久保

これらの箇所を読むと、裂開の前提として、メルロ＝ポンティならではの身体観があることがわかります（資料 16,18）。また、裂開とは、われわれがものへと移行するのと同様に、ものがわれわれのうちに移行するプロセスの起点であることがわかります（資料 17）。

岩崎さんの第 17 便を読むと、資料 17 のプロセスとは別の事態を裂開と呼んでいるかも知れません。むしろ、資料 18 に書かれた「分離」の方が岩崎さんが裂開と呼んだものに近いのではないでしょうか。

また資料 18 の後半部分――肉的存在がもつ奥行や「潜在」といった世界観は、第 15,16 便で論じた「過剰な贈与」「問い」の思想とつながりうるものであり、また、木村敏の「第一の次元」とつながりうるものであるように思います。

６．ドゥルーズ

「個体以前」「自他未分」と言われる次元を、人間観・世界観の中に組み込む際に参考になる理論の二つ目は、ジル・ドゥルーズの理論です。

ドゥルーズの理論は「感覚の次元」や「過剰な贈与」「問い」を考える際にも参考になります。ここでは、ドゥルーズ自身の文献から紹介するよりも『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』（吉川泰久・堀千晶著、せりか書房、2015 年）を参照しながら、キーワードとページ数を、２つ引用しておきます。

一つ目は「前 - 個体的な潜在性」というキーワード。これは p70 に登場します。
二つ目は「存在としての感覚」というキーワード。これは p198 に登場します。

『ドゥルーズ　キーワード 89』によって、岩崎さんが出してくれた言葉と論理は磨かれていくものと思われます。私自身も、自分の言葉と論理を磨いていきたいと思っています。

とはいえ、ほどほどの厳密さで満足することも大事だと思います。第 13 便の表 6 をもとにした次ページの表を磨いていくことを目指したいです。

【巻末資料】

第 16, 18 便　表１（第 13 便表６より）：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス、居心地の良さ、アクチュアリティ／リアリティ、交換様式

	西田、木村	大田	エリクソン （第 12, 16, 17, 18 便）	居心地の良さ （第 11 便）	アクチュアリティ／リアリティ （第 10, 11, 18 便）	交換様式／社会類型 （第 15, 16 便）	2020 年の往復書簡 〇数字は便数
①a	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。	アクチュアリティⒶ：包まれている実感（ヌミノース） 前 - 個体的：「分離性の超克」「相互的な認知」「個体以前の集合的な生命（ゾーエー）」	交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U ナシ） 純粋贈与（過剰な贈与）	解除① のんびり、くつろぎ⑦ 明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
①b	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	ヌミノース（第一期） 身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）		個体的：「個別性の認可」 「個体的な生命（ビオス）」への限定	純粋贈与（過剰な贈与）	阿頼耶識⑧、末那識⑧ 意識⑤、意識状態⑤ 差異の生成⑤、ズレ② 場所としての主体⑪
①c		不思議だね	応答（第一期）				
①d			基本的信頼（第一期）			交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U ナシ） 共同体（特殊的信頼）	
②a		不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。	アクチュアリティⒷ：自己発揮している実感	交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U アリ、選択アリ） 第二期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰なし）	状態⑤、イラスト A（2018） フロー⑪、あっという間⑦ 行為する主体⑪
②b			周囲からの期待（第二期）				
②c		探りたいことが違う	食い違い（第二期）				ズレ②、非対称⑧
②d		探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）				
③a			出来事の客観視、俯瞰（第三期）		リアリティ：俯瞰、客観		
③b			順番、役割などの取り決め（第三期）			交換様式 B（非対等、特殊的信頼アリ？） 交換様式 C（対等、特殊的信頼ナシ？） 集列体（ヌミノースナシ、選択ナシ）	
③c			順番、役割などの取り決め、権利の相互尊重（第三期）			連合体（ヌミノースナシ、選択アリ、一般的信頼アリ）	
③d							明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
③e	生への意志（の共有）	たくらみの共有	順番､役割などの取り決めをつくる、権利の相互尊重（第三期） 目的の共有（第三期） シンプルな統合（第三期）	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。	アクチュアリティⒸ：回帰したアクチュアリティⒶ（ヌミノース）としての「シンプルな総合」	交換様式 A（原遊動性 U 込み）の回帰 交響体（ヌミノース込み） 第三期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰アリ）	イラスト B（2018）
④			職人気質（第四期）				

第 19 便

対面講読（12 月 14 日開催）の報告と記録

久保健太
2020 年 12 月 18 日

はじめに

先日、**12 月 14 日に「対面講読」を行いました**。11 時から 15 時まで、4 時間。関東学院大学で行いました。

そこでは、「【第 15 便】塊と裂開についての考察（溝口さん）」と「【第 16 便】第 15 便の考察を今後深めるために（久保健太）」を読みました。

岩崎さんが書いてくれた「第 17 便」や、久保が書いた「第 18 便」を読むことはできませんでした。

対面講読においては、第 15 便と第 16 便を読み進めながら、新たな問いがドンドンと生まれてきました。

対面講読は、11 時から 15 時まで行ったのですが、11 時の時点では、その後の 4 時間で、どのような問いが生まれて、どのような探求が起きて、どのような解答が得られて、どのような知識が得られるかは、まったくわかりません。

対面講読の 4 時間が終わって、初めて、そこで**生成**された問い、探求、解答、知識が明らかになります。

このような探求を、「**生成的な学び（創発的な学び）**」と呼びますが、対面講読は、まさにこのような学びの場になっています。

対面講読で起きた学びを記録しておくことは大事なことのように思います。ですので、第 16 便に追記を施して、対面講読の場で起きた学びを記録しておきたいと思います。

以下、この第 19 便は、第 16 便に追記をすることで構成されています。主な追記（生成された問い）は三つあります。

A. 純粋贈与と贈与交換の違いは何か？

B. ヌミノースとは何か？

C. 俯瞰について、エリクソンはどのように考えているのか

読み進めると、追記が明示されていますが、それらの追記は第 16 便には存在しないもので、この第 19 便に加えられたものです。

１．溝口さんの洞察を深めるために

11 月 24 日、溝口さんから、第 15 便が届きました。非常に多くの洞察を含んだ文章でした。今後、溝口さんの洞察を深めるために、参照した方がいいであろう思想を、本便で紹介します。

本便で紹介する思想を踏まえつつ、今後、第 15 便の洞察を更新していきたいと思っています。

２．過剰な贈与

まずは第 15 便の p4 から引用します。

「物の価値は、あの人とこの人の関係、間柄によってその価値は決まります。久保（関東学院大学）は、そのことについて『過剰な贈与』と表現をしました。(久保健太　童心社会)。関係、間柄にとって贈与と返礼は、その価値を増産させ減産もさせることが可能なのです。」

童心社会というのは、絵本・紙芝居の出版社である童心社において、同社の酒井京子会長、私、溝口さんを中心に、2012 年 1 月 19 日から 2019 年 3 月 4 日にわたって続けられていた研究会です。

そこで、私が「過剰な贈与」という言葉をどのように紹介したのか、その記憶は定かではありませんが、その言葉の出自はわかります。矢野智司は『贈与と交換の教育学』（東京大学出版会、2008 年）において、「過剰な贈与」という言葉を用いて、次のように述べます。

「直接に贈与について名指しで語るのではなく、その「出来事としての贈与」の体験を生み出す文学作品を手がかりに語ることで、過剰な贈与の痕跡を感受できるようにすることができる。それを通して、私たちの経験として解釈枠組みの網の目のうちに沈み込んだもののなかから、事後的にではあるが贈与を想起することができる。またこのような作品を経ることによって、私たちは交換の環を破壊する贈与の力を知るとともに、贈与のもつ暴力性の危険を知ることができる。ホモイの物語が示しているように、贈与の一撃は交換の環を侵犯するがゆえにそれ自体が暴力でもある。」p171。

「(宮沢）賢治における「犠牲」としての自己の差しだしは、返礼できないことへの負債感から来るもので、この返礼への内的要請は、交換の原理に由来すると考えることができる。つまりこの自己の差しだしは、純粋贈与ではなく贈与交換における返礼にあたると

考えられるだろう。ところが返礼として自己が差しだされたときに、とても奇妙なことが生じる。形態上は返礼にあたり、交換であるはずなのに、自己がちゅうちょなく差し出された時点で、この行為は返礼ではなくなるのだ。それというのも、自己を差しだすとは、自己に死を与えることであるが、受贈者にとってこの他者の死に値する等価物はどこにも見出すことができず、そのため交換の環は侵犯されてしまい機能しなくなるからである。交換に基づき差しだされた他者の死は、受贈者にとって過剰な贈与となってしまい、結果として交換の環を破壊してしまう。だから、今度は、自己が差しだされた受贈者の側に、過剰な負債感を残すことになるのである。」p180

ここで、矢野は「贈与交換」と「純粋贈与」とを分けています。そして、「純粋贈与」の側に「過剰な贈与」を振り分けています。さて、柄谷が交換様式 A と呼んだのは、「贈与交換」と「純粋贈与」のどちらなのでしょうか？また、溝口さんが第 15 便で書いたのはどちらなのでしょうか？この点は、柄谷、溝口の思想を検討し直しながら、明らかにしたいと思っています。

いずれにせよ、ここに示された矢野の思想は、溝口さんの洞察を更新する際に、大きく参考になるように思います。

その際は「侵犯」「破壊」といった「暴力」的な言葉もキーワードに加わるでしょう。これらのワードは、ドゥルーズが『差異と反復』（上下、河出文庫、2008 年。原著は 1968 年）に記した次の世界観ともつながります。

「思考するということはひとつの能力の自然的（ナチュレル）な［生まれつきの］働きであること、この能力は良き本性（ナチュール）［自然］と良き意志をもっていること、こうしたことは、事実においては理解しえないことである。人間たちは、事実においては、めったに思考せず、思考するにしても、意欲が高まってというよりむしろ、何かショックを受けて思考するということ、これは、「すべてのひと」のよく知るところである。」（上 p354）

「思考は、「思考させる」もの、思考されるべきものの現前において、強制されてやむを得ずといったかたちでのみ思考する――そして、思考されるべきものは、まさに思考されえないもの、あるいは非‐思考でもある」（上 p385-6）

「真の問題とは諸《理念（イデア）》であるということなのである。さらにカントが言いたいのは、諸《理念（イデア）》とは、それなしにはいかなる解も存在しえないような不可欠の条件である

がゆえに、そうした諸《理念（イデア）》は「それらの」解によっては削除されない、ということである。(略)「問題的」という言葉は、とりわけ重要な種類の主観的行為を意味しているばかりでなく、こうした主観的行為によってエネルギーが備給される対象性［客観性］そのものの次元をも意味している。経験外の対象は、問題的なかたちでしか、表象＝再現前化されえないものだ。このことの意味は、《理念（イデア）》は実在的な対象をもっていないということではなく、むしろ、問題である限りでの問題こそが《理念（イデア）》の実在的な対象である、ということだ。」（下 p13－14）

『差異と反復』からの引用は以上です。何らかのショックによって、問題が与えられ、それによって思考が強制される。このようなドゥルーズの学習観（？）は、贈与と学習とを結びつけようとする人間にとって、非常に参考になる見方を与えてくれます。

今後の「対面講読」において、溝口、柄谷、矢野、ドゥルーズ、この四者の異同を丁寧に検討したいと思います。

それは、第 13 便の表 6 においては、①a、①b の箇所の検討だと思います（表については巻末資料として、後掲します)。

大田は「不思議だな」という言葉で、①b における「センス・オブ・ワンダーの触発」を表現しましたが、矢野やドゥルーズに言わせれば、そこで生じている「触発」は、「不思議だな」という言葉で表現されるほど整ったものではなく、「何が何だかよくわからないけど、すごいことが起きている」という情動の動きによって表現されるものでしょう。
それをドゥルーズは「アフェクト」という用語で論じました。これらの点については、『増補新版　ドゥルーズ　キーワード 89』（吉川泰久・堀千晶、せりか書房、2015 年）なども講読しつつ、検討をしたいと思います。

第 19 便での追記 A．純粋贈与と贈与交換の違いは何か？

その１：純粋贈与とは何か？

12 月 14 日の対面講読においては、「２．過剰な贈与」までを読んだところで、純粋贈与と贈与交換の違いは何か？という問いが生まれました。この点は、今後、柄谷行人の交換様式論を検討する際にも重要になってくる点です（とくに交換様式 A）[1]。

[1] 『戦後思想の到達点』（柄谷行人、見田宗介、大澤真幸著、NHK 出版、2019 年）

その問いを探求するために、矢野智司『贈与と交換の教育学』の序章を読みました。以下、矢野の文章から引用をします。

「もっとも強度な脱自と恍惚の瞬間をもたらす体験とは死であろう。いうまでもなく、死は誰も経験することはできない。できるのは他者の死にすぎない。しかし、たとえそれが他者の死であっても、死んでいく存在と同一化するとき、私たちはその不可能性＝外部に触れることになる。模擬的なものであるにもかかわらず、その他者の死を通して、私たちは非‐知（non-savoir）の体験をする。死の避けがたさという観念をもっていても、またそれが他人の死であっても、死という日常の営みではありえない不可能な出来事（奇跡）として体験するからこそ、私たちは我を失い泣くのである。そのとき、私たちは世界との境界線を失い、世界との連続性を体験する。死の体験とはこの連続性の体験である。意識が避け自己が自己でなくなるとともに、この世界が世界でなくなる体験である。しかし、この連続性は私たちの存在の源郷であり、私たちはこの連続性へと立ち返ることを求めているのだ。」（矢野 2008：11-12）

この引用文中、「私たちは世界との境界線を失い、世界との連続性を体験する。死の体験とはこの連続性の体験である」という箇所は、後述するヌミノースの体験とも重なる体験です。

対面講読では、さらに矢野の文章を読み進めました。以下、引用を続けます。

「死の体験は、体験がそうであるように、言葉でもって物語として語ることができない。ところが、言葉自体を日常の有用性から解き放つことで、言葉で描こうとする不可能な試みこそ詩や文学作品である。そして賢治の作品もまたその不可能性を試みようとする「限界への文学」なのである。ふたたび『銀河鉄道の夜』に戻ってみよう。『銀河鉄道の夜』に、死の影が浸透していることは、これまでにもしばしば指摘されてきたことである。なにより銀河鉄道での旅自体が、死後の世界の旅と見ることができ、さらに作品中に自己の純粋贈与（don pur）や供犠に関わる挿話が、繰り返されるからである。（略）

この蝎の寓話は、賢治の思想の特徴としてよく取りあげられる「自己犠牲」そして「自己焼尽」の典型的な話のひとつであり、仏教的純粋贈与というべき「布施」「捨身」の思想そして輪廻の思想の系譜に位置する話でもある。『銀河鉄道の夜』には、このほかにもカムパネルラを助けそのため水死する話、沈む船のなかで救命ボートの席を譲る家庭教師と姉弟の話が登場する。供犠に参加したものが、屠られた動物の死に一体化するように、蝎の死（そして後にはカムパネルラの死）にジョバンニは一体化する。この供犠としての蝎の死の寓話が重要なのは、ジョバンニの「ほんたうは何か」という最初の問いが、「みんなのほんたうの幸せはは何か」という問いに変わり、それが「みんなのほんたうの幸

い」のために自分の命をなげうつ覚悟へといたる転回点に位置しているからである。」（矢野 2008：12-14。傍点は久保）

上の箇所には、純粋贈与という言葉が二か所出てきます。引用を、さらに続けます。

「このとき、ジョバンニの「みんな（他者）のほんたうの幸いは何か」という問いは、共同体の道徳の次元の問いではない。共同体の道徳は、他者に善行をなせ、そうすればあなたも他者から善行をなしてもらうことができる、という仲間との交換の教えからなっている。しかし、この教えは復讐の教えと裏腹である。他者からなされた苦しみは、同じだけその他者に返されなくてはならない。善行にしても悪行にしても、この道徳は共約可能な原理を背後にもつ交換の思想によって作られているのだ。」（矢野 2008：14。傍点は久保）

一度、引用を止めます。矢野はここで「共同体の道徳の次元」にある教えとして「交換の教え（交換の思想)」を挙げます。これは、柄谷の交換様式論でいう「交換様式 C」の次元です。

そして、ジョバンニの問いは、その次元にはないと、矢野は述べます。では、ジョバンニの問いは、どの次元にあるのか？矢野からの引用を続けます。

「この交換に基づく共同体の道徳を乗り超える教えは、いかなる見返りも求めることのない純粋贈与である。この教えは共同体の仲間の間の教えではなく、共同体の外部の他者との関係をつくり出す教えである。共同体の道徳を超えた倫理は、「歓待」にみられるように、仲間だから見返りを期待できるために助けるのではなく、異邦人ゆえに手をさしのべるのだ。歓待とは純粋贈与であり蕩尽（consumation）である。そして、この純粋贈与の極限の形態は、自己の贈与的な死である（もっとも原理的には、すべての純粋贈与は蕩尽であり、非‐知の体験であるから、自己の死なのではあるが)。ジョバンニにとって、カムパネルラの死が純粋贈与の死として体験される。しかし、それは共同体の道徳を超える行いであるとともに、共同体の道徳、交換の思想を破壊する行いでもある。そのために、カムパネルラは自分の行いを母親が許してくれるのかと自問することにもなる。

（略）

「ほんたうは何か」ということは、この自明な交換の原理を括弧に入れることであり、このように問う人には交換に基づく説明はもはや説得力をもたなくなる。このとき、人は道徳の次元を失う危険性にさらされていると同時に、共同体の道徳ではない「みんなのほんたうの幸い」を求め続けるという生命の倫理に開かれてもいる。」（矢野 2008:14-15。傍点は久保）

以上の引用より、ジョバンニの問いは、「交換に基づく共同体の道徳」の次元ではなく、「生命の倫理」の次元にあることが分かります。

そして、生命の倫理の次元にある交渉のあり方こそ、純粋贈与であることが述べられています。また、純粋贈与は、「いかなる見返りも求めることのない」かかわりであり、「共同体の外部の他者との関係をつくり出す教え」であるとも言われます。この点は、重要な点ですので、下のように整理しておきます。

純粋贈与とは何か？それは、

1．いかなる見返りも求めることがない関わり

2．共同体（共同体の道徳、交換の思想）の外部の他者との関係をつくり出す教え

である。

第 19 便での追記 A．純粋贈与と贈与交換の違いは何か？

その２：純粋贈与と贈与交換の違いは何か？

矢野の文献を読むことで、純粋贈与とは何かが分かってきました。対面講読では、さらに矢野の文献を読み進めることで、純粋贈与と贈与交換の違いは何か？を考えました。矢野の文章を、さらに引用します。

「教育の起源を、共同体の内部に見ているかぎり、教育はどこまでも社会化という共同体の機能の一部でしかない。教育が、共同体の構成員を再生産する必要性から始まると考えるなら、教育には詰まるところ、未熟な子どもが成熟した大人に向けて高度に組織化されていく過程があるだけだ。そして教育学自体には、いかなる謎もなくなり、残るのはただ共同体におけるより普遍的で合理的な教育目的の吟味と選択の手段の探究、そしてその目的を実現するための有効な手段の探究だけである。事実、狭義の教育学とはそのような学問である。しかし、ひとたび共同体の学部という限界・極限に直面するなら、教育の起源はふたたび謎として立ち現れることになる。もちろんこの教育の起源とは、一回的な歴史的起源のことをいっているのではない。システムの成立を外部からの「贈与の一撃（un coup de don）」として捉える反復される原理的起源のことをいっているのである。

このような共約不可能な異質性をもった体験をもたらす「最初の先生」を、考えることができるのではないだろうか。この先生の特徴は、一切の見返りを求めない純粋贈与にある。贈与と交換とは経済学的な事象となっているが、近代以前には「贈与交換（echange-don, gift-exchange）」としてモースが語るように、経済的であるとともに宗教的でもありまた社会的でもある「全体的社会事実」であった。近代において経済が自立したシステムとして立ち上がって以来、このような人間的交渉の全体性は、機能的に分化した個別的事象として理解されている。ところで、近代社会において市場を支配している等価交換のシステムが、一般的な交換のモデルとして解されるようになり、私たちの繊細な差異からなる諸相の厚みをもった人間的交渉もまた、ここから理解されるようになる。先に述べた共

同体の道徳がそうであるし、教育もまたその例外ではない。私たちがこの問題に自覚的になるとき、現在の市場経済を支配する等価交換とは異なる交換形態である「贈与交換」の概念によって、自らの交渉を理解しようとする。」（矢野 2008：18-19。傍点は久保）

いったん引用を止めます。ここで「贈与交換」という言葉が出てきました。ここでは「贈与交換」は「交換」と対比されています。そして、「贈与交換」はたんに「経済的な事象」ではなく、「経済的であるとともに宗教的でもあり、また社会的」でもあるものとして、人間的交渉の全体を含み込んでいることが述べられます。

とはいえ、純粋贈与と贈与交換の違いは、まだ述べられていません。矢野の文章を読み進めると、両者の違いについて、矢野が述べている箇所に出会います。

「しかし、贈与交換もまた制度的な営みであり、そこには贈与と受納と返礼に関わる義務の観念が働いている。制度的な次元を超える教育事象には、出来事としてしか捉えることができない、そして出来事であるがゆえに首尾一貫した物語として完結することのできない、純粋贈与の次元が存在している。等価交換の制度のなかに生起する純粋贈与という出来事に着目することによって、ちょうど共同体の道徳を超えた倫理の根源にいたるように、私たちは教育という謎に出会うことができるのである。」（矢野 2008：19。傍点は久保）

ようやく、純粋贈与と贈与交換の違いは何か、にたどり着きました。

贈与交換は、単なる交換とは違い、人間的交渉の全体を含み込んだものです。しかし、それでもまだ、制度の枠内にあります。純粋贈与は、制度の枠外にあります。そこに、純粋贈与と贈与交換の違いがあります。

ここから、純粋贈与とは何か？という問いには、以下のように答えることができるでしょう。

純粋贈与とは何か？それは、

1．いかなる見返りも求めることがない関わり
2．共同体（共同体の道徳、交換の思想）の外部の他者との関係をつくり出す教え
3．制度的な次元（贈与と受納と返礼に関わる義務の観念）を超える営み

である。

第 19 便での追記 A．純粋贈与と贈与交換の違いは何か？

その３：溝口さん（第 15 便）の用語法を確認する。

さて、対面講読で、純粋贈与と贈与交換の違いは何か？という問いが生まれたのは、溝口さんによる第 15 便の p4 がきっかけでした。その箇所を改めて、読んでみます。

第 15 便の P4 で溝口さんは、交換様式 A を「心と心」の交換と呼び、それは交換される「物」の価値がイコールである必要がない交換であり、そこでやり取りされる物の価値が「あの人とこの人の関係、間柄によって」決まるような交換だと述べています。言い換えれば、それは、物の価値を「増産もさせ減産もさせることが可能な」交換です。そして、そのような交換は、もはや交換ではなく、「過剰な贈与」なのだと述べています。

溝口さんは、以上のように、純粋贈与という言葉を使うわけですが、このような使い方は、矢野の使い方とマッチするのでしょうか？

先述のように、矢野は、純粋贈与を、

１．いかなる見返りも求めることがない関わり

２．共同体（共同体の道徳、交換の思想）の外部の他者との関係をつくり出す教え

３．制度的な次元（贈与と受納と返礼に関わる義務の観念）を超える営み

だと述べています。

矢野の使い方のうち、「１.」については、溝口さんの使い方とマッチしているように思います。

ただし「２.」については、さらなる検討が必要です。というのも、りょうた君とけんちゃんとのやり取りにおいては、「共同体の外部の他者との関係」への開かれはありませんが（共同体の内部の他者との関係に閉じているように見えますが)、そこには交換ではなく、贈与の原理が働いているように見えるからです。

これは、「共同体内部の道徳とは、交換の思想である」という矢野の想定を修正しうる洞察です。すなわち、りょうた君とけんちゃんは、共同体の内部で、贈与の原理を働かせているのです。

溝口さんの第 15 便が示すのは、ウッディキッズという共同体は、そもそも交換を原理とした共同体ではなく、贈与を原理とした共同体ではないかという可能性です。だとすれば、りょうた君とけんちゃんのやりとりも、贈与を原理とした交渉だということになり、そこには「共同体（交換の思想）の外部の他者との関係をつくり出す教え（上の２.)」という性格を見出せます。

言い換えれば、贈与を原理とした共同体であれば、すべての交渉が、内部に閉じた交換ではなく、外部に開かれた贈与にも、なり得るのです。

これは私自身がウッディキッズで体験したことなのですが、ウッディキッズのれい君は、自分が食べていたアイスを、「これ、おいしいよ」と私に差しだしてくれたことがあります。数年前の、夏の、暑い日でした。

これは「いかなる見返りも求めることのない」交渉であり、「外部の他者との」交渉です。すなわち、上の「１.」と「２.」の性格を含み込むものです。

もちろん、りょうた君とけんちゃんとの間に生まれた交渉と、れい君と私との間に生まれた交渉を、同一視することはできません。

前者は「共同体内部での贈与」であり、後者は「共同体外部への贈与」であるからです。しかし、前者を原理とした共同体に育った人間は、後者を原理とした交渉を取り結ぶことができるのではないか？そのような仮説を検証したくもなります。

この点は、第 15 便を深めるための、残された課題にします（**残された課題①**）。

一方で、共同体内部で行われる物のやりとりを、もしくは、物と物の交換に先立って、心と心の交換が先立つものを、溝口さんのように、贈与と呼んでいいものでしょうか？この点については、慎重な検討が必要です。柄谷行人『世界史の構造』（岩波現代文庫、2015 年。原著は 2010 年）の「第一部　ミニ世界システム」などを講読し、検討したいと思います（**残された課題②**）

また、ウッディキッズの子どもたちだって、見返りを求める関係、すなわち「共同体（共同体の道徳、交換の思想）の内部に閉じた交換」をするときもあるでしょう。

「共同体内部での贈与」と「共同体内部に閉じた交換」と「共同体外部への贈与」。この三者がどのような比率をなしているのか、その点も、引き続き、検討したいと思います。

第 13 便の末尾にも書いたことですが、ウッディキッズの子どもたちは「共同体（交換原理）の外部の他者」に開かれているように思います。第 13 便では「一般的信頼」というパットナムの用語で説明しましたが、矢野の用語で言い直せば、「贈与」によるかかわりが身についているように思います。

つまり、溝口さんが言うように、交換様式 C（交換）ではなく、交換様式 A（贈与）を原理としたかかわり合いが身についているように思います。

この点を、より詳細に検討するために（そして、柄谷行人の交換様式論と結合させるために）も、「共同体内部での贈与」と「共同体内部に閉じた交換」と「共同体外部への贈与」。この三者がどのような比率をなしているのかを検討したいと思います。

この点も、第 15 便を深めるために、残された課題にします（**残された課題③**）。

最後に、りょうた君とけんちゃんとの交渉が、最後に「３．制度的な次元（贈与と受納と返礼に関わる義務の観念）を超える営み」であるかどうかについて。

りょうた君とけんちゃんとの交渉において、「贈与と受納と返礼に関わる義務の観念」が働いていれば、「贈与交換」だということになります。しかし、「贈与と受納と返礼に関わる義務の観念」が働いていなければ「純粋贈与」だということになります。

この論点は、りょうた君とけんちゃんとの交渉に限定させず、ウッディキッズにおける交渉を丸ごと論じるつもりで、ウッディキッズにおける交渉が、贈与交換なのか？純粋贈与なのか？両者の混在なのか？という点を、じっくり検討したいと思います。（**残された課題④**）

以上が、第 19 便での追記 A です。

引き続き、第 19 便での追記 B を記します。

第 19 便での追記 B．ヌミノースとは何か？

先ほど、「**第 19 便での追記 A．純粋贈与と贈与交換の違いは何か？　その１：純粋贈与とは何か？**」の箇所で、「私たちは世界との境界線を失い、世界との連続性を体験する。死の体験とはこの連続性の体験である」という体験が、ヌミノースの体験とも重なる体験であることに言及しました。

対面講読においては、矢野の文章をひとしきり読み、理解した後、「ヌミノース」とは何であるのか？という点を再検討しました。

「ヌミノース」はエリクソンが用いた言葉ですが、エリクソンはオットーの『聖なるもの』から、その言葉を借用しています。ですから、対面講読においては、オットー『聖なるもの』（久松英二訳、岩波文庫、2010 年。原著は 1936 年）の目次を参照しながら、ヌミノースへの理解を深めました。

以下、オットー『聖なるもの』から、目次の一部を引用します。目次に「ヌミノーゼ」と表記されているのが「ヌミノース」です。目次には、ヌミノーゼの諸要因が六つ挙げられています。ヌミノーゼについて、理解を深めるのに役立つと思います。以下、引用です。

第三章　ヌーメン的対象に引き起こされる感情の自己感情における反射としての「被造者感情」（ヌミノーゼの諸要因　その一）
第四章　戦慄すべき神秘（ヌミノーゼの諸要因　その二）
　（一）「戦慄すべき」という要因
　（二）「強大なもの」（威厳）という要因
　（三）「活力あるもの」という要因
　（四）「神秘」という要因――「まったく他なるもの」
第五章　ヌーメン的賛歌（ヌミノーゼの諸要因　その三）

第六章　魅するもの（ヌミノーゼの諸要因　その四）
第七章　ウンゲホイアー（ヌミノーゼの諸要因　その五）
第九章　ヌーメン的価値としての聖なるもの、高貴なるもの（ヌミノーゼの諸要因　その六）

目次からの引用は、以上です。
オットーの『聖なるもの』は、キリスト教神学（宗教学）の本です。その本の中で、用いられたヌミノース（ヌミノーゼ）という言葉を、第一期の人間関係、その中でも母子関係を論じるために用いたのはエリクソンです。
母子関係を念頭において、ヌミノースという言葉を用いると、本来の意味を取り違える可能性があります。
上の目次を読む限り、次の六つの感覚を得るような経験が、ヌミノースの経験です。それは、①そこから自分が生まれたような感覚、②戦慄、強大さを覚える一方で、活力が湧いてくる感覚、③その存在を讃えたくなるような感覚、④惹きつけられる感覚、⑤底知れなさを感じる感覚、⑥神聖な感覚。これらの六つの感覚がないまぜになったような体験こそ、ヌミノースの本質です。

対面講読では、このような体験は、矢野の言う「贈与の一撃」や「過剰な贈与」と重なるのではないか、また、ドゥルーズのいう「問題」と重なるのではないかという点が議論されました。
また、久保の書き方の不適切さもあり、ヌミノースという言葉に「暖かさ」や「安心感」というイメージだけを抱いていたメンバーもいたので、そのイメージを払拭しました。

先述のように、ヌミノースの体験は、そうした甘っちょろい感覚だけを要素にしたものではありません。エリクソンが、ヌミノースという言葉を、母子関係を説明する際に用いたために、ヌミノースという言葉に「暖かさ」や「安心感」のイメージを抱いてしまったのだと思います。

とはいえ、ヌミノース的な体験が、人間関係の第一期に置かれるという洞察は、エリクソンの優れた洞察です。
エリクソンの洞察を、発展的に活かすのであれば、
① 子ども同士（もしくは人間どうし）の関係を説明するために用いる。
② 人が人にもたらす体験ではなく、矢野が言う意味での「出来事」が人にもたらす体験を説明するために用いる。

③　「①」「②」から、子ども同士が（もしくは子どもと大人にかかわらず、人間どうし）が、「出来事」に飲み込まれ、巻き込まれ、包み込まれる体験を説明するために用いる。

ということにすれば、いいのではないかという点を議論しました。

この点を深めるためにも、エリクソンの人間論を今後、学び直そうということになりました（**残された課題⑤**）。

以上が、第 19 便での追記 B です。

対面講読においても、これ以上の深掘りはできないまま、一度、第 16 便の講読に戻りました。以下、第 16 便の文章に戻ります。

３．意志を意志する

第 15 便に戻って、p8 から引用します。

「「意志を意志する」。実際には「俯瞰」や「客観視」することとほぼ同義です。俯瞰や客観視と言う状態は、一度、自己を離れ他者からの視線で自己を認識するという作業が必要です。であれば、自己と他者が分離された状況でなければならない。水たまりの 3 歳前後の子どもたちは、この俯瞰や客観視が行われている。一方、水たまりに入った子どもたち、すなわち 1 歳から 2 歳の半ばの子どもたちは、そうではない。自己を一度離れ、他者の視線で自己を認識することはしていない。1 歳と 3 歳の違いは、ここにありそうです。

そして、俯瞰や客観を「意志を意志する」と書いたことには理由があります。今時点の俯瞰や客観だけではなく、先の予測を伴う俯瞰や客観であったからです。ですから、will＝意志としたわけです。生まれて 3 歳にもなると、今から先の予測を俯瞰したり客観視したりすることが可能と言えます。今から先の自分の姿を、未来での自分の姿を予測することが可能ということです。」

溝口さんの、この洞察も、ぜひ深めたい洞察です。そのためにも 1 歳（第二期）と 3 歳（第三期）の違いについて、参考になる箇所をエリクソンの文献から引用しておきます。

第二期は、**自分の体が自分の思い通りに動かせるようになる時期**です。そして、その時期は他者からのコントロールを受け入れたいという欲求が高まる時期でもあります。『洞察と責任』から引用します。

「乳児の感覚と、その筋肉は、活動的（能動的）な体験への機会を、これまで以上につかむようになる。それにつれて、乳児は二重の要求・欲求（demand）に直面するようになる。その二重の欲求とは、自己コントロールの欲求と、他者からのコントロールを受け

入れたいという欲求とである。」（Erikson1964：118＝エリクソン 2016：115。以下、訳は久保によるもの）[2]

自己コントロールと他者からのコントロールという相反するものへの欲求が同時に浮上してくることに関して、エリクソンは次のようにも書いています。

「成熟しつつある人間は、周囲に期待できることと、自分に期待されていることに関する知識を、徐々に、組み込むようになる」（Erikson1964：119＝エリクソン 2016：116）。

ここでは、自分から周囲に向けるものとして「周囲に期待できること」があり、逆に、周囲から自分に向けられているものとして「自分に期待されていること」があり、その両者が、一つの人格の中に組み込まれていくことが書かれています。

「自分に期待されていること」は承認欲求とかかわっています。ここでのキーワードは期待です。第二期は、**周囲からの期待**を感じる時期でもあるのです（この点も第 13 便の表 6 に②b として、書き加えておきます）。

また、第二期は**周囲からの視線**を意識する時期でもあります。エリクソンは第二期の「恥」の感覚について、以下のように述べています。

「恥とは、自分が完全に人目に曝され、また見られていると意識していること、要するに、自己意識的であることを意味している。人は見られる存在であり、見られる準備のできていない存在である。」（Erikson1959：71＝エリクソン 2011：68）[3]

次に第三期です。私は、第三期こそ、俯瞰が始まる時期だと考えています。そのように考えられる根拠を、エリクソンの文献から引用しておきます。

まずは良心について、述べた箇所。

「自主性（イニシアティヴ）を統治する偉大なる存在、すなわち**良心**がしっかりと確立するのは、この

自主性（イニシアティヴ）の段階である。（略）

---

[2] Erikson, E. H. “Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight ”、W. W. Norton & Company,1964。エリクソン『洞察と責任（改訳版）』（鑪幹八郎訳）誠信書房、2016 年。

[3] Erikson, E. H. “Identity and Life Cycle”、W. W. Norton & Company,1959。エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』（西平直、中島由恵訳）誠信書房、2011 年。

今や子どもは、見つかったときに恥ずかしいと感じるだけでなく、見つけられはしないか恐れる。いわば神の姿を見ることなく、神の声を聞く。さらに言えば、誰も見ていない単なる思いや行いについてさえ、反射的（オートマティカリー）に、罪を感じるようになる。これが個人における道徳の礎である。」（Erikson1959：84＝エリクソン 2011：83）

ここでは、見えないものの存在をイメージの中につくりあげるようになる子どもの姿に注目したいと思います。さらには、仲間たちと協働するために「建設的で計画的な目的」をつくるようになるということを指摘した次の箇所も引用しておきます。

「この時期は（略）**人を**「［自分の］**ものにする」代わりに物を作る**という意味における力よりも、義務・規律・作業を共に分かち合うという感覚において、大きく成長することを学ぶ時期である。また、この時期の子どもは、他人を支配したり強要する代わりに、**一緒に物を作り**、他の子どもたちと一緒に建設的で計画的な目的のために協力することに熱心であるし、またそれが可能である。」（Erikson1959:85-6＝エリクソン 2011：85）

これらの箇所からは、目の前の事柄から離れ、目の前の事柄を俯瞰している子どもの姿を想定することができます。

また『玩具と理性』（1977 年）において、エリクソンは、「現実」と「仮構（メイク・ビリーブ）」との相互関係に注目しながら、「仮構」と「現実」とが互いに制約し合いつつ、相互に生かし合う関係を論じています（西平 1993:170）[4]。

この「仮構」と「現実」との相互関係自体は、アクチュアリティの議論と大いにかかわる点ですが、それについて論究すると脱線してしまいます。ここでは、「現実」とは別の次元として「仮構」の次元を設定できるようになることに注目しておきます。「仮構」の設定には、俯瞰する能力が不可欠だからです。

これらの箇所から、エリクソンの人間観を次のように整理しておきます。

第二期：動けるようになること。周囲の期待はわかること。しかし、俯瞰はないこと。
第三期：俯瞰が生まれること。

第 19 便での追記 C. 俯瞰について、エリクソンはどのように考えているのか

[4] 西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993 年。

対面講読では、以上の資料に加えて、下の資料を追加しました。エリクソンの『洞察と責任』からの引用です（数字は久保が振ったものです）[5]。

①It 1s inherent in infantile man's prolonged immaturity that he must train the rudiments of will in situations in which he does not quite know what he wants and why, which makes his willfulness at times rather desperate. ②By the same token he must develop in "mere" fantasy and play the rudiments of purpose: ③a temporal perspective giving direction and focus to concerted striving. ④Play is to the child what thinking, planning, and blue— printing are to the adult, a trial universe in which conditions are simplified and methods exploratory, so that past failures can be thought through, expectations tested. ⑤The rules of play can−not be altogether imposed by the will of adults: ⑥toys and play− mates are the child's equals. ⑦In the toy world, the child "plays out" the past, often in disguised form, in the manner of dreams, and he begins to master the future by anticipating it in count−less variations of repetitive themes. ⑧In taking the various role− images of his elders into his sphere of make-believe, he can find out how it feels to be like them before fate forces him to become, indeed, like some of them. （Erikson1964：120-121）
①人間の、乳幼児期の、延長された未熟性に内在している問題は、自分が何を、なぜ欲しているのかをまったくわからない状況（その状況が、彼がわがままになることを絶望させもするのだが）の中で、意志の原基（芽生え）を鍛えなければならないということである。②その上、その子は、「わずかな」（現実の中ではなく）「たんなる」空想や遊びの中で、目的の原基（芽生え）を発達させなければならない。③（目的の芽生えとは）一致して取り組んでいるものへの方向づけと集中（没頭、Focus）を与える時間的見通しである。④子どもにとっての遊びとは、大人にとっては考え、計画し、青写真を描いているものであり、それは、状況が単純化され（問題の焦点はしぼられ）、方法が探求されるような、それゆえ、過去の失敗が考え抜かれ（thought through）、予測が試されるような試行錯誤の世界（trial universe）である。⑤遊びのルールを、完全に、大人の意志で課すことはできない。⑥おもちゃや遊び仲間は、その子と同等のものである。⑦おもちゃの世界では、子どもは過去を「演じ切り（play out）演じることで、送り出し。遊ぶことによって、送り出し」（それは、まやかしという形態で、夢というかたちで、ということもよくある）、さらに、子どもは、その将来を、何遍も繰り返しテーマとしながら、その将来を予期することで、その将来を自分のものとし始める

[5] Erikson, E. H. “Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight ”、W. W. Norton & Company,1964。エリクソン『洞察と責任（改訳版）』（鑪幹八郎訳）誠信書房、2016 年。訳し直した箇所もある。

（begin to master：支配し始める）。⑧年長者たちの、様々な役割イメージを、ごっこ遊びの中に取り入れることによって、実際に年上の子のようになることを運命によって強いられる前に、年上の子のようになるとどういう気持ちになるのかがわかる。（エリクソン 2016：117-8）

③の文章において、エリクソンが「目的の原基（芽生え）とは、時間的見通し」であると述べている点は重要です。ちなみに、「目的」とは第三期に開花する徳（人格的強さ）ですので、この箇所は、「第三期に入って、目的の原基を発達させ始めた子どもたちは、時間的見通しをもち始める」のだと読むことができます。

時間的に見通しを立てられるようになること。そのためには、いま、ここで起きている出来事から数歩離れて、その出来事を俯瞰しなくてはなりません。つまり、この③の文章は、第三期に俯瞰が始まることを指摘した文章なのです。

なおかつ、この文章では、時間的見通しによって、「一致して取り組んでいるものへの方向づけと集中（没頭）とが与えられる」と述べられています。同じ取り組みに向かって、ともに力を注ぐこと。それは、同じ出来事に包み込まれ、飲み込まれ、巻き込まれるという点で、ヌミノースの体験をもたらすかも知れません。そのような第一期的な体験が生じる際に、俯瞰による時間的見通し（の共有）という第三期的な人間関係が重要な役割を果たすこと。

エリクソンは『玩具と理性』（1977 年）の中で、第三期の遊びにみられる徳（強さ）を「**シンプルな統合**」と呼んでいます。しかも、シンプルな統合を通じて、第三期の遊びと、第八期の賢さとは近しさを感じ合うとも述べています。

すでに第 12 便に記した仮説ですが、第一期的なヌミノースが、第三期においてはシンプルな統合として回復されるのではないかとも思います。

この点も、今後、対面講読でエリクソンの文献を読み進めつつ、検討したいと思います（**残された課題⑥**）。

以上が、第 19 便での追記 C です。以下、第 16 便の文章に戻ります。

４．あらためて「意志を意志する」

左の表は、見田宗介による 4 つの社会類型を整理したものです（『戦後思想の到達点』p215 より）。

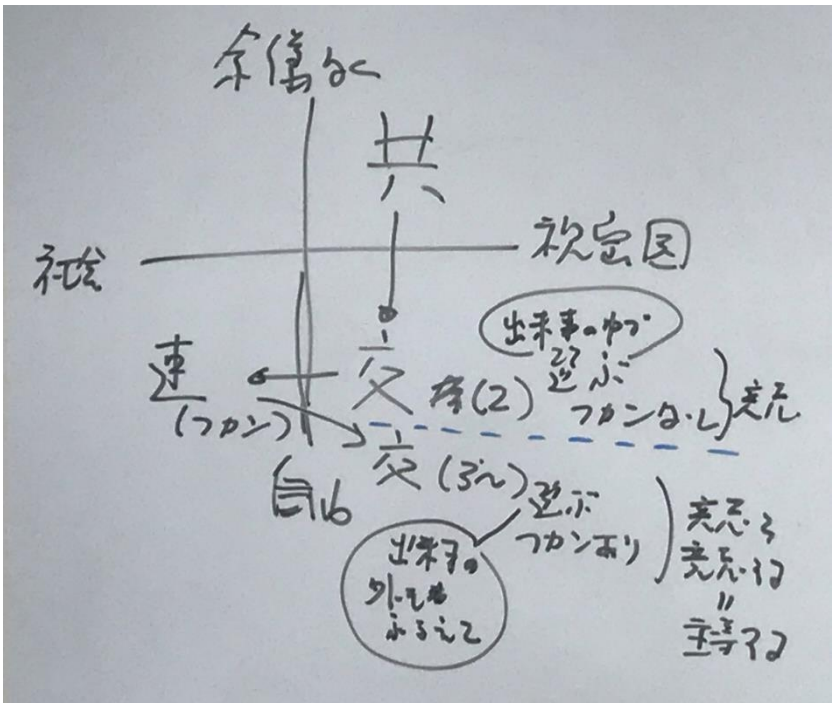
第一期において、行動の自由をもたない新生児は「共同体」にいます。第二期におい

て、自由に動けるようになるとき、人は共同体から交響体に移動します（ヌミノースの感覚、すなわち、包まれている感覚があることが条件ですが)。その後、第三期において、俯瞰能力を獲得するときに、親密圏を出て、社会圏に身を置きます。そこでは人間は連合体に入っていきます。しかし、俯瞰をした上で、あらためて親密圏に戻ってくる。すなわち、交響体をつくる。そのようなことも可能です。このときつくられる交響体は、第二期においてつくられた交響体とは別のものになるはずです。第二期には不可能だった俯瞰能力が備わった上での交響体だからです。

このように 1 歳（第二期）と 3 歳（第三期）の違いを踏まえると、交響体を 2 種類に分けることができるように思います。それは、**第二期の交響体**（共同体のあとにくる交響体。自分で動けるようになった 1 歳児の交響体）と、**第三期の交響体**（連合体を踏まえたあとにくる交響体。3 歳になったころに、俯瞰が可能になることで、社会圏に出て、連合体をつくったのちに、選び直された交響体）です。

それぞれ、第 13 便の表 6 においては、②a と③e の箇所で生まれるものでしょう。
交響体という社会類型をこのように用いることには賛否があるかも知れません。私たちも丁寧に検討したいと思っています。

交響体を二つに分けて考えるというアイデアは、11 月 16 日の対面講読において生まれたものです。その際にホワイトボードに書きつけられたメモ書きを撮影しておきました。その写真を右に掲げて、本便を終わりにしたいと思います。



第 19 便のおわりに

第 19 便は以上です。次回以降の対面講読でも、第 15 便の考察を深めたいと思います。その一環として、次回以降は、エリクソンの思想を学び合う予定です。そうして、残された課題を、さらに検討していきます。

【巻末資料】

第 16 便　表１（第 13 便表６より）：死への傾斜から生への意志が生じるプロセス、居心地の良さ、アクチュアリティ／リアリティ、交換様式

	西田、木村	大田	エリクソン （第 12, 16 便）	居心地の良さ （第 11 便）	アクチュアリティ リアリティ（第 10, 11 便）	交換様式／社会類型 （第 15, 16 便）	2020 年の往復書簡 〇数字は便数
①a	死への傾斜 （もしくは、自分以外の存在が見せる生への意志）	くり広げられる世界	ヌミノース（第一期）	タイプ１：状況に包み込まれ、身を委ねている。	アクチュアリティⒶ：包まれている実感（ヌミノース）	交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U ナシ） 純粋贈与（過剰な贈与）	解除① のんびり、くつろぎ⑦ 明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
①b	（生への意志の芽生え）	不思議だな（センス・オブ・ワンダーの触発）	身体的・情動的欲求（第一期） 暗い衝動（第一期）			純粋贈与（過剰な贈与）	阿頼耶識⑧、末那識⑧ 意識⑤、意識状態⑤ 差異の生成⑤、ズレ② 場所としての主体⑪
①c		不思議だね	応答（第一期）				
①d			基本的信頼（第一期）			交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U ナシ） 共同体（特殊的信頼）	
②a		不思議を探る（例えば、カニを追いかける）	自己発揮（第二期）	タイプ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。	アクチュアリティⒷ：自己発揮している実感	交換様式 A（ヌミノースアリ、原遊動性 U アリ、選択アリ） 第二期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰なし）	状態⑤、イラスト A（2018） フロー⑪、あっという間⑦ 行為する主体⑪
②b			周囲からの期待（第二期）				
②c		探りたいことが違う	食い違い（第二期）				ズレ②、非対称⑧
②d		探りたいことを伝えあう	善い意志の交わし合い（第二期）				
③a			出来事の客観視、俯瞰（第三期）		リアリティ：俯瞰、客観		
③b			順番、役割などの取り決め（第三期）			交換様式 B（非対等、特殊的信頼アリ？） 交換様式 C（対等、特殊的信頼ナシ？） 集列体（ヌミノースナシ、選択ナシ）	
③c			順番、役割などの取り決め、権利の相互尊重（第三期）			連合体（ヌミノースナシ、選択アリ、一般的信頼アリ）	
③d							明るい兆しの予感③ 予感、予測⑧
③e	生への意志（の共有）	たくらみの共有	順番､役割などの取り決めをつくる、権利の相互尊重（第三期） 目的の共有（第三期） シンプルな統合（第三期）	タイプ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。	アクチュアリティⒸ：回帰したアクチュアリティⒶ（ヌミノース）としての「シンプルな総合」	交換様式 A（原遊動性 U 込み）の回帰 交響体（ヌミノース込み） 第三期の交響体（ヌミノースアリ、選択アリ、俯瞰アリ）	イラスト B（2018）

おわりに

研究代表　久保　健太
（関東学院大学）

以上が「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究２」の報告書です。

「はじめに」でも記したように、今回の報告書は、2020 年 12 月の「対面講読」の報告と記録とで終わっています。その後も「対面講読」を続け、「第 15 便」の捉え直しと書き直しを続けていますが、その成果は、2021 年度、22 年度の研究成果として発表するつもりでいます。

この「おわりに」では「居心地の良さ」について、本研究が明らかにした限りのことを記しておきます。

第 11 便（本報告書 p87）に記したとおり、居心地の良さには次の三つのタイプがあるように思います。

居心地の良さの三つのタイプ １．意識が解除され、状況に包み込まれ、身を委ねている（そこにみんなが溶けていく）。その心地よさ。 ２．自分なりの仕方で（内的な論理に従って）自己発揮できる。その心地よさ。 ３．目標を共有して、役割や順番を自分たちでつくって、分担して、それが自分のやりたいことで、かつ、周囲から承認されている。その心地よさ。

第 13 便（本報告書 p110-111）で書いたように、この三つのタイプは、エリクソンの発達理論に重なるように思います。エリクソンの発達理論の図式を下に再掲します。

第 12 便：エリクソン理論の図式的記述 第一期：ヌミノースの感覚を得る。自他未分の感覚を思う存分、味わう。第 11 便までいうところの「アクチュアリティ」の感覚を思う存分、味わう。その一方で、自分という存在のかけがえのなさも味わう。 第二期：自己決定、自己発揮、自己主張が盛んになる。それに伴い、取り合い、ケンカ、食い違い、すれ違いも起きる。 第三期：取り決めをつくる。取り合いをするよりも、順番をつくる。一緒に使うための取り決めをつくる。シェアをする。その役割をプレイする。すなわち、演じて、遊ぶ。

あらためて両者を照らしても、タイプ１が第一期に、タイプ２が第三期に、タイプ３が第三期に、それぞれ対応しているように思います。

エリクソンは第一期、第二期、第三期に開花する感覚を、それぞれ「基本的信頼」の感覚、「自己決定（自律性）」の感覚、「主導権（自主性）」の感覚と名づけています。

この三つの感覚は、民主主義の主体が、その生活を通して感じ続けてほしい感覚そのものです。

私たちの研究は、報告書完成の後も続き、そこでは第四期の「勤勉性」の感覚も大事ではないかという議論が起きています。

勤勉性の感覚と訳すと、誤解が生じやすいので補足しておきますが、エリクソンが勤勉性の感覚と呼んだものは、「仕事を完成させる喜び」の感覚です[1]。そこには、努力することの大事さ、学ぶことの大事さ、自分のこだわりを大切にすることの大事さ、そのそれぞれを実感していること、すなわちエリクソンが「職人気質」と呼んだものが含まれています[2]。

とすると、「居心地の良さ」の中身として、「基本的信頼」「自己決定」「主導権」「勤勉性」の四つの感覚が登場するわけですが、悩ましいのは「自己決定」の感覚や、「勤勉性」の感覚が、どうしても自分本位に傾くがゆえに、「信頼」の感覚や、「主導権」の感覚と相克するときがあるという点です。

居心地の良さは、少なからず居心地の悪さを含みこんでいたり、居心地の悪さと表裏一体、隣り合わせでなくてはならない理由が、ここにあるように思います。言い換えれば、居心地の良さばかり追い求めると、居心地が悪くなるのです。

このあたりの論点についても、「第 15 便」の捉え直しと書き直しの中で明らかにできるものと思います。

いずれにせよ「保育者が実践し、研究者が分析する」という分業体制に加えて、「保育者と研究者が一緒になって記述する」という研究ができないものかと思っています。

「実践者が自ら書くこと」と「読者にとって読み易いものになること」を研究として両立するために、読者みなさまの忌憚ないご意見をいただきたく、あらためて、お願い申し上げます。

---

[1] Erikson, E. H. “Identity and Life Cycle”、W. W. Norton & Company,1959, p91。エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』（西平直、中島由恵訳）誠信書房、2011 年、92 頁。

[2] Erikson, E. H. “Insight and Responsibility: Lectures on the ethical implications of psychoanalytic insight ”、W. W. Norton & Company,1964, p123.